

御座候此凡天下の三字南宋編安の版圖をさすと申陋説は和漢ともに無御座候左候へば當今の世に於て五世界に涉り其あらゆる學藝物理を窮め可申事本より朱子の本意たるべく候去る故に當今の世に出で善く大學を讀み候者は必ず西洋の學を兼申すべきと有無之論に及ばざる義と奉存候此大綱領を以て先公儀の御學術を被爲正御學政の御根本と被遊胃子國子御教育に御力を被爲盡候様有御座度奉存候凡學問三年にして小成し九年にして大成すると申候へば右御教育十ヶ年御倦怠無御座御世話行届候はば御人材に御不自由御座候様の御事は有御座開敷奉存候此義迂濶に近く候へ共夫の七年の病に三年の艾を蓄へ候の譬にて只今より蓄へさせられず候はば遂に得させられ候期有御座まじく奉存候

儲又民を教ふると申事も是迄はいかにも御疎闊と奉存候右故天下に兔角無頼の者多く不良を働き候ては被召捕年々牢獄に瘦死し斬に處せられ候者御府内ばかりにても夥しき義と奉存候御教導さへ被爲行届候はば其者共とても多くは良民たることを得其身の職業を以て何也世の用に可相成を左も無御座候は

誠に慙むべく惜むべき義に御座候歐羅巴亞墨利加諸國の記載を讀み候に年分死囚の數全國民口にかけ合せ甚だ寡く御座候全く教導に念入候效と被存候其民の性皇國より宜しきにも無之又皇國の民性の彼より不善なるには固より無御座被存候學校の建方も教方も東西諸蕃の制宜しく被存候へば總て其仕方に倣ひ其教へ導き候筋は孔孟の正道を和げ諭し惡事をせざる様に致し農工商賈にても其才發のものには別に先窮理の初歩を教へ其才に應じ諸學科を治めさせ候様に仕り大に天下刑人の數を減じ有用の工藝追々興り候様相成候はば天下の御有益少からずと奉存候儲又教へ導き候に孔孟の正道を以てし候と申内第一に孝道を先と仕度孝道を先と仕候には第一に喪服の制度を被爲正候事其大本と奉存候大戴禮に凡不孝は仁愛ならざるに生じ仁愛ならざるは喪祭の禮明ならざるに生ず喪祭の禮は仁愛を教ふる所以なりと御座候も此義と奉存候喪服に付候ては聊か拙著も御座候御忌諱に觸れ候義も御座候歟と奉恐惶候へ共兼々愚存之次第も御座候に付拙著喪禮私説制服之條録出奉入御覽候御熟覽の上御採擇も被成下候はば天下幸甚の義と奉存候

諸其他奉申上度は御辭命と御稱呼との義に御座候斯く五世界の諸蕃と御交通被爲在候に就ては御辭命に御念被爲入候様仕度奉存候御辭命よく修り候べは他に少しく御短處御座候ても其御補ひにも相成又御國勢を被爲張候にも御辭命に其力多かるべく奉存候春秋の際に當て鄭の小國を以て晉楚の閒にはさまり其兵禍を受け候事殆ど虚歳なく候ひしを子産政を執り候に及で辭命に非ざれば其大患を免れ候事の難きを知り裨謀子太叔子羽等の名士を選用し草創討論修飾の伍に充て尙自らは是に潤色の功を加へ諸侯賓客交通の閒に施し候故に敗事あることなく定公獻公襄公を合せて五十餘年の久しき兵禍を免れ社稷人民これに依頼して保全を得候事全く辭命を修め候功と被存候へば此節も其器に當り候者御撰擇子産の意に被爲倣假にも御敗事無御座候様有御座度奉存候御稱呼の義と申は近日御勅宣の寫と申もの拜見仕候僞託の品にも候へば誠に幸の義自然眞の御勅宣に御座候時は假令天朝にて被仰候にも御稱呼不相當御國體より申上候ても御政治上より申上候ても穩かならざる義天下國家の御爲大損御座候て小益なき義と深く憂勞仕候義に御座候其理解よく被仰上向後外

國を斥して戎狄夷狄と御稱呼無御座候様有御座度奉存候凡戎狄夷狄の稱は漢土の中つ國にて四邊の外邦をさし候辭にて代々の歴史御本邦の如きをも皆東夷傳に收め候是は全く漢土の彼の如く蚤く闢け代々聖智の王者出られ賢才の臣下多くこれに従ひ人倫の教も明に禮樂政刑制度文物形の如く備はり候故に倫理綱常もなく文字の教も届かざる邊陲の氓をば禽獸蟲豸の如くにも被思候故に戎狄とも蠻貉とも呼ばれたる事に御座候其申辯遂に常と成り御本邦の如き綱常正しき君子國迄を夷狄と申候は漢人既に誤り候義に御座候然るを御本邦にも又其誤に倣ひ只管外邦他國を貶し學行技巧制度文物此方より備はり候と見え候有力の大國を戎狄夷狄と御稱呼被爲在候は甚だ如何之御儀と奉存候御勅宣とて世にもてはやし候上は萬一外蕃へ傳播仕るまじきに無御座其節はいたづらに諸大邦の怒を起し候筋御損なる御事と奉存候よしや左迄に至り候はずとも天下の御大政を御委任被爲在候東府に於て御交通有之其國々の使節官人は皆夫々賓禮を以て被爲待候を無下に蠻狄と御稱呼御座候はむこと御不都合の御儀と奉存候古來御本邦にて夷と可稱は蝦夷に限り候義日本紀に蝦夷

をえみしと被訓候これ其證と奉存候征夷之御稱號も本蝦夷より出候御事御本邦に於て夷と呼び可申國は蝦夷の外に無御座其他は皆蕃と被稱候義と奉存候往古任那高麗百濟新羅も夷と被爲呼候義無御座琉球も夷と被稱候義無御座候只今もし朝鮮琉球をさして夷狄と御稱呼御座候はば彼の小國だにも必ず甘んじて受け申まじく況や東西洋の大國を斥して夷狄と御賤み御座候は只此國の御無禮に當り可申と奉存候國語に夫戎狄は冒沒輕儻にして貪て讓らず其血氣治まらず禽獸の如しそのたま／＼來て貢物をつらぬるも馨香嘉味を俟たず故にこれを門外に坐せしめて舌人に其性を體の儘委ねて之を與へしむと御座候いかさま禮儀の教を知らず進退上下の別もなく食物等に臨んでは血氣に任せ馨香嘉味の調理をも俟たず打喰ひ候様のものに候はば禽獸に近しとて是を門外に坐せしめ狗畜に物を與へ候如く取扱御座候も其理ある事又戎狄の方に於ても其稱呼を甘んじ其禮を受て柔服候故に子細もなき事に御座候然る所當今諸蕃の使節これを御門外に坐せしめられ御饗應候はむと御座候に納得仕るべしや否や此義納得仕らず候はば夷狄の稱決して納得仕らず只納得仕らず候

のみならず其御不當御無禮の筋奉糺候様の事に至り可申かと深く氣遣ひ奉存候義に御座候外蕃御取扱は即ち賓禮に屬し候義賓禮は即ち五禮の一に候へば厚くせさせられずはあるべからずと奉存候厚くと申義無下に彼を崇め御國體を屈し候義には無御座至當の禮儀を以て御手薄の義無御座候様にと申迄に御座候免に角只今の御形勢此御方に御無理御座候ては不相成候様奉存候就ては漢學の諸生輩詩文章の上勢に任せ英夷赤狄紅毛夷墨黠虜等の詞を用ひ來り候義に御座候へども斯く諸蕃と御交通御座候上は右等の文字扱ひ一切不仕候様屹と御觸諭し有御座度奉存候此御時節柄彼方にて右等の義に付御國事を指摘し申上候様の事御座候ては甚だ遺憾之義に奉存候免角此御方には分毫の指摘すべき事無御座候様被爲在度御事と奉存候

儲尙申上度奉存候は御國力の義に御座候皇國を以て外國と比較候に氣候の順正なる米穀の富饒なる人民の靈慧にして衆多なる實に外に類もなき御國柄と奉存候然る所其類もなきほどに御國力不被爲屈候竊に其故を求め候に四箇條御座候様奉存候其一は遊民多くして徒に其財用を耗糜し候に御座候其二は買

易理財の道外蕃の如く開けざるに御座候其三は物産の學未だ精しからず山澤に遺利あるに御座候其四は百工之職未だ力學器學を知らず人力限あるに御座候此度格別の思召を以て御大政御變革御座候に就き候ては御府内の遊民を始め各其職業に有付候様の御趣法御座候は勿輪の御事たるべく奉存候へども御本邦にて只今遊民の第一と申は佛氏の徒に御座候凡天地の間に少壯男女なくこの身ある時は必ず居る所の分位有之候分位有之候時は必ず治むる所の職業御座候然る故に天地の間に無職のものとは一人も無之筈の事に御座候右故に若一人其職を守らざる者有之候へば國家天下を保ち候もの必ず陰に其害を受くると申事に御座候皇國人口外國の割合より多く候と雖も此御小國を以て魯西亞漢土亞墨利加英吉利等に比して申上候佛寺の數殆ど五十萬に及び候其寺内有る所の僧侶多きは數十百人其少きは十人五人乃至一兩人なるも有之僻土貧地の寺院には農夫同様自ら耕し候も御座候へ共多くは皆佚居して飽食煖衣する事に御座候天下國家の上一人其職を務めざるもの御座候だに陰に其害を受くると御座候に今五十萬宇に近き寺々に許多の僧侶其身を托し空しく

世上の米穀布帛物材を耗糜し候是天下大に其病害を陰受して御國力大に振ふ事を得ざる根元と奉存候かゝる御時節と相成り上様御發奮被爲在世界第一の御強國と被遊度思召候ても此一路の御始末つき不申候ては譬へば山を作るに九仞ならむと欲し候に傍より土石を崩し持去り候が如く井を掘り泉に及ばむことを欲し候に隨て土沙を填め候が如く許多の歲月を被爲積候とも決して思召に報いさせられ候御時節有御座間敷奉存候さりとて佛の義は年久しく骨髓に入候病患に付倉卒過劇之御改革等御座候ては之が爲に大害を引出し可申候へば久漸の病は久漸を以て治め候外無御座と御觀念被爲在先邪説の亂ること能はざる正理を以て御一法を被爲立それを以て御持久被遊御怠慢無御座候間に小を積て大に至り微を積て顯に至り遂にその大功を被爲收候様有御座度奉存候邪説亂ること能はざる正理とは天下に佛に依らず儒禮を以て葬祭仕候義を御免許被爲在候と度僧の法を嚴にせられ候との義に御座候度僧の法は往古太政官にて度牒を被授候御法被爲復其御法通り嚴重にせさせられ候はば一二十年を出でずして僧徒の數大に減じ可申左候はば其間情願を以て度を受け候

僧は其行も必ず汗下に有御座開敷眞の佛道の爲にも願はしかるべき義と奉存候只今現在の僧には多く出家と申ながら出家に非ず貪冒汗穢の行在家の俗より甚しきも有之候斯ては其數多しとて其道盛なりとは申すべからず其行高くその學ぶ所深く候はば其流の人寡くとも其道の爲には可然候佛氏の學儒者は一概に邪説と破し候へ共其靜寂を習ひ候處全く孔孟の教とは別派に候へ共一向人に益なしと申すべからず且其説く所多く列子に合ひ候又列子の説は西洋實測の理に叶ひ候所往々有之候是皆その心得の妙にして地に東西の別なく世に古今の差なしと可申候既に人に益なきにあらず候へば必しも其書を火にせず其人亦世に用ふる所可有御座候世に用ふる所有之候はば少しく是を存し候も亦妨無御座義と奉存候但只今の儘にて被差置候ては天下國家の蠹害大方ならず御國力の振ひ候期無御座候に付是非共御良法を以て此大害を被爲除度奉願候孔孟之教を以て忠孝仁義の道を御怠慢なく御訓導有之喪服の御制度御更張被爲在候はば天下人民大凡其向ふ所を存知可申其所に於て儒葬の義情願に任せ候様相成候はば佛氏は多く入らぬものと可相成候又住持無之廢寺の分其

處置いか程も可有御座其儘手を入れ文武の教場に可仕なごも可多候邪宗門の義も平日正道の御教諭に御念入り加之保伍の法を被爲正其教導の士大夫に命じ邪書を繕き邪教を聴き邪言を吐き候義をいたく被爲禁候はば此く只今迄佛氏の徒世話仕候よりも御邦禁御嚴密に相成可申奉存候
儲貿易理財之義に御座候處私義本より此筋修業不仕乍去洪範の八政食貨を一二に列し周禮天官の職九職を以て萬民に任じ商賈阜いに貨財を通ずるを以て一職の務を爲し候事に候へば貨財の義は先王の政事食に次で被重候事兼て心得罷在候別して當今の御代御國用乏しく御座候ては何事も思召通に出來させられまじく是非共御理財の御法相立不申候ては被爲叶開敷奉存候私義理財の術學び候事は無御座候へ共西洋諸蕃貿易の利を以て國本を立て候大略は承知罷在候依て愚意奉存候には是迄の御會計に被爲立置候外別に専ら西洋の貿易理財の術御取用ひ御老中様の御内にて其御掛り被爲定公儀御船を以て其御定額をも被爲立不斷清國を始め五世界に往來して彼の民と貿易し其御出方を以て防海の御入費外蕃御接待の御用途に被爲充度義と奉存候全世界の形勢此體

に相成候所にては防海の義も益々御嚴重に無御座候ては叶はせられず候就中御軍艦の數も次第に可被爲増城制の義も追々被爲改西洋諸國の如く御國內の城々脈絡貫通候て京師邊は別して京師を環拱圍繞候て互に相控援し候様有御座度是等の義皆外蕃に依て御入増に相成候御用途にて年々歳々莫大の御儀に御座あるべく是迄の御會計を以ては何程の御省略を被爲務候ても御出方決して有御座まじく奉存候依て愚管には是等皆外蕃に因て御入増に相成候御用途に付其分悉く外蕃より被爲得候御出方を以て被爲償候様有御座度ものと奉存候

右申上候公儀御船にて御積送に可相成品々大凡此度御改革にて工職に有りつかしめられ候遊民の手に成り候様相成候はば此計策全く御成就と申すものと奉存候今天下の佛寺四十六萬餘宇一寺に就き一人の僧を減じ工職に就かせ候はば四十六萬餘人出で來り候二三人減じ候はば百三十萬の工職出で來り候加之僧徒ならざる遊手の民いか程も有之又正道御教諭の爲に惡徒に陥らず刑戮を免かれ候者も有之夫等は御趣法次第皆職業を勉め勵み候様可相成左候はば

只今迄世上に無之工職の數二百萬人出で來り候は容易の義に可有御座候然る上に力學器學を興し外蕃の通り便利の器械をも製し候て人力を助け又彼國々の方法に倣ひ諸所に工場を開き互に相勵み候様御董正有之又物産の學を明にして山澤の遺財を收め其出來立候貨物と共に船に積み五世界に御通商御座候はば莫大の御利方にて防海其他の御用途に隨分御餘計可有御座其餘計を以て益御國力を被爲振候様被爲勉候はば上様思召通五世界第一等の御強國と相成候はむこと年を數へて可奉待義と奉存候乍去大事に付早速其功を被爲收候には至らず但邪說亂ること能はず候の正理を御持久被爲在いつ迄も御怠慢無御座候様被爲在度左候はば小を被爲積候もの必ず大に至り微を被爲積候もの必ず顯に至り候はむ事何の疑か御座候べき只々御速功を不被爲望御持久可有御座の御規模を被爲定候事御肝要と奉存候此御規模即ち御國是に付假令御執政の御方様幾度被爲替候てもいつも御同様に御所務有御座度奉存候尙一二御利害上存寄候義も御座候へ共一々毛舉仕可申上筋にも無御座候但前條申上候數件は當今に於て御事體の大なるものと奉存候に付不顧愚蒙上言仕候御審察

の上御採用も被成下候はば天下幸甚の義と可奉存候以上

戊九月

眞田信濃守家來

佐久間修理

文久二年十月

幕府への上書草稿を文聰公の内覧に供せんごす
る時添へて上る

乍恐謹而奉言上候此度公邊御大政向御變革に付私義御咎之身分に御座候へども天下の御爲是迄久敷貯へ罷在候愚存竝に當今存じ付候管見共上書仕度右成否奉伺候所其義は公邊へ御伺被成下候はむとの御儀且右草案御内覧も被成下度と御沙汰之趣難有仕合奉存候此義は奉内願候ても奉備御内覧度奉存罷在候義に御座候所思召より斯く御沙汰も被成下候御事全く當今天下之御形勢御大切に被思召候より被爲出候御儀と深く難有奉存覺えず感泣仕候義に御座候但當今切迫の御時節に候とて天下御大政之義を言上仕候ひながら御自國御政事向之義一向等閑に奉存候ては所謂おのれの田を捨て人の田を芸り候とも可申

甚だ恐入候義且此度公邊非常之被仰出に就き候ても當御政事舊新之御流弊御改革にて格別之御施設不被爲在候ては被爲叶まじく奉存候兼々當御政事之上に存寄候事共御座候に付書付乍恐奉申上候犬馬主を愛し國を憂ふるの誠と被思召御採擇被成下候はば獨私微臣の幸のみに無御座實に御國家之幸と奉存候義に御座候抑當節之御政事向御上には御安心に被思召候歟御不安心に被思召候歟可也と被思召候歟不可也と被思召候歟御不可と被思召御不安心と被思召候はば一日も御安居は難被遊若又御不可とも御不安心とも不被思召候御儀に御座候はば是必ず其心術不正無學庸妄佞諛のもの御座候て御聰明を奉壅蔽虚飾を以て取繕ひ罷在候に相違無御座候只今御政事に考課銓綜之御制典權衡殿最の御法則と申もの無御座候故に非常の勳勞御座候ものも其御賞を蒙らず非細の過怠御座候者も其御咎も無御座上は御家老より下大小の御役人に至り候迄己の職守の得不得と申義を辨へず言責の有無を心得ず御家中御領内風儀ますますあしく廉恥地を拂ひ風俗敗壞に及び候ても移易の術あるを見ず私を營み貨に穢れ獄を鬻ぎ奸を蔽ひ訴訟事致沈滯年を重ね候ものありと雖も其儘に

成行き御城下町々外近村に強盜の患有之候へども其盜を得ず人殺有之候ても其賊を得ず御城内御金藏に盜賊入込大金を奪去候へども其賊を得ず御荷物會所にて江戸御送りの大金を盗み候もの有之候へども其罪人を得ず博奕を業とし風教を害し候もの有之候ても糾治行届かず偽印を蓄へ偽書を作り候者有之候ても其儘に差置左候て其典憲を掌り候御役人平然と罷在御上にても平然と被差置候依て此切迫之御時節に至り候ても時を濟ひ候大策等には念慮も不及只偷惰苟且一日一日と容れられ候事のみを心掛罷在候事と被存誠に長大息に堪へざる義に御座候是等の御體たらくにて果して御安心に可被思召哉否哉右を左迄に不被思召候は全く虚飾を以て御上之御耳目を糊塗仕候者御座候に相違あるまじくと相察候自然左様のもの御座候て尙私申上候義をも左様には無之右は全く修理の誣言に候なご論じ申上候もの御座候はば是は實に國の大蠹と可申もの速に御除き不被遊候はば其害遂に不可測候間御手短に御目付差添御用筋を以て私方へ罷越し辯論候様可被仰付候左候はば私義御目付目前に於て言下に申伏せ一言半句を開かせ申聞敷候左候はば屹と御上を奉欺候嚴科に被

處永く御家中の大戒と相成候様有御座度候私此度斯く迄に敢言仕候義は是迄の御次第にては實に不容易御國家の御大事と奉存候故に御座候間乍恐御精神を被爲奮御目背を被爲拭候て御熟覽被成下候様仕度奉存候抑古より人君之御職分は賢相を得るを以て第一とし宰相の職分は君を正すを以て第一とす此二者各その職分を失はず候時は治體正しくして朝廷尊しと申事に御座候御家にて申候へば御家老は則ち宰相の職に御座候然る所御家老共其治體の本原を明にし實に御上を正し奉り候經世經國の主旨に通じ候ものとは無御座大抵は身を容れられ君寵を固くし惟其役儀を失はむことを憂ひ候もの而已に御座候其上近來未だ弱年にて文に付き武に付き一事の修業も仕らず吏事と申し民務と申し一端に通曉仕候義も無御座候ものを御引集め御家老職被仰付候是何等の御政事に御座候哉堯舜三代の昔より官に任じ候の大法は農務を委しく心得候ものを后稷とし百工の事に達し候ものを共工とし水土の理に深きものを司空とし萬民の教道に精しき者を司徒とし兵務に熟鍊候者を司馬の將帥とし君徳を匡養し治體に通達して才德衆に出づる者を以て宰相と仕候事に御座候其

上にも考績の法と申もの有之各をして益益勵精して怠慢なる事なからしめ候
如此に御座候てこそ天下國家の政治は行届き候事に御座候然る所只今文武御
振興御座候はむと申に文にも通せず武にも達せざる者其の總裁にていかでか
行届き候はむ夫にて可也にも行届き候義に候はば聖賢治道の御世話も無之義
選任を精しくするの沙汰も無之筈に御座候免に角政治は人を得るに御座候義
にて一人本才の人御座候へば一國の政治は勃然と奮興候義に御座候是を中庸
に人道敏政と申候事に御座候管仲の齊に於ける樂毅の燕に於ける由余の秦に
於ける諸葛亮の蜀に於ける其證に御座候此邦にても近代池田家にて熊澤治郎
八を御用ひ保科家にて田中三郎兵衛を御用ひ其功績今に至るまで見るべき事
御座候趣に承候此二人の才前の四子と比倫可仕には無御座候へ共其人物丈の
功御座候義にて固より凡庸俗吏の能く及ぶ所に無御座候只今の學校年々四書
五經素讀講釋出來候者有之劍槍の術少々粒立ち候者出來候を御世話の様心得
候者も有之哉に御座候へ共當今文教を振ひ候と申には駈と御學政を被爲立御
家老は勿論大小之御役人御家中子弟の面立候者は皆文辭章句の末のみに趨ら

す周公孔子の仁義道德の教を體として西洋の天文地理萬物の窮理を兼ね當世
の時務に通じ候所を用とし候義を辨へ候様不相成候ては御文教の振ひ候とは
難申候又御武備とても子弟之少々劍槍を使ひ候位申すに足らず責ては御火器
の分一昨申年正月御武具奉行申立候通内實は私義御武具方の爲に取調候義に御座候御出來寄り小銃火
薬も建築通り御欠目なく御家老より御番頭迄は大抵バタイロン位の人數は百八
千人人より引廻し候義を熟練致し大小火器の打方用ひ方等巨細に相心得其製作の
致し方々其吟味の法迄悉く辨へ罷在御番士御徒士末々の子弟迄劍槍術に兼て
西洋砲術を錬磨し馬に乗り候者は馬をもよく狎し馬上銃の演習も不斷怠らず
騎兵調鍊も調ひ候と申に無御座候ては當節御武備御整ひとは難申上奉存候斯
く申上候義を誠に大業之義如何致し容易に出來可申と危ぶみ存じ候ものも可
有御座候いかさま容易には參り兼ね候但只今迄の御振合にては百年千年相立
候ても逆も出來仕らざる義に御座候へ共爰に其人有之治國の政典を心得御正
令を設けて年を重ねて是を成し候はむに何の難きことか御座候べき學校之御
法相立ち人材御教育御座候上に四類觀異の法と申ものを被爲設賢能を御進め

貪冒を御抑へ御與奪を被爲慎其人材次第御家老職迄御擢升可有御座御法にだに相成候へば素讀講義等の御吟味竝に年々出席の日星を數へて御褒美被下置候等の細屑の御手数數無御座候て子弟少壯を論せずみづから勵みみづから勉め其業に進み候はむこと譬へば蒸汽車の行くが如く停む可らざるの勢に相成候はむと奉存候四類觀異の法と申は德行を第一とし才學を其次とし勞效を又其次とし門地を下となし徳均しく候へば才學を取り才學均しく候へば勞效を取り勞效等しく候へば門地を取り候事に御座候只今迄此御法無御座候故に門地高きものは安逸に怠り卑きものは目前を營み出身の業を勤めず子弟の才ある者はまゝ其才に誇り放蕩無頼名檢を犯し候に至り候も全く此御法無御座候故に御座候いか程才能御座候ても德行かけ候ては御精選に入候事叶はず其德行だに修り候へば其才力次第御徒士席尙下々のものなりとも御家老迄に御擢用御座候と申ものに候はば自然と禮節を守り名檢を謹み行儀を缺き候様のもの先は御座あるまじく候畢竟才に誇り卓犖不羈を働き候も多くは行く先望むべきの地無之故に御座候然る所行く先望むべきの地を闊大に御開き德行を御進

め才能御用ひ御座候と申に相成候はば誰か憤發激勵仕り候はざらむ凡その人純粹之聖賢に無御座候以下は必ず勸懲黜陟の典によらざれば叶はざる事と奉存候又御武教とてもやはり此意にて夫々藝術御世話御座候上に三奇拔選の法と申ものを被爲設第一に謀略ある者次に材藝超絶の者次に統領たるべきの器量ある者御選び御登用有御座度尤も士は文武兼備仕るべき義に付此三奇拔選は即ち前の四類觀異法中の才學と見候て宜しき義と奉存候此政令だに相立ち御勵精被爲在候はば前申上候位の義は十年を出でずして屹と御行届き可有御座奉存候公邊にて此度文を興し武を振ひ候様にと御座候は必ず此御實效を被仰候御儀と奉存候其上尙被仰出候に富強の術計厚く心掛候様にと御座候此義は御家老共竝に要路の御役人輩如何なる術計御座候義哉私義は兼てより富強の術も少々は心得罷在御國家に就て種々思慮計畫仕候義も御座候乍去此義は事體廣大にして其節目も叢細に付一朝に紙筆上申上難盡奉存候其内一事殊に早く御規模を被爲定度と奉存候筋御座候閑爰に奉申上候御家之御本領かゝる山中には御座候へ共當今は矢張海を被爲兼候思召にて御

人數相應に御選びにて此節御軍艦奉行所へ御頼御軍艦操練所に於て大艦の扱ひを稽古し兼て測量學修業候様被仰付借又公邊へ御願にて西洋諸蕃の内より非常の節軍艦の用にも可相成スクーネル位の船一艘御買上有御座度其内御勝手向御右餘御座候はば蒸汽船軍艦等も御備被遊度當節差向候所は一艘にて可然奉存候左候て其船自由に致し航海の出來候迄の稽古は江戸海にて修業致させ又越後今町近邊の内公邊へ御願ひ且榊原様へ御示談相應に御手廣に御屋敷地御取立追々御領内は勿論此一と平らに物産の學を興し產物御一手に歸し候様に仕工作場を開き別紙公邊上書にも認め候通の手段にて多分の貨物を拵出し御用意の船を以て近くは松前朝鮮九州邊の地球清國は勿論遠くは歐羅巴亞墨利加迄も被遣貿易の利を御收め御座候様有御座度其仕方は別紙上書の趣に御座候前條の文武御振興の上に此船艦之御策相立候へば御富強の御術計先大半を被爲得候御儀と奉存候且又被仰出候に環海の御國海軍を不被爲興候ては御國力不被爲振候に付追々御施設可被爲成とも御座候上は諸侯様方御參勤御緩にも相成候義に御座候へば右御定策遅々候はば山國なりとも海船用意の義等被仰出まじきに無御座其所にて御手初御座候

より只今速に左様御座候方公邊へ御忠勤の御一廉にも相立可申天朝其他天下への御聞えも可宜候へば一日も早く御規模被爲定度御儀と奉存候乍去箇様の義も免に角人を不被爲得候ては御行届きかね可被遊奉存候借又前條申上候大銃御製作の義位にても能く西洋の砲理に通じ其利害得失を審にし金木二材の理に精しく器學力學の二科を兼ね心思細密にして粗ならざる者に無之候ては僅か十門以上の筒にても分釐の誤り無之候様にと申は決して難出來義に御座候善き圖を以て職人へ申付候はば夫にて無差支出來可申など考へ候は素人によく御座候ものに御座候所私義など左府の間諸家様より御頼にて大銃數十挺監造仕能々容易ならざる義を存申候砲制に自然誤り御座候節はおのれを害し敵を利し候義に付能々被爲慎御誤造無御座候様有御座度奉存候監造の者其人に無御座候時はわれ知らず誤を生じ候ものに御座候只今迄の御火器誤謬多に付已む事を不被爲得此度御改鑄に相成候と則ち其確證と奉存候此切迫の御時節に付天下の御爲にとて多分の御用途を以て御改造も被爲在候御儀に付再び御誤造無御座候様御精密に御念慮被爲鍊監造の者を御選擇被遊候様有御座度

奉存候私義去る辰年只今より十九箇年前已に世界の形勢を相察し天下國家の事砲術兵法器械物産等の學西洋の學を興し候にあらざれば行届かざる義を存じ自身にも講究仕御家中へも一統此學に従事仕らせたく存込み右には有力の西洋學者御召抱に無御座候ては教導不行届候義に付其義建白仕學藝相應に出來候もの三人迄奉薦候所御家老共其識も無之其志も無御座候故其議遂に行はれず残念の義に奉存候諸般の學藝三年にして小成し九年にして大成仕候義に付十九箇年の間には再度之大成に至り候義に候へば私其節の建議行はれ御家中洋學盛に御座候はば此節銃器御改鑄などにも監造の御用可被仰付もの定めて幾人も御座候て萬端御行届き可有御座の所其節の建築行はれず十九箇年空しく過ぎ去り候義に付西洋砲書等少しく讀候ものだに私門人兩三輩の外無御座夫すらも私手離し候て此度の監造御用被仰付誤を生せず近來西洋にて益々精密に發明仕候法通り製作出來候はむと申義は無覺束まして唯聊か翻譯書なごにて身筒の形を心得候位の者にては又々誤を貽し候て御實用妨害御座候様の事に至り候は眼前の義と奉存候此度莫大の御用途も可惜義且大砲製作不精密

にては實地緩急の場に臨まざる以前既に御身方の銳氣を挫き候一つの御損と奉存候何分も其人を御精選被爲在候様仕度奉存候彌其人を御精選御座候御儀に相成候節は乍恐當御家中は勿論此近國を合せ私の半學を心得候者も有御座開敷候私義當時公邊御咎を蒙り日蔭ものに御座候へ共只今僑寓蟄居罷在候歸一郎下屋敷内空隙の地餘程手廣に御座候此地内右御改鑄中暫く御用地に相成御用掛鍛冶鑄物師大工の外雜人の出入を禁じ是迄御用筋を以て私方出入御許容に相成居候御武具奉行にて金木兩材竝に御用途受拂の義取扱ひ御火器臺車竝に彈藥車等製作の式總て私の指南を得可仕様被仰付候はば日蔭の御用いかけ程も勉強仕西洋精密の規則に不差候様製作可仕奉存候此切迫の御時節當今の御急務たる御砲器精密に御製作御座候はむ爲に私蟄居罷在候同屋敷の内御用地に相成私義に應身の御用被仰付候とて御子細も有御座まじく乍去尙御不安に被思召候はば其段程よく被仰立候ても可然御事の様奉存候此節と相成候ては公邊にても私罪案の義も大抵相白し居可申義と奉存候其義自然も相成兼候御様子にも候はば責ては蟻川賢之助に右監造の義被仰付度左候はば餘人の十

人にも相増し可申奉存候此者義は久しく手に附け候門人にも有之又於江府親類名目に相成居り候義に付其不行届の所はいか様も申談じ可遣候左候はば可也御用便に相成可申奉存候是等の義自薦の嫌に涉り甚だ如何に御座候へ共十九箇年も御手後れ御人に御逼迫の御時節故に聊か管見を奉獻候義に御座候宜しき様御取舍被成下置度奉願候儲又前にも申上候通御政治は免に角其人を被爲得候に無御座候ては御上にいか程御聰明御才智被遊御座候ても決して振ひ不申右故に明君は必ず賢相を擇み用ひ候義に御座候只今此切迫の御時節罷成候所にては御國の御安危も御興替も其人を被爲得候と不被爲得候とに御座候義と奉存候御家來に被召使候は必しも世祿の御舊臣ならずして苦しからず初め申上候管仲は桓公の仇に候ひしかどもこれを用ひて五霸の第一と被成候樂毅は本魏人に候へども燕の昭王これを用ひて大功あり由余は本秦人に無之候へ共穆公これを用ひて西戎に覇たられ候蜀の先主と孔明とは御存知被遊候通りの義に御座候其他和漢とも風雲の會に乗じて勃興せられ候人主等は其臣下皆舊臣にては無御座候左候て形の如く各其忠義を得られ候左候へば臣下の

忠義は悉く上の恩遇に出で候義と奉存候就ては賢能才智千萬人に勝れ候もの御座候はばたとひ浪人なり御他家の御家來なり苦しからずこれを天下に被爲求其人に應じて厚く御祿位を賜り御政事の指南役に被遊和漢古今竝に五世界諸蕃の政治迄御參酌の上是迄新舊の御流弊被爲除除と永世御率由可有御座御邦典を被爲立御政事御一新被爲在候様仕度奉存候新參に候ても御恩遇次第決して不忠は仕るまじく別して賢者に候をや只今越前家にて大分御用立候横井平四郎は本細川家の御家來に候を御借受にて被召使候趣に御座候當時の形勢能く早く御心づかれ候義と奉存候春嶽様にも天朝より御人選被爲在候程の御方に付いづれにも御非常と被奉存候當御家中只今の如く一人も世祿ならざるは御座なく殊に代々大祿を戴き罷在候ても名節行檢禮義廉恥を磨き候義御世話無御座候時は私利の爲に公義を害し候風習に相成候事只今之通に御座候是又世祿の臣も其忠義必ず恃むに足らざるの一證に御座候免に角君臣は義を以て合ひ候大倫に御座候故に臣の君に事うまつり候には義の一字を重んじ道合へば服従し奉り不可なる時は去ると申覺悟を以て一日も苟且の御奉公は仕ら

すたとひ永の御暇を戴き候までも義理を枉げ候勤は仕らずと申ものに無御座候ては眞實の士とは難申眞實の御信任は御出來かね被遊候義と奉存候然る所私を營み公義を害し候ものの癖として三代層恩の御主君を去ると申事無之社稷と存亡を共に致し候が忠義と申候左程に忠義を辨へ候義に候はば平日御上の御目を暗まし奉り私利を營み公義を害し候は何事にや是全く失ひ候事を憂ひ候のかこつけ言と申ものと被存候夫と申も平日大小の俸祿を戴き罷在永の御暇にても奉願候へばもはや再び其半分四半分の祿にあり付候事叶はず是其才學器量衆に出候と申事無御座候故の義に御座候自分の心この義を危ぶみ罷在候に付言を託し面を飾り候へども本來義の一字を辨へず候故惟容悦をのみ宗として不忠を働き候依て愚意には右の託言御國に満ち候て御上ほど御損なる義は無御座候と奉存候いかにと御座候に譬へば平日其價無之器物を莫大の高價を以て被爲召置候と同様に御座候平日高價を以て下品の器被爲召置候も無御據候處すはと申節其器物其器に當らず御國家の事を敗り候はば如何可仕と此事のみ寒心罷在候義に御座候乍去かく申上候へばとて只今迄高祿被下置

候もの減祿被仰付候様にと申上候義には無御座是迄久しく其價なき器物を高價に被爲召候も畢竟は大鋒院様御以來御家に御邦典と申もの無之此義委しく申上候様仕候へば其言甚長く候故爰に不奉申上御不審の御儀に被思召候はば追て御尋可被成下候又御代々此僻境に被爲入候故御家老職相勤候ものも知見開けず俊傑名士に接見候事も無之無學固陋にて治國の典刑を建て候義を心得ず右故に御政治の御大柄たる御賞罰をだにも或は軽く或は重く或は有り或は無しと申次第嘆かはしき義に御座候いにしへは舊成人なしと雖も猶典刑ありと申候に御家には甚だ恐入候義に御座候へ其人法ともに無御座候唯大祿だに戴き罷在候へば其才其識平人に及ばず候ても御家老迄被仰付候如此御國體に御座候故に大祿の徒學術を精研し德行を勵修し治體を通曉候て御國恩に奉報候はむなどは夢にも心得ず幼少より先は游惰に暮し候が通常にて御座候全く上の御仕向けの宜しからざるより爰に至り候義に付夙く御督責の御法を被爲立寛く其勉勵補過の期を被爲設其上にても猶怠惰放肆遂に其材を成し候はずは不及是非義に御座候今一概の御沙汰等御座候ては所謂戒めずして成るを見る是を暴といふにて人心を難得義と奉存候偕又乍恐御上の御身の

上に就て奉申上度候事は御學問の義に御座候古々聖主賢君其生質の美類に出で萃に抜き候も其徳を成就御座候は皆其學に由られ候義に御座候堯舜之性のまゝ也と申候だに傳記を見候へば皆其師範有之候湯武のこれを身にし候と申も湯王は伊尹に學ばれ武王は太公に學ばれ候事詩禮孟子に見え候殷の高宗は初甘盤に學ばれ後に傳説に學ばれ候事尙書に見え候齊の桓公は管仲に學ばれ晉の文公は舅犯に學ばれ候事孟子禮記に見え候此四聖三賢のみならず孔子の大聖と雖も十五志學より毎十年に御進歩御座候て七十に至て心に從ひ矩を踰えざるの妙に及ばれ候聖賢既に如此に御座候況や其他に於て學を捨て候ては叶はざる義と奉存候故に天下の君も一國一城の主も其世子たるより學問出精御座候様其法御座候事に御座候大戴禮中の保傅則ち其規則に御座候私義此所に所見御座候故に御上御幼稚の御砌より御學問の御儀に付候ては屢建言も仕候義に御座候へども御家老にて不取用御學問の御儀甚だおろそかにて唯柔介を御相手に被遊候のみ啖と大儒碩師に御下り御修業被遊候御儀とては無御座天下の名士俊士を被爲召候て御講習御討論被遊候御事も不被爲入候へばいか

に御生質御明敏に被爲渡候ても思召被爲違候御事も乍恐可被爲在又御誤に御座候義を御誤には御座なくと御心得被遊候類も可有御座被奉存候尙書にも滿は損を招き謙は益を受くとも申し又能く自から師を得るものは王たり人おのれに如くことなしと謂ふものは亡ぶとも御座候何分にも御謙虚之御徳を被爲勉候て御學問被爲進候様奉願候初にも申上候通り只今切迫の勢と相成候ても御家中人材に乏しく候所にてはいかがとも難被遊候就而は御上御學問とても御師範の人無御座候ては御迷惑被遊候御儀に付廣く御師範とも可相成學者を被爲求暫く御私意を祛けさせられ候て聖帝明王賢主良君の學御修業被爲在候様有御座度奉存候聖帝明王賢主良君の學と申し他に非ず大學格物致知の御工夫を以て事物の變を窮めさせられ事物の御前を過ぎ候者義理のある所は纖微と雖も必ず御洞照被遊御心目の御間に瞭然として毫髮の隠暗無御座候へば自然に所謂意誠心正と申御場合にて天下の事務に應せさせられ候御事一二の數を數へさせられ黑白の色を辨せさせられ候と御同様なるべく奉存候御學問の御手筋自然も此所を主と不被遊候時はたとひ御才發の御資質御座候ても其知

見善を御明らめ被遊候に足らず其御淵識理を御窮め被遊候に足らず終に天下國家の治亂に補ひ無御座候は私の私言には無御座古賢の成論にて御座候人君の御學問は甚だ御大切なる義にて其御學問の有無正不正其御方寸の間に御座候て天下國家の治不治遠大の外に響き候易に毫釐に差ふれば繆るに千里を以てすと申は此義に御座候私義卅四歳の夏迄西洋の語の字だにも存せず罷在候處洋書讀めかね候ては萬端不都合の義と存じ夫より讀初め候所公邊御咎を蒙り候ひしは只今より九年前に御座候其頃既に西洋兼學の事天下に知られ申候讀み始め候より其節まで丁度十年に御座候十年かゝり候へば一向不案内の義も大抵には得る所も御座候ものに御座候況や御上の御明敏を以て御良師とも御良友とも相成候人を被爲得朝夕に御講習御討論被爲遊候はば未だ御春秋にも被爲富候御儀其御造詣の御深遠私共の能く量り奉る所に無御座奉存候只今御家中四書など讀み候もの御上韓非を御好被遊候とて竊に奉議候者も御座候歟に承候韓非も大才の人さすがの李斯もみづから及ばざる事を知り秦王に讒して殺し候程の者に付其議論人を動かし候所有之大に人の智識を引立候所御

座候右故孔明も手づから其語を抄録候て後主へ差出し候事と被存候私などいらざる義に文章などをも好み候癖御座候て韓非の文法精絶なる所をば學び候はむとも存じ候て隨分繰返し通讀仕候義に御座候然る所好所は隨分宜しく候へ共又其疵瑕紕繆論外なる所御座候堯舜湯武を賢とし候は乃ち天下の亂術なご申し又孔子未だ孝悌忠信の道を知らずなご申候は悖亂の極其身を殺して餘罪あるものと可申候正學の格物窮理の御功を以て箇様の理非を御明斷被遊候ひながら御書物被遊御覽候へば韓非に限らず何書にても皆正學の御羽翼と相成候況や韓非とても名言頗る多く人君國家に益御座候義少からず候へば御好み被遊候義御尤に奉存候然るを眞の識見も之なく叨に奉議候は卻て愚なる義に御座候惟々御讀書之上之御取舍も義理の御判斷も何卒御善師とも御良友とも相成候人を被爲得御相談被遊候はば御學問御長進被遊候事日を數へて可奉待奉存候左候はば御家中の文學も自然と暫時に丕變面目を革め可申と奉存候兔に角羣を離れて索居すれば過ち多く獨學なれば固陋なりと昔より先哲の名言も御座候何分にも善き御師友を天下に求めて被爲得候事當今最大之御先務

と奉存候孟子に湯の伊尹に於ける學んで後これを臣とす故に勞せずして王たり桓公の管仲に於ける學んで後これを臣とす故に勞せずして覇たりとも御座候學び候と申は其所得の學術を受傳へ候事に有之これを臣とすと申はこれに委任して國政を掌らせ候事に御座候其臣下君に及ばざる者のみにて治をなしよく其國の治り候事は古より今に至る迄未だ嘗て有らざる義に御座候此切迫の御時節御國政の義も段々申上候通の義に付是非共急に御救正あらせられず候ては叶はせられ開敷詩の大雅に天の方に蹶する然く泄々たるとなかれと御座候も此義に御座候泄々は怠緩悦從の義と申事に御座候怠緩悦從は是迄の御風誼に御座候何分斯くては叶ひ不申此場御救正御座候にはちと御峻薬に無御座候ては急患深病を癒し候に至らず書の說命にもし藥瞑眩せざれば厥病瘳えずと御座候も此義に御座候乍去是も兼々醫理に通達候て能々其病因病症に明に其對症の薬を施し候に其斤兩分銖を誤らざるものに無之候ては病を癒さむとして卻て其病を深くし人を殺し候に至り候義も可有御座候是又良醫を被爲求候こと御急務之上の御急務と奉存候甚だ奉犯冒御威重候義深く奉恐惶候へ

共忠憤の所激みづから止め候事能はず遂に極言仕候義に御座候御熟覽之上御採用も被成下候はば實難有仕合可奉存候以上

十月

佐久間修理

猶以奉申上候右不憚忌諱極言仕候義御熟覽被成下置思召に入らず御採用難被成下候義に御座候はば別紙公邊への上書草稿御下げの節一同御封を以て御下げ被成下候様仕度奉願候左候はば直様火中仕跡を滅し候様可仕奉存候私義は過日より段々御覽も被成下候通り皇國の御爲には廿餘年前より天下億兆の人に先ち天下の御大計ごも數度及建言遂に又其事に依て公邊より蒙御答御手数に罷成候其段は恐入候へ共天下形勢も大半私申上候通りに相成候右故に天下後世へ恥ぢ候義も無御座又御國家を辱しめ奉り候とも聊か不奉存但感應院様より莫大の御厚恩を被り候ひながら是と申御奉公も仕らず奉慙愧候義に御座候乍去顧み候へば御同院様御加判之列御引際人の及び候はぬ非常の御奉公も仕候義も御座候此義壹岐主水晴山三人御同院様既に御世存知候義に御座候ひきを被爲讓候上は一筋に御上へ死力を盡し忠勤を抽で奉答御國恩候覺悟に御

座候ひし所未だ半途にも至らず公邊御咎を蒙り多年屏居罷在候義遺憾至極奉存候乍然回想仕候へば御上へ奉對候ても聊か非常之御奉公申上候筋も有之少しく思出なきにあらず去れば此書付思召に入らず御採用も難被成下御儀に御座候はば公邊への上書成不成に拘らずます、伏蟄殘年を終へ申度奉存候若又是迄之御宿弊等御感悟被遊私申上候義共其理御座候義と思召も被爲取被下置候はば助之進へなりとも密に被仰出此節御加判の列にも被爲入從來御親類様之御儀にも御座候へば助之進を以て竊に板倉様へ御相談被爲在俊傑を被爲得候て御政事御作新被爲在候様有御座度奉願候板倉様御身内に山田安五郎と申もの御座候卑き所より出候ものよしに御座候處學問も有之記憶等も宜しく事務にも疎からず候様被存候水野様御藩鹽谷甲藏なごも随分御用立可申候人物に御座候右等の者三五年御借被遊御學政御整頓御政事の御相談御座候はば相應に御益可有御座奉存候但兩人共此時節故御兩家にては御手離し御承諾御座候はむ事いか可有御座哉其段は難計奉存候浪人儒者に藤森恭助と申者有之候經學詩文手蹟等迄大抵に出來候ものに

候へども其著し候海防備論と題し候書一覽仕候處當今の時務に於て餘り迂陋を極め候ものに付是等にては御政事の御相談は出來兼候義と奉存候私塾居被仰付候以來も九年に相成候に付既に學術大成の期年にも候へば廣く天下に御求め被遊候はば私など夫迄名も存じ候はぬ後生などにけく格別の俊傑も可有御座候何分も其人を被爲得候事返す、も御先務の又御先務と奉存候以上

内問により文聰公に呈したる意見書

文久二年十月

今般公儀より勅書御寫御廻しに相成被仰出候様は此度勅書之通被仰出候に付ては銘々之策略被爲聞度被思召候間見込巨細相認め來二月御上洛前迄早々可被差出との義に付右被仰出候御書付勅書御寫共御下げ御見込被仰立候御考合せにも可相成候様略見込の次第早速申上候様御用番矢澤將監申達し候義に御座候處右御尋之策略に至り候ては私義などの能く及び候所に無御座候惟私義の能く及び候所に無御座候のみならず御家の左衛門佐様楠公等と雖も御策略

は立ち申まじく惟左衛門佐様楠公のみに無御座候孔明孫子太公望と雖も策略は立ち申まじく惟孔明孫子太公望のみに無御座候孔子孟軻と雖も恐くは策略の出づる所は有御座まじく奉存候如何となれば孟子齊王に語られ候にも小は固より大に敵すべからず寡は固より衆に敵すべからず弱は固より強に敵すべからず海内の地の方千里なるもの九にして齊その一をたもてり一を以て八を服せむとするは鄒の小國にして楚の大國を押領せむとするに異ならず蓋し亦その本に反れと申され候今此大地の周圍を獨逸の里法を以て量り候に五千四百餘里にしてその面積九百二十七萬八千九百六十方里に御座候然る所大地四分の三は海にして四分の一は陸地に御座候當今は外蕃測量の學至精に至り候て五世界の坪數をも綿密に積り二百三十七萬九千五百五十六方里と定め候事に御座候然る所本邦の面積獨乙里法を以て量り候に壹萬方里に満たず候左候へば五大洲の二百分の一には遙に及ばず候本邦は膏腴の地のみにして外國は過半不毛の地と致し候ても猶一と百との如くにて懸隔惟鄒と楚とのみならずと被存候其上外國の學術技巧はかね／＼申候三大發明より日々月々に致長進天

文地理船艦銃砲城制等一として其妙に至らざるは無之且蒸汽機の學盛に相成候より海には蒸汽船を走らせ陸には蒸汽車を行き候近日五年前獨乙にて開板に相成候精しき地圖を得候て披覽候に魯西亞佛郎察英吉黎獨乙窩窩所德禮幾字漏生沙彈尼亞翁加利亞蘇□齊亞和蘭伊斯巴爾亞彌利堅の諸國皆盡く國內に蒸汽車を行べき爲の鐵道を幾條となく開き短きもの數十里長きものは千里に餘り候皆本邦の里其國力の富有強大いかなるべきや此一事を以ても推知すべきことに御座候然る所本邦にては大朝御始御船政御砲政等も未だ相立不申諸藩とても御同様の義二三藩君相御手揃にて御勝れ被成候も御座候様に候へども私なごより見候ては未だ御不行届の義と被存候其上かねても申候通天下城制今時軍術の法に叶はず外寇の防禦は總て脈絡の貫通を缺き三都を始め外部の設ともこれなく人に警へ候へば全く裸體空手のありさまに御座候其上是迄彼を知るの義を務めさせられず御駕馭の御法を被爲失剩へ兵術只顧御不心得にて江府第一の御要塞たるべき御殿山の地外國へ永く御借與御座候趣承り候如此當今の御様子にては和蘭の小國と御抗拒御座候ても甚だ無覺束奉存候和蘭を誰も小國と輕視候へ共いか

さま本國は三十年前ベルギーの分れ候より益狭小に相成候處地誌を詳観候に尙印度彌利堅等に頗る廣大の領地有之日南諸島は大抵其所有に御座候日南諸島ばかりにても其廣さ本邦より較大に候へば其歳入も恐らくは本邦より多かるべく候左候て年々航海貿易の利を務め其國力を強盛にし船艦銃砲海軍の用意も行届き候義に候へば此一國と御抗拒も當今の御姿にては無覺束と申す義に御座候而るを況や外四大國を併せて一齊に御抗拒御見せ付け御座候はむ策略いづれよりして可立申や蓋し亦其本に反らせられ候様奉願候義に御座候抑五世界の學術智巧次第に開け各國の兵力所作此形勢に相成候も實に天運のしからしむる所皇國獨り此天運を奈何せさせらるべき且御鎖國の御手段も充分の御國力と御伎倆無御座候ては不被爲叶又學術智巧は互に切磋して相長じ候もの故に始終御鎖國にては御國力御伎倆共竟に外國に劣らせられ終に御鎖國も遂げさせられざるに至り可申是本邦當今の御形勢に馴致候を以ても明に知らるべき義に御座候夫よりは外蕃と禮義を以て御交通其間に公武御合體被爲在御共々御勵精被遊古代神聖のおのれを捨て人に從ひ人に取つて善を爲すの

御盛徳被爲渡萬國の長ずる筋を被爲集外國にも追々日本領をも被爲開御國力の御強盛も萬國の上に出で銃砲の御修繕彈藥の御術業も萬國の上に出で軍艦の數も萬國の上に出で將材異能の士の衆多なるも萬國の上に出で兵卒の鍊熟も萬國の上に出で城制の堅固なることも萬國の上に出で候様被爲至候はば兼ては關關の禍心を致包藏候國々も自然と奉懾畏御抗拒を待たず跡を絶ち可申又御徳化を奉慕候上よりは貢獻を修めて奉臣服候も可有御座候是も本に反るの說に御座候尙書にも力を同じうするは徳を度り徳を同じうするは義を量ることも有之古司馬法にも物を見て與に侔しうする是を兩之といふとも有之候其國力敵國と侔しきに至らずして兵を構へ候ては其徳其義いか様彼れに超過候とも其志を得候義は決して難出來是乃ち天下の正理實理明理公理に御座候已むなくば此道理を以て御見込の義被仰立天朝大朝御共々其本に被爲反此切迫の御時節御過擧不被爲在候様奉願度義に奉存候以上

十二月廿四日

文久三年正月十日

文聰公に上りて自ら薦むる書

乍恐謹而奉言上候

苟子の臣道篇に大忠なるものあり次忠なるものあり下忠なるものあり國賊なるものあり徳を以て君にまうし之を化するは大忠也徳を以て君を調へてこれを補ふは次忠なり是を以て非を諫めてこれを怒らしむるは下忠なり君の榮辱を恤へず國の臧否を恤へず偷も合ひ苟も容れられてこれを以て祿を持し位を竊むのみなるものは國賊なりと有之候私義去秋中切迫の御時節に付公邊へ上書仕度段御様子奉伺候所右上書草稿御内覽被成下度被仰出候に付難有仕合奉存奉入御内覽候に就候ては公邊御大政向の義のみを心配仕御自國御家政向之義一向心配仕らず候ては所謂おのれの田を捨て人の田を耘り候譬にも當り恐入候義に付是まで久しく貯へ罷在候愚見共不取包極言仕自然御旨に叶ひ不申候はば御下げを奉願火中仕跡を滅し可申又奉言上候條々御感悟も被爲在被下置候はば板倉様等へ御相談御家政向御一新被成下度愚衷を盡し申上候義御座

候所右上書御下げも不被成下候義に付稍御感悟被爲在候御儀も可有御座と竊に喜幸仕舊臘二十九日公邊より御咎御免被仰付候に就き切迫之御時節柄元朝直様御目通奉願候所翌二日寛々御目通被仰付段々見込申上候義共思召被爲在御可否は不被仰下候得共御聽納被成下候御儀も御座候上に御退隱の思召も被爲在候御儀薄々傳承仕殘念至極奉存候趣申上

殘念至極奉存候義は御家中志あるもの誰も同様の義と申内私義は感應院様より殊に深く御愛遇を蒙り莫大の御厚恩を奉荷その萬分の一をも奉報に及ばず御同院様群臣を被爲指候故何を仕候張合も無御座悲歎罷在候内亞墨利加の事起り候て其一時御軍備等御上より御委任も被成下主水にも能く私の申候義を用ひ候故に丑寅兩歲聊か微力を伸べ御奉公申上候義に御座候所程もなく門人吉田寅次郎が獄事に連累仕九箇年の間整居被仰付何かと御手数數に罷成候のみ其間一事の功績も無御座漸御咎御免被仰付是より身を致し心を盡し忠勤を勵み候はむと奉存候へば御上御年未だ御三十にも到らせられず候て追々御退隱の思召と奉伺何共可申上様も無御座殘念至極に奉存候畢竟右様思召つかせられ候も所謂君ありて臣なしと申にて何事も何事も思召通り貫かせられざる御事の多く候より出で來り候思召にも候歟と奉恐察御退

隠の義慙く思召被爲止一日おのれに克ち禮に復れば天下仁に歸することも御座候へば何とぞ御克己の御工夫を被爲務今慙く御政事向御勵精被成下候様奉願候所御謙讓之御辭を以ていか程の御儀可被爲出來歟御鑒定申上候様被仰下候に付先年より奉感服罷在候一證を申上右之通流石守國院様感應院様御血脈を被爲受御聰明の御資質被爲在候得ば其人をだに被爲得御信任被爲在候はば天下に御美名を耀かし松代の政事は格別也と世の公評を被爲得候程にはいかう難くも有御座開敷申上候又御軍制之義も御家中勇壯の者も有之志なきものも有之二心を抱き候ものも可有之候夫等いかが可致と御意御座候節私義申上候は私義に被仰付候とも法を以て維持仕候はば右等の御懸念は有御座開敷と申上候節法の一字は韓非流也と御意被成下候いづれも即座御可否は不被成下御軍制の義は將監へ被仰付置御政事の根元なる御勝手の義は助之進へ被仰付置候義に付兩人へいか様も強く可申談旨再三御意も被成下候御事故大に力を得即日兩人方へ罷越申談じに及び候所將監義は弱年不學兵務の事等はこれを基に譬へ候へば四つ目殺しをだにも辨へずと申程の義又助之進とても固陋不才

にて治國の大典等申談候ても周官一部一讀も仕らず候義何を申談じ候ても總て面牆にひとしく分毫の見解も無御座銃砲兵備等に至り候てはやはり將監も同様一事を辨せず實に致し方無之依て翌三日登城仕御用席残らず列座の所に當番御目付小崎貫兵衛立合之上御老職共へ每一人及尋問候は昨年中公邊への上書草案奉入御内覽候節耘田の譬を以て御國政向の義上書仕候右は御下げにて一覽有之候哉否やと尋ね候へば何れも御下げにて一覽候との挨拶に付再び右之條々如何被見候やと問ひ候へば一々尤も至極の義に存する趣五人とも異詞無御座候に付私申候様はいかにも左様に可有御座候御大切の御政事之批判を申上候義に付一事にても胡亂の筋有之候ては士として活き候ては難居候左程に重き御政事の義に付私申上候義一々尤も至極に候はば各是迄の被取計方難相濟筋に陥り候此義如何と申候所何れも誠に恐入候との挨拶に御座候依て私申述候は是迄の義は畢竟大鋒院様御以來御子細有之御邦典の立たざるに坐し候義に付不及是非斯る切迫之御時節と相成り公儀被仰出に御遵奉御軍制嚴重に被爲整候様にも吳子陣定の説の通り賢者上に居り不肖者下に處るに無

之候ては戰勝之道難立御軍制御調等も皆むだごとく御座候賢智のもの必ず上に居り愚不肖の者必ず下に處り候様には御政事に睨と御率由可有御座御邦典無御座候ては叶はず畢竟御政事の振はず候は權衡殿最の御掟も無之六廉弊吏の御法も無御座候故に候依之賄賂に穢れ獄訟を鬻ぎ候族も有之容悅を宗として祿位を竊むの徒も有之候義いづれにも此所にて睨と御邦典の立候様有御座度と申候所助之進始め權衡殿最の義も分らず候故其義も一々解釋に及び六廉の義も不辨に付丁寧に申釋し廉善廉能廉敬廉正廉法廉辨これを六計とも六廉とも申候凡そ仕官候者廉の一字に欠け賄賂苞苴に穢れ候ては其人となり仁厚善柔也とも取るに足らず才能ありとも稱するに足らず事に粗略なしとも觀るに足らず折目正しきも尙ぶに足らず法を用ふること嚴也とも賞するに足らず理非暗からずとも悦ぶに足らず故に聖人の政事に於ては諸役人の吟味に廉の字を以て基本とすること也と申候所助之進夫は何に出居候事哉と相尋ね候故周禮小宰の職に有之候と申答へ候義に御座候御大切之御政事を掌り候者六廉の義をだにも辨へず候事に候へば御政治に紕繆多く候は實に無理ならずと奉

存候依て既往は不及是非是より速に御法の建ち候様仕度と申候所助之進申候は何分力に及ばず修理何としか仕候様申聞け候へども御邦典の建立に至り候ては一大重事にて容易の談に無御座候故有無之返答にも及び不申儲又將監に向ひ兼ても申述候通圍碁の遊戯にて候だに未だ四つ目殺しをも辨へず候て上手の碁打に對し碁を圍まむと致し候ものは無之然るを況や兵は國の大事死生存亡の係る所是より重き事は無之候を是迄一向に兵道の修業も無之候て兵を被總候はむとは御國家を何れの地に置き御家中士卒をいづれの道にゆかしめむとての料簡にやと申候所助之進申候はこれより士卒共々いろはより修業候心得と申候私申候は其心得は宜しく候へども只今いろはを習ひかゝり候子供に他所向への書札を認め候様申候へばとて能く辨じ可申哉否や軍務の重大なる唯他所向の書札のみならず候將は民の司命國家安危の主也とも申候に今より始めて其初步を學び候はむと申もの安んじ其大任に當り候義尤もあるまじき筋と申候所將監解悟の様子にて其掛いづれにも御訴訟申上度申候を采女傍より申候は折角將監へ被仰付候義にて來る七日迄には三奉行より御兵制調も出

候筈その出で候所にて可否を定め右を以て一兩年も試み夫にて不行届に候はば其所にて別人に被仰付可然只今直に御訴訟には及び申まじく申候に付私申候は此切迫の御時節故に御上へも申上御上よりも強く申談候様御意も御座候に付御國家の御爲至當の道理を極言候に有之候然るを是迄の因循苟且にならひかゝる俗論を發せられ候はいかなる心得や此切迫の御時節半月一月をも争ひ候義を一二をも辨へざる人に其兵權を掌らせ一兩年も試み候はむとは何事に候や修理今日此談判に及び候は御國家御急務の御爲にて斯る悠々緩々の戲談にては無之候此御時節に至り候ても御國家重大の義を思はず筒様の俗論を發して正議を妨げられ候右にては實致し方なく候閒勝手にせられ可申私は別に覺悟有之候と氣色を替へ申候所采女も詞塞がり將監も彌御訴訟御賢慮奉伺に相決し同列も皆其意に同じ候に付夫にて引分れ御城を下り候義に御座候其談判の終り御家老共申候様は將監ばかりに無之私共も修理に申され候ては皆不學無術不行届に付御役御訴訟申上候方可然修理一人へ御委任御座候も御賢慮次第など申事も聞え候へ共私義一言を出さず其故は形の如き庸妄の徒知し

て爲すを
妄と申候 おのれを恥ぢ御役義御訴訟申上候は責てもの義又御目金を以て私義に御政事向御軍制竝に學校の義御委任も被成下候はば是迄五六人にて勤め罷在候義私一人にて聊か御差支無御座候様所置可仕覺悟に罷在自然も右にて五六人前の働も仕得ず御上の御差支を引出し候はば速に私義に死を賜り夫を以て是迄の御家老共に御謝し被遊再び本通り被仰付御子細も有御座閒敷又私義に御委任も被成下候はば致堂再勤御勝手掛被仰付候様奉勸候致堂御勝手を總べ私義御軍制を總べ御家政向の義共々協同取計らひ候はば初めに申上候天下に御美名を耀かし奉り御政道御武備とも被行届候御名譽の四方に鳴り響き候様には月を數へて待ち可申義と奉存候義に御座候ひき其の翌四日終日在宿仕候所夕刻友衛より私存意通り容堂様へ御斷りの御返翰御草案取調差上候様申來り候に付取調夜中友衛方迄差遣し内心奉存候様は容堂様御方彌御斷りに相成候に付ては差向き御急務の義外に御人も無之將監輩御訴訟申上候に就き候ては御軍制の義御任せも可被成下候歟と奉存舊臘除夕御咎御免以來御軍制の御本相立候様永御預け足輕返上の義少しも早く相決し候様申談じ置候義も有

之彌果敢取左様も仕度翌五日登城仕御用席揃候所にて三日に端を開き置候足
輕返上の義を申出で切迫の御時節に付今日速に政府より始めて返上御座候様
致し度左候はば其餘は破竹の勢にて力を勞するに及ばず行届き可申と申談じ
候所各因循苟且の詞三日に彌増し候義甚だ不審に存じ必ず子細あること相察
し候に付友衛に面會候へば夜前私取調差上候御斷御返翰案文御不用に相成月
期を以て御借し被遣候に御決心被遊將監始め御訴訟申上候嘆願書御差戻しに
相成未熟にても不知案内にても出精相勤候様被仰出銘々奉畏又々相勤め候氣
分に罷成候趣緒々不及是非者共に御座候御上よりいか様被仰出候ともいか様
蒙御叱候とも御上の御榮辱を勘辨仕御國の御臧否を恤へ候へば此御時節不知
案内の義を以て衆士大夫の上に立ち大事の御軍制等取扱ひ候義は難出來次第
於同列も固より其所に任せ兼候義に御座候處いづれもいづれも御上の御榮辱
御國家の御臧否を度外に置き唯一身の祿位を持養候のみを心掛候苟子の所謂
國賊共の義に付實に致し方無御座候賢者在位能者在職と申は聖王治國の大經
に有之旁ねく俊父を招いて諸々の位に列せむと申候は賢臣承君の用心に御座

候其在位在職不賢庸妄にては其下にいか程賢智のもの罷在候てもいかんとも
仕るべき様は無御座譬にも名匠人に規矩を與へて人々をして巧ならしむると
能はずとも申候此切迫の御時節に當て其在位在職のもの庸妄の國賊のみにし
て一人その賢能を不被爲得候ては去冬中公儀より被仰出候此上別して入念武
備嚴重相整候様可被心掛この御趣意にも第一に被爲觸候御儀且大國大藩にて
だに御招き御武備之御相談等有御座度と申修理義を御上御手放し不被遊の御
美意を奉盡惑一應も二應も奉勸請遂に御手放し御借し被遣候に取捨候は旁ね
く俊父を招き候意に相反し候唯修理御登用にて御邦典相立權衡殿最の御掟相
備はり六廉弊吏の御法相振ひ候へば是迄貪汗を極め候奸吏ども身を竦め候様
罷成り是まで庸妄不學祿位を竊み罷在候者も其間に濫竽仕候事能はず候様相
成候に付いかにも致し修理義を外へ出し其跡是迄通りおのれおのれが勝手儘
を仕候はむと私計を企て候に相違無御座候乍去深く勘辨仕候へば夫迄に至ら
ず必ず大敗を引出候はむと奉存候其故は御家中御無人には御座候へども末々
迄には餘程有志も可有御座候其者共修理義を此節柄御手放し御他家へ御借し

被遣候様奸邪庸妄の徒相談評議仕候を深く憤り居候趣に付此儘にては急ご一騒動可仕かご心配仕候私義五日以來深く爰に心配仕候故六日朝より一切來客を謝絶仕門人故舊と雖も堅く面會を斷り候義に御座候瓜田の靴李下の冠何分しからざる事を得ざる勢と奉存候何分も速に御思慮を被爲運御國政も相振ひ御軍制も相立御家中士氣折合候様の御處置有御座度奉存候實は此御時節御政事御改革御軍政御一新御座候はむに奉自薦候は甚だ恐入候へども私義御登用御委任被成下候の外有御座間敷奉存候私三日五日御用席へ申談じ候義を以て政府惑亂など稱し候向も御座候かに承候惑亂と申は非を以て非に混じ枉を以て枉に難へ是非枉直分つべからざるを申詞に御座候私の申述候義は天下の公是を以て天下の公非を碎き天下の正直を以て天下の邪枉を破り候義に付一聽了然聊か惑ふべき様も無之又亂るべき様更に無御座候右御不審に被思召候はば於御前今一應御用席の者ごもと三日に其席に罷在候御目付をも被召出御側御用人御側役等も其御席に被差置私義と辨論被仰付御聽聞被成下候様仕度奉存候左候はば惑亂にあらざる義を惑亂などと申候事も相分り私申述候御國家

の御大事天下の公是公非も著顯明察に至り可申又其上にも孟子に左右諸大夫國人の言を盡し候説も相見え尙書洪範にも汝に大疑ある時は謀なんじの心に及ぼし謀卿士に及ぼし謀庶人に及ぼし謀卜筮に及ぼすの言も御座候へば廣く御家中御領内の人言をも盡させられ卜筮までも被爲及候て此御大切の御時節御遺算無御座候様仕度奉存候自然も御遺算御座候ては御取返しに不相成御後悔の御儀も可有御座奉存候免に角苟卿の申候大忠次忠下忠國賊の御辨別被爲在候様奉願候此段味死謹て奉言上候以上

正月十日

佐久間修理御

尙以奉言上候此度攘夷御策略御見込公儀へ被仰上候に付御家中大夫士數多く見込をも申上候はむに私奉申上候見込御取用ひ其儘被仰立に相成候義榮幸無此上難有仕合奉存候竊に計算仕候に私見込の如きも天下に必ず多くは有御座間敷右御取用被成下候御儀に付御上御見込御大名様の御内必ず第三等迄は被爲下まじく奉存候果して右之通御座候へば御上の御顯榮ごも可申上候私義外様へ御借被遊向後不居合候節又々筒様の義御座候はむに私の見

解の如きもの無御座候はば御上の御恥辱を引出し候はむも難計候御政府の者共是等の考も更に無之と被存候私義御家に罷在蒙御擢用和漢古今を斟酌仕五大洲の諸蕃の政刑をも参考し御邦典を建て御兵制を定め學校の御政を修め候はば御國忽ち御善國と相成可申私義御他藩へ罷越候はば政府は庸妄弱年のもの而已に有之是迄奸吏の始末をも致しかね候手振にては御邦典を建て候などは存じも寄らず御兵制學校等も眞に兒戲に侔しかるべく左候はば御國の否塞は只今より又甚しかるべく候政府のもの共是等の考も總て無之事と被存候然らば苟子の申候君の榮辱を恤へず國の臧否を恤へすいやしくも合ひ苟も容れられてこれを以て祿を持し位を竊むの國賊と可申候此切迫御大切之御時節かゝるもの共に御政事を被爲委候事乍恐天朝大朝へ被爲對候て難被爲濟御事と奉存候何分御發憤被爲在御政事向御維新被成下候様奉伏願候以上

文久三年正月

板倉周防守に上らんこせし眞田家に關する陳情書

佐久間修理

乍恐謹而奉申上候此度稀之御大典を以て上様御上洛被遊候御供被爲蒙仰近々御發駕も被爲在候趣奉傳承御日合相迫り候に就ては御公務御繁劇之御儀も固より奉恐察罷在候義に御座候然るを右御中へ拙者底より上書等仕候は實に奉恐入候義に御座候處此切迫の御時節に當て信濃守様第一身の御榮辱のみに無御座實に眞田氏一家の興衰に拘り候義有之心痛至極奉存外に睨と致し候御親類も無御座候所にては御前へ奉申上御裁判被成下置候様奉願候外更に術計無御座に付御時節柄御繁務之御中を顧み奉るに暇あらず奉申上候義に御座候あはれ信濃守様御續合の御儀を以て眞田家興廢に關係仕候義御明鑑被成下置いか様とも國體相立ち武備充實仕公儀被仰出之御趣意にも相叶ひ當家の家名衰替に至らず候様被成下度偏に奉懇願候右發端は別紙一印に起り八印に終り候義に付別に舊臘廿九日よりの日録を相添奉入御覽候間御公務之御暇隙を以て篤と御熟覽被成下置度奉願候既に七印之通御館迄罷出奉申上候義信濃守様に於ても一度御聞濟も被下候義に付八印云々の次第も御座候て出府不相叶候へ

ごも此節の有様を申上當家立行き候様御智略之程奉仰候此切迫の御時節に付重役の者竝に拙者義をも一同京師へ也とも被召出急に兵制等も當今の御實用に相成候様御手入被成下度伏而奉願上候此段謹而奉申上候以上

眞田信濃守様御家來

正月

佐久間修理印

尙以奉申上候拙者一身の義も當惑至極奉存候既に容堂様へ御借し被遣候に相極り罷越し候様被仰付候上は君命に従ひ候より外無御座拙者一身の上を申候へば君命を以て大藩の御招きに應じ候義榮幸にあらずと申べからず候へごも拙者當藩に不罷在候ては別紙一印五印の次第にて政體兵制共決して立つべきの日無御座候へば被仰付候義には御座候へごも甘んじて土州様へ罷出候義難仕奉存候去りて不罷出候へば君命に戻り候筋又君命に従ひ候へば君家の廢替目前に御座候義詩に所謂進退維谷と申は拙者今日の身の上にて實に當惑仕候是又御裁判を以て進退を相決し度奉存候心事何分も御灼照被成下度奉冀上候以上

別紙目次

- 一印 去戌年上書
- 二印 容堂様御直書寫
- 三印 拙者取調べ候御斷御返翰案
- 四印 九日月番重役赤澤助之進へ申立
- 五印 十日上書
- 六印 十五日御書下寫
- 七印 十九日助之進切昏
- 八印 廿日助之進申渡し被仰出の御趣意

文聰公の世嗣に關する建白書

口上覺

差向き御國家の御大事と奉存候義御座候に付御時節柄同志の者申合一同申上候各様にも御誠忠を以て御評議御協同御座候様有御座度奉存候殿様御儀御生

上書

二三七

文久三年三月三日
有志の連名
なれども先
生起る草の
成るもに

得御虚弱にて御多病に被爲在未だ御壯年に不被爲及候へども往々御勤も難被爲出来被思召且御不幸にして御出生の御子様方御早世被遊御世嗣の御方様不被爲入候に就き候ては御相應の御方様御養子に被遊御自身様には御退隱御保養專一に被遊度昨年中より頻て被仰出も御座候趣奉承いづれも残念至極奉存何卒乍御多病猶暫く御勉強御勤め被爲在被下置候様仕度竊に祈上罷在候義に御座候然る所此度公方様御上洛御留守横濱表へ英國の軍艦數多く渡來申立候次第容易ならざる事柄にて公邊より度々御達しも御座候御中又々御養子様御取極の上御退隱被爲在度御旨頻に被仰出各様にも御當惑の御様子に傳聞仕御心中奉察候義に御座候然る處御養子の御方様最初御目ざし御相談に被爲及度と御座候は秋月様御次男政太郎様にても御座候様承及候此御方様に御座候へば御幼年より文武兩道の御心掛も御厚く依之是迄諸侯方様に御例も無御座御二男様にて御扶持高御頂戴學問所奉行被蒙仰候と申御事又近日承り候へば御大政の義も春嶽様御相談相手に被爲成候よし御年若の方様には外に御比倫も被爲在間敷奉存候又細川様御舍弟に澄之助様と申上候方御聰明にて御心立

も御宜しく御學問も被爲在候御様子に奉伺罷在候御上既に御多病に被爲入連も御勤も不被爲出来候と申にて御養子被爲在候御儀に御座候はば第一に大録院様之御血筋を天下に被爲求自然御相應之御方様不被爲入候はば何れの御家なりとも御高之御多少等は被爲論候に及ばず御賢明にて且御年も被爲長直様御政事御引受御命令被爲在候様の御方様御選之御相談御取極に相成候様仕度御事に奉存候右初めに申上候御二方様にも候へば則ち其御選と奉存候何卒精精御懇望被仰進夫にても尙御相談御行届き不被遊候様の御事にも候はば此節御親類様にて板倉様井上様御加判之列にも被爲在候へば此御方様等へ各様より折入て御歎願有之御内々御口上をも被爲添被下置候様仕度奉存候斯る御時節殿様御餘儀なき御次第にて御退隱之思召を以て御養子被爲在候御儀に付其御方様自然も御幼稚等にて御政事向御自身に不被爲行届候御儀にては實に御國家の御大事と奉存候に付此段一同申上候御協同之程奉冀候以上

三月十三日

矢島小次郎 中川求記 横田作大夫

恩田重見	德田五百人	畑小平太
佐久間修理	松村五大夫	菅鉞太郎
矢野倉謙兵衛	山口左馬介	西山安太郎
望月繁之助	恩田十郎	長谷川直太郎
前島源藏	矢島源左衛門	飯島楠藏
増田助之丞	水野瀨平	正村勇之進
德田治郎左衛門	相澤龍太郎	堀田源之進
川崎源吾	八田競	齋藤龜作
藤岡伊織	高山敬之丞	三井榮助
堀田伴左衛門	山田兵次	小川邦人
松木源八	竹村熊三郎	蟻川賢之助
金井彌惣左衛門	松木束	白井平左衛門
飯島楠左衛門	望月主米	石倉藤右衛門
奥村權之丞	横田甚五左衛門	

鎌原石見様
 矢澤將監様
 小山田壹岐様
 赤澤助之進様
 玉川左門様
 小山田采女様
 望月歸一郎様

文聰公に上りて速に是迄の建白意見を採用せられんことを陳ず

乍恐謹而奉言上候

此度江府戒嚴に付乍御不快御勉御參府被爲在候に御決心被遊候御儀御宗社幸甚と御家中一統難有仕合に奉存候右に付尙御國家之御爲御發駕以前に御目通を以て奉申上度以友衛奉願候義御座候所御氣分御勝れ不被遊候に付御逢之義

御迷惑被爲在認取可申上候様被仰出奉畏候以御目通奉願候も他事に無御座此度江戸戒嚴御人數出御座候に付候ても諸向大狼狽御人數申渡有之候に臨み俄に銃卒に御賄被下學校にて始めて鐵砲之稽古御座候始末其他皆是に準じ候事共沙汰之限りと奉存候此義不奉申上義にては無御座候此時にして御悔悟不爲在候はば大非常之際御國家御破滅實に不可奉救奉存候何分も是迄數度奉申上候事件御明省被成下置速に其人を被爲選御政事御軍備御一齊に御振興被爲在候様不勝懇願之至奉存候此段乍恐謹で奉言上候以上

三月廿一日

佐久間修理

元治元年四月十四日

一橋公に上りて國家の治亂を陳ず

乍恐謹而奉申上候

一昨十二日微賤之身を御座之咫尺近く被爲召當今天下之御大計に被爲問及候御事此御大切之御時節御大任被爲蒙仰候より公聽廣觀之至道を被爲盡天下之小善を遺さず其方を被爲得再び太平の天下に被爲復候思召に被爲出候御儀と

天下蒼生の爲難有仕合奉存候儲又微臣之身に取り世の才徳を備へ重任に堪へ候士と雖も容易に得べからざる非常の御寵光を奉荷候義誠に以て過分至極感傷に堪へず奉存候私義の材と分とを以て申上候へば御顧問の□に及び候とも天下の御大體等は辭避遜讓仕猥に口を開くべきに無御座候へども當今之御時節實に御大切と奉存乍不肖天下之形勢當今之急務等兼て存寄候次第も有之旁御寵遇奉感戴候の餘り言辭之不敏を顧みず率直の御答申上深く奉恐入候幸に御原亮可被成下候但當今之御大計御下問に隨ひ略其端を開き一二之愚見奉申上候義に御座候所御登城御時限に迫り未だ其説を盡さずして御前を退き候は遺憾之限に奉存候素より御賢明に被爲渡候へば奉申上候一端を被聞召其底蘊迄を被爲盡候御儀に可有御座候へ共爲念微臣の愚を盡し一二申上殘し候と奉存候義左に認め取り奉入御覽候一昨聊か其端を申上候通常當今之御時勢を以て易卦に取り候へば蠱の卦に當り候と奉存候蠱は文に於て蠱皿に有之器皿の蠱あるは則ち敗壞の義に御座候器皿久しく用ひざれば蠱これに生じ人身久しく宴溺すれば疾これに生じ天下久しく無爲なれば弊これに生ずる皆これを蠱と

可申候卦象を申候へば艮山の下巽風有之風の山に遇ひ廻り候時は草木皆離披
撓亂仕候又二爻より四爻に至り兌の卦を成し候兌は正秋の卦にて候故秋山の
木葉風に亂れ候象も有之何れにも世の季に成り平穩ならざる姿に候故蠱を事
あるの卦と仕候義に御座候乍去既に蠱亂の事有之候へば必ず復治まるべきの
理御座候いにしへより治は必ず亂に因り亂は必ず治を開き候事理の自然にし
て易道の窮れば則ち變じ變ずれば則ち通ずると申は此義に御座候故に蠱卦の
象詞に元に亨るとも有之利涉大川とも御座候大川を渉るに利しとは艱難險阻
を勇往して世の敗れを救ひ功の御座候を申義に御座候もし艱難險阻を見て怖
れて進まず因仍怠懦にして止み候はば竟に蠱亂に終らむのみ豈能くおほいに
亨ることを得候はむや乍去その艱難險阻を勇往し候も他道を以てし候には無
御座尊卑上下の義を正すを主と仕るべき義と奉存候在下の者巽順に至り在上
の方に安定齊止の場に被爲至天下之事皆順道に止り候様相成候はば蠱亂は既
に治り候義と奉存候然る所蠱を治むるの道は事の先後を推原して舊弊を救ひ
且後害を防ぎ假にも倉卒苟且の筋無之候様可仕義と奉存候右故其象詞に先甲

三日後甲三日とも御座候甲は數の首にして日の始事の端に有之候甲に先だつ
とは事の先を推し原ねてその然る所以を究め候義甲に後るゝとは事の後に心
を注いで其將にしからむとするを慮り候義に御座候一日二日の初より三日に
至り候はその推すことの遠く慮ることの深きを申に御座候能く其然る所以を
究め得候時はこれを救ひ候方法は知り難からざる義と奉存候一昨劇甚の病痛
の如き其部分に就て救はざることを得ず候へども其病を根治し候は其病源を
究め候にあらざれば能はず其病源を探り得候へばこれを治むるの方は則ちそ
こに可有之と申上候は此義に御座候其將に然らむとするを慮り候時はその害
に備ふべき方略は立ち易き義と奉存候一昨乍恐是迄の御倉卒の御儀を數へて
申上候は是より後を被爲慎御預備の幾重にも届かせられ候様仕度忠懇に出で
候義に御座候兎角後世の蠱を治め候もの易道の先甲後甲の理に明ならず慮り
候所深遠ならず因仍怠緩に流れ候にあらざれば必ず倉卒苟且に出で候右故に
世を救ひ候に劬勞は御座候ひながら壞亂全く革まるに至らず功業未だ成るに
及ばずして弊害すでに萌し禍敗復生じ候ことを免れず歎すべき義と奉存候一

昨申上候防海の御國用御進取を不被爲務是迄の御會計を被爲取縮その御用途に被爲充候はむ御見込は假令一旦を被爲救候とも久しうすべきの御長策に無御座候又攝海の御要害御防堵御築立之義端的洋人の築城に精しき者に不被爲尋新式砲千八百六十年式發明以來の防法を不被爲悉候等は乍恐當今之御至計と不奉存此兩件は何卒後甲三日之義を被爲體候様仕度正名の説に至り候ては先甲の義にて子として父の蠱に幹たる固より其道あるべき義と奉存候人心の居合はざるを被爲救候も蠱の大象振民之義にて巽風の鼓舞三令五申その用と奉存候初爻の詞に至て幹父之蠱有子考无咎厲終吉と御座候此詞を玩び候へば實に周公今日の御爲に態と此詞を繋け被置候様奉存候當今蠱猶未だ深からず事猶濟ひ易く恰も此初爻の時に當り候様奉存候抑主上より申上候へば上様は子道に被爲當上様より申上候得ば御前は子道に被爲在候上様能く正名の事に被爲堪候へば名の正しからざる所今日の蠱を成し候所以と奉存候善き御子の被爲入候故に朝廷咎なきことを可被爲保御前能く此御事に被爲堪候へば朝廷上様共その咎なきことを可被爲得奉存候斯の如き御大任當時御一身に被爲集候へば實に容易ならざる御際會と奉

存上候乍然眞に能く此御大任を被遊御擔當其危厲を以て萬事御兢畏被爲在候はば當今未だ甚だ深からざるの壞狀再び平治に反り終吉を被爲得候はむ事何の疑か御座候べき惟何分先後深遠に御思慮を被爲運候様奉願候京都を始め五畿の分間圖を作るが如きは細事といへども急務に付速に御手配被仰付度孔孟の教を盛にし佛寺の數を減じ候が如きは極めて遠大にして速にすべからざる義には御座候へども御經畫は蚤く被爲定候様仕度此義は尤も御國用之大本と奉存候偕又政治は人材に本づき人材は學術に出候義に付天下の學術を被爲正胃子國子を教へ候御學政を被爲行候事當今御先務の又御先務と奉存候是等の義は奉申上候を待たず素より御規畫も可被爲在候へども愚見に於て或は毫毛の御裨益も可有御座歟事理の詳悉筆紙の能く盡すべきに無御座候へば尙又御用隙を以て御目通被仰付口上を以申上候義御採擇被下置候様伏而奉願上候猥に奉冒御威重候義不堪恐懼之至奉存候以上

四月十四日

海陸御備向御用御雇

佐久間修理

一橋公に上りて京師警衛の策を陳ず

過日海陸御備向御用御雇蒙仰候に付差向き御當地の形勢大略をも心得罷在度其段申立七口之御固場巡歴其御場所に於て諸藩出役のものに面會仕出張之人數等相尋候義も御座候所大分人數御差出被成候御向も御座候へども天下日久しき弊風にて有用の士卒に引くらべ無用の雜人數多く總人數の多勢失費の嵩み候程に御實用無之と被存候左候て多年御振合を以て被爲續御固被蒙仰候諸候様方其御疲弊云ふべからず無事の時に當て御疲弊御座候ては非常緩急の際いか様御心を被勞候ても御力に被及かね候義可有御座と深く氣遣奉存候義に御座候右に付諸候様方平素御疲弊に至らず御當地非常緩急之際卻て許多御實用可有御座御備之義存付候間萬一之御採擇にも相成候様書付左に申上候

一、兵法に兵は多を貴ます精しきを貴むと見え又備へざる所なければ少からざる所なしとも申候へば有用の士卒少くして雜人の多く候は兵道に於て固より取るべきにあらず候又平日御人數を分け置かれ候事可然御儀と不奉存候右よ

元治元年四月二十五日
一橋慶喜
京師警衛總督
攝津守
海防禦指
揮となる

りは御人數何程なりとも京師守護職等の御一手に被渡一所に御引集日々演習操練懈怠無之様勤めさせ御固めの口々をば巡邏の法を定めて不斷隙なく御見廻候て事ある時節其事ある方に向て相當の御人數を被差出其他は遙に應援掎角の勢御座候様の御手組に有御座度奉存候右一所御引集の御人數も西洋編兵の法を被爲取身體強健のもの共を廿歳より三十九歳迄尤も強壯の時限として俸を定めて御召抱に相成老憊又は病身に成り候もの等は速に御暇被遣弱卒の分は一人も其間に無御座候様御起法御座候はば拾萬石又は拾五萬石丈の御物成御座候はば御定法の御軍備に數字不明候歟超過し候精兵は豫備に可入置と奉存候右精兵御扶助器械製作の御料には一昨秋以來御參勤御交代の御制度御弛め奥方御在所に被差置候義御勝手次第に被仰出候に付ては天朝へ御貢獻之義御高柄に應じ可被仰付と申様承知罷在候右御貢獻の内を以て朝廷より右御兵備の御料に被爲充御下附相成候様御取計らはれ候はば則ち御親兵を以て京都御守護職に被爲附候御姿にて眞の公武御合體之御道理に於ても可然様奉存候是當今列藩の御疲弊を防ぎ京師御警衛は是迄より一層御行届あるべき一策

と奉存候此段申上候以上

元治元年

勅諭草案

勅諭之御大意大略如此にも有御座度哉に奉存乍恐起草仕候所如左
鎖港之法徳川氏一代の籌策に出づると雖も既に奏聞を経て定むる所なり然して後二百餘年遂に一度外蕃の輕侮を受けず本邦の羞恥を貽さず其偉蹟たる嘉獎すべきに足れり朕が身に及び嘉永癸丑幕府亞國の請ふ所を拒む事能はず恣に先代奏聞を経て定むる所の國法を改めかれと好みを通ずるに至て事果て後に奏聞す是朕の竊に痛憤する所なり其後一二歳ならずして亞國又蒸汽船所用の石炭を置くべき地を借らむことを請ふ幕府又これを許して下田箱館二箇所の條約を成すも亦事果て然る後に奏聞すこれ朕の更に深く痛憤する所なり又三年を出でず亞國本邦全州開港の事を請ひ且ミニストルを置くべき地を借らむことを望むミニストルを置くの地に至ては其構の内自國の法を奉じて本邦官府の制度を受けずと云へり斯ては邦域の内王土王臣にあらざるものあるに

非ずや實に開闢以來の大變革といふべし然るを幕府又その望む所を許して然る後に奏聞す是朕の尤も深く痛憤して堀田□□を輦下に徴し勅旨を降せし所以なり然るに□□陽に其勅旨を奉じて陰に彼れの條約に調印せしむこれに嗣て姦吏意を逞しうして忠讜を黜け外蕃の賂を納れ江府第一の要害たる殿山の地を借し與ふるに至る是をしも忍ぶべくは何れをか忍ぶべからざらむ是朕が詔旨を有志の列侯に降して鎖港の法を復し掃攘の功を速にせむことを冀ひし所以なり然るに今大樹世を嗣ぐに及びて深く従前の過失を悔い能く朕が意を奉遵し姦吏を祛け忠讜を用ひ弊を改め害を除き將に天下の兵備を修繕して夙くまで武官の職掌を盡さむとす是朕が積年の痛憤を舒べて更に依頼の眷念を敦くするに足れり於是つら／＼惟るに當時外蕃講明する所の學術本邦未だ講明せざるもの多く外蕃備具する所の砲艦本邦未だ備具するに至らず外蕃改築して堅牢を極むる所の城制本邦未だ其堅牢を極むる所以を知らずこれ宜しく反省顧慮して疎虞あらしむ可らざるべし古司馬法にも物を見て與に侔しうする謂之兩支といひ孫武が兵法にも多算は勝ち少算は不勝といひ周書にも力を

同じうする徳を度り徳を同じうする義を量るといへり今彼我の勢を詳にせず
猥に兵を構ふるが如きは滿清近く殷鑒あり戒めざるべけむや宜しく猛省奮拔
して學術技能國力兵備總て外蕃の上に駕出すべきの本を務むべし但一二の藩
に在りて利を捨て義を取り戦争を開いて天下の人心を一にし大艦巨砲は且戰
ひ且備ふべしといふ議を主張し浪士の徒これに附和するもの多く所在に黨を
集め羣を成すを聞けり専ら心を戦争に決して本邦の正氣を鼓舞せむことを欲
するは烈士の志取るべきに似たり抑亦兵は國の大事死生存亡の係る所といは
すや其算なくして猥にこれを動かさば宗社生靈を何れの地に置かむとかなる
朕竊に疑ひ思召す所なり故に今これを著筴に命じ天つ神の御心を問ひ奉り然
る後に事に従はむとす嗣で當に其得る所の占兆を擧げて商議裁度し是を建定
せしむべし其間爾列侯以下浪士の輩に至る迄能く朕が意を體認し謹飭に鎮靖
して輕忽の擧ある可らず黨與を集めて一方に據る可らず若此詔に遵はざる者
あらば即ち亂逆の徒なり刑憲の存する所朕決して赦さず速に幕府及び列藩に
勅し誅滅して後にやまむ普く遐邇に布告し咸く聞知せしむること斯の如し

礮學圖編

和蘭礮書に據り其の眞形を摸し、長短大
小毫髪をも爽へず。更に各部に於て細か
に分寸を記したるものにて、本邦銃礮史
上特筆すべきものなり。嘉永四年十月稿
を脱し同六年二月製本出來す。縦一尺横
一尺四寸百四十六頁の折本なり。當時の
賣價壹兩三分なりきと云ふ。原本は東條
村河口千嘉太郎氏の秘藏せるものなり。

礮學圖篇敘

始予沈潛西洋神器之術。蓋將知彼所善。以自補缺。故閒有筆錄爲圖。亦惟自備遺忘。未嘗出以示人也。近聞往往有妄人。假託洋說。而銜賣此術。或乃目未識洋文。而謬傳其說。彈制器規。茫然莫之能悉。而苟且從事。貽害同學。吾甚慨焉。因遂出所校圖編。棗于板。以廣其傳。庶幾妄人無所竄其奸。而迷者有以發其蔽。云爾。嘉永辛亥十月望。象山平啓識。

例言

一書經傳寫謬訛或鮮。縱有謬訛。易爲校正。圖一再傳。便成舛錯。舛錯之後。難復稽尋。而妄意增損。施諸火砲危厲之技。其爲害匪淺。是圖仍依荷蘭原本。摸其真形。長短大小。不爽毫髮。更於各部。細記分寸。令學者互證。不至顛錯。一凡從事斯學。得洋尺洋稱而用之。尤爲簡便。然是編端爲初學指途。故輕重之量。長短之度。皆以邦俗所用稱尺註之。圈外另標原數。以備覆詳。

一砲家之算。與曆家殊科。剖析微茫。不遺奇零。徒煩心目。無益實用。故今以荷蘭一肘當我三尺三寸。一斤當我二百六十七錢為率。覽者其詳之。

一藥囊式。及藥囊轆轤。甚有實用。或謂舉一例他可也。何事繁列。殊不知比例為圖。多易貽誤。且囊式之瓣。轆轤之頭。其為弧線。極有曲折。非初學可得猝辨。今不厭煩瑣。逐一臚陳。令人一見輒能應手。免致臨時妄作之弊。

一是帙專為學火術者而設。故未及其他。其神器神車。裝點器械。別有圖譜。容遲續出。

啓又識

礮學圖編目錄

彈

- 三十六斤地礮ボンドカノン彈コイゲル大小彈規附
- 二十四斤地礮彈大小彈規附
- 十八斤地礮彈大小彈規附
- 十二斤地礮彈大小彈規附
- 六斤地礮彈大小彈規附
- 三斤地礮彈大小彈規附
- 六十斤即二十拇鐵殼燒彈ホルレエイヒレンブランドコイゲル
- 三十六斤鐵殼燒彈
- 三十斤鐵殼燒彈
- 二十四斤鐵殼燒彈
- 十八斤鐵殼燒彈
- 二十四斤地礮鐵奩彈フリツキドリス子彈フリツキドリス規附
- 十八斤地礮鐵奩彈子彈附
- 十二斤地礮鐵奩彈子彈附
- 六斤地礮鐵奩彈子彈附
- 二十拇人礮鐵奩彈ドイムホウキツツエル子彈附
- 十五拇人礮鐵奩彈子彈附
- 十五拇長人礮鐵奩彈ランゲ子彈附
- 三十斤地礮蒲桃彈ドロイフ
- 三十斤地礮蒲桃彈椅スツール
- 十八斤地礮蒲桃彈椅
- 三十斤獵龍礮蒲桃彈椅カルロナーテ
- 十二斤獵龍礮蒲桃彈椅

- 八十斤地礮石樞彈 ガラナイト
- 六十斤地礮石樞彈
- 二十九拇老石樞彈 ボム
- 二十拇石樞彈
- 十五拇石樞彈
- 十三拇 即十六斤鐵 石樞彈
- 八斤鐵石樞彈 エイセル
- 鏡版石樞彈 スビーゲル
- 手擲石樞彈 ハンド
- 二十九拇 ブランドコージェルグラームテ 燒彈骨
- 二十拇燒彈骨
- 十五拇燒彈骨
- 鏡版
- 三十六斤地礮彈鏡版 スビーゲル

四

- 同貼鐵者一 ペースラーゲネ
- 同貼鐵者二
- 石彈天礮鏡版 ズワールステ 重者
- 同輕者 リクトステ
- 藥囊
- 三十斤地礮毛布藥囊式 サイインパトロンサツクモデル
- 二十四斤地礮毛布藥囊式
- 十八斤地礮毛布藥囊式
- 十二斤地礮毛布藥囊式
- 六斤地礮毛布藥囊式
- 三十斤獮龍礮毛布藥囊式
- 十八斤獮龍礮毛布藥囊式
- 十二斤獮龍礮毛布藥囊式
- 二十拇人礮毛布藥囊式

五

- 二十四斤地礮彈鏡版
- 十八斤地礮彈鏡版
- 十二斤地礮彈鏡版
- 六斤地礮彈鏡版
- 三斤地礮彈鏡版
- 八十斤石樞彈鏡版
- 六十斤 即二十拇 鐵殼燒彈及石樞彈鏡版一
- 同二
- 三十六斤鐵殼燒彈及石樞彈鏡版
- 三十斤鐵殼燒彈及石樞彈鏡版
- 二十四斤 即十拇 鐵殼燒彈及石樞彈鏡版
- 十八斤鐵殼燒彈及石樞彈鏡版
- 十五拇長人礮鐵殼燒彈及石樞彈鏡版
- 鐵彈天礮鏡版 オンペースラーゲネ 不貼鐵者

- 十五拇人礮毛布藥囊式
- 十五拇長人礮毛布藥囊式
- 二十四斤地礮 リコセットスコート 躍射毛布藥囊式
- 十八斤地礮躍射毛布藥囊式
- 十二斤地礮躍射毛布藥囊式
- 二十拇人礮躍射毛布藥囊式
- 十五拇人礮躍射毛布藥囊式
- 二十四斤地礮毛布底 サイインボイテム 紙藥囊 パピレンパトロンサツク
- 六斤紙藥囊
- 火管
- 八十斤及六十斤石樞彈火管 ボイス
- 二十九拇老石樞彈火管
- 二十拇石樞彈火管
- 十五拇石樞彈火管

- 十三拵石榴彈火管
- 鏡版石榴彈火管
- 手擲石榴彈火管
- 用器
- 三十斤地礮藥囊轆轤ロルアル
- 二十四斤地礮藥囊轆轤
- 十八斤地礮藥囊轆轤
- 十二斤地礮藥囊轆轤
- 六斤地砲藥囊轆轤
- 三十斤犛龍礮藥囊轆轤
- 十八斤犛龍礮藥囊轆轤
- 十二斤犛龍礮藥囊轆轤
- 二十拵人礮藥囊轆轤
- 十五拵人礮藥囊轆轤

- 十五拵長人礮藥囊轆轤
- 藥斗一容二斤者ポンド
- 藥斗二容一斤半者
- 藥斗三容一斤者
- 藥斗四容五兩者オンス
- 藥斗五容三兩者
- 藥斗六容二兩者
- 藥斗七容一兩者
- 藥斗八容五錢者ロイド
- 藥斗九容三錢者
- 藥斗十容二錢者
- 藥斗十一容一錢者
- 地礮藥囊漏斗大者カノンバトロインデレクテル
- 同小者

結木

- 火銃模ベーパーホルム
- 火銃杵スタムベル
- 火銃轆轤ロルアル
- 火銃槌スライゲル
- 火銃規プルーフシリンデル
- 火銃模シユンデルホルム 同 下 端 附
- 火銃模座フット
- 火銃杵スタムベル
- 火銃轆轤ロルアル
- 火銃漏斗テレクテル
- 二十九拵及二十拵火管ボイセンラドスコフヘル
- 十五拵以下火管ボイセンアラッ
- 火管砧

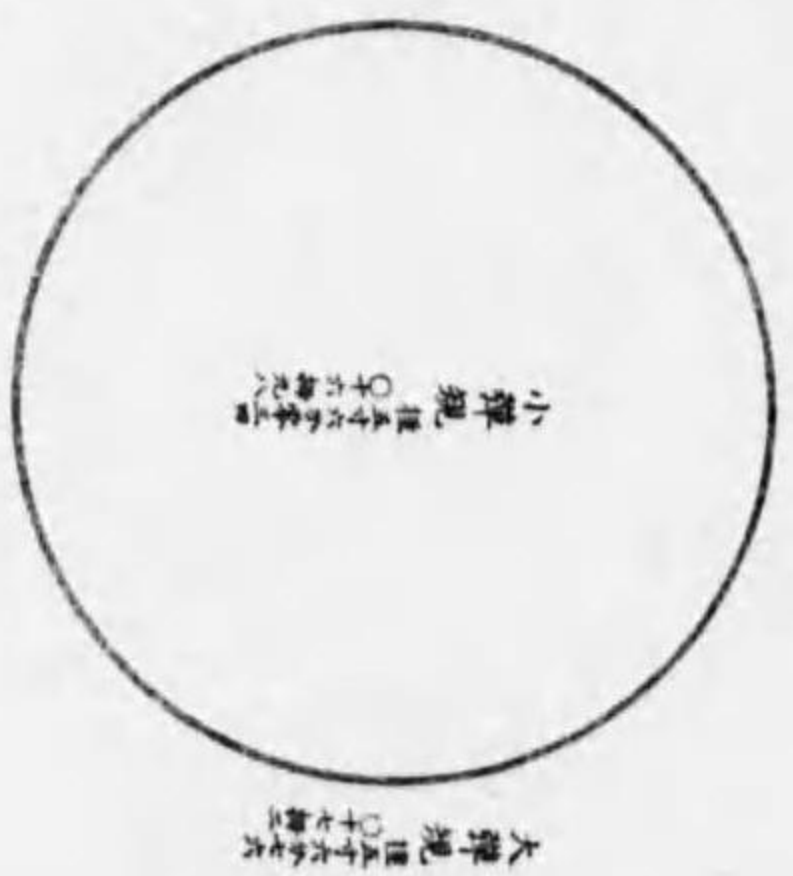
二十九拵老石榴彈火管杵

- 八十斤及六十斤即二十拵石榴彈火管杵
- 十五拵石榴彈火管杵
- 十三拵以下石榴彈火管杵
- 火管槌スライゲル
- 燒彈ブランドコーゲル 杵
- 燒彈ブランドコーゲル 簍
- 燒彈及光彈信藥杵リクトコーゲルボイセンサスタンベル
- 十三拵光彈砧リクトコーゲルプロック
- 十三拵光彈杵スタムベル
- 手擲光彈ヘンドリクトコーゲルプロック 砧
- 手擲光彈杵スタムベル
- 手擲光彈囊式サック
- 手擲光彈漏斗テレクテル

砲學圖編 目錄

- 二十拇以下石樁彈爬 ガラナート カラツベル
- 二十九拇老石樁彈爬
- 老石樁彈鈎 ボムハック
- 二十九拇及二十拇石樁彈漏斗 テレクテル
- 二十拇以下石樁彈漏斗
- 二十九拇老石樁彈火管冒 ボイセンセツテル
- 二十拇及十五拇石樁彈火管冒
- 十三拇以下石樁彈火管冒
- 火管木錐 ボイセン
- 藥匕 サスレーベル

三十六斤地砲彈小彈



大彈 徑 0.76 米

徑 0.6 米
重 17 磅
重 37 磅
重 50 磅
重 61 磅
重 72 磅

二十四斤地砲彈小彈



大彈 徑 0.61 米

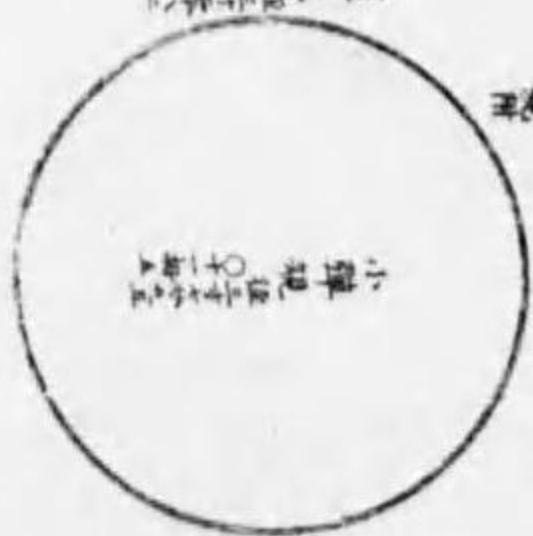
徑 0.47 米
重 14 磅
重 18 磅
重 22 磅
重 26 磅
重 30 磅

十八斤地砲彈小彈



徑 0.4 米
重 10 磅
重 13 磅
重 16 磅
重 19 磅
重 22 磅

十二斤地砲彈小彈



大彈 徑 0.33 米

徑 0.27 米
重 6 磅
重 8 磅
重 10 磅
重 12 磅
重 14 磅

六斤地砲彈小彈



大彈 徑 0.27 米

徑 0.22 米
重 3 磅
重 4 磅
重 5 磅
重 6 磅
重 7 磅

三斤地砲彈小彈



大彈 徑 0.22 米

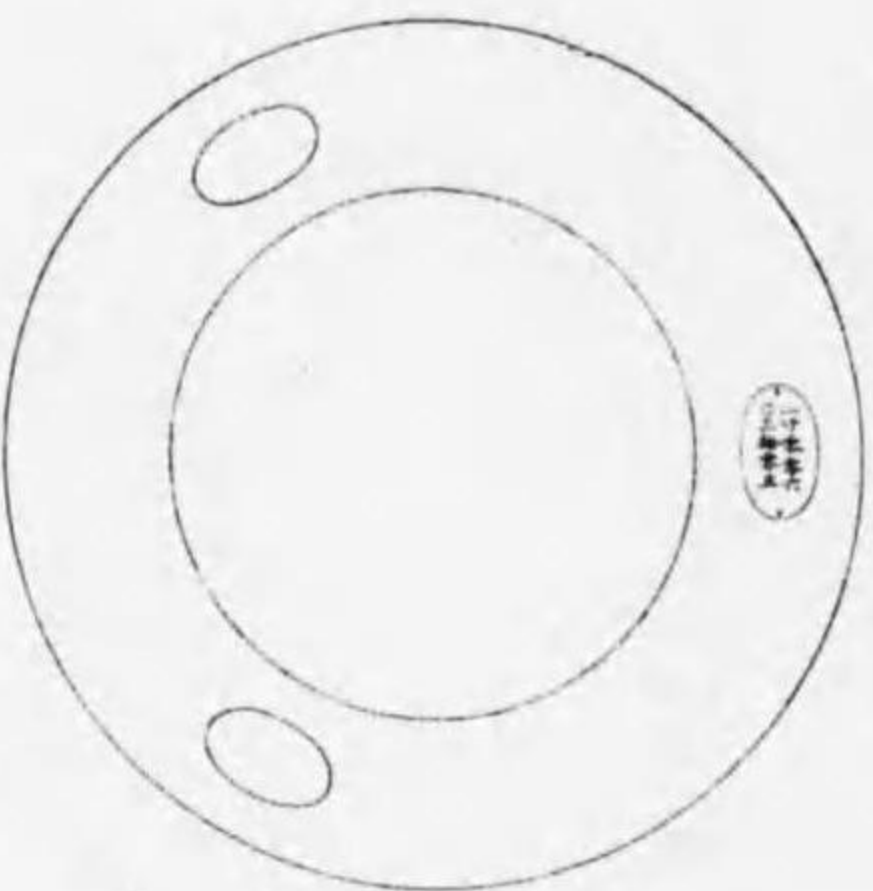
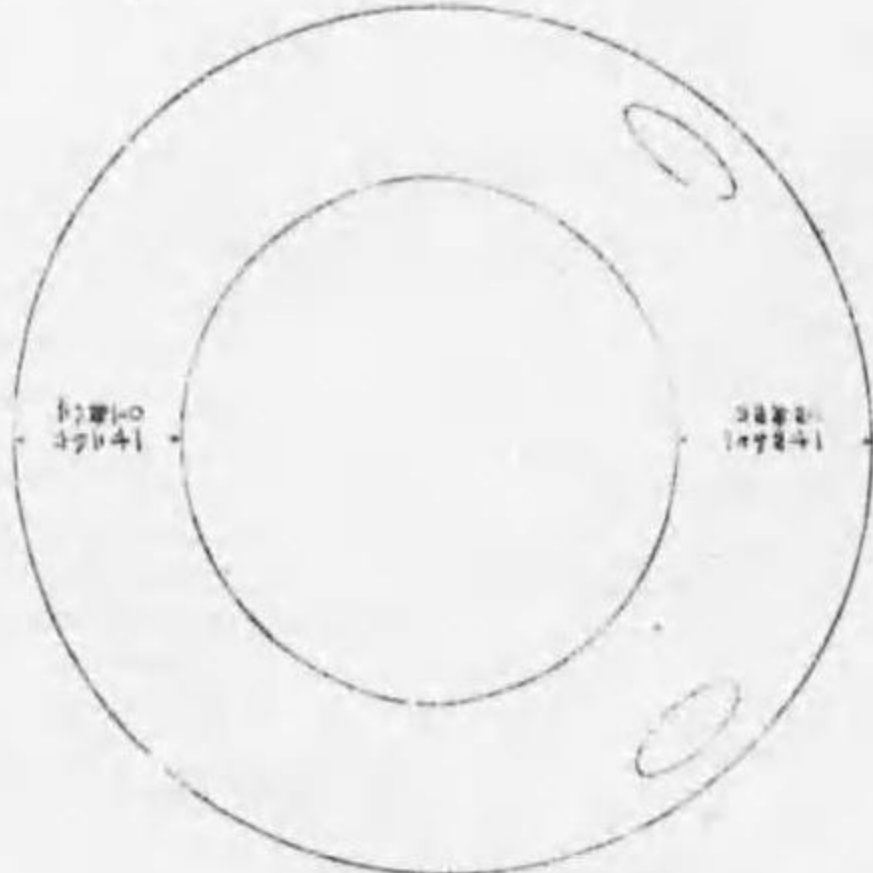
徑 0.18 米
重 1.5 磅
重 2 磅
重 2.5 磅
重 3 磅
重 3.5 磅

六十斤鐵殼砲彈



小彈 徑 0.33 米

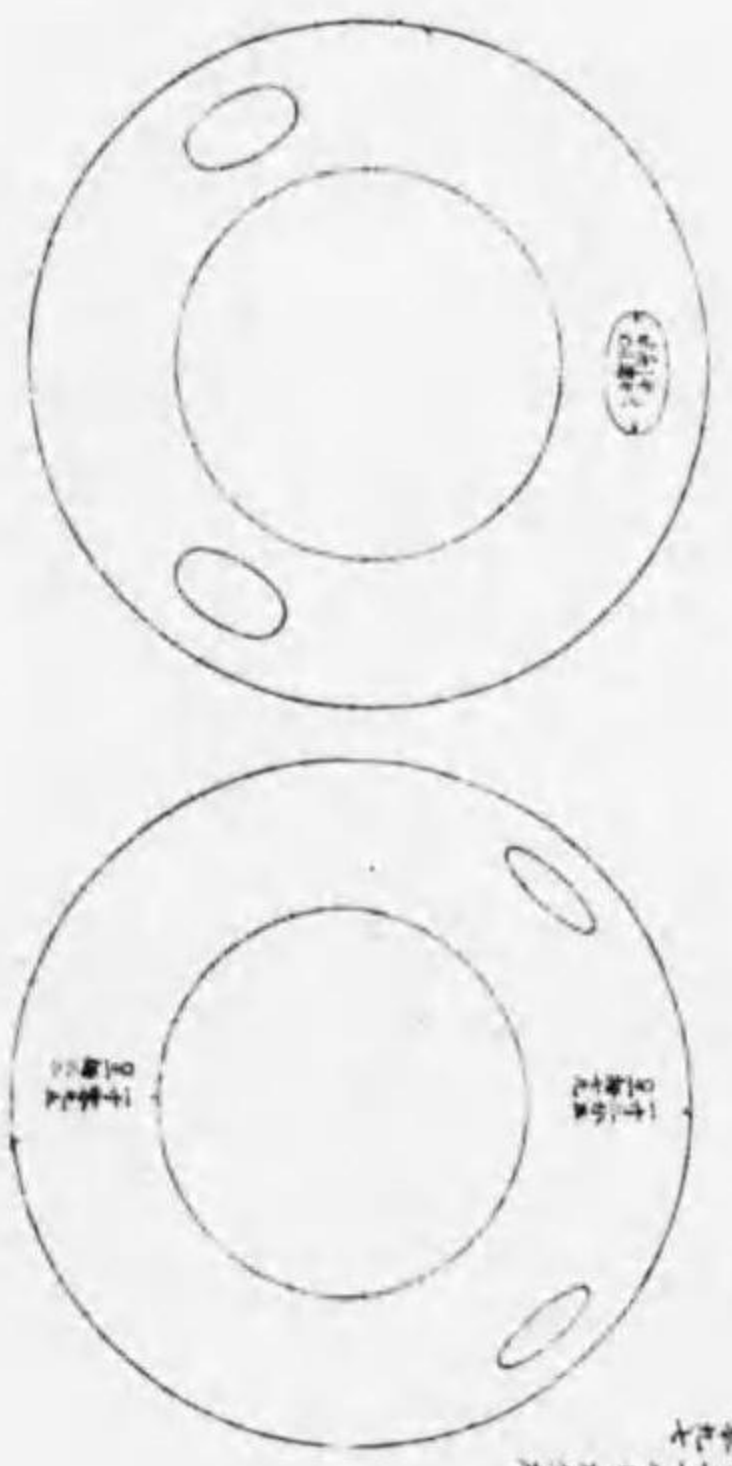
徑 0.4 米
重 20 磅
重 25 磅
重 30 磅
重 35 磅
重 40 磅



砲學圖編

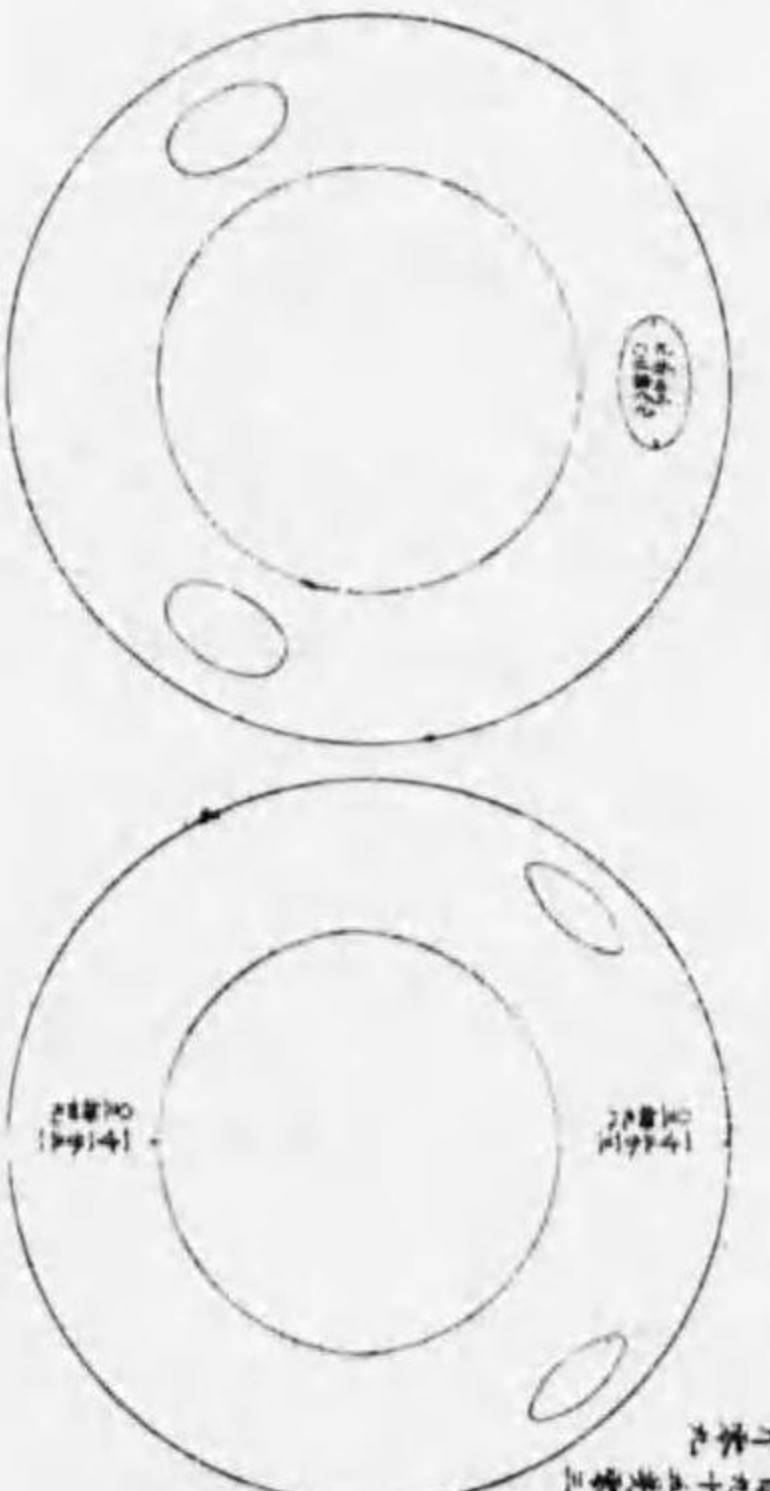
三十斤鐵殼燒彈

徑六寸八分
重四百二十磅
○五號
○五號



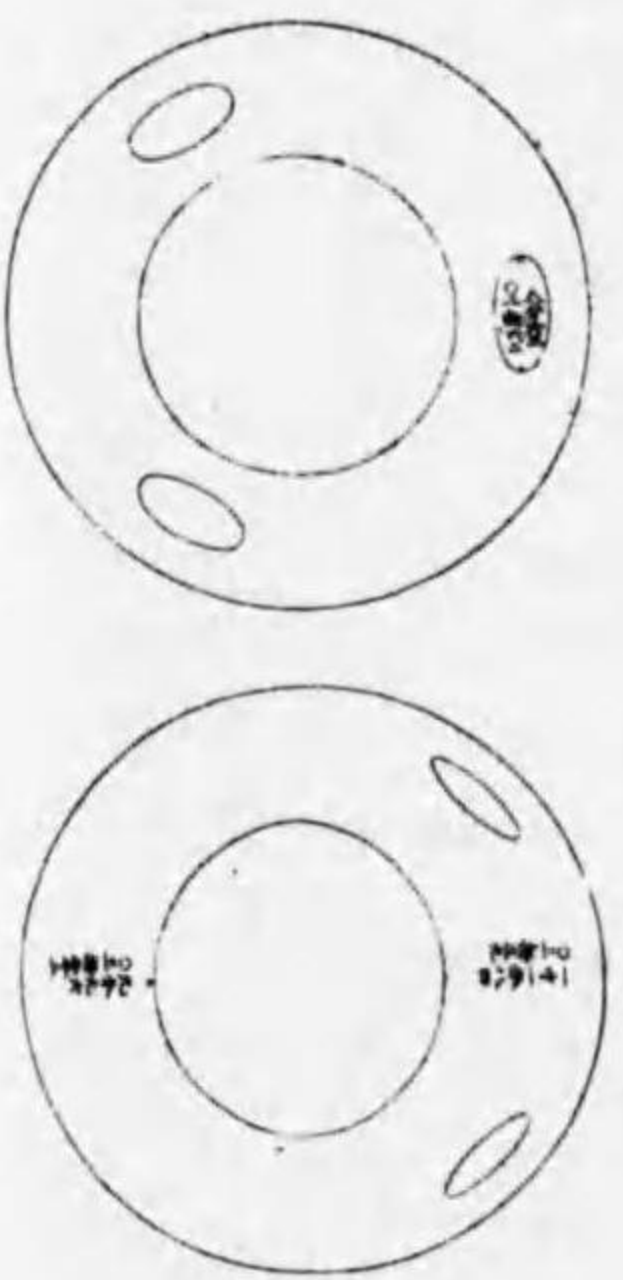
三十六斤鐵殼燒彈

徑六寸八分
重四百二十磅
○五號
○五號



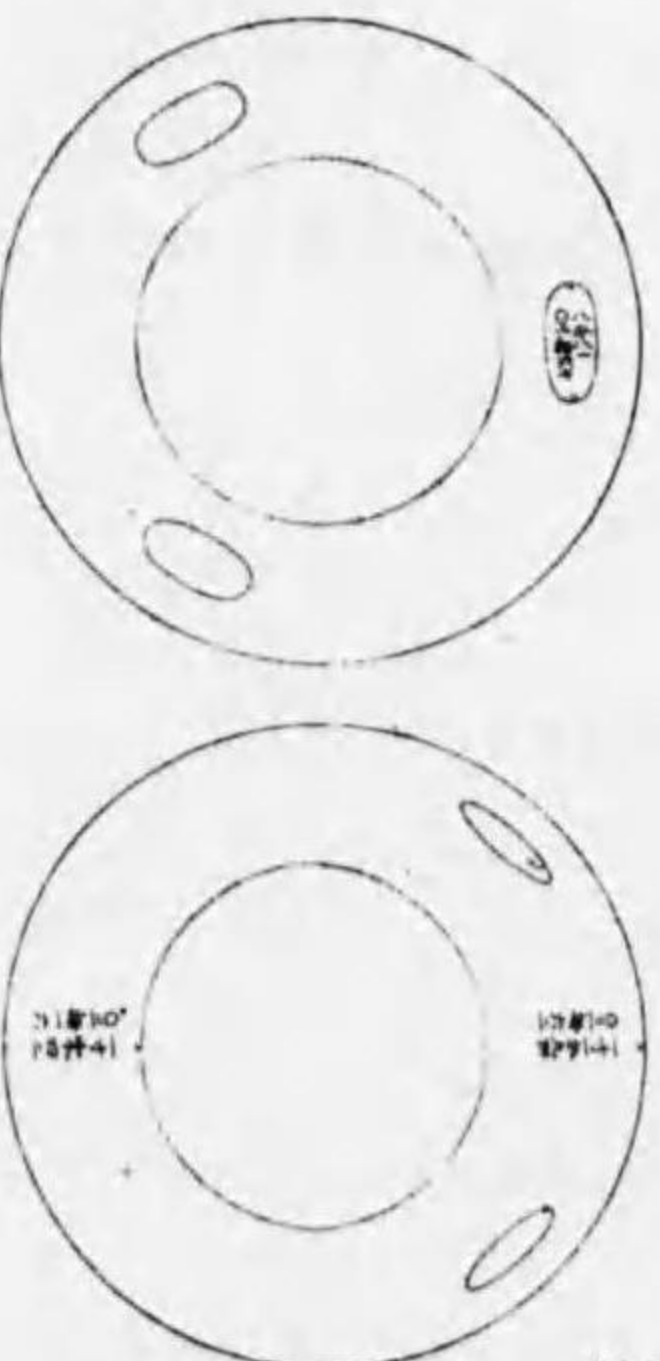
十八斤鐵殼燒彈

徑五寸五分
重二百三十磅
○六號
○六號



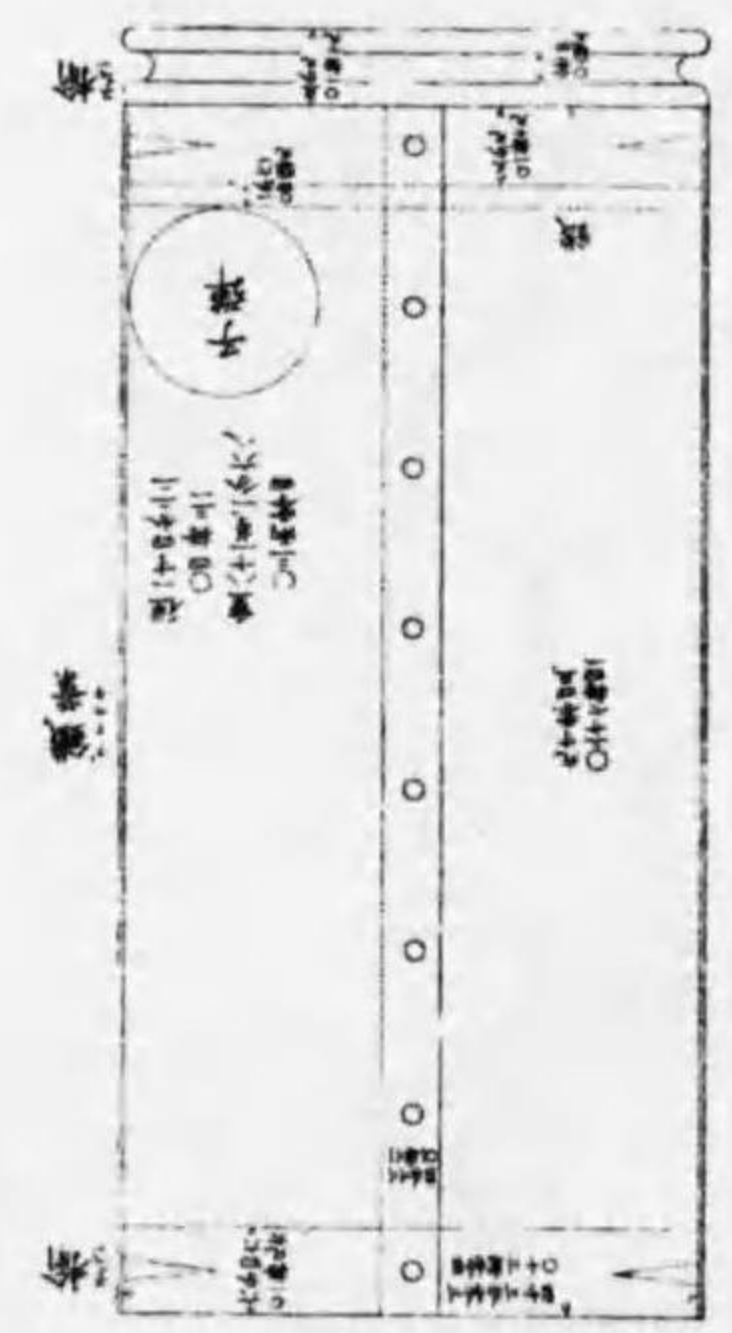
二十四斤鐵殼燒彈

徑五寸七分
重二百四十磅
○五號
○五號



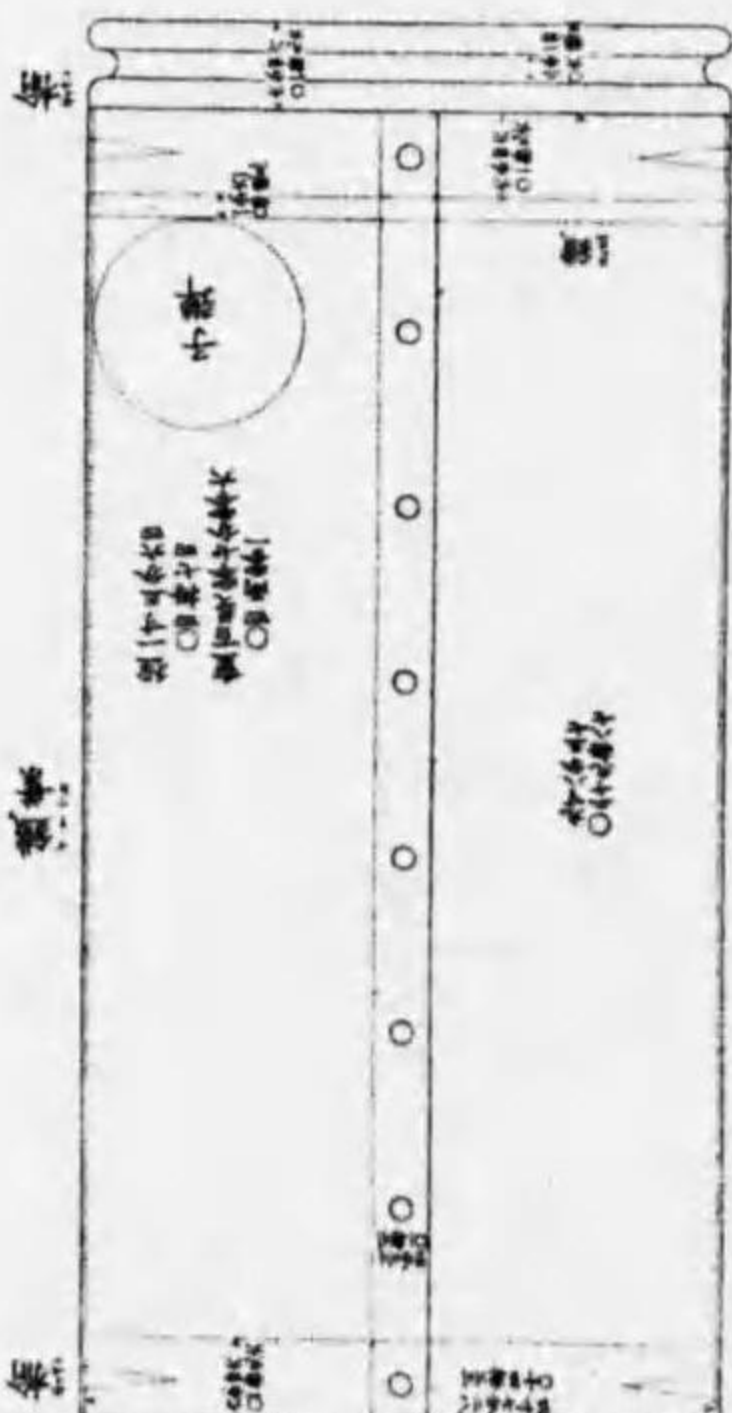
十八斤地鐵殼彈

徑五寸五分
重二百三十磅
○六號
○六號



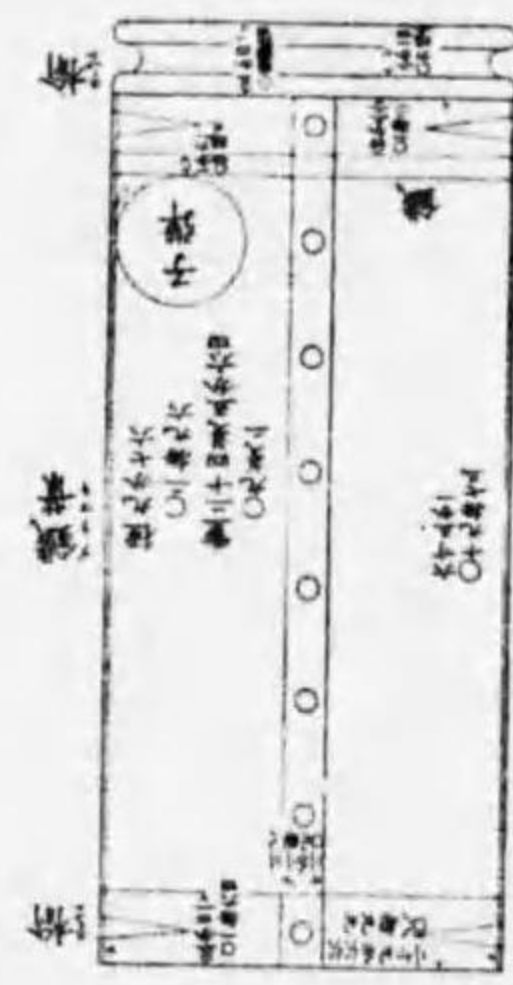
二十四斤地鐵殼彈

徑五寸七分
重二百四十磅
○五號
○五號



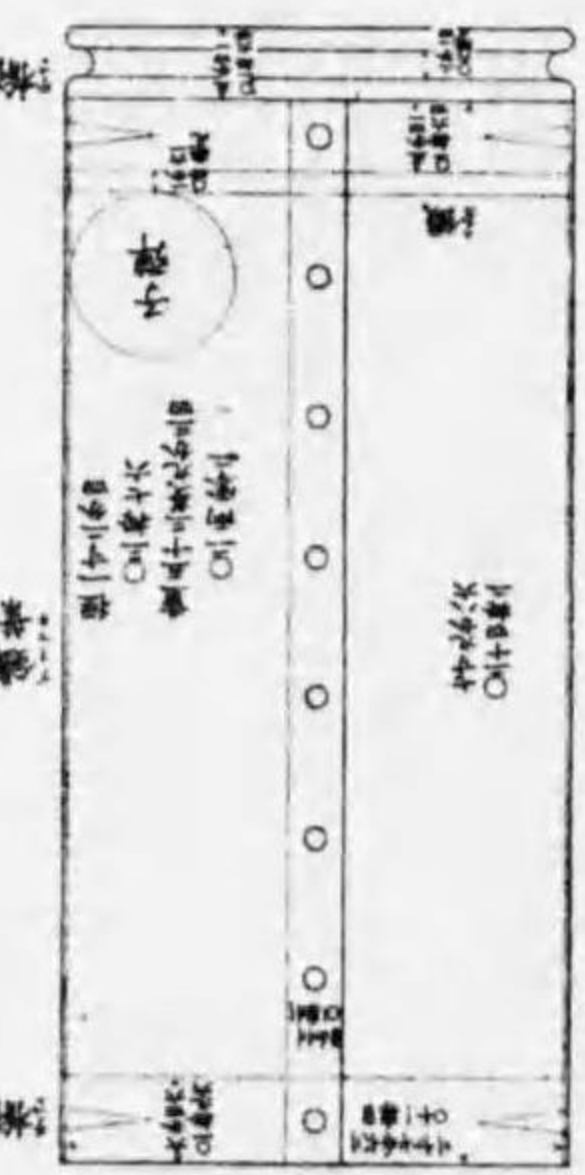
六斤地鐵殼彈

徑三寸二分
重一百一十磅
○九號
○九號



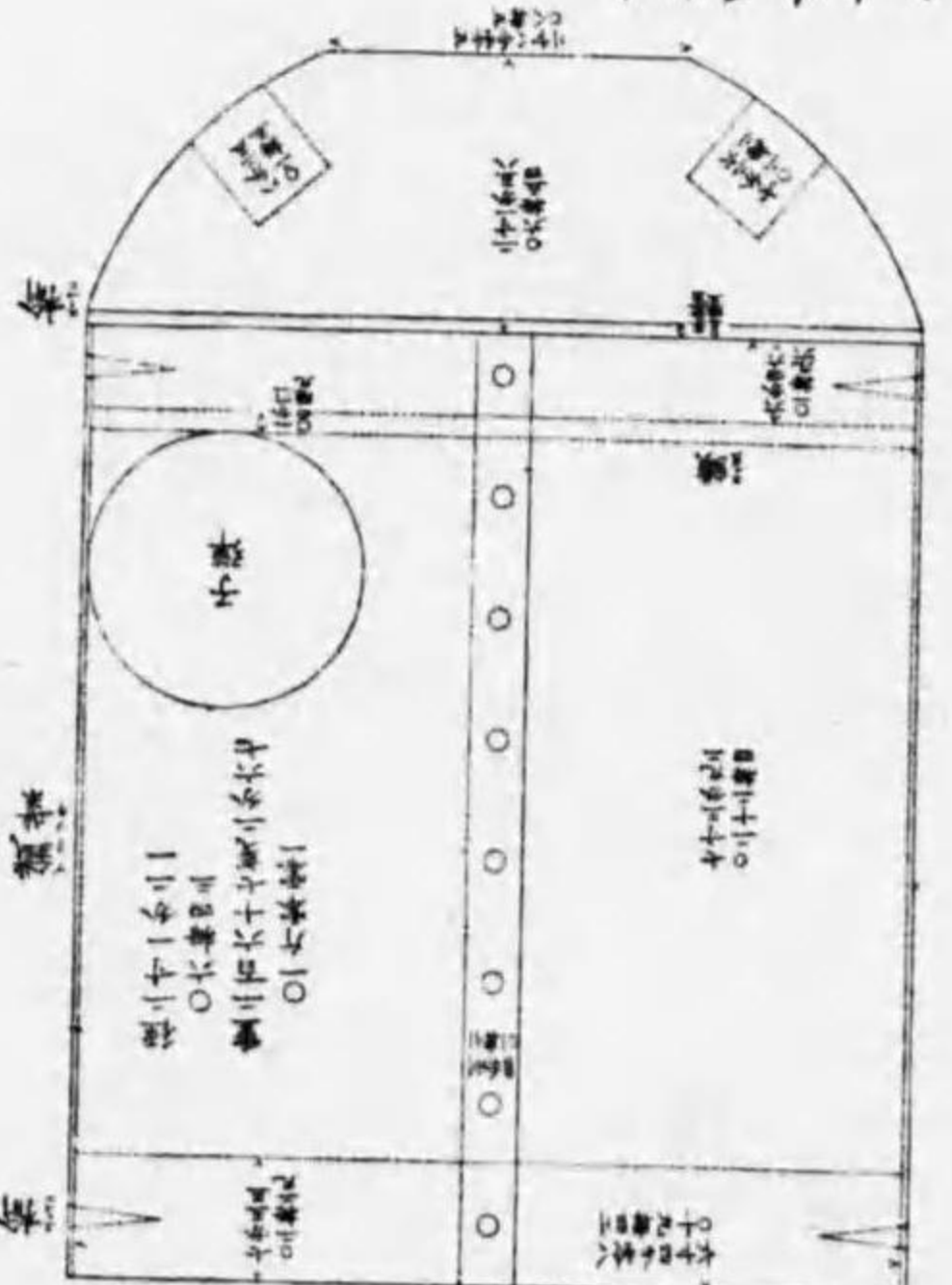
十二斤地鐵殼彈

徑三寸五分
重一百六十磅
○九號
○九號



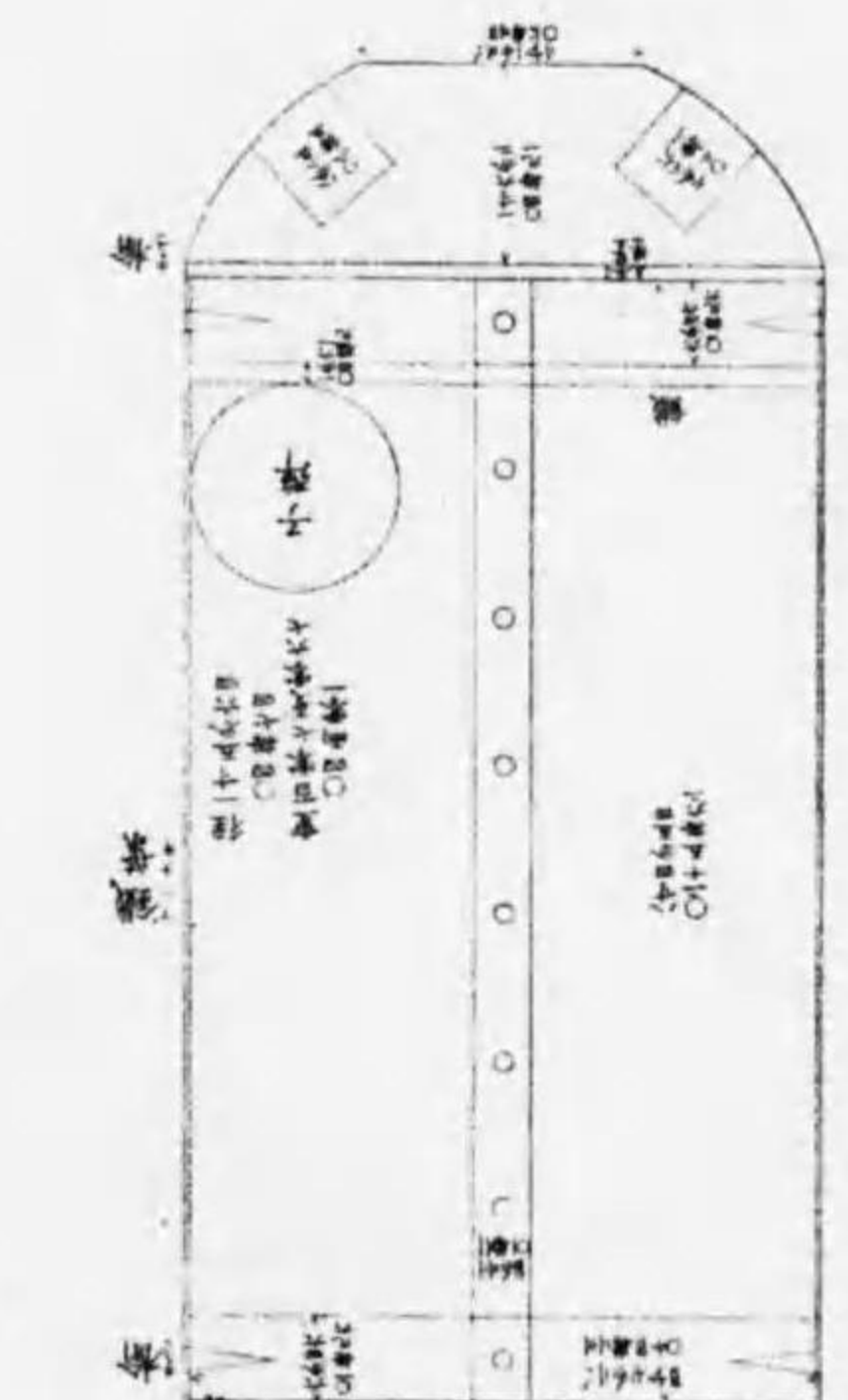
二十排人鐵查彈

徑六寸四分
重五十五磅
〇二十寸四分



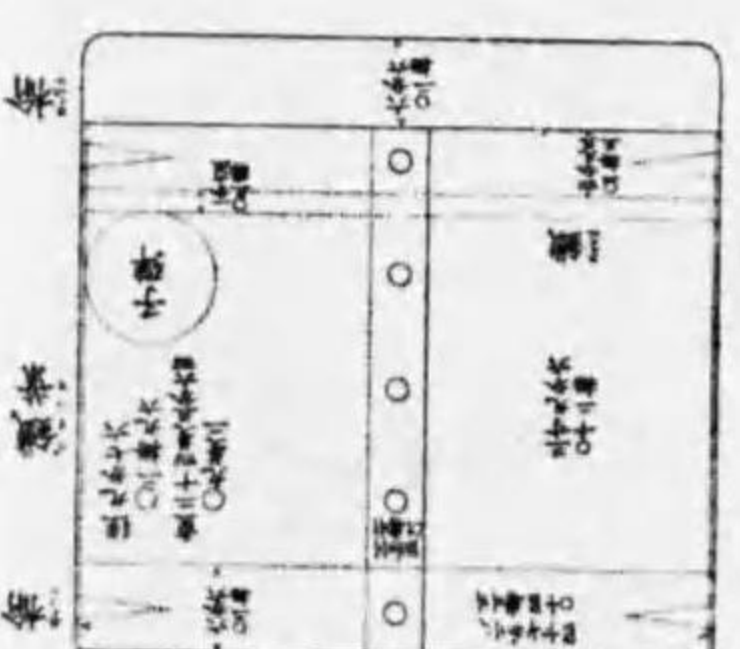
十五排人鐵查彈

徑六寸四分
重五十五磅
〇二十寸四分

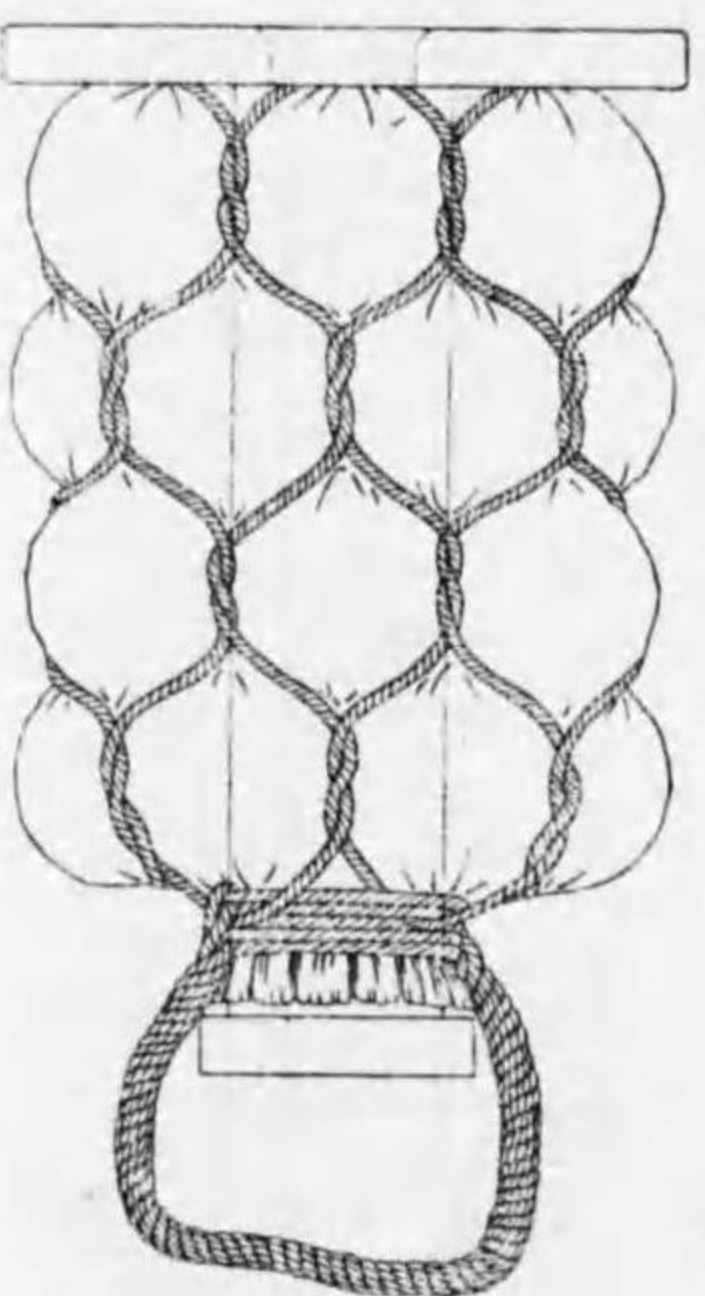


十五排長人鐵查彈

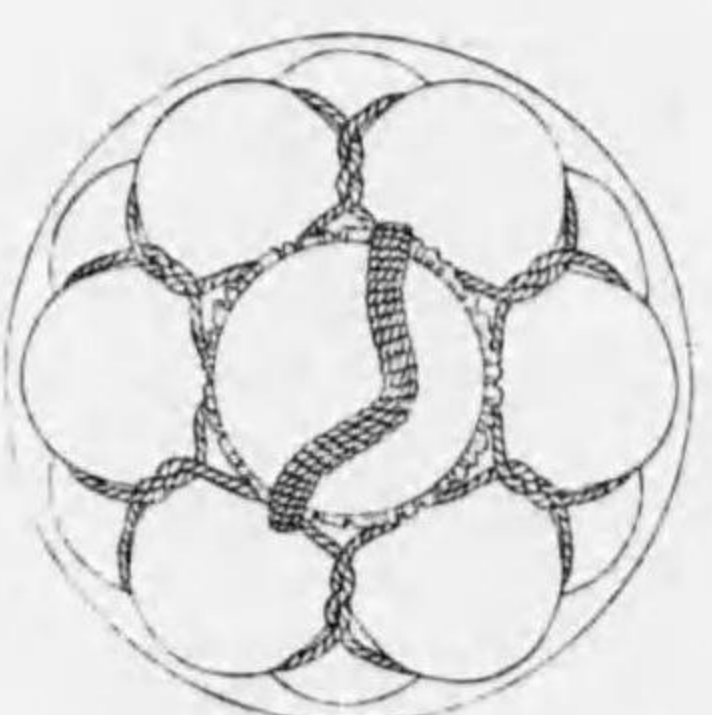
徑四寸四分
重五十五磅
〇二十寸四分



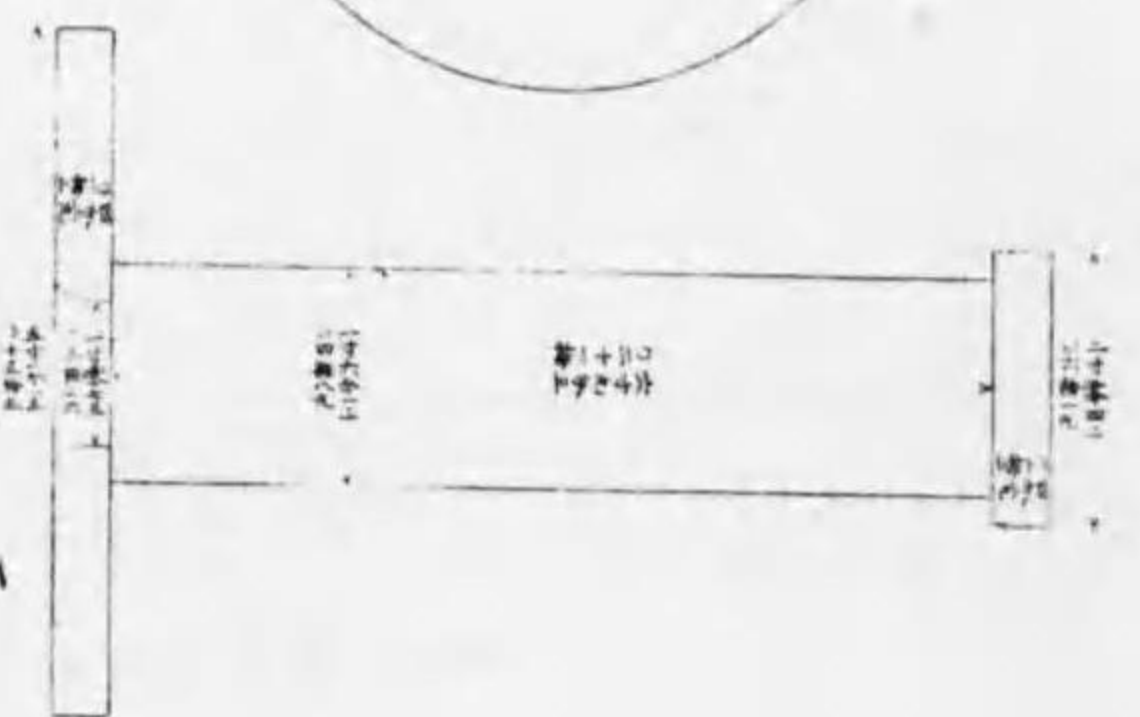
三十行地磁清地彈



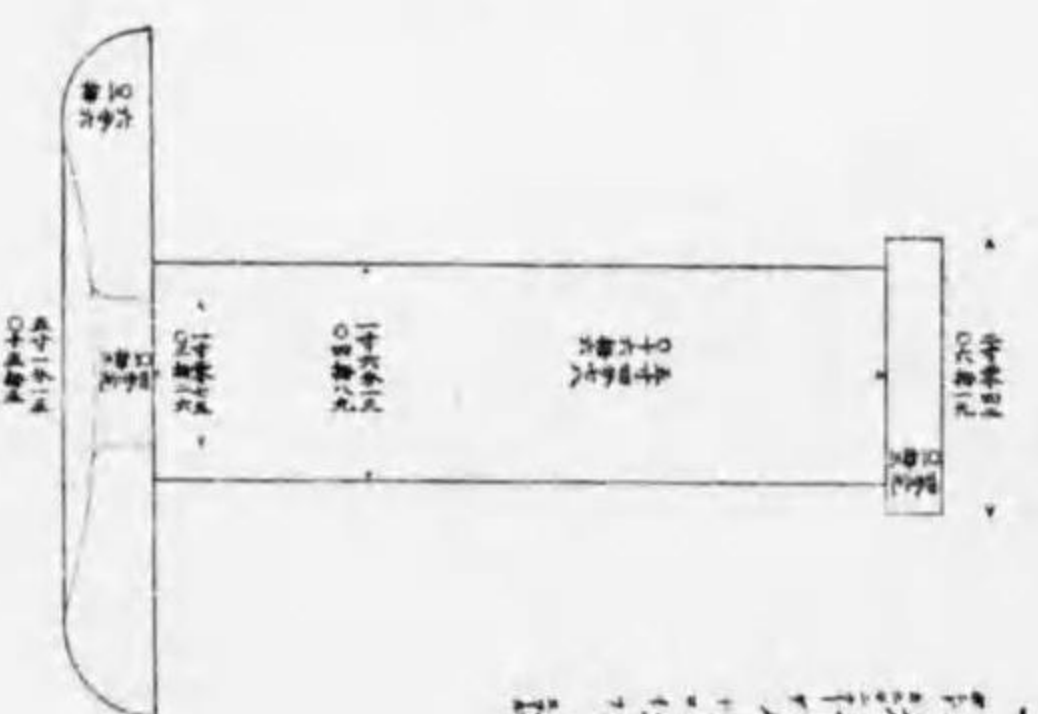
全上面



三十行地磁清地彈

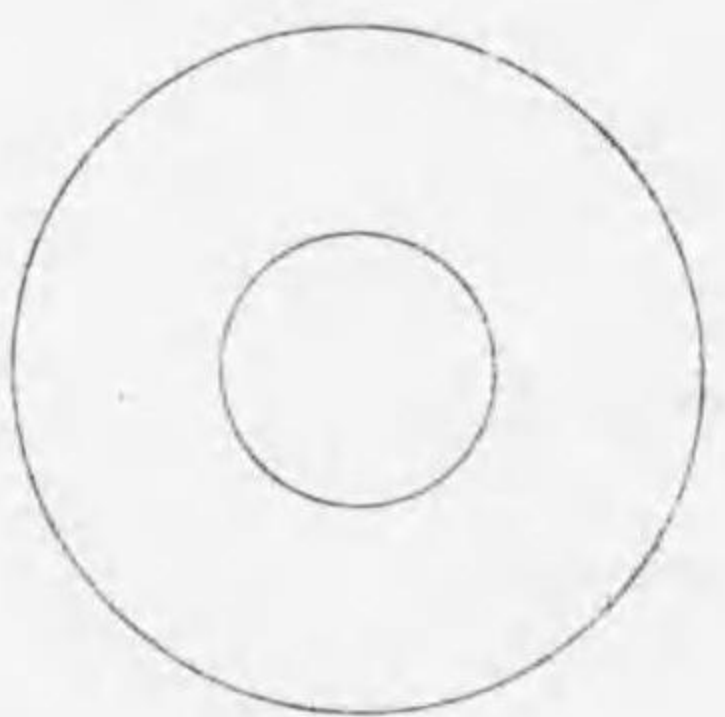
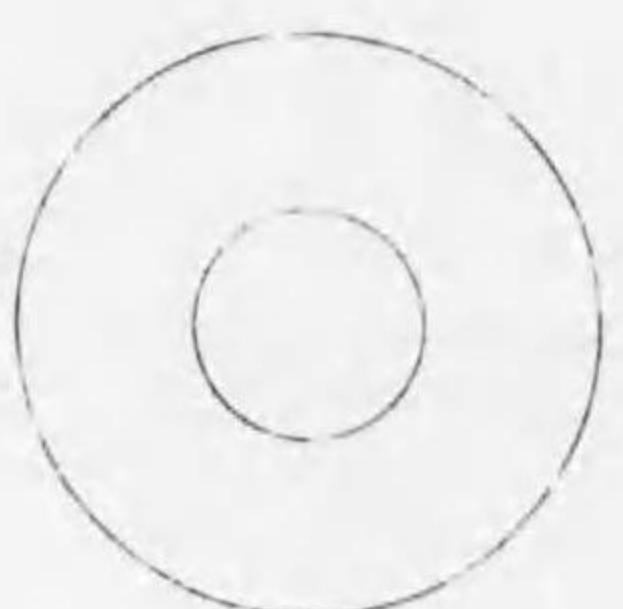
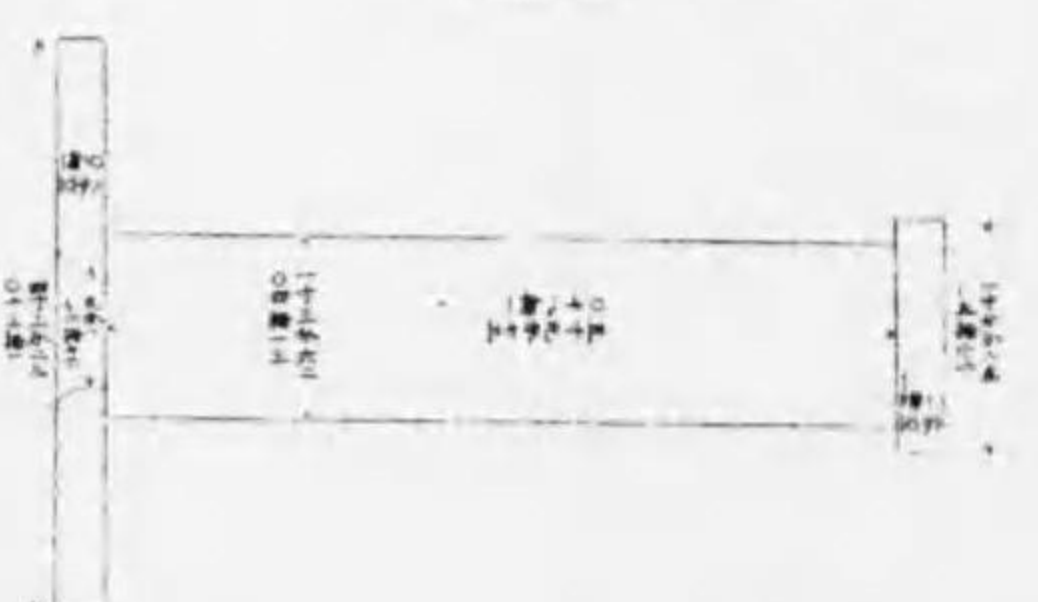


三十行地磁清地彈

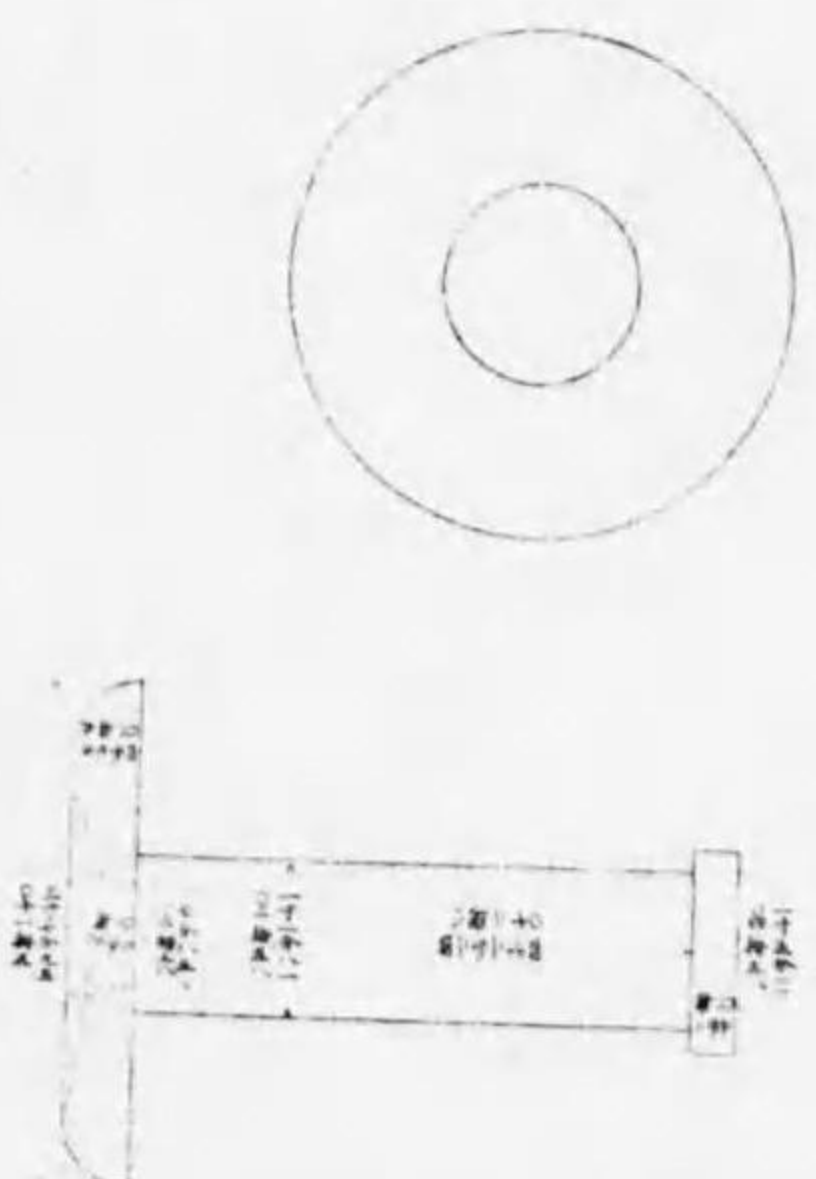


鐵學圖繪

十八行地磁清地彈

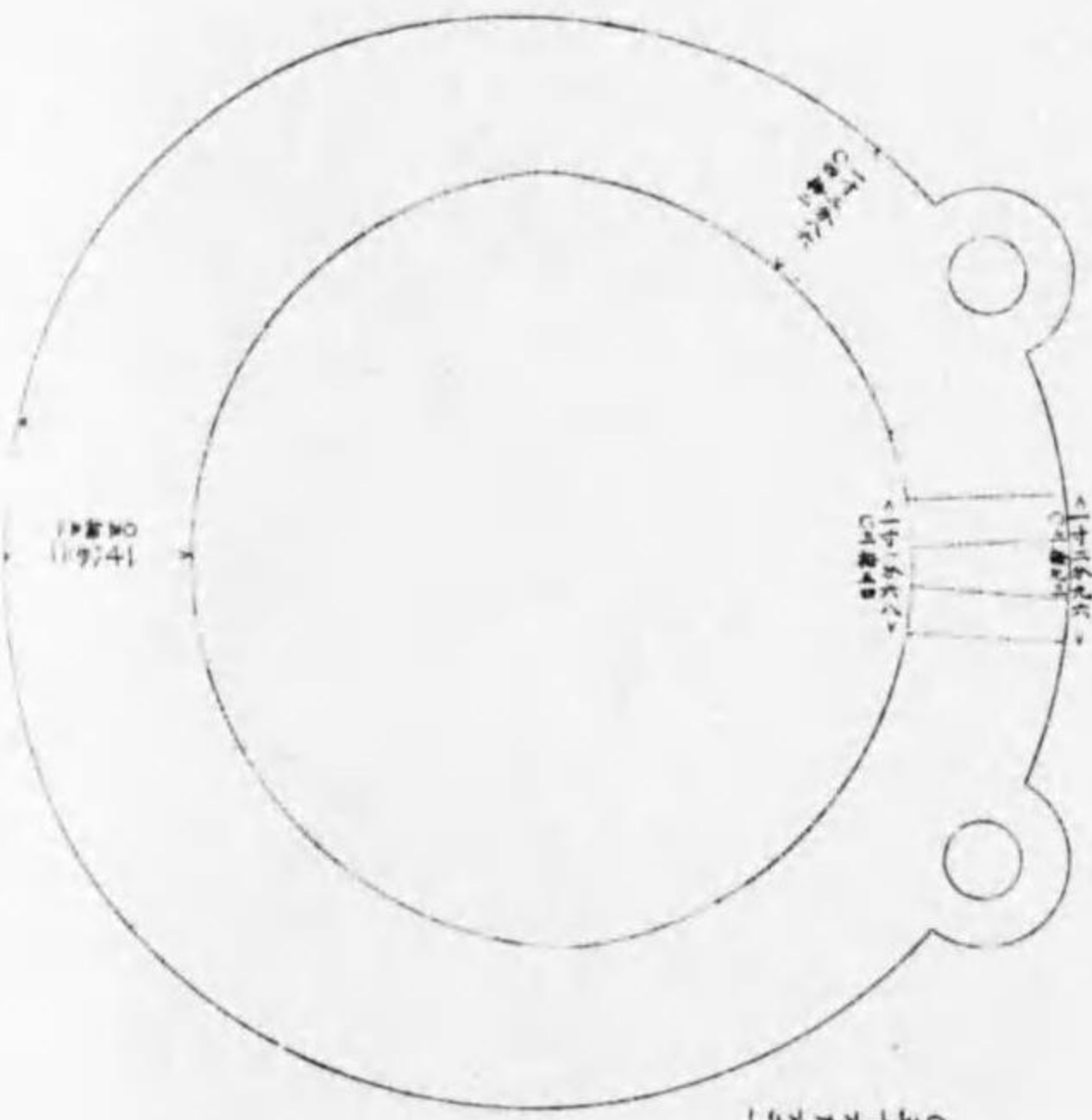


八十斤地礮石榴彈
徑七寸五分
重四百七十磅
○十二號九五
○十三斤

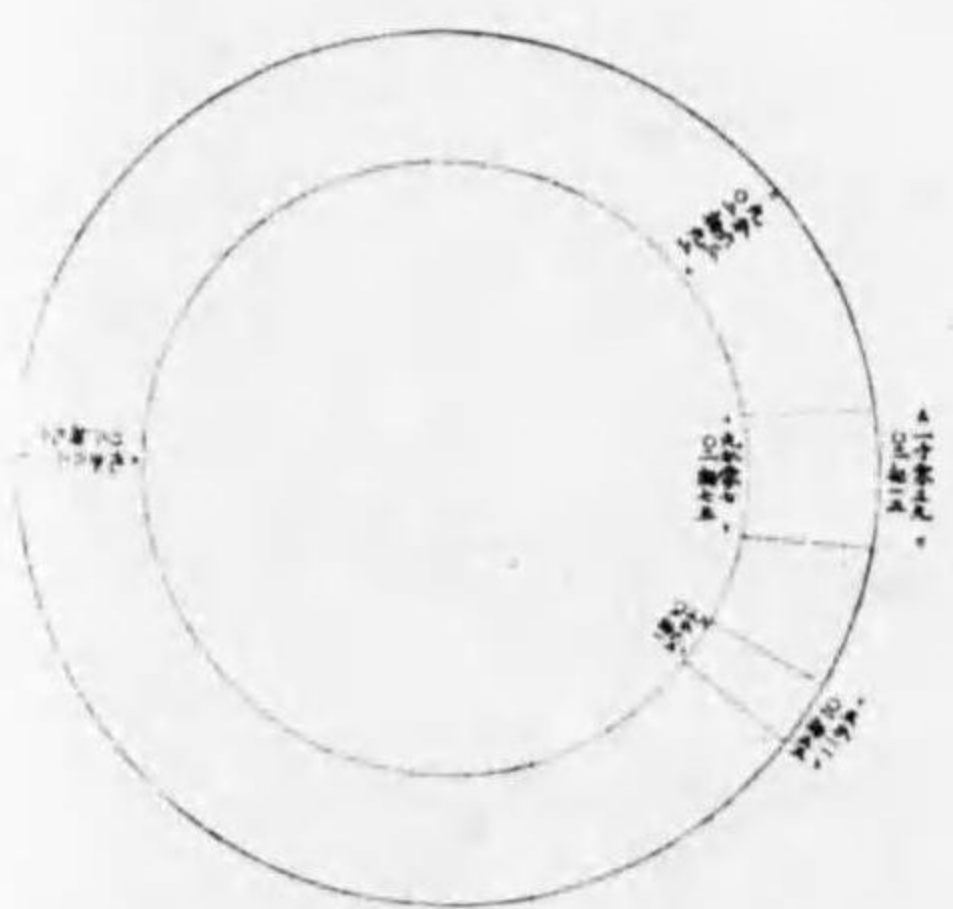


十二斤精龍礮清地榴彈

二十九海老石榴彈
徑十四寸四分
重五百七十磅
○十八號七
○二十六斤二

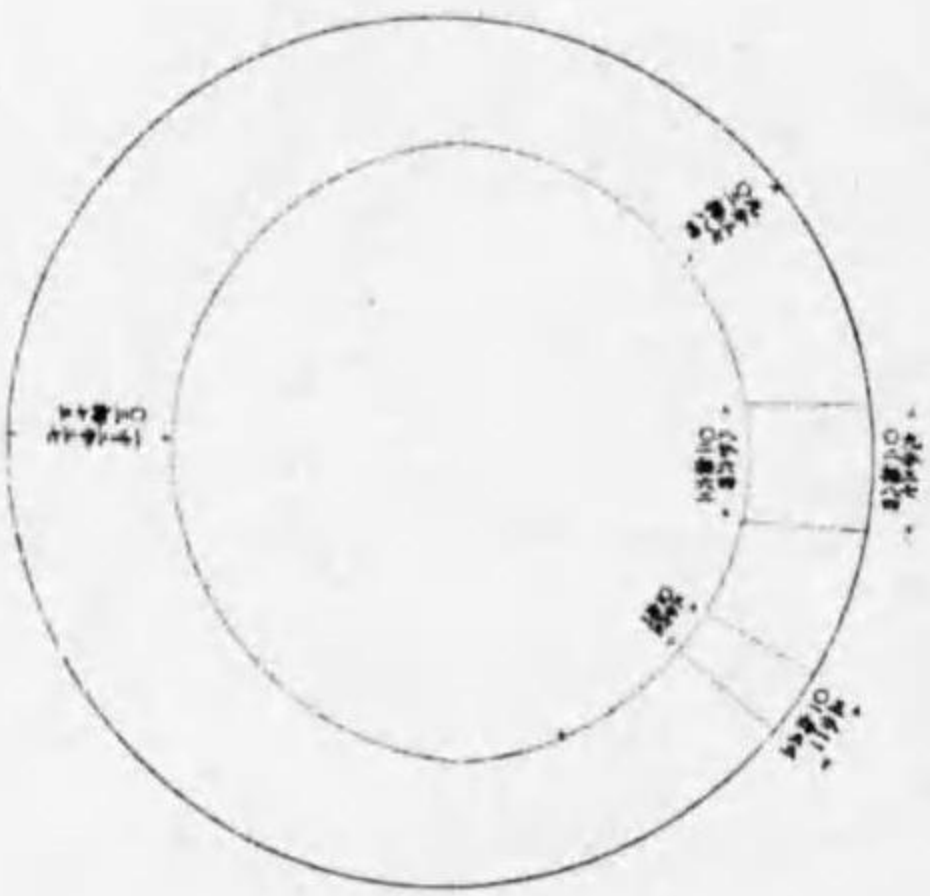


六十斤地礮石榴彈
徑十六寸五分
重四百七十磅
○十號七
○十斤重

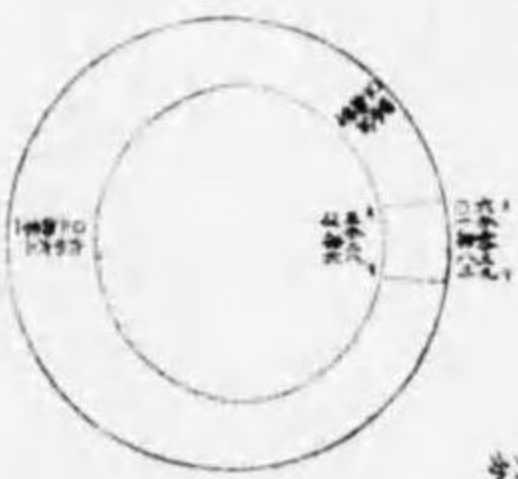


全上面

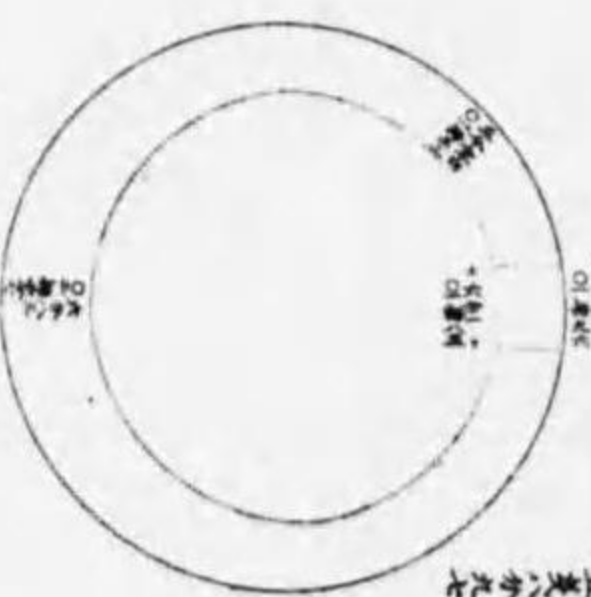
二十磅石榴彈
徑十五寸五分
重四百七十磅
○十九號七
○十八斤重



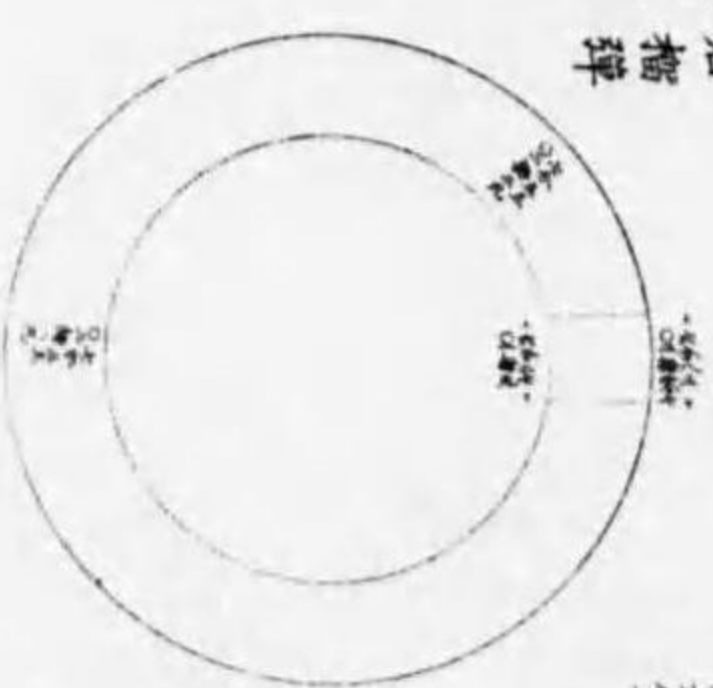
八斤鐵石榴彈
徑十三寸五分
重二百五十磅
○五斤八



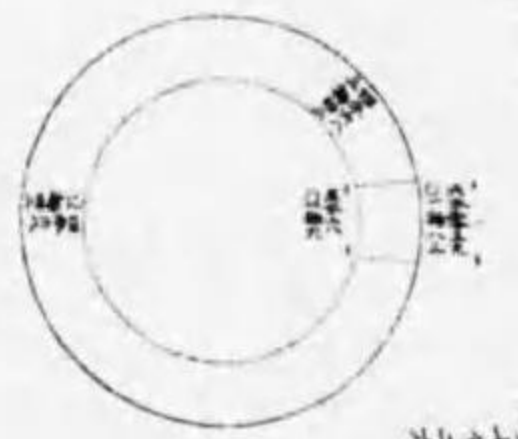
十三磅石榴彈
徑十四寸四分
重二百五十磅
○四斤九



十五磅石榴彈
徑十六寸五分
重四百七十磅
○十斤六



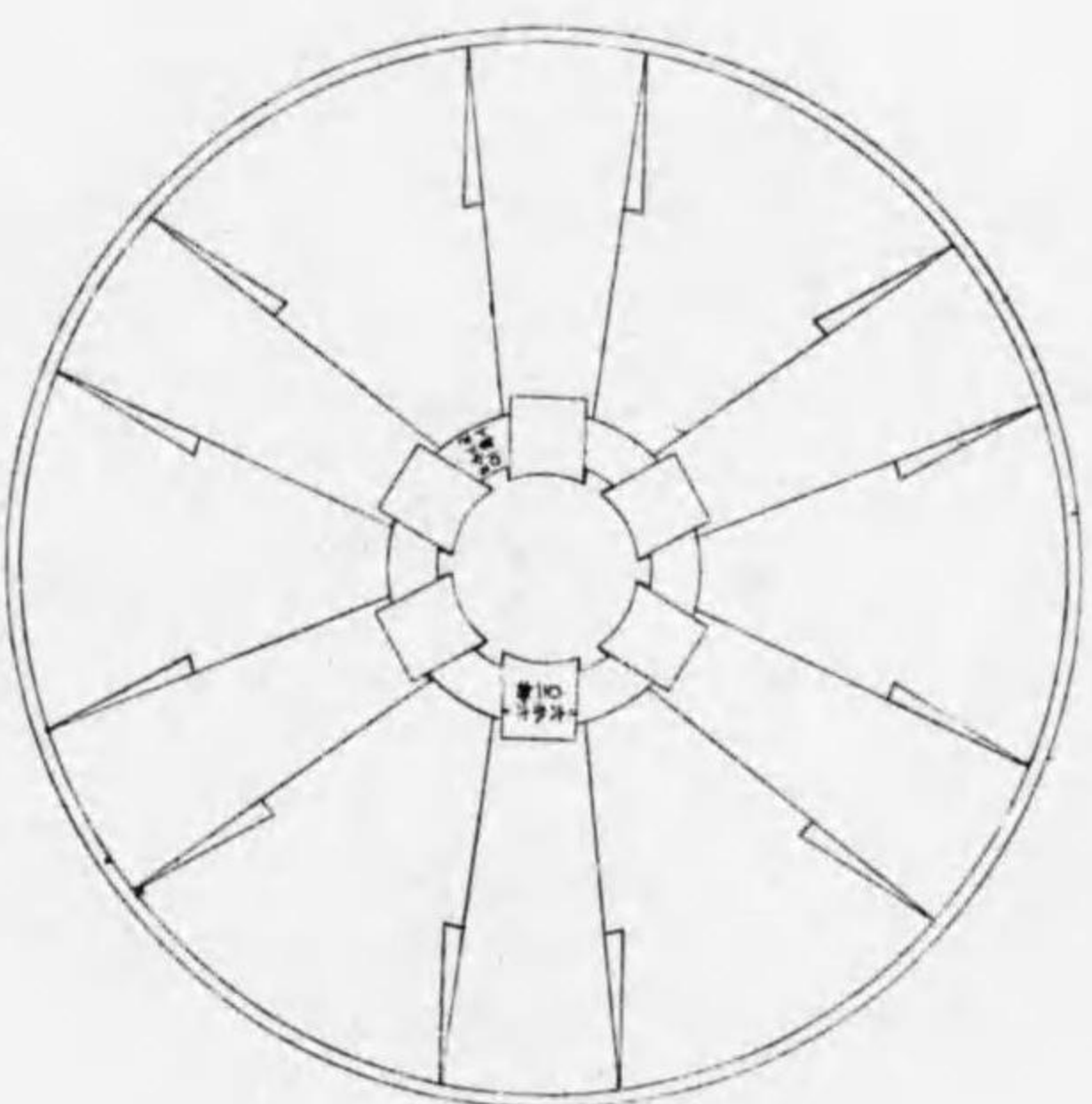
手擲石榴彈
徑十三寸九分
重百二十磅
○七號二



繞散石榴彈
徑十四寸四分
重四百七十磅
○二十七號六

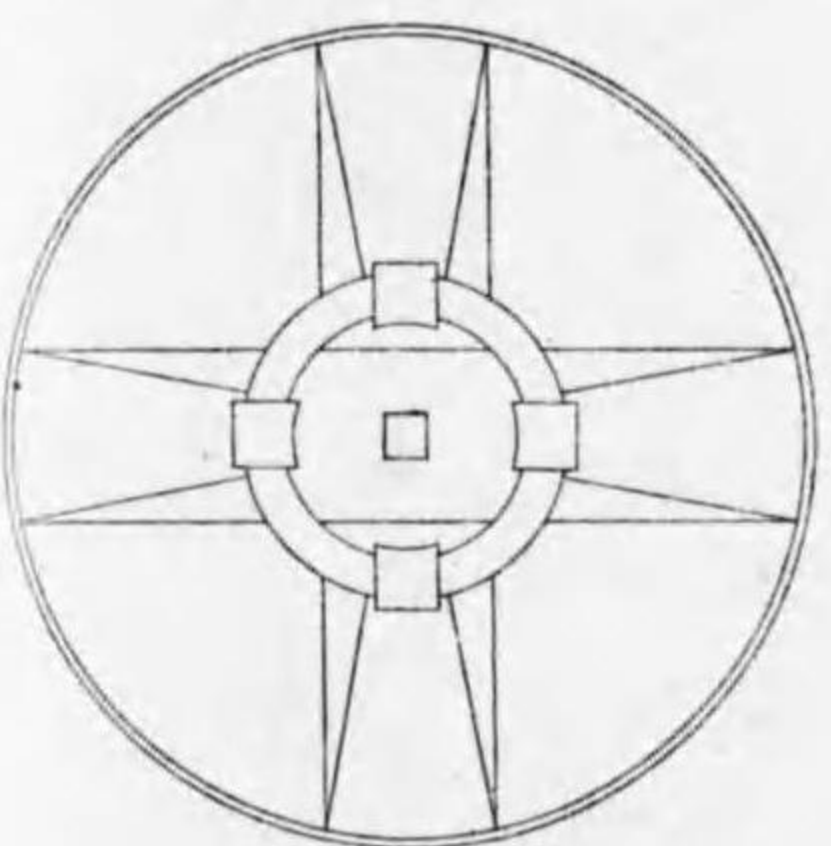


砲身圖樣

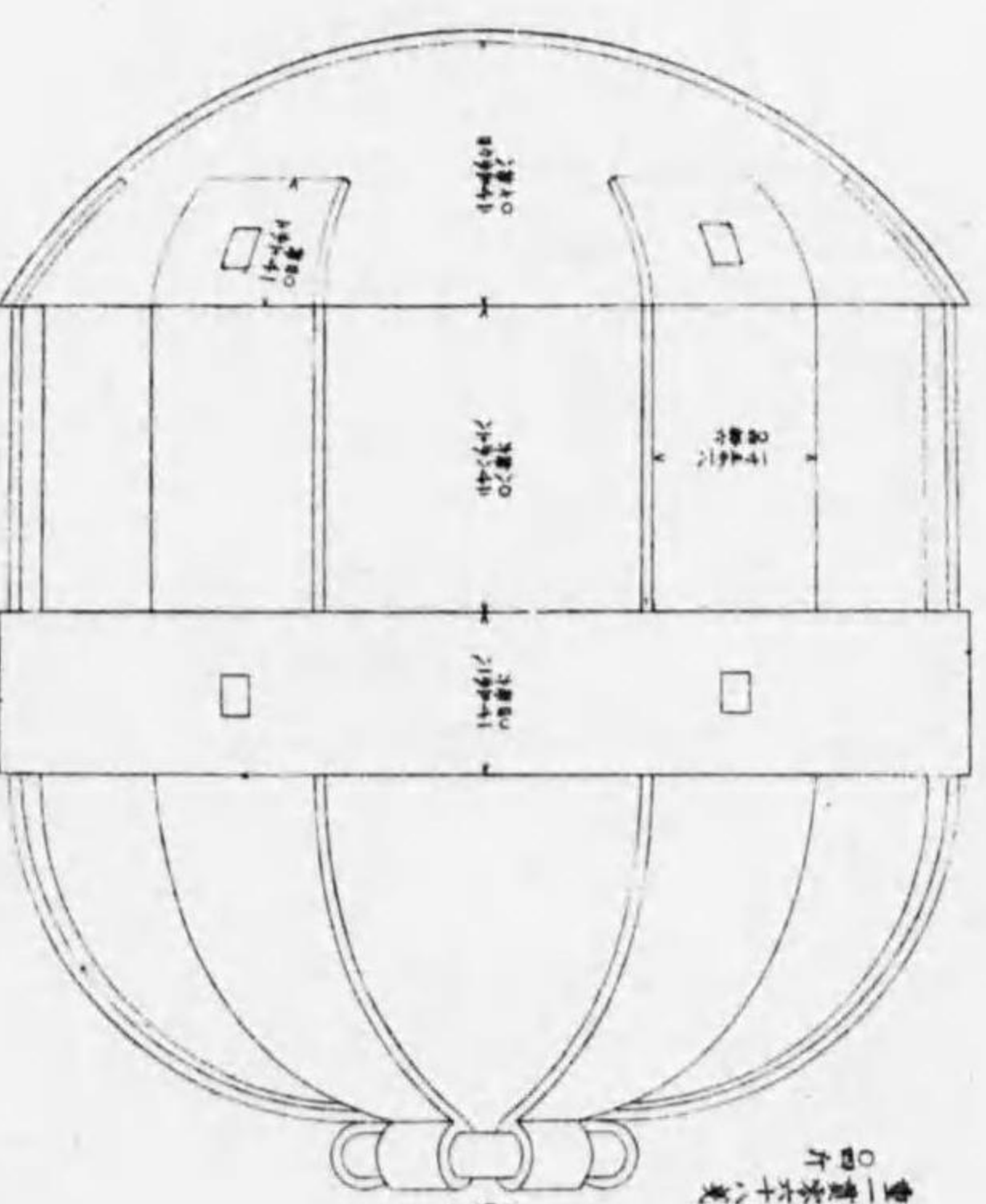


全上面

全上面

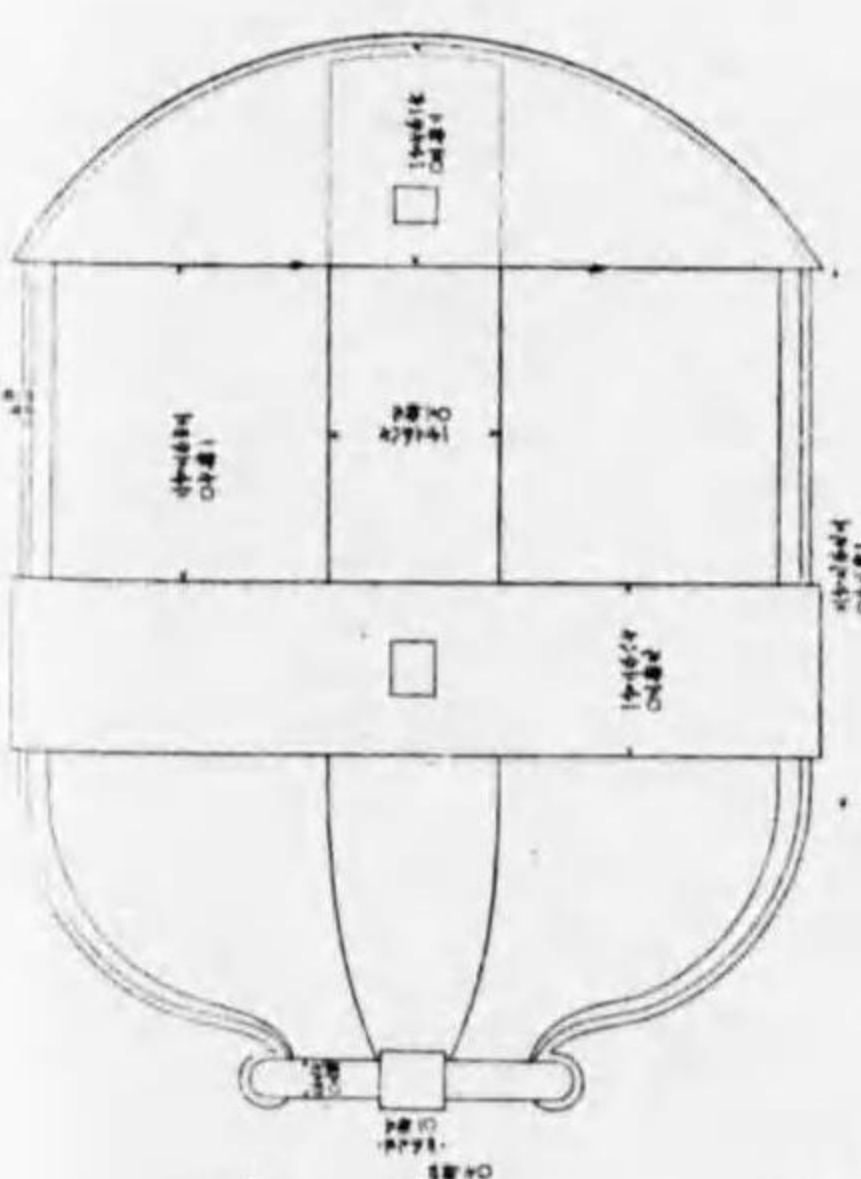


1寸

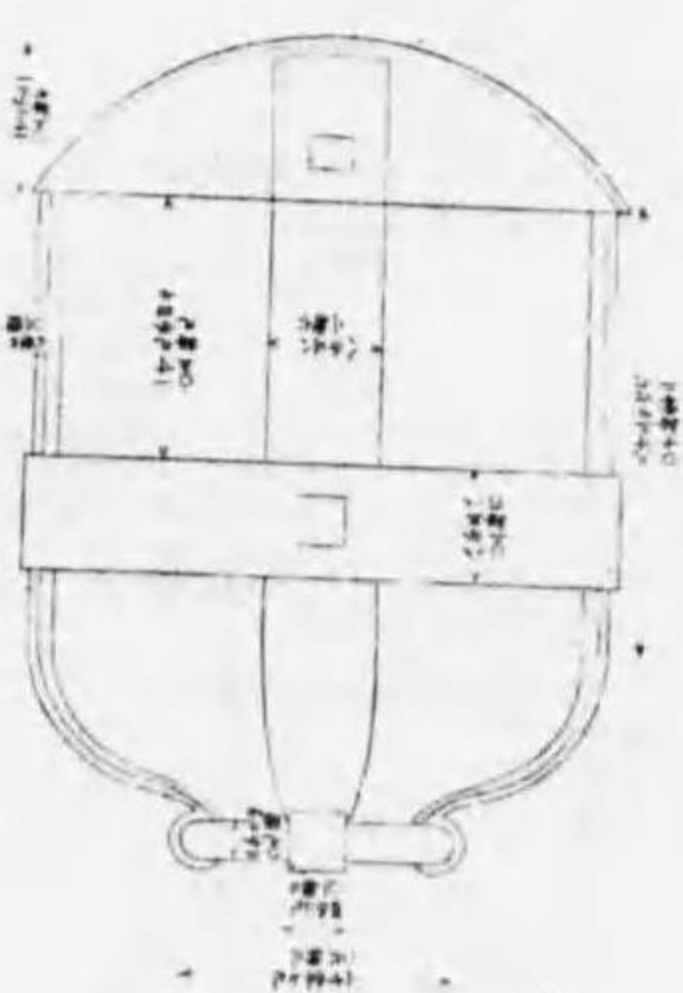
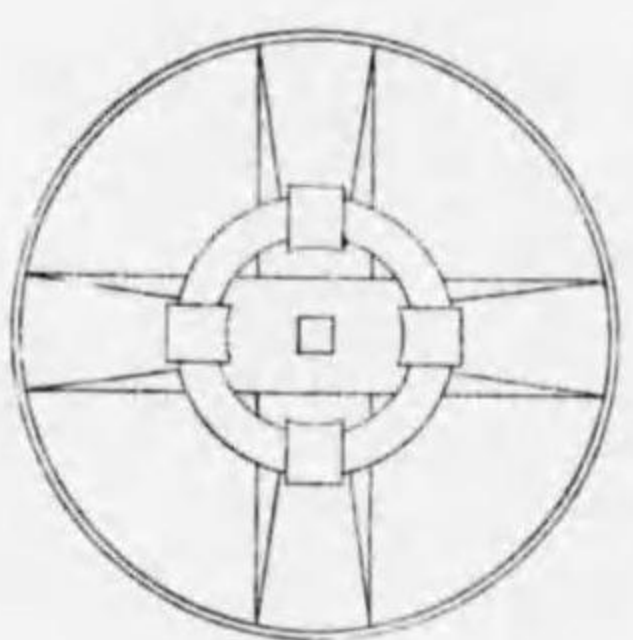


二十九海
徑半英寸
重四十二磅
長五十二英寸
口徑二英寸

二十海
徑半英寸
重四十二磅
長五十二英寸
口徑二英寸



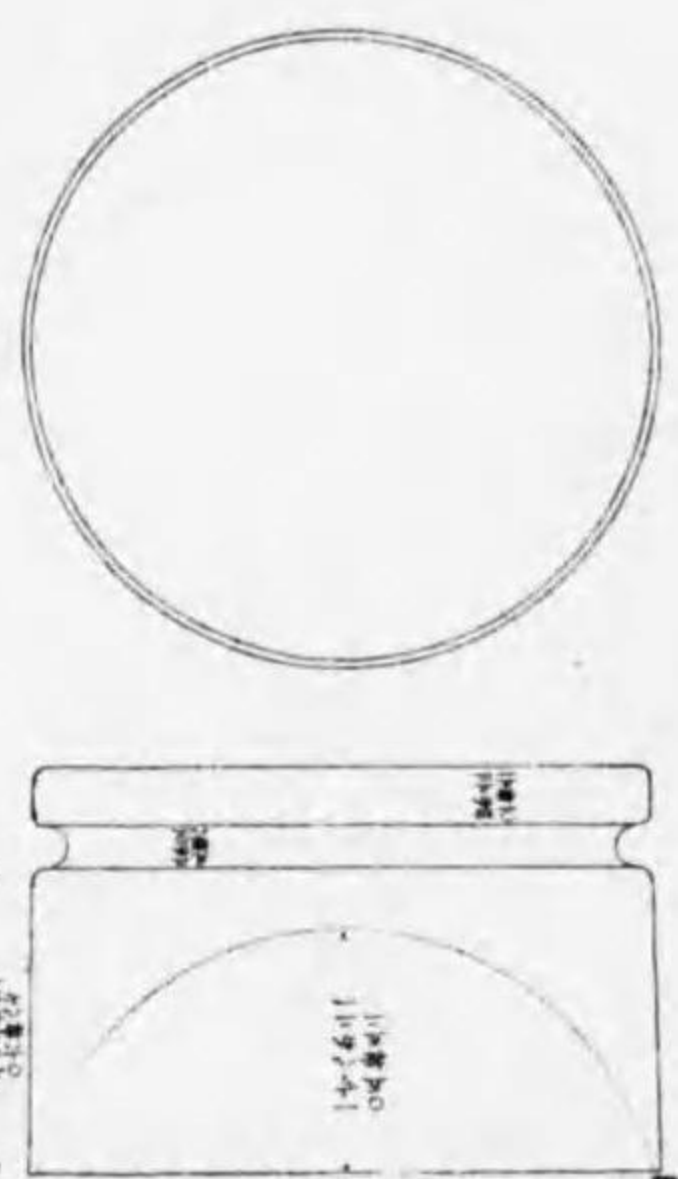
全上面



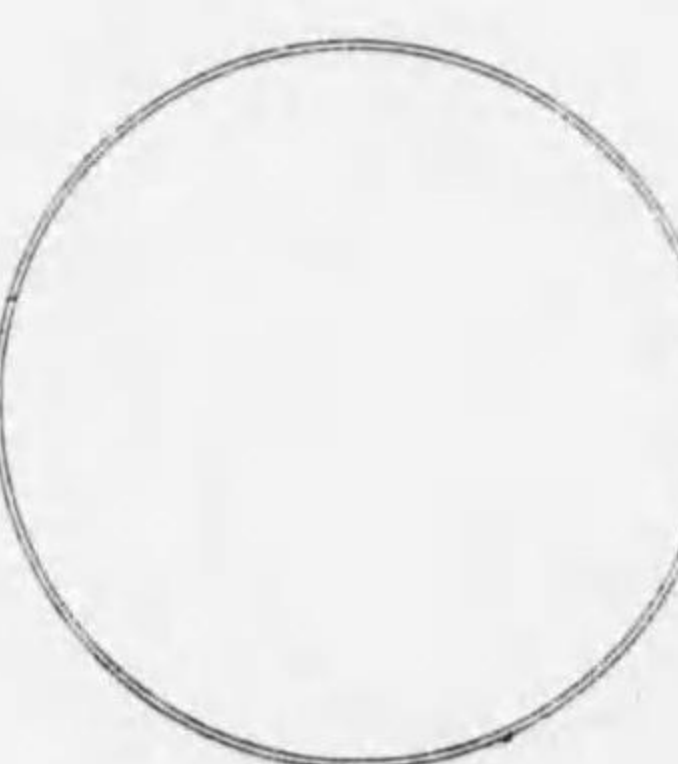
十五海
徑半英寸
重四十二磅
長五十二英寸
口徑二英寸

二十六海
徑半英寸
重四十二磅
長五十二英寸
口徑二英寸

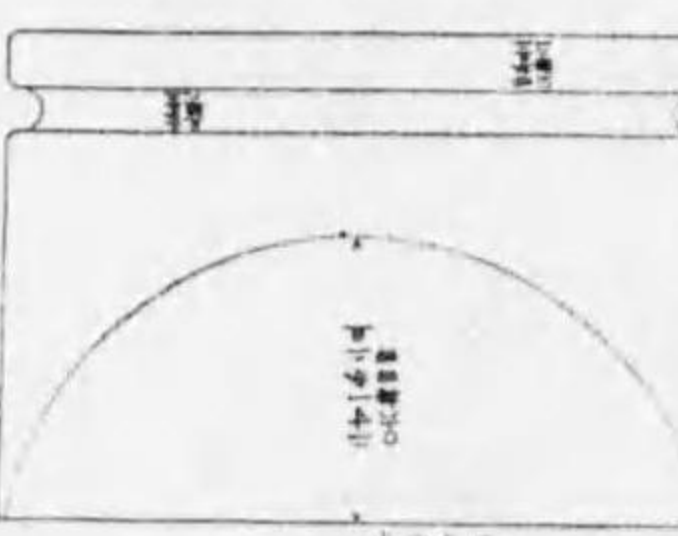
砲身圖樣



二十四海
徑半英寸
重四十二磅
長五十二英寸
口徑二英寸

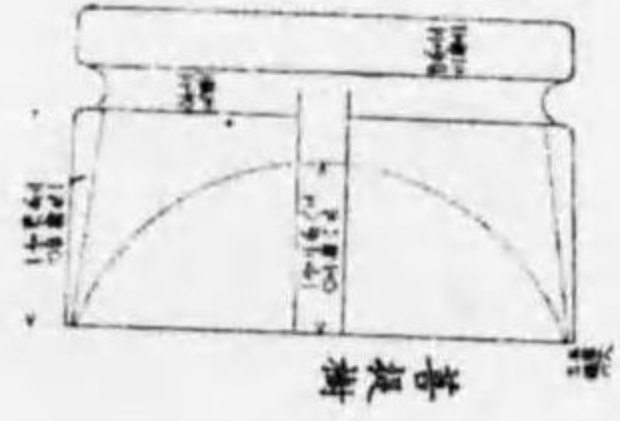


1寸

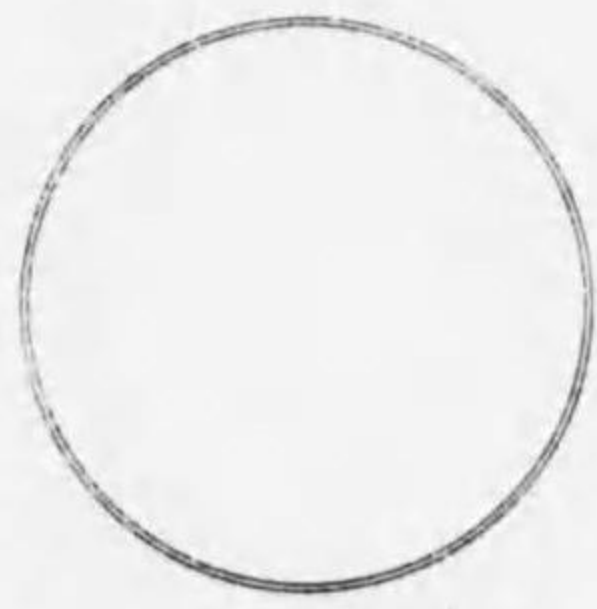


二十六海
徑半英寸
重四十二磅
長五十二英寸
口徑二英寸

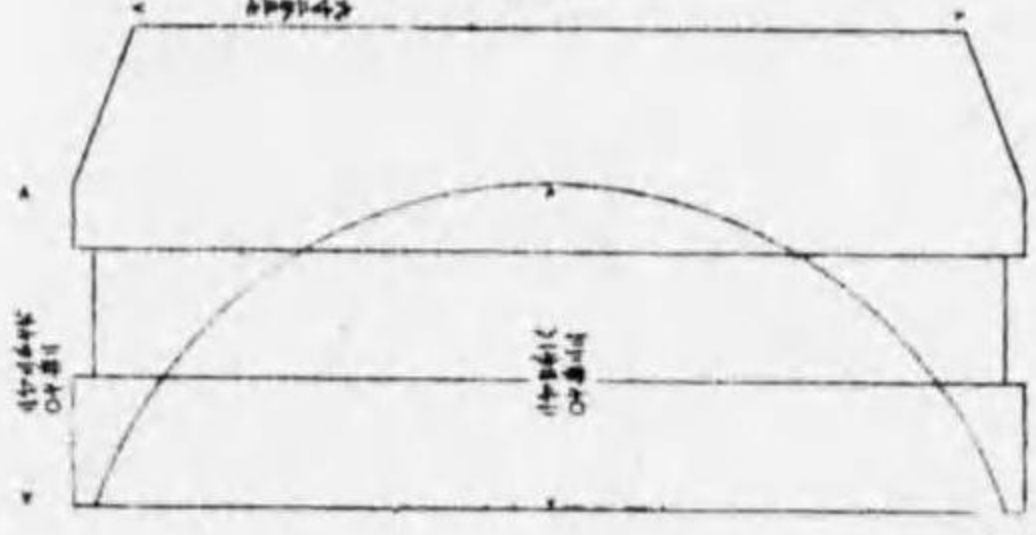
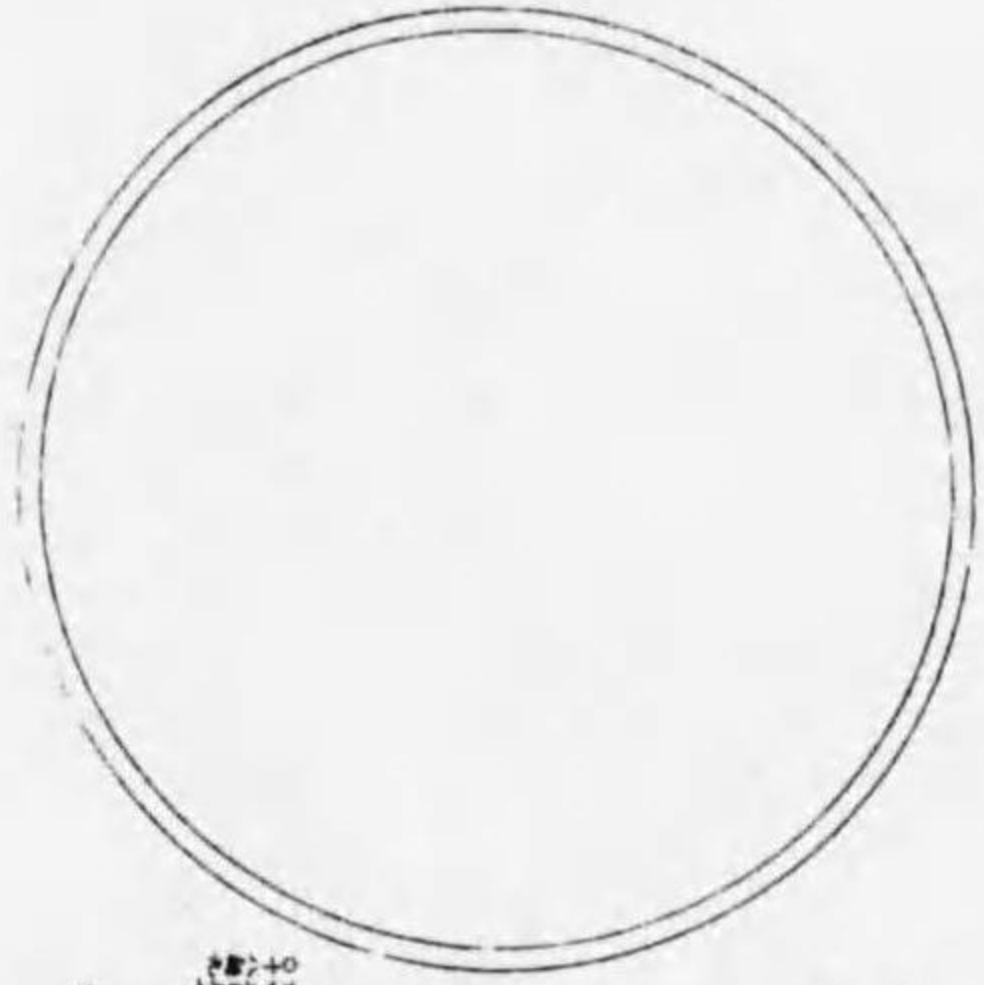
二十六海
徑半英寸
重四十二磅
長五十二英寸
口徑二英寸



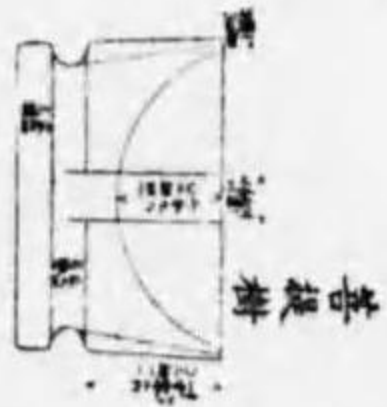
十二斤地砲彈鏡版
上徑十八分八厘
下徑十七分五厘
高四寸一分五厘
重十二斤七分



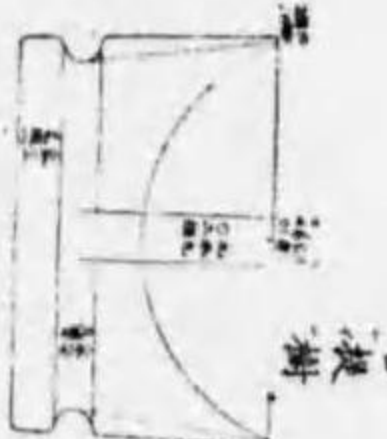
十八斤地砲彈鏡版
上徑二十二分六厘
下徑二十一分五厘
高四寸八分五厘
重十八斤八分五厘



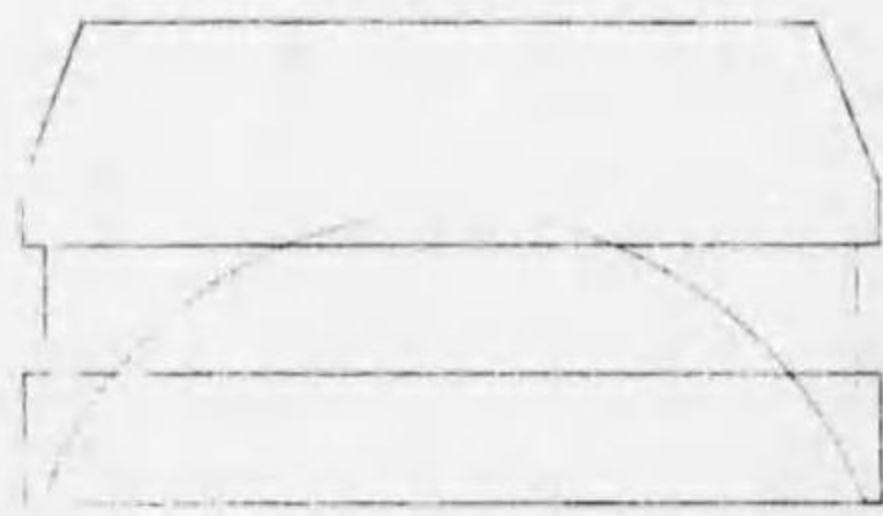
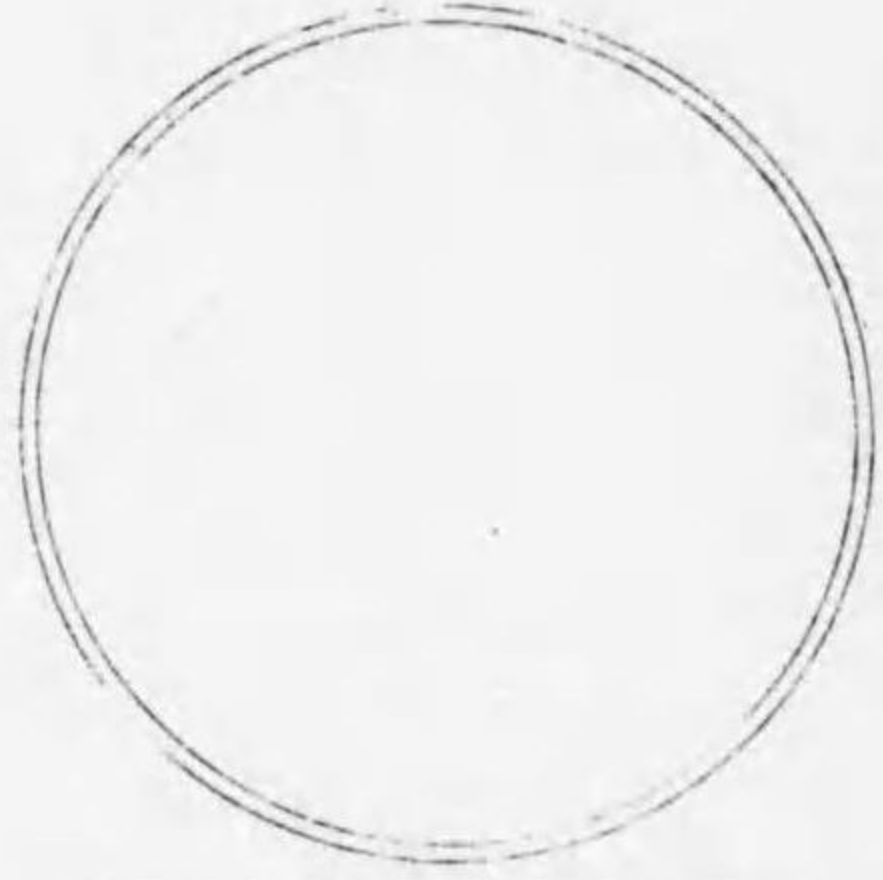
八斤石砲彈鏡版
上徑十二分
下徑十一分二厘
高四寸一分
重八斤四分



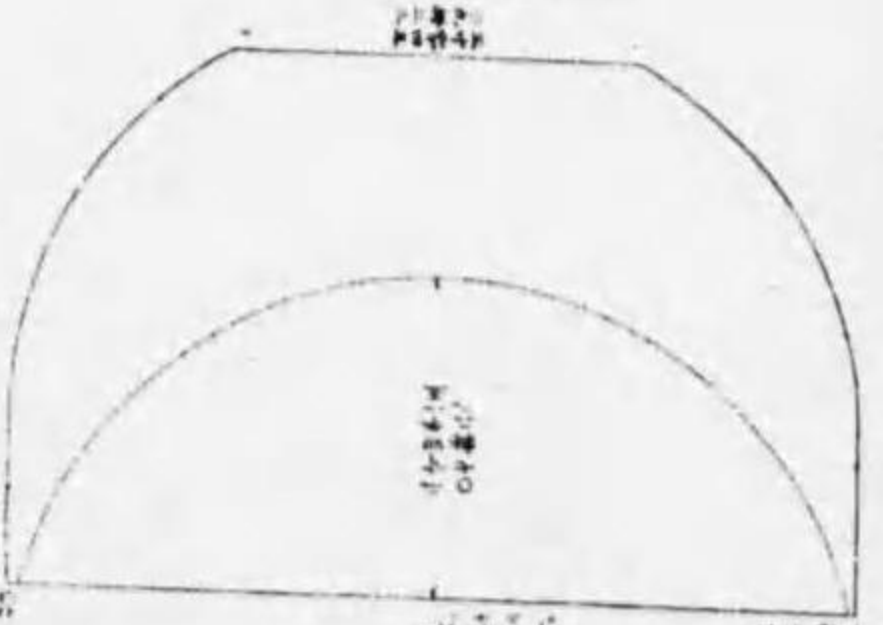
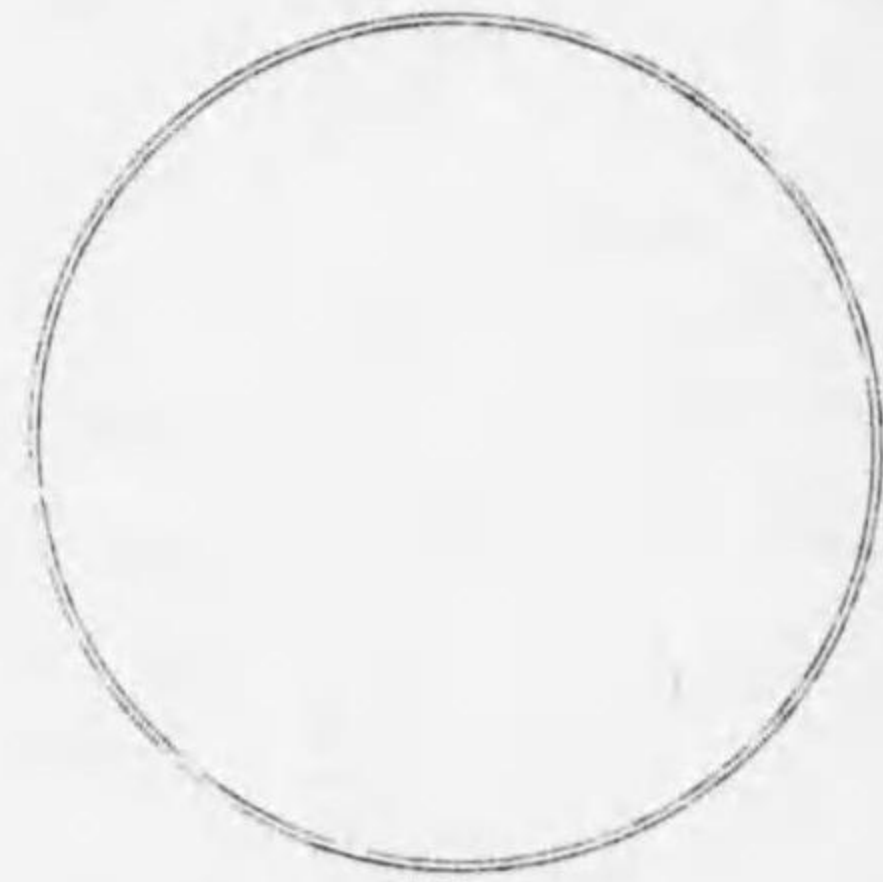
三斤地砲彈鏡版
上徑七分
下徑六分五厘
高四寸一分
重三斤四分



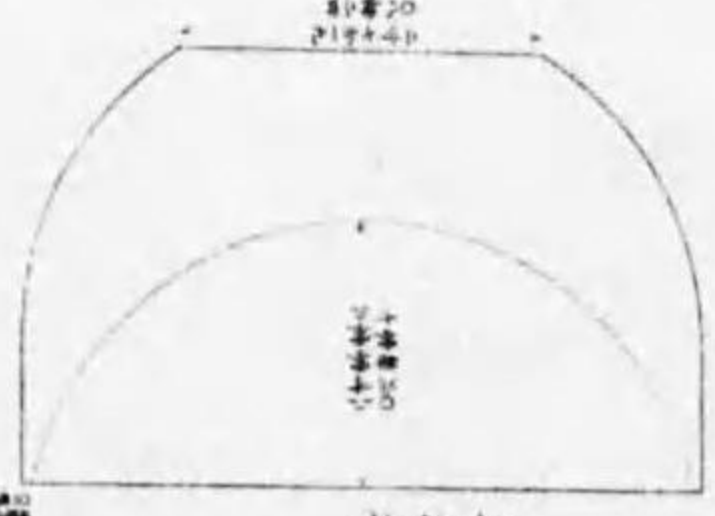
六斤地砲彈鏡版
上徑十二分
下徑十一分五厘
高四寸一分五厘
重六斤四分五厘



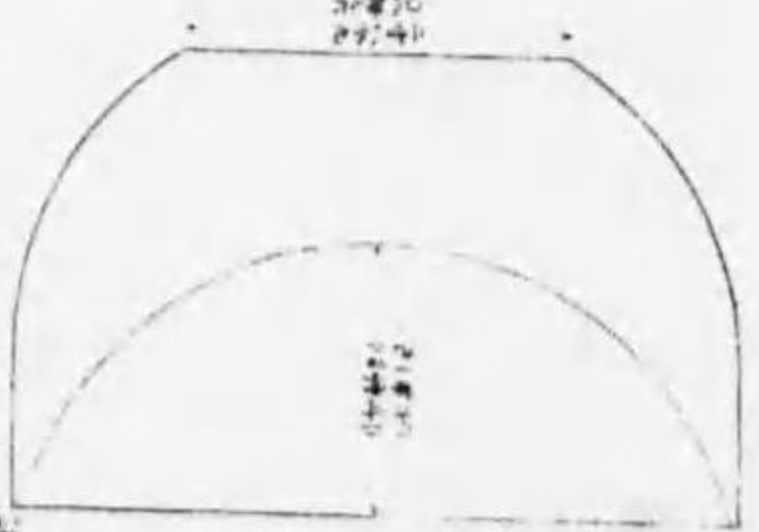
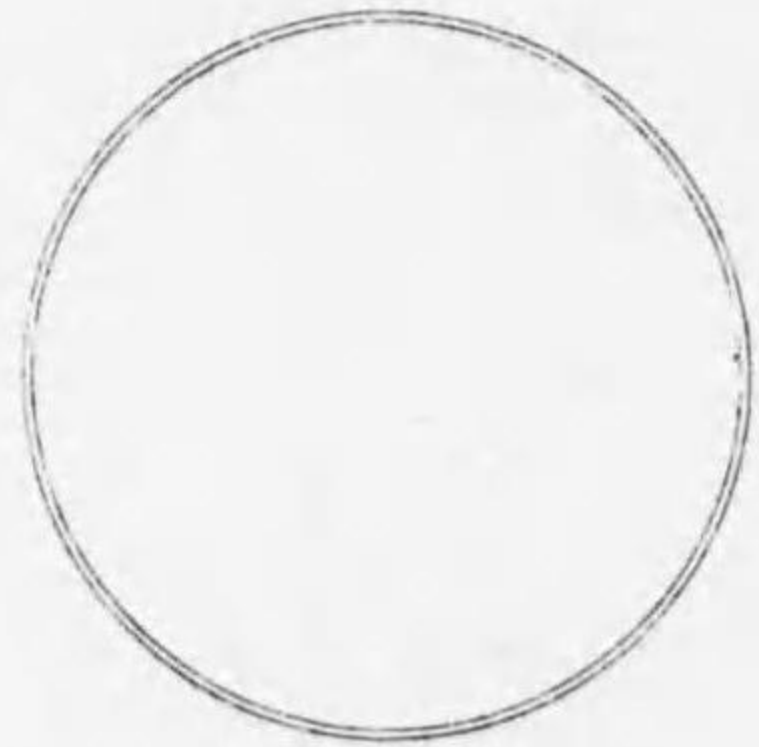
全
三十斤鐵板砲彈及石砲彈鏡版



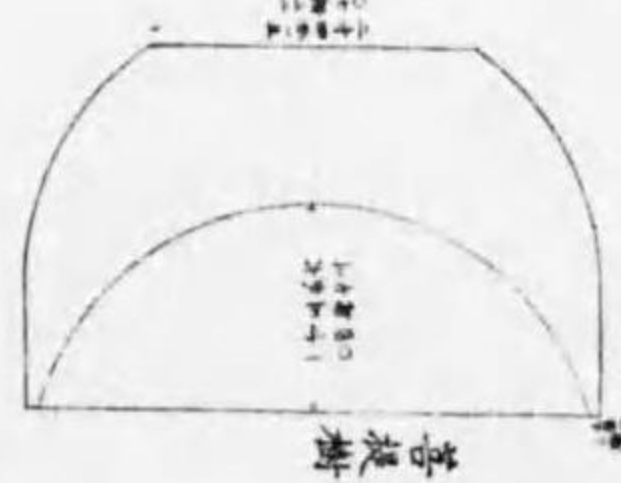
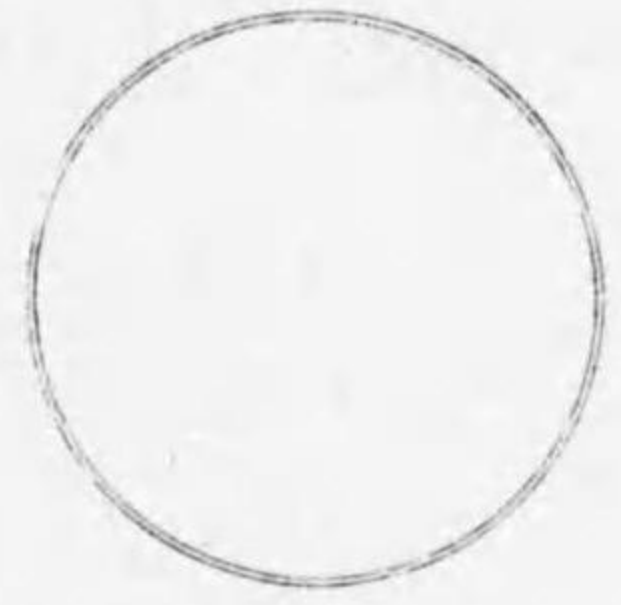
六十斤鐵板砲彈及石砲彈鏡版
上徑二十二分
下徑二十一分五厘
高五寸四分五厘
重三十六斤四分五厘



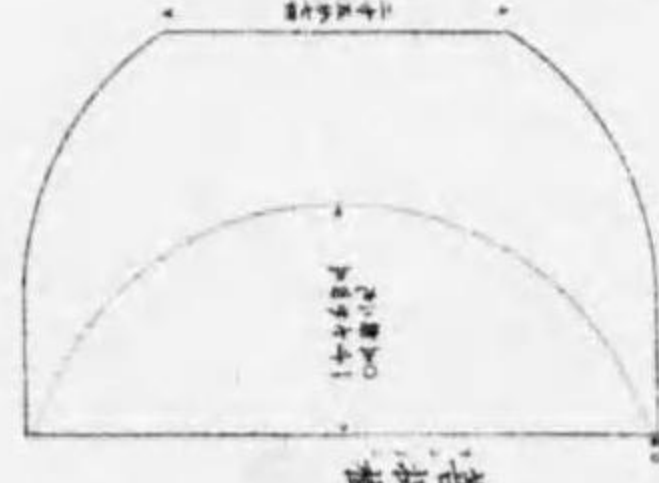
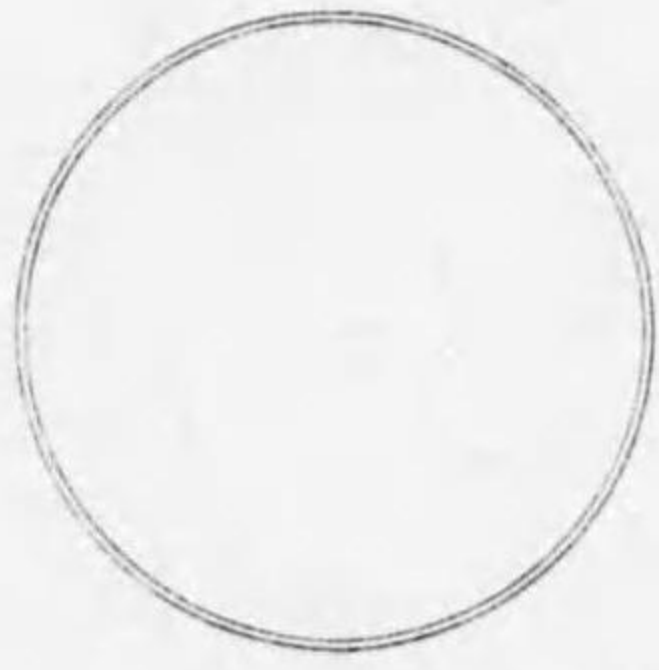
三十斤鐵板砲彈及石砲彈鏡版
上徑二十二分
下徑二十一分五厘
高四寸四分五厘
重三十斤四分五厘



三十六斤鐵板砲彈及石砲彈鏡版
上徑二十二分
下徑二十一分五厘
高五寸四分五厘
重三十六斤四分五厘



十八斤鐵殼砲彈及石榴彈鏡版

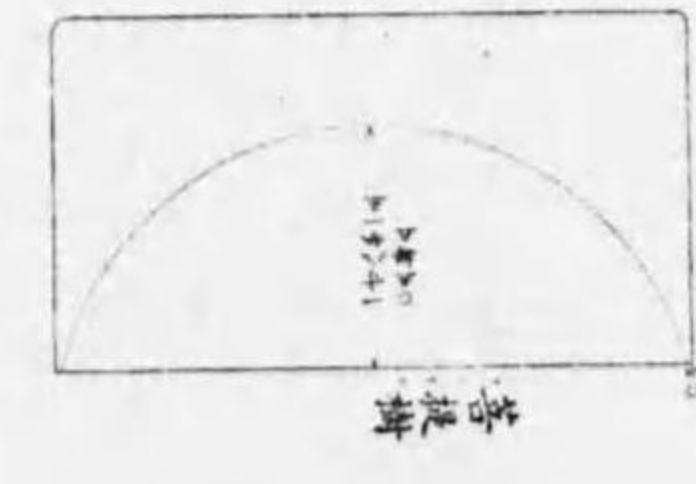
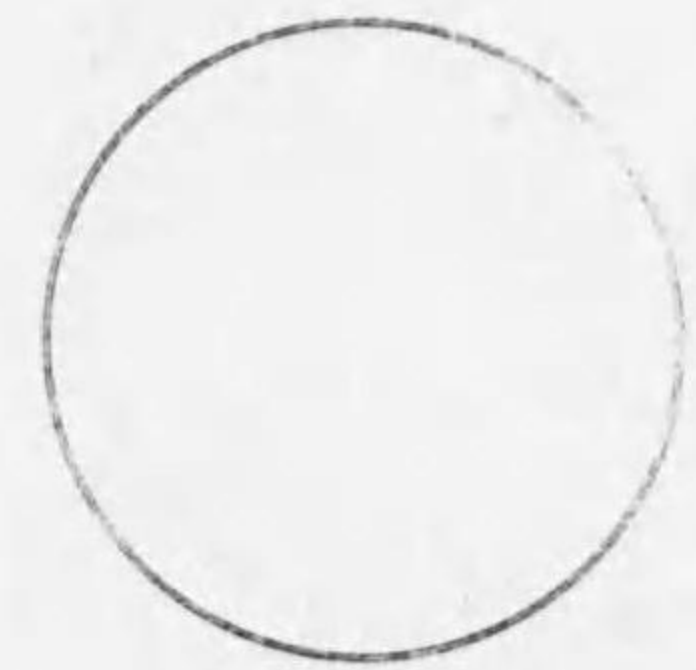


二十四斤鐵殼砲彈及石榴彈鏡版

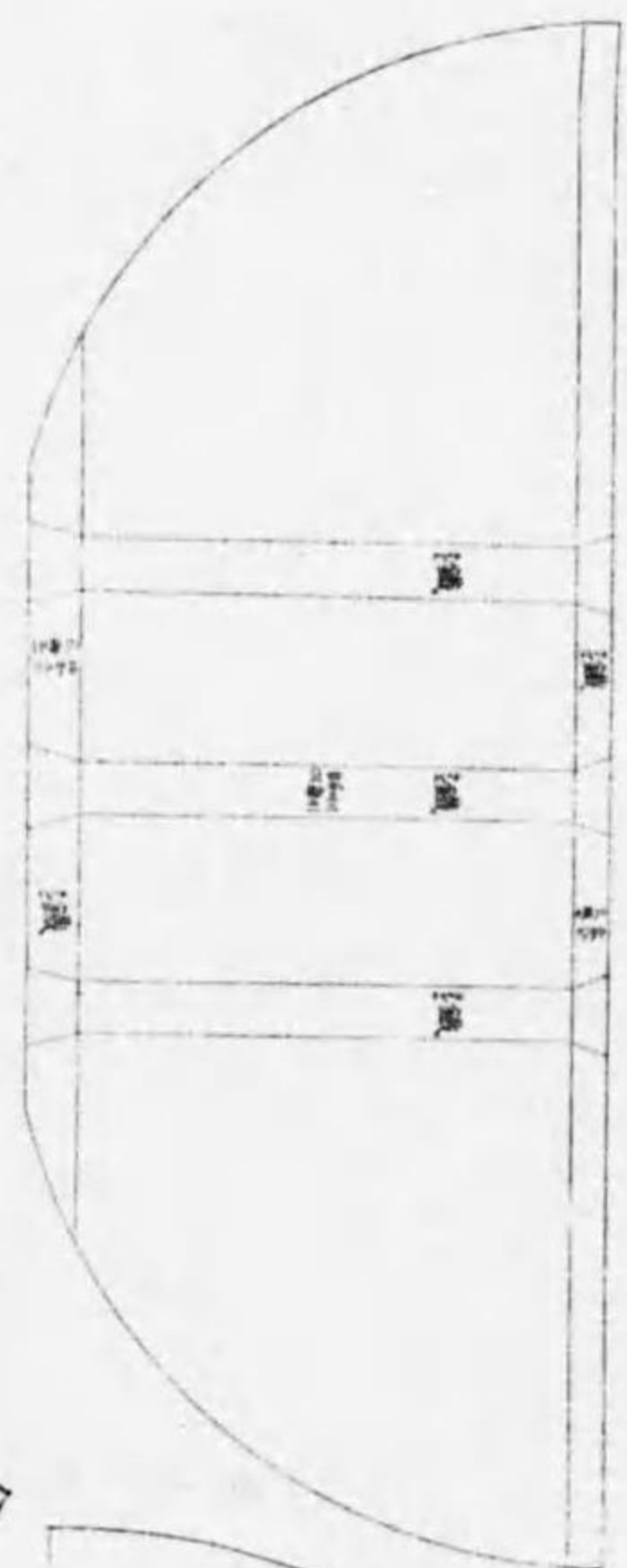


繪圖

鐵彈天砲鏡版
石榴彈鏡版
石榴彈鏡版
上徑八寸八分
下徑五寸二分
重四十八斤
重四十八斤
重四十八斤
重四十八斤
重四十八斤

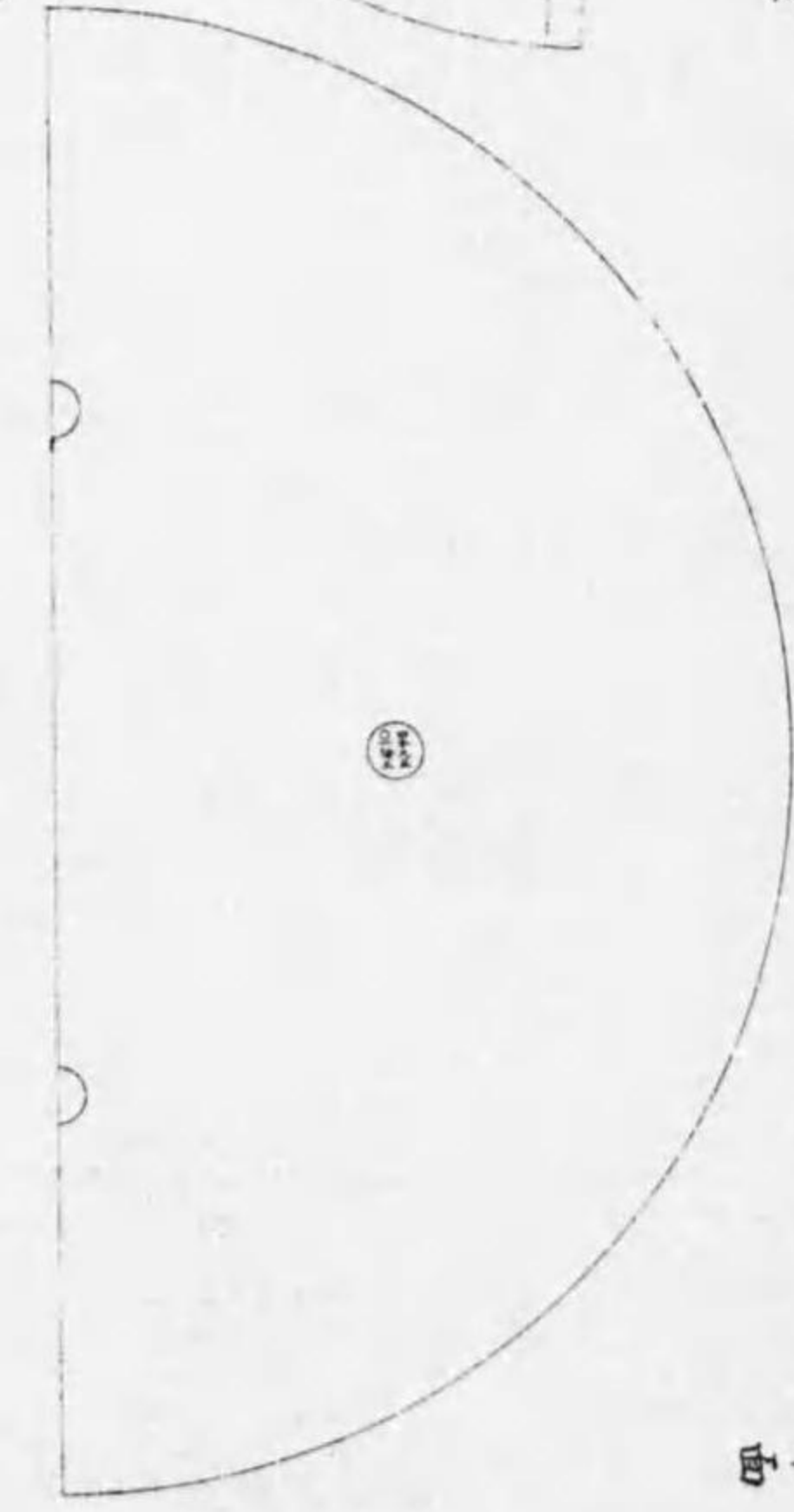


十五斤鐵殼砲彈及石榴彈鏡版

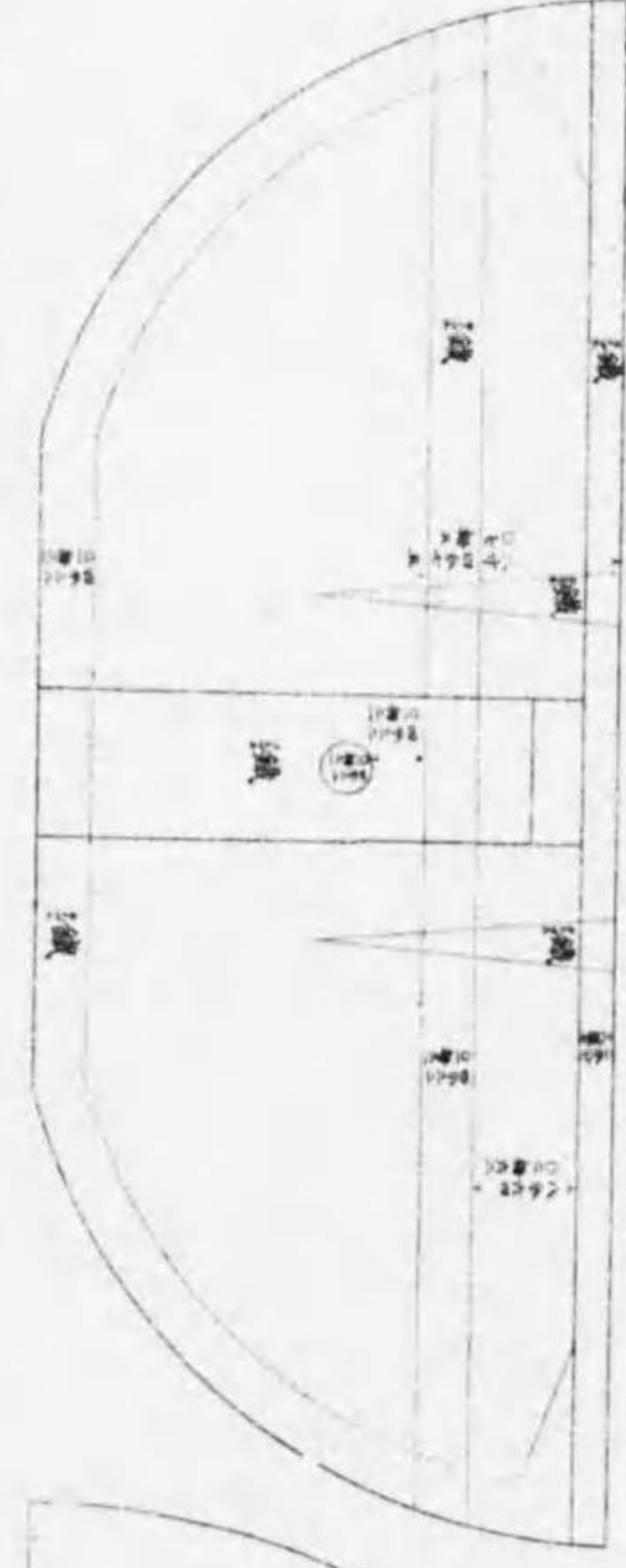


繪圖

全砲鏡版
上徑八寸八分
下徑五寸二分
重四十八斤
重四十八斤
重四十八斤
重四十八斤
重四十八斤

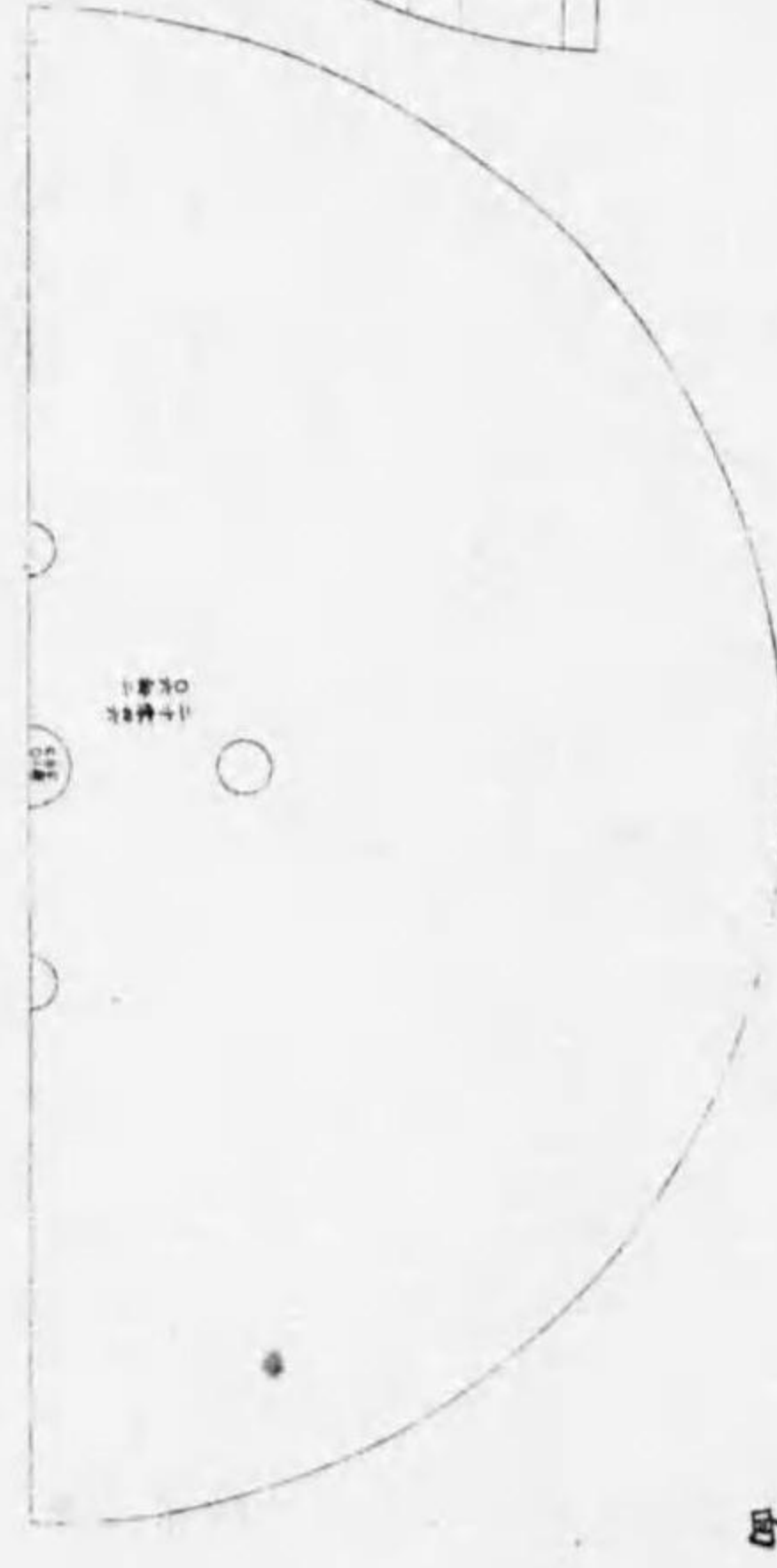


全上半面



繪圖

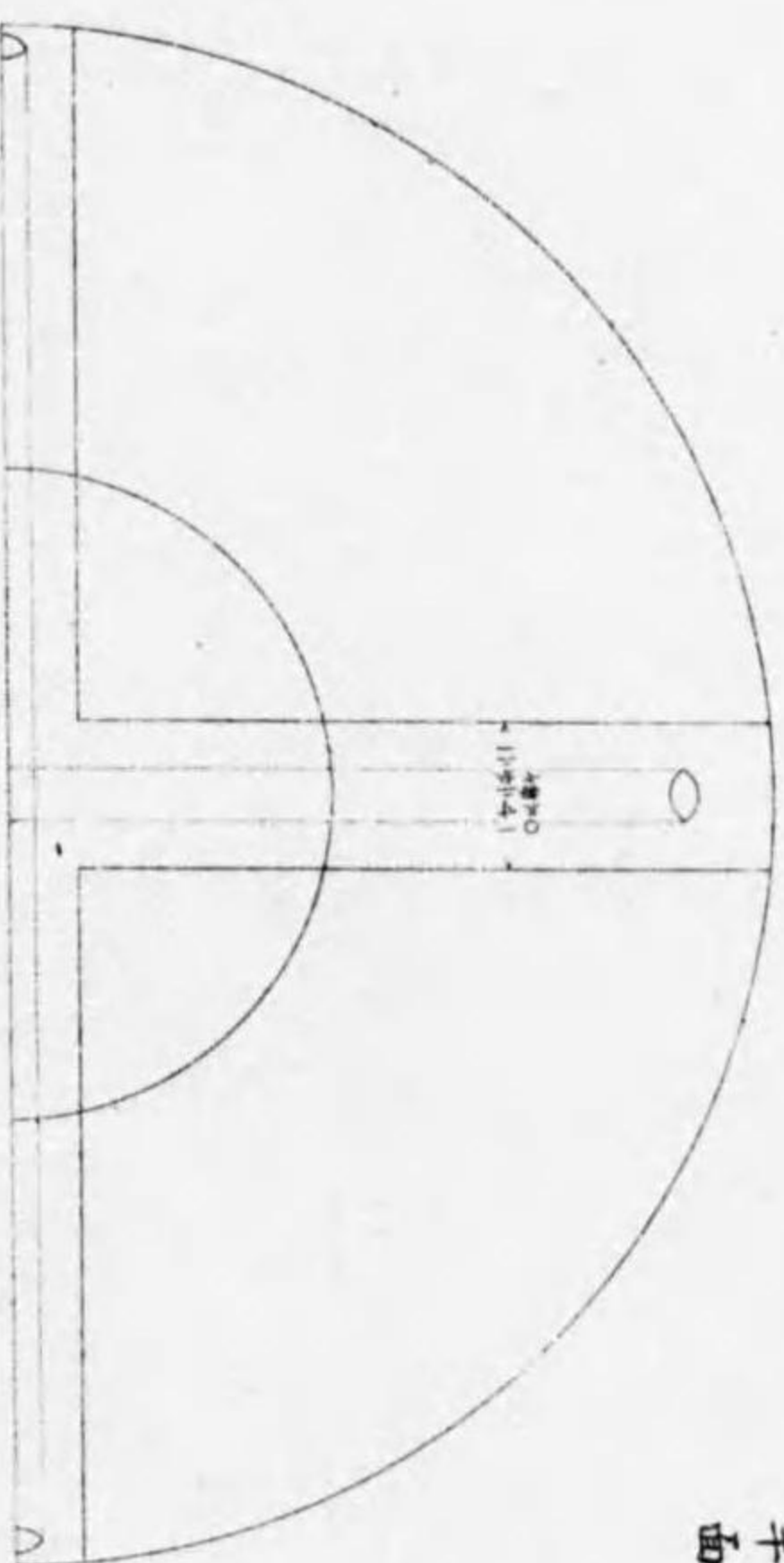
全砲鏡版
上徑八寸八分
下徑五寸二分
重四十八斤
重四十八斤
重四十八斤
重四十八斤
重四十八斤



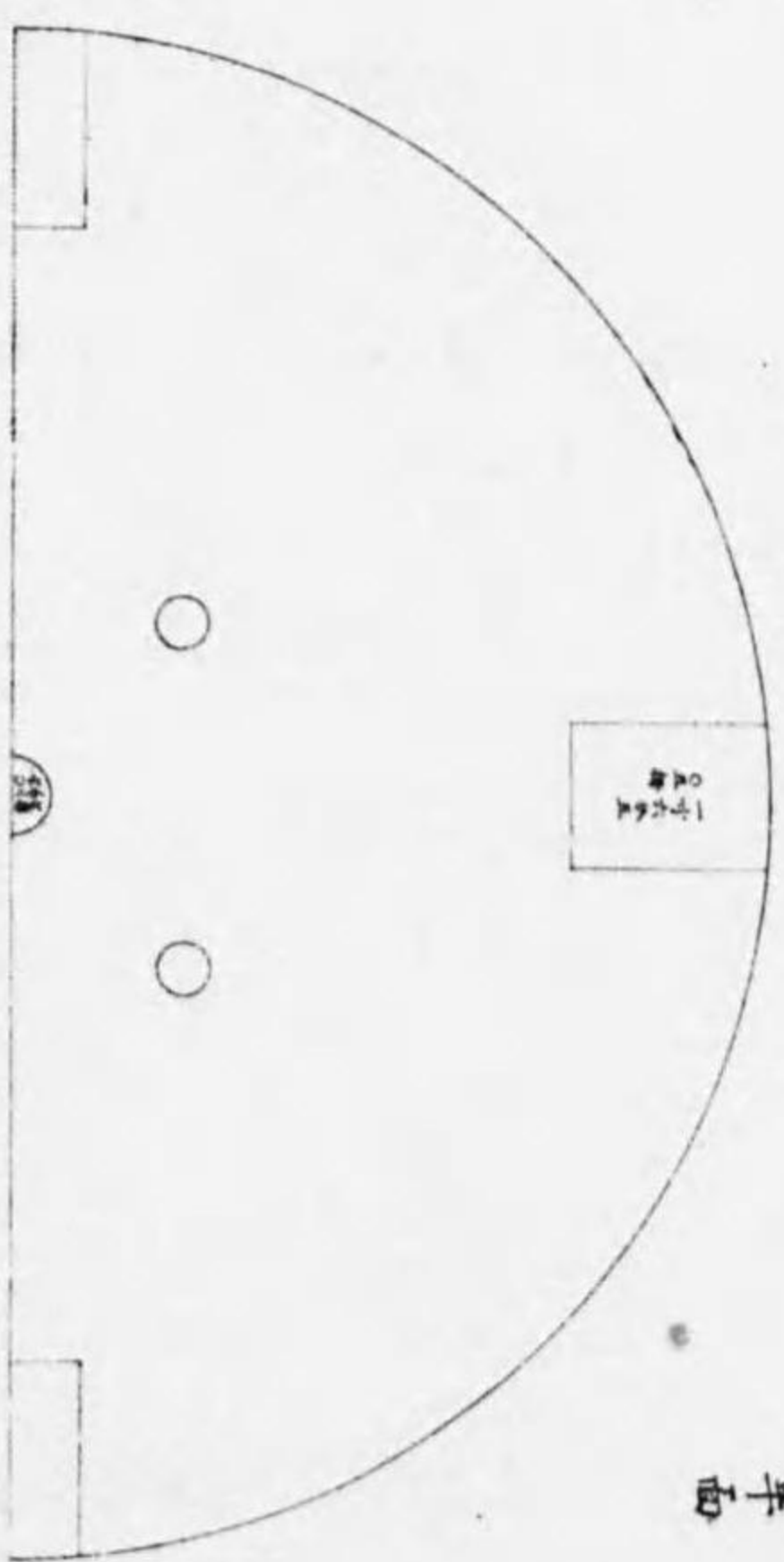
全上半面

襪子圖樣

1111

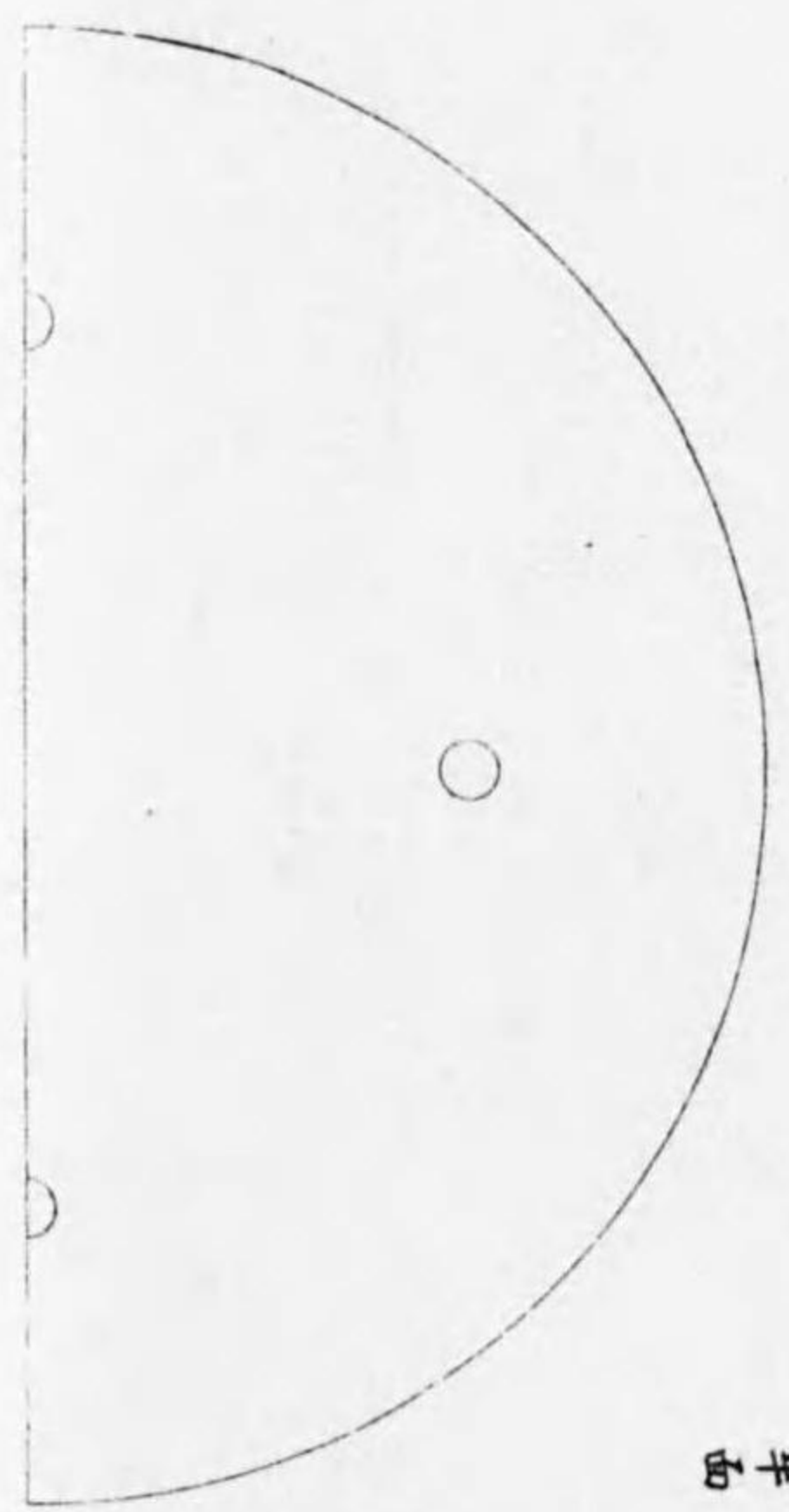


全下半面

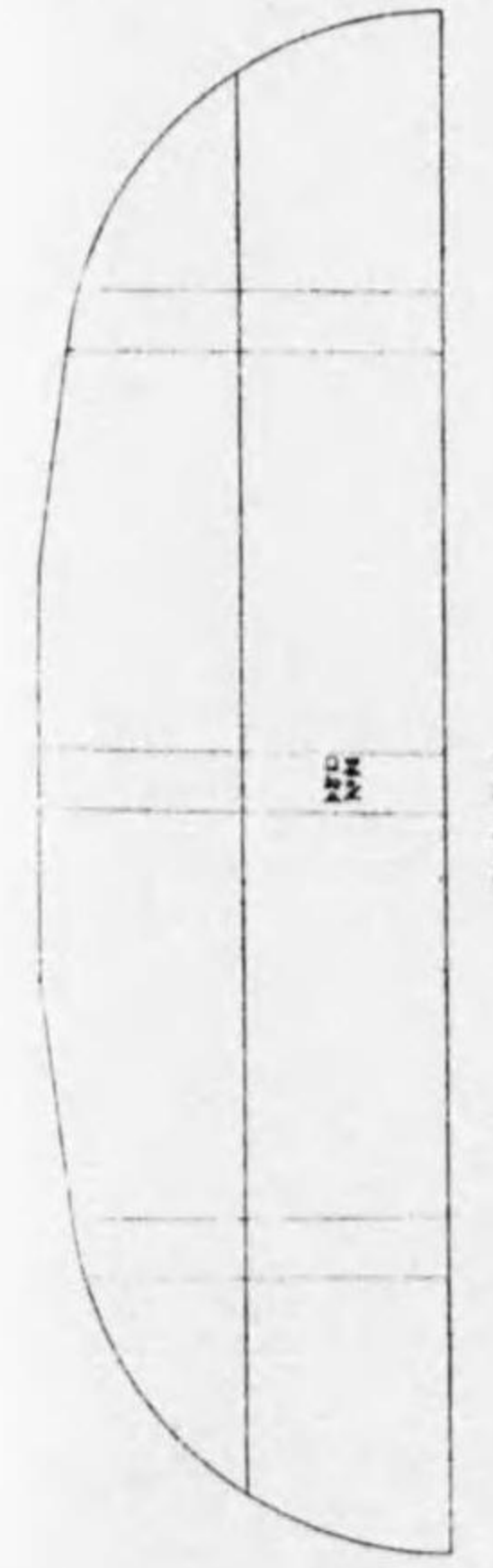


全上半面

全經緯
上邊一尺二寸五分
下邊一尺二寸五分
下口一尺二寸五分
下口一尺二寸五分
下口一尺二寸五分
下口一尺二寸五分
下口一尺二寸五分
下口一尺二寸五分



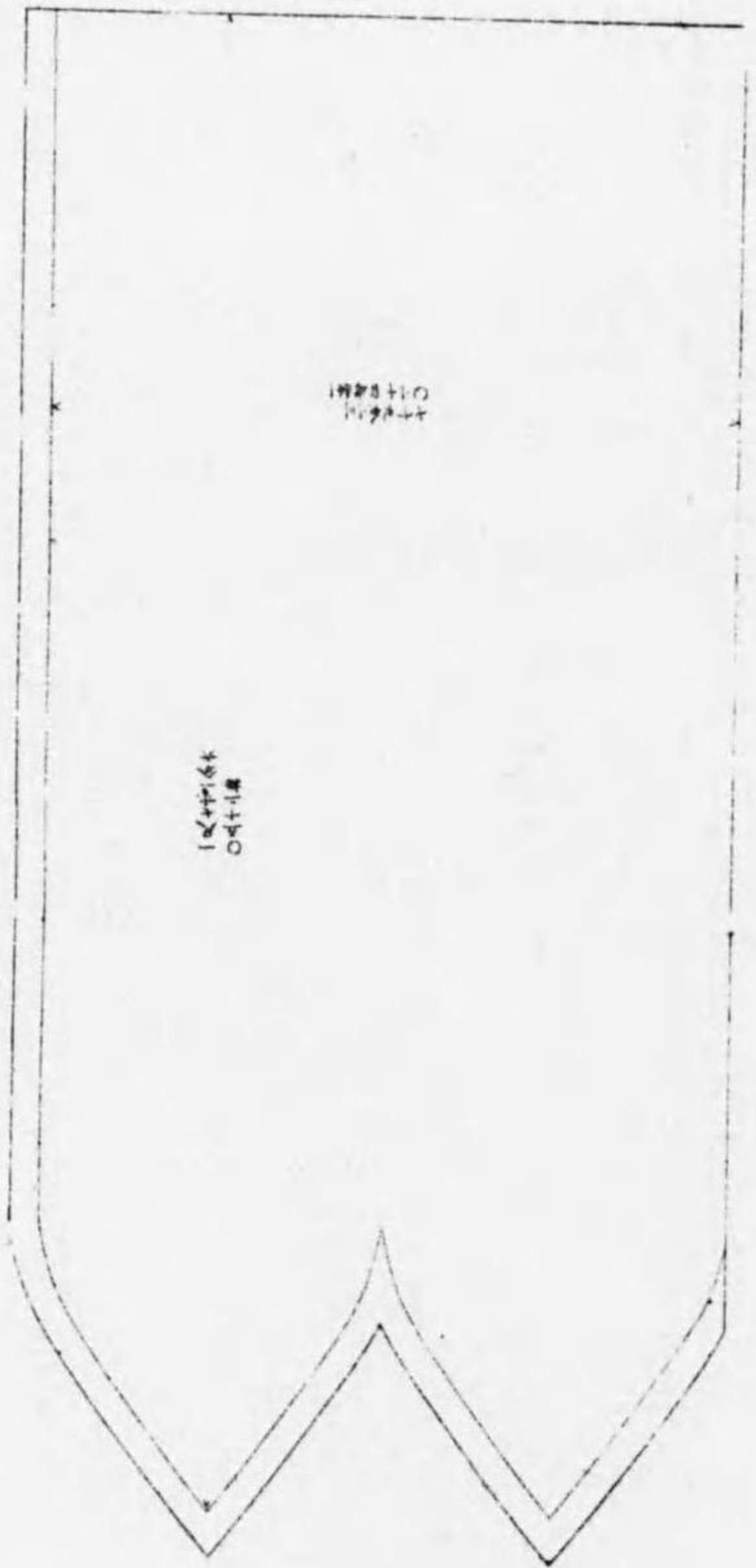
全上半面



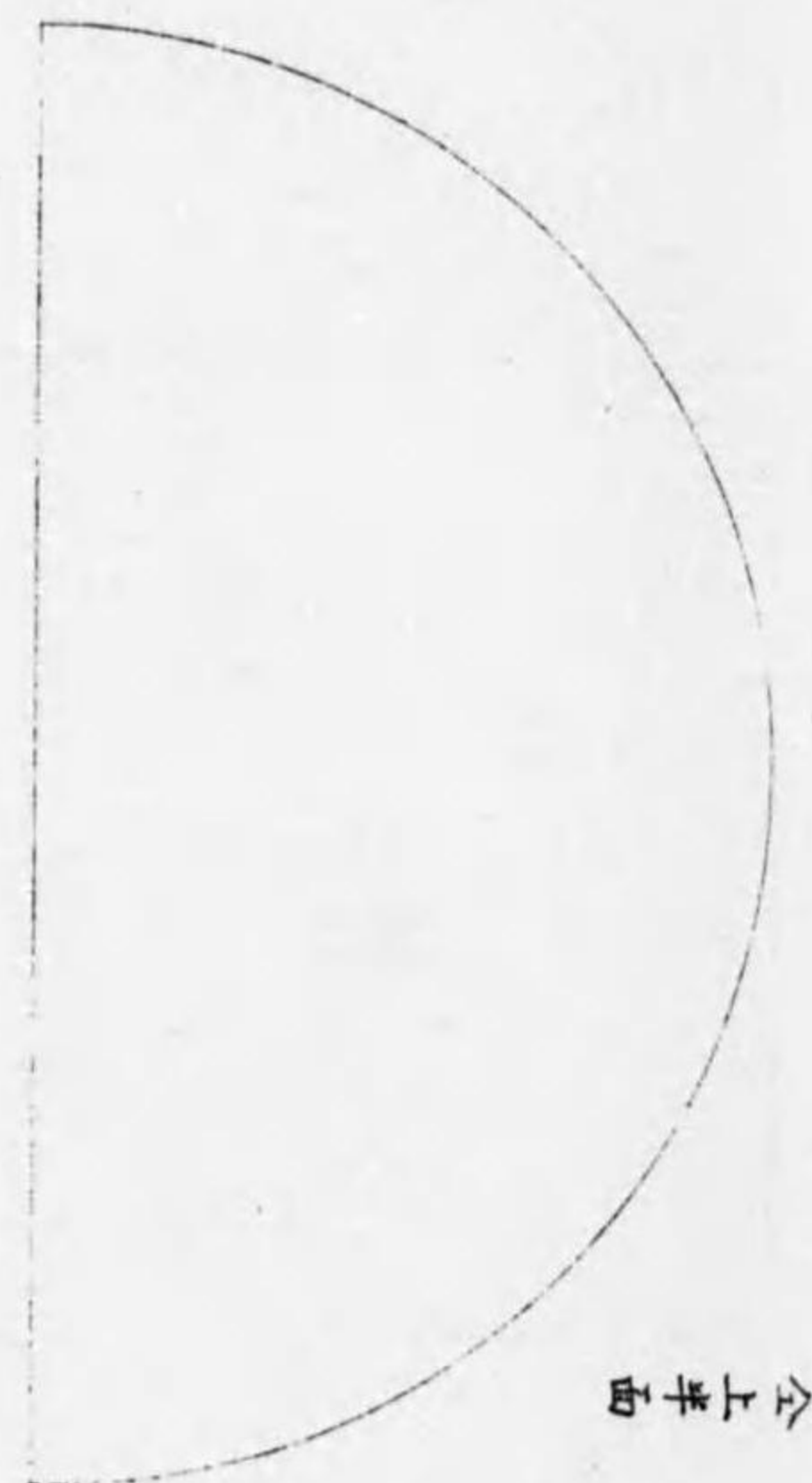
全經緯

襪子圖樣

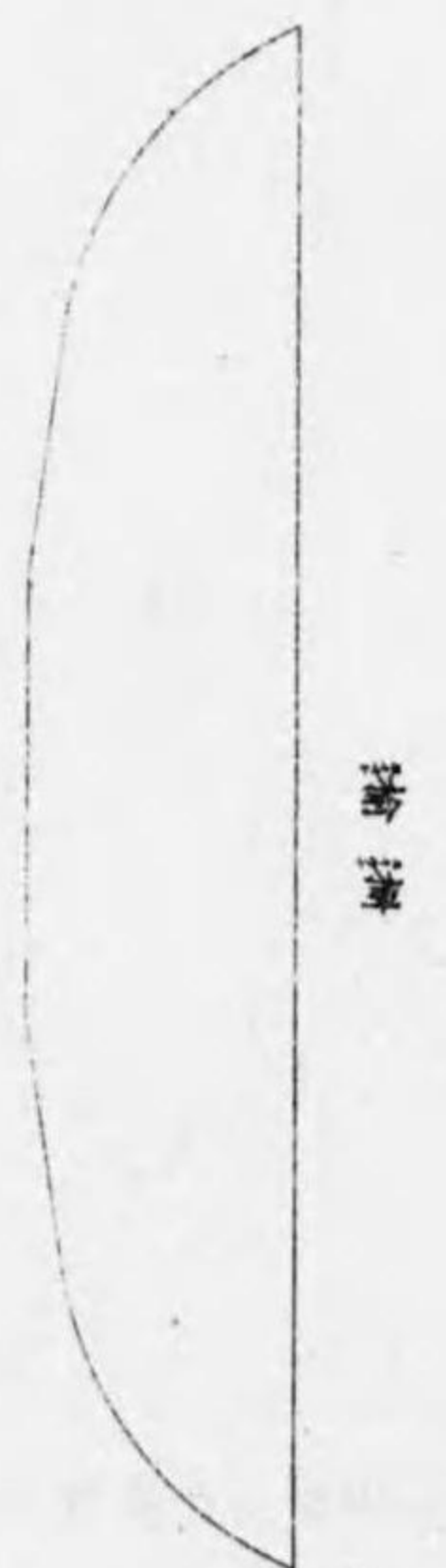
1111



三十行地氈毛布襪圖式



全上半面



全經緯

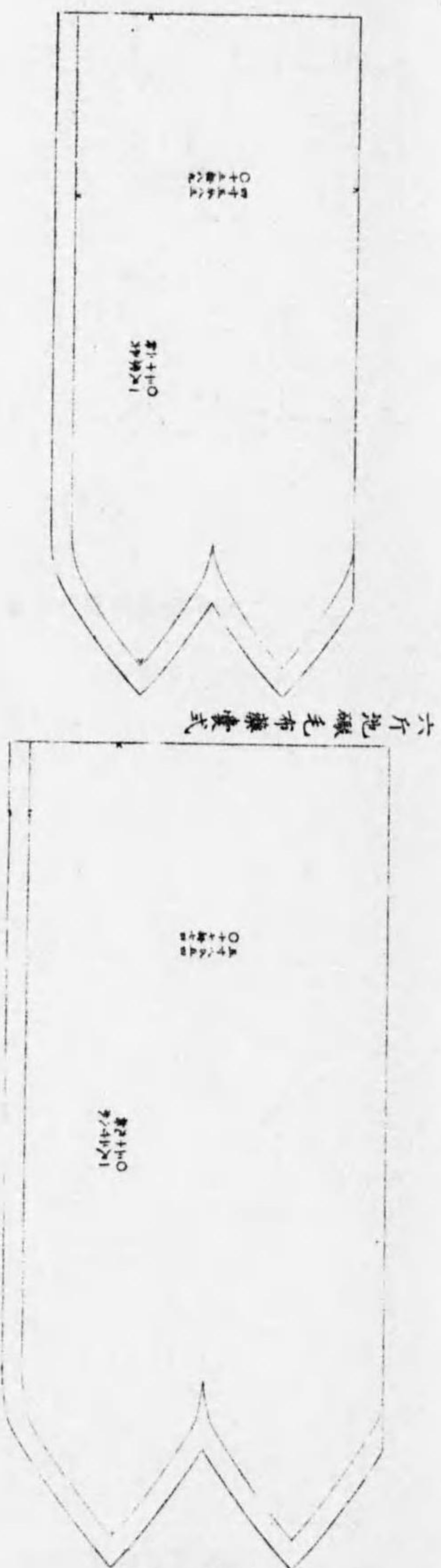
全經緯
上邊一尺二寸五分
下邊一尺二寸五分
下口一尺二寸五分
下口一尺二寸五分
下口一尺二寸五分
下口一尺二寸五分
下口一尺二寸五分
下口一尺二寸五分



二十四斤地氈毛布襪樣式



十八斤地氈毛布襪樣式



十二斤地氈毛布襪樣式



三十斤地氈毛布襪樣式

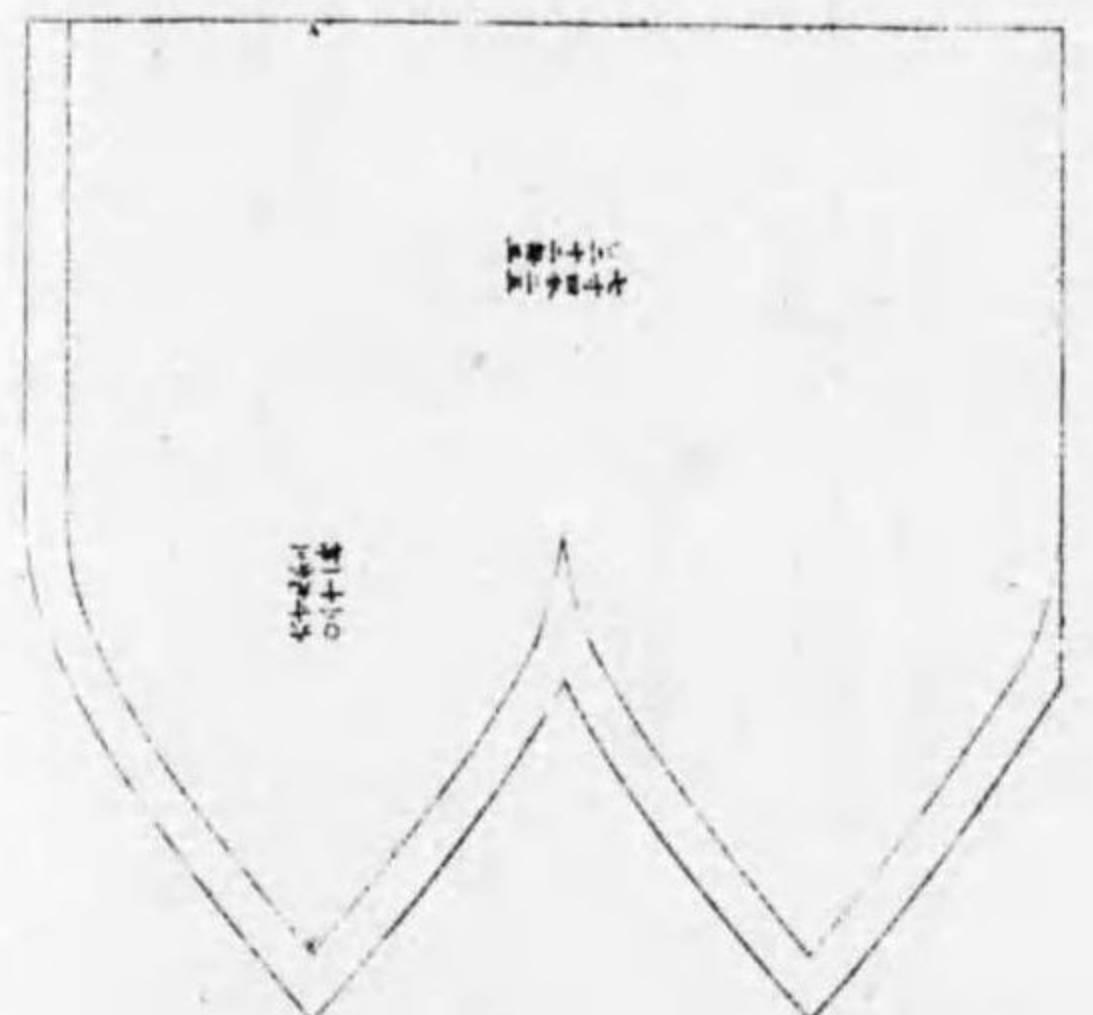
十八斤地氈毛布襪樣式

六斤地氈毛布襪樣式

襪 樣 圖 樣



二十斤人 襪毛布 樣式



十五斤人 襪毛布 樣式



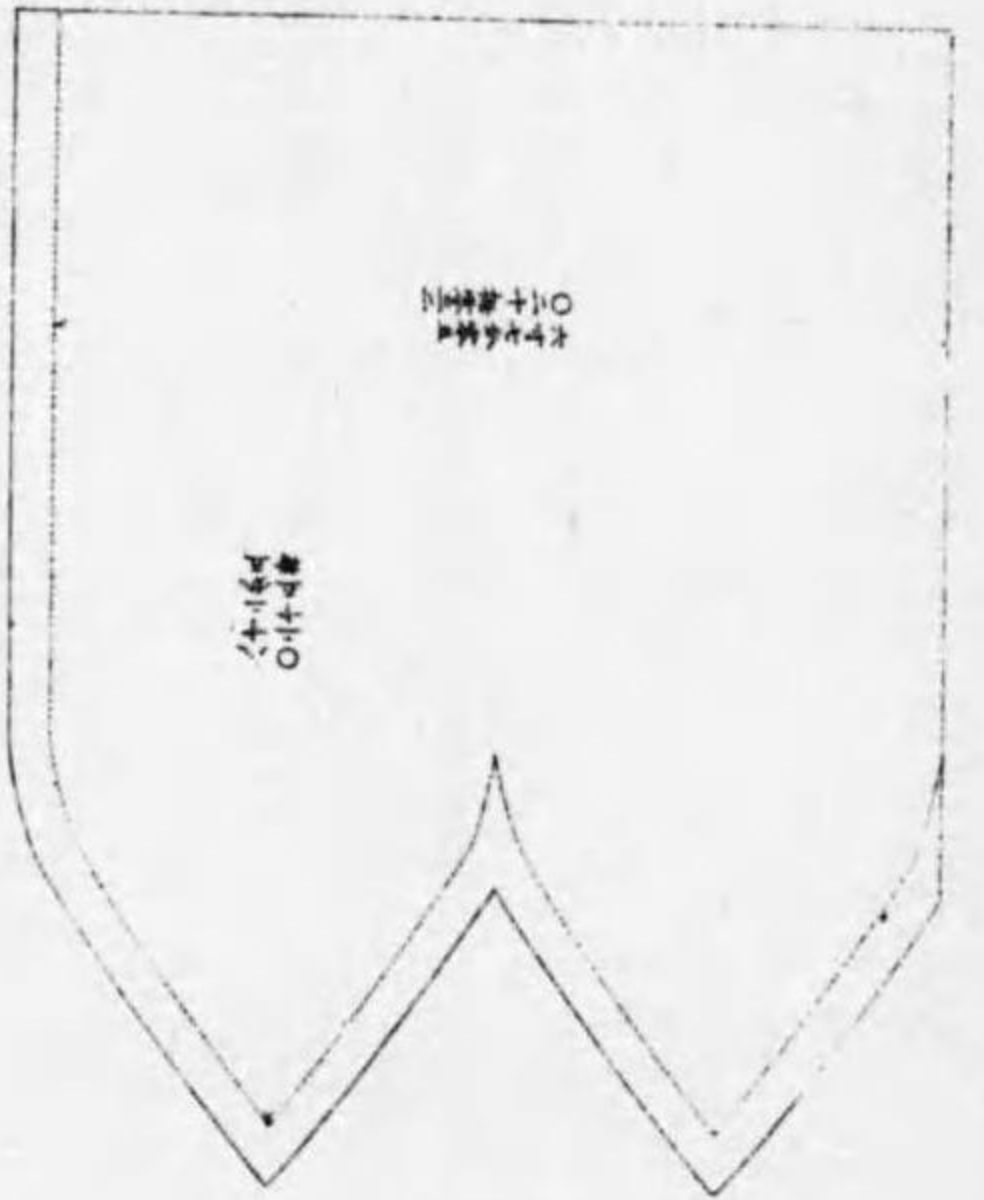
十二斤 獨 襪毛布 樣式



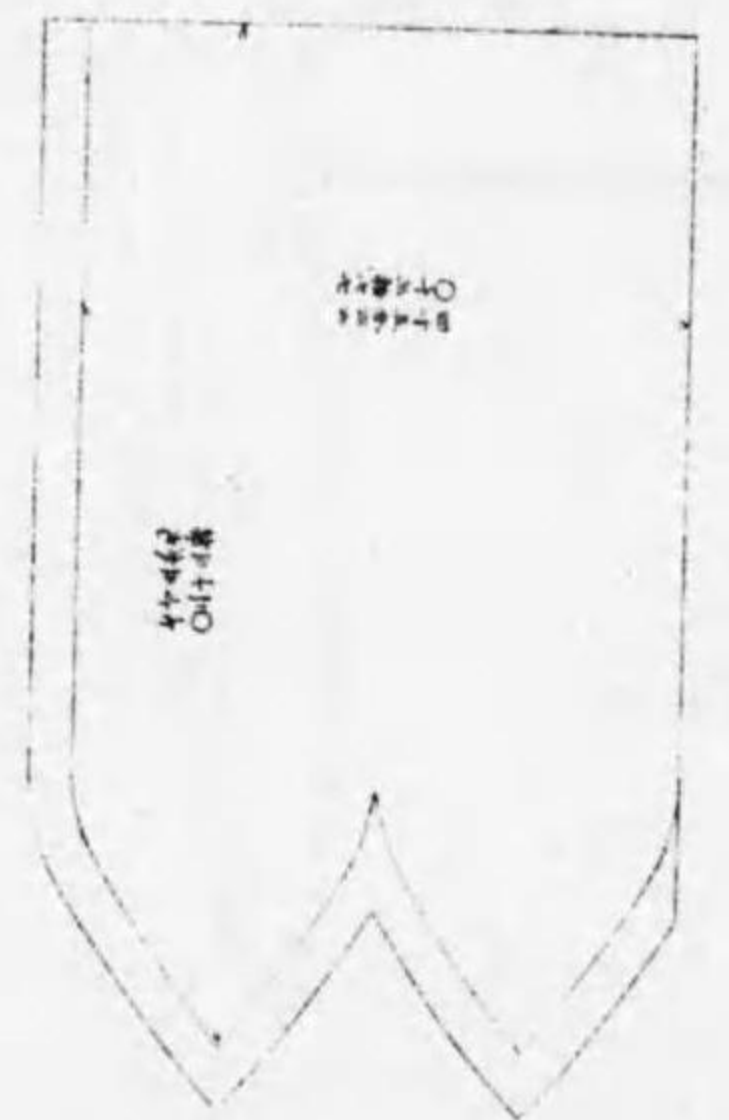
十五斤人 襪毛布 樣式

二水

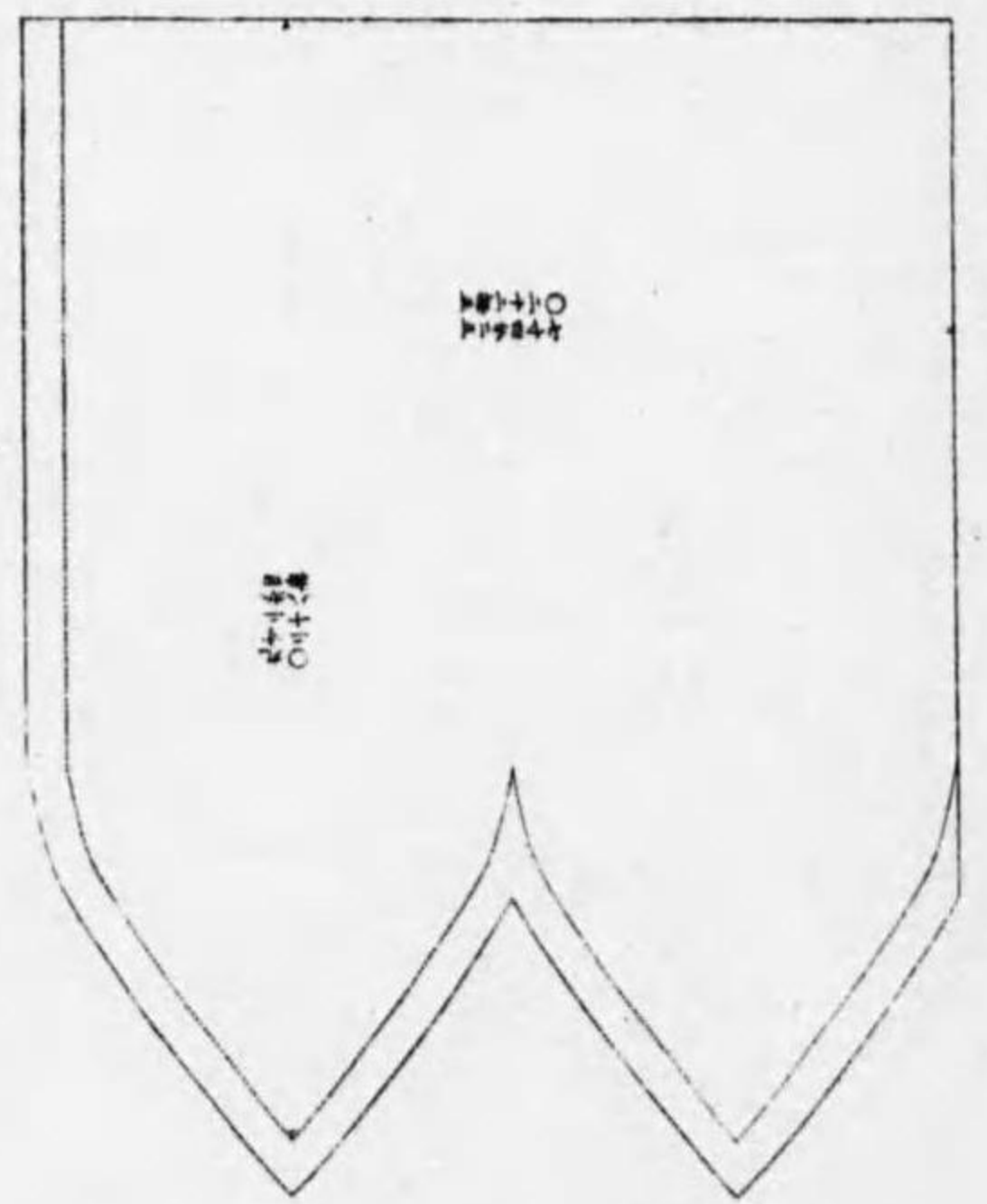
十一



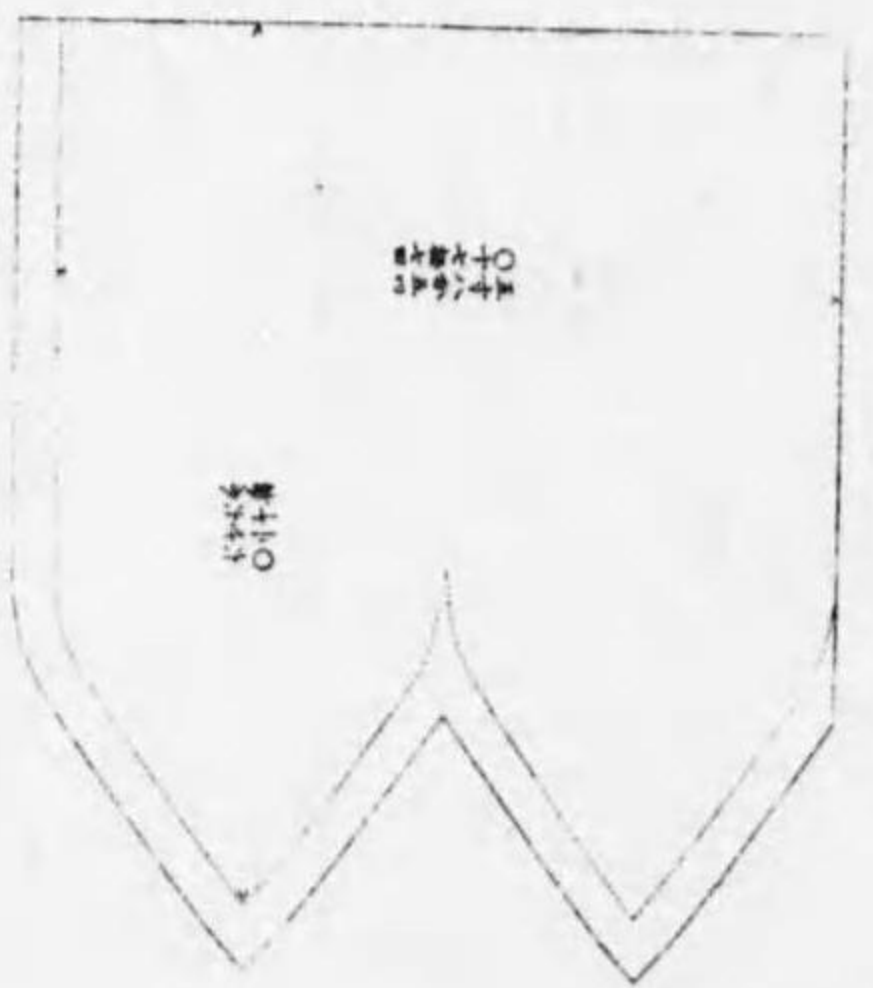
十八斤地 襪毛布 樣式



二十斤人 襪毛布 樣式



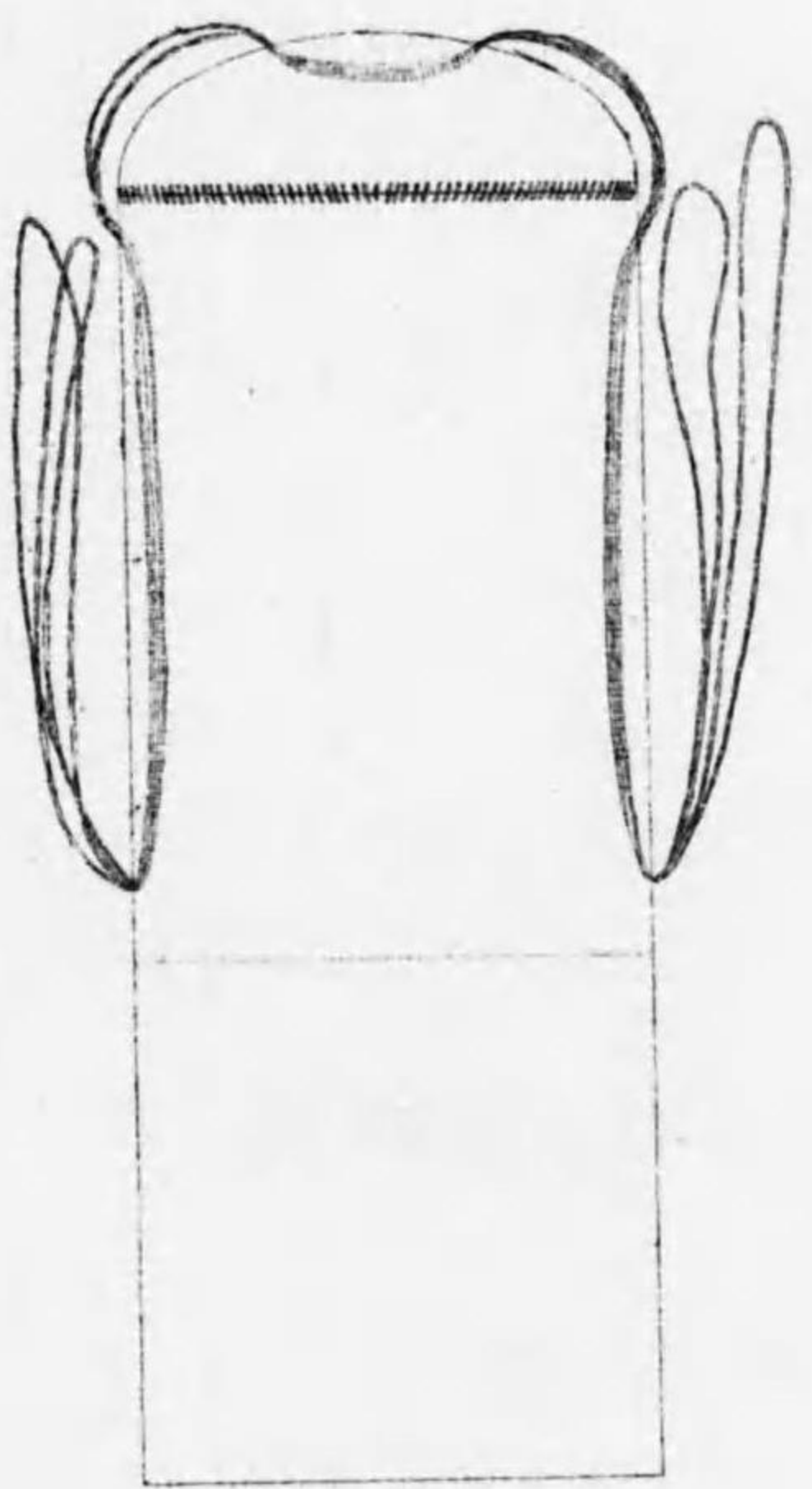
二十四斤地 襪毛布 樣式



十二斤地 襪毛布 樣式

二水

襪 樣 圖 樣

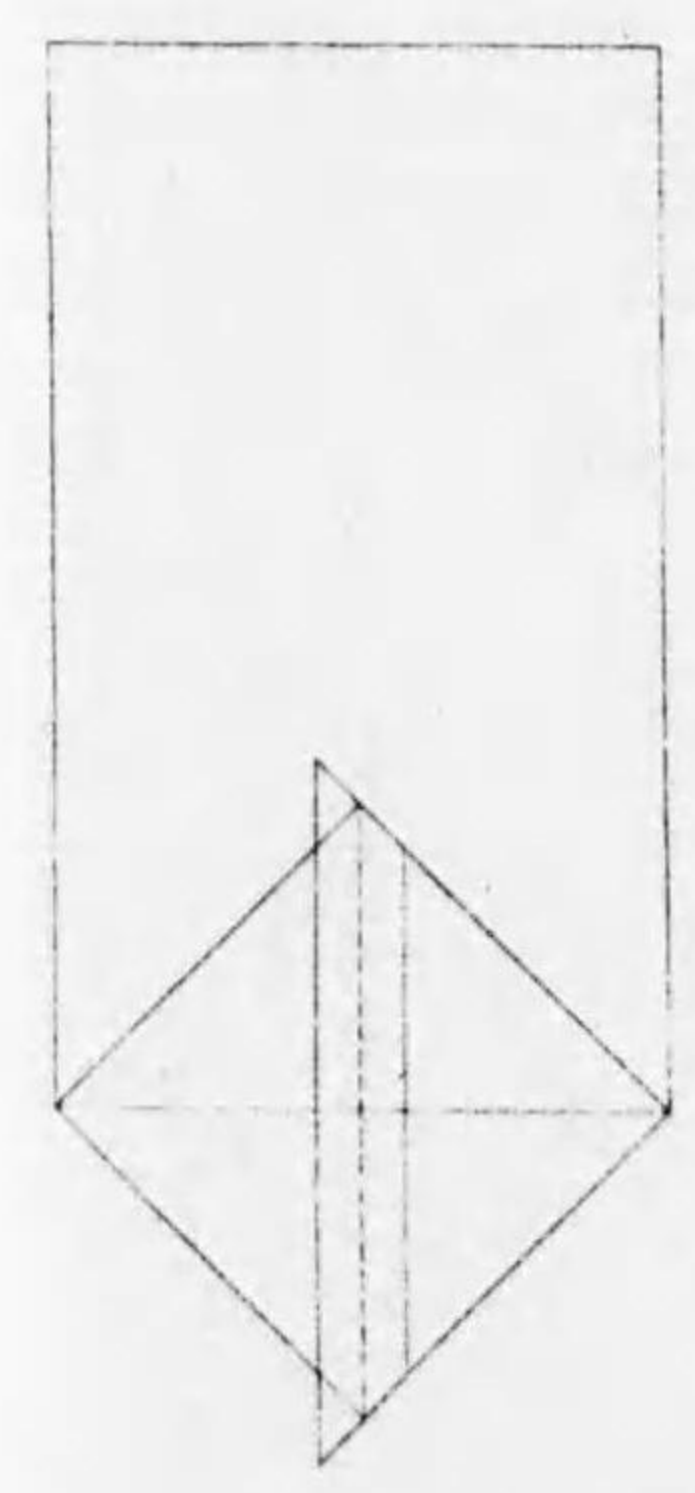
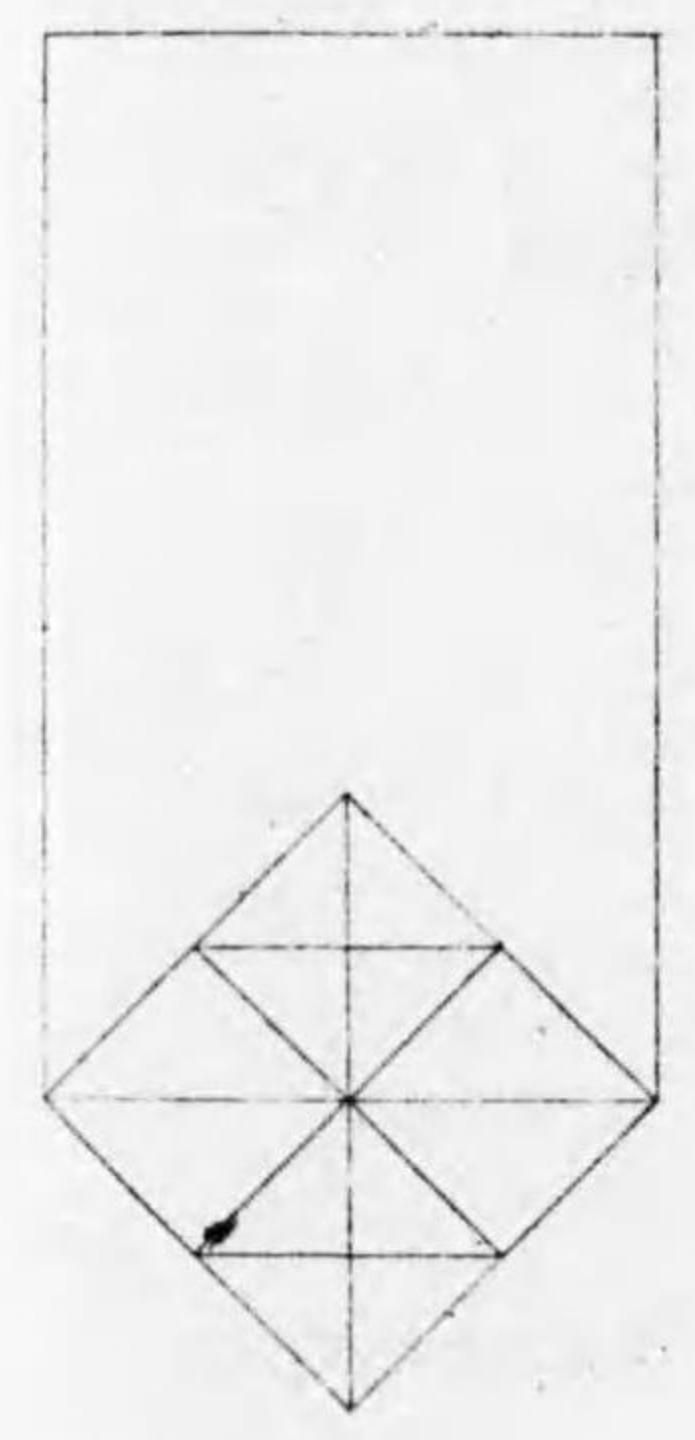


二十四斤地氈毛布盛藥袋

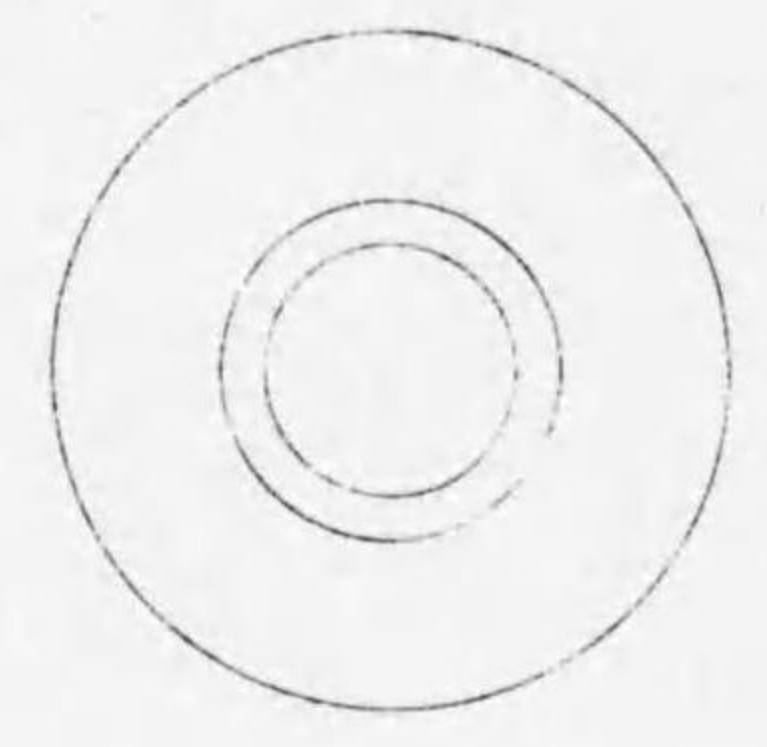


十五斤人氈羅射毛布盛藥袋

六斤紙藥袋

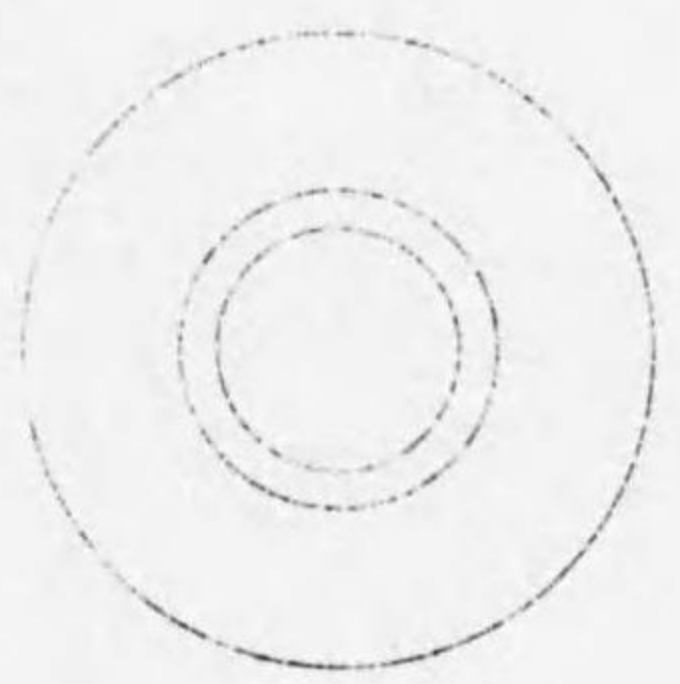


全



- 八十斤及六十斤石榴彈火管
表寸六尺
口徑四寸
重五百斤
徑五寸
口徑二寸
重二百斤
- 二十九號老石榴彈火管
表寸六尺
口徑四寸
重五百斤
- 二十號石榴彈火管
表寸六尺
口徑四寸
重五百斤
- 十五號石榴彈火管
表寸五尺
口徑三寸
重三百斤
- 十三號石榴彈火管
表寸四尺
口徑三寸
重二百斤
- 鏡版石榴彈火管
表寸四尺
口徑三寸
重二百斤
- 手榴石榴彈火管
表寸一尺
口徑二寸
重五十斤

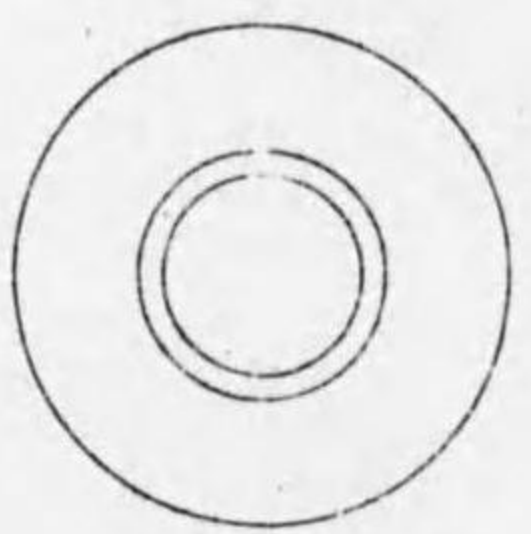
三十斤地氈藥袋



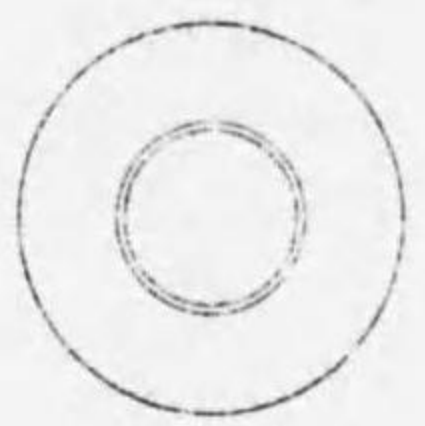
二十四斤地盤藥液樽
徑四寸五分
重四斤五分
高九寸五分



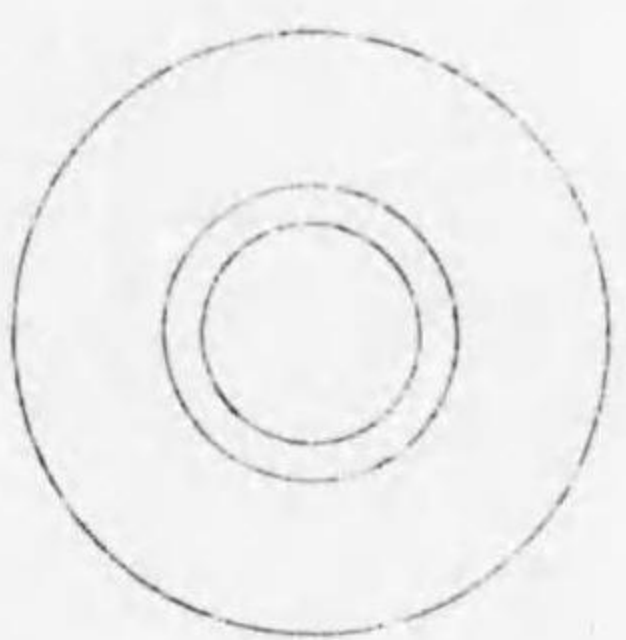
十八斤地盤藥液樽
徑四寸五分
重四斤五分
高九寸五分



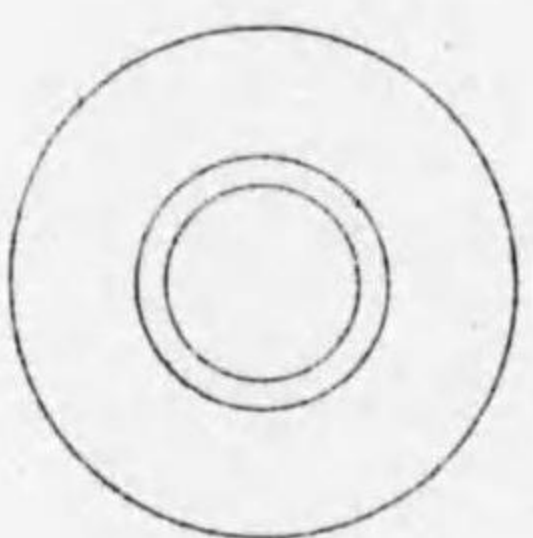
十二斤地盤藥液樽
徑四寸五分
重四斤五分
高九寸五分



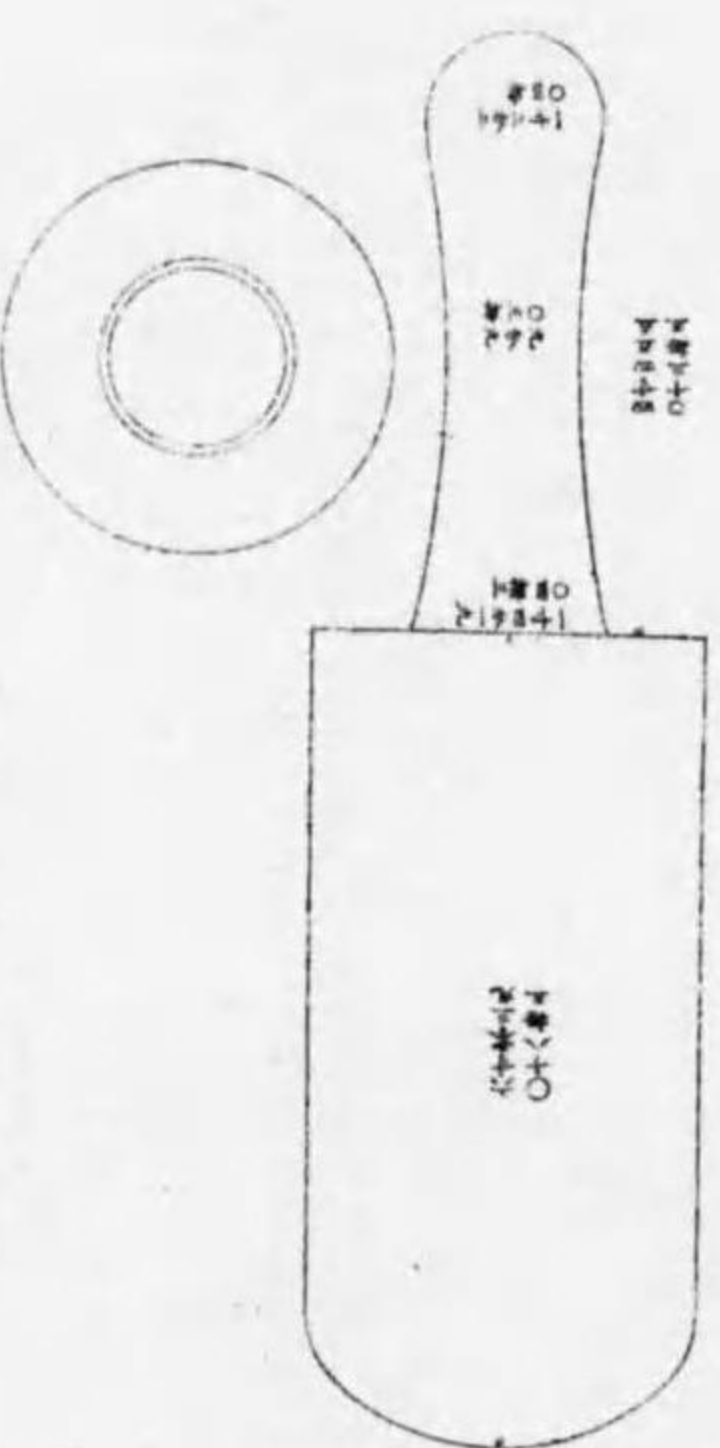
六斤地盤藥液樽
徑四寸五分
重四斤五分
高九寸五分



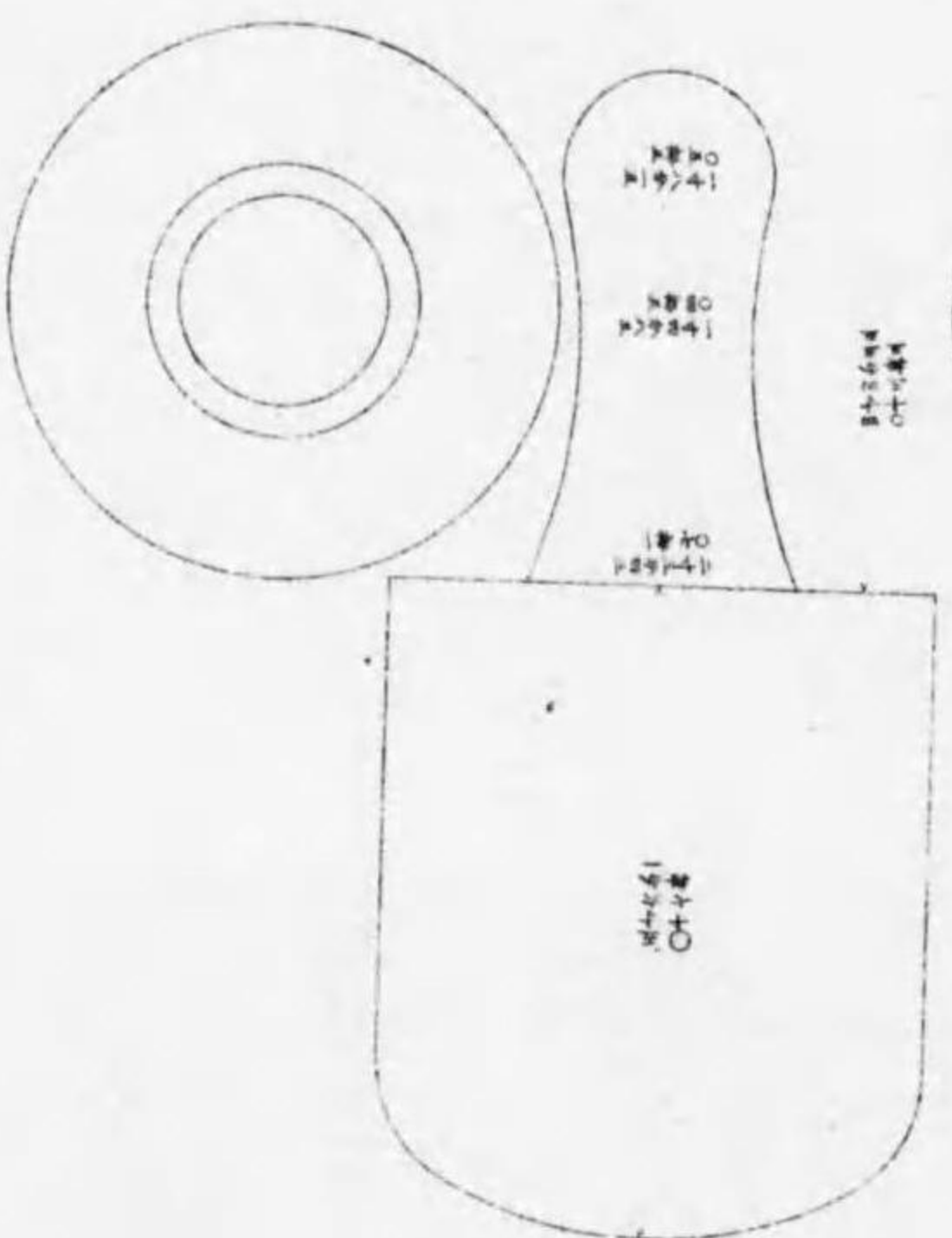
二十斤湯龍環藥量樽
徑四寸四分
重八斤七分六厘
○五斤五分
○五斤七分六厘



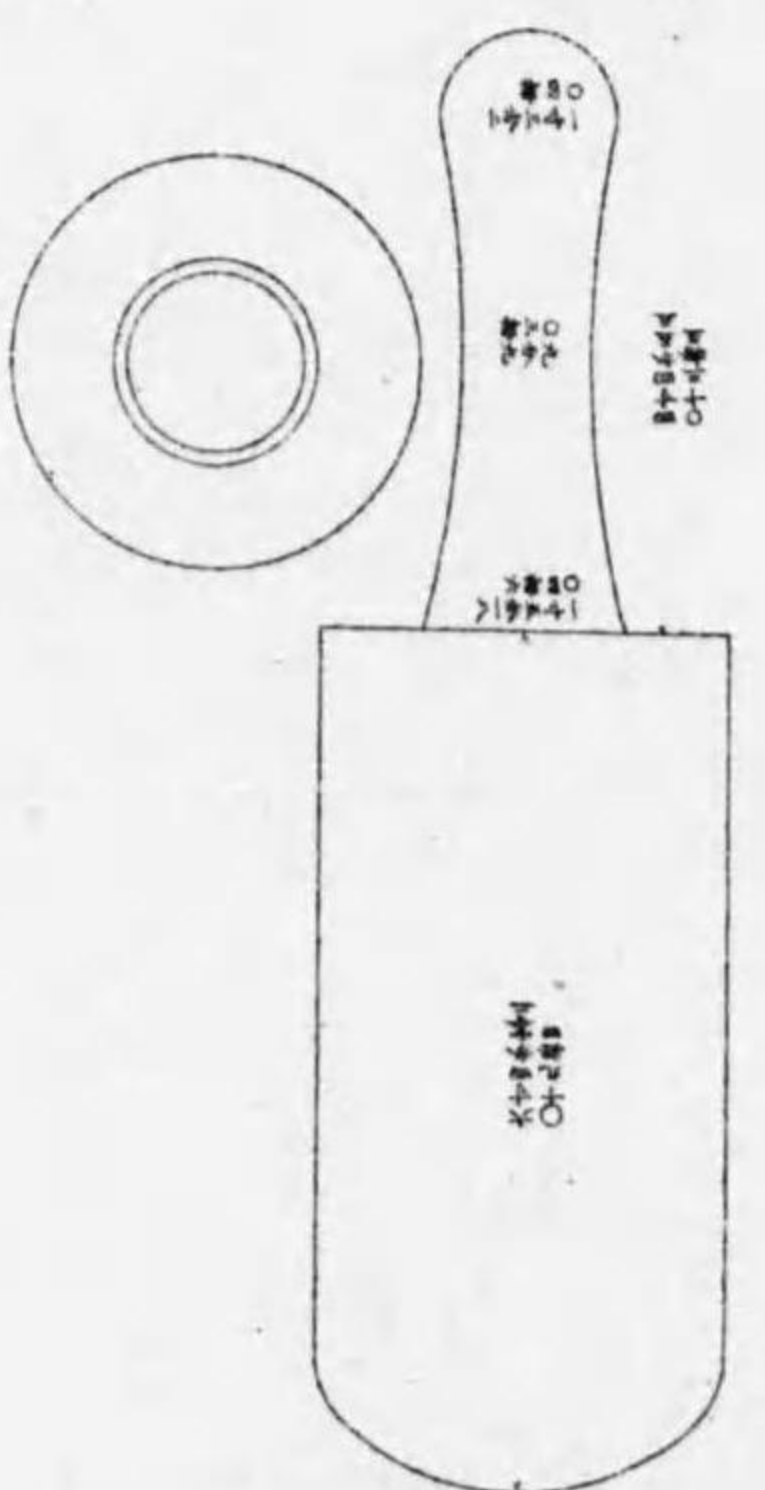
十八斤湯龍環藥量樽
徑四寸四分
重五斤七分六厘
○五斤五分
○五斤七分六厘



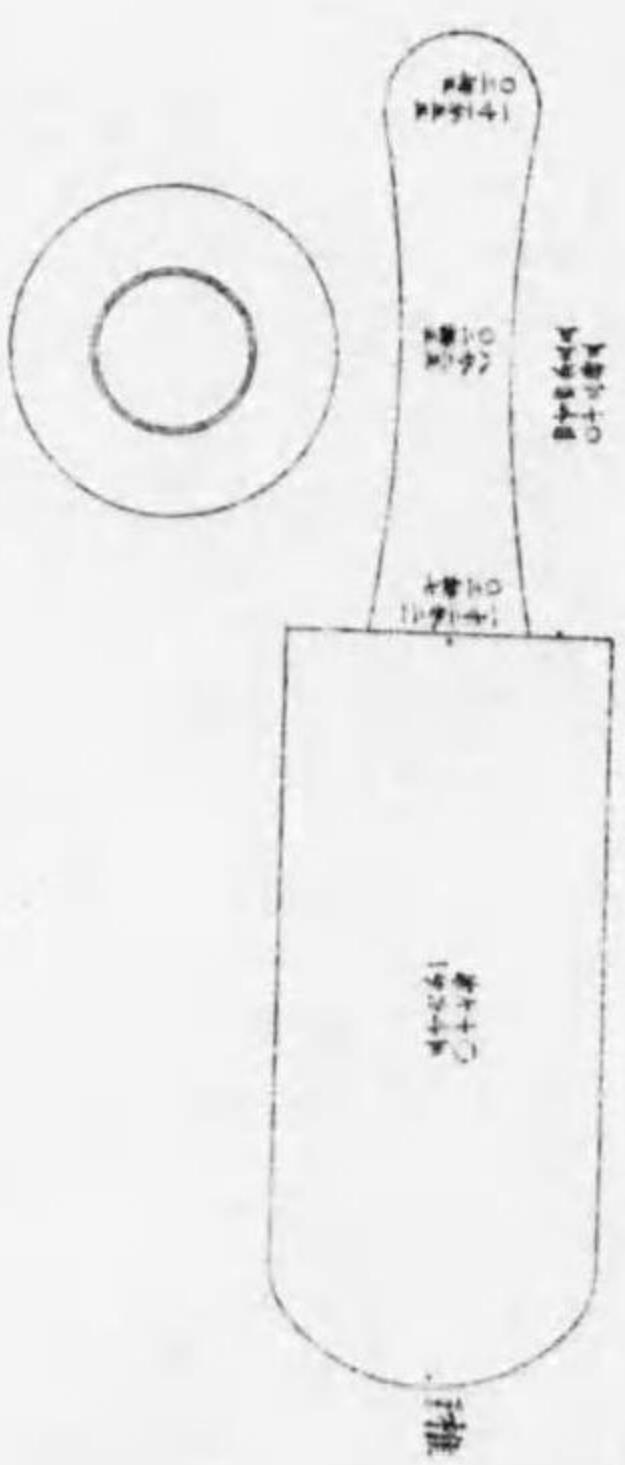
二十斤人環藥量樽
徑六寸四分
重八斤七分六厘
○五斤五分
○五斤七分六厘



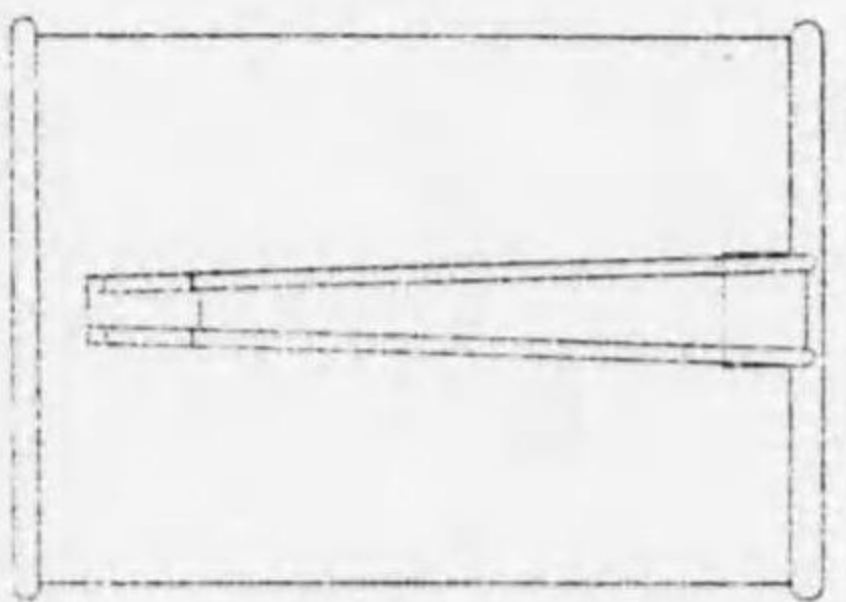
十五斤長人環藥量樽
徑六寸四分
重八斤七分六厘
○五斤五分
○五斤七分六厘



十二斤湯龍環藥量樽
徑四寸四分
重五斤七分六厘
○五斤五分
○五斤七分六厘



十五斤人環藥量樽
徑四寸四分
重五斤七分六厘
○五斤五分
○五斤七分六厘

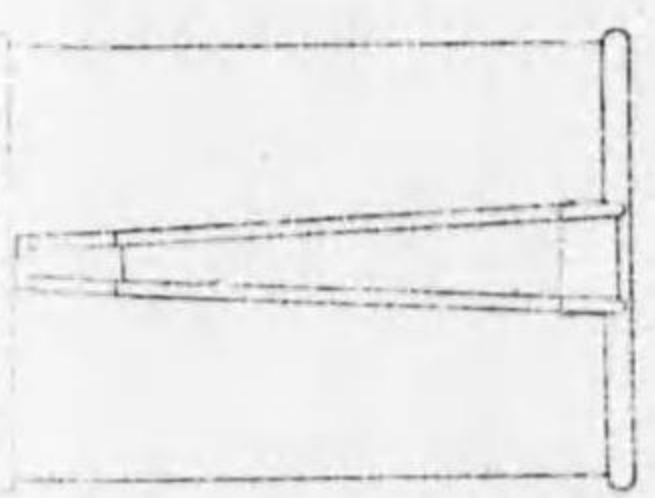
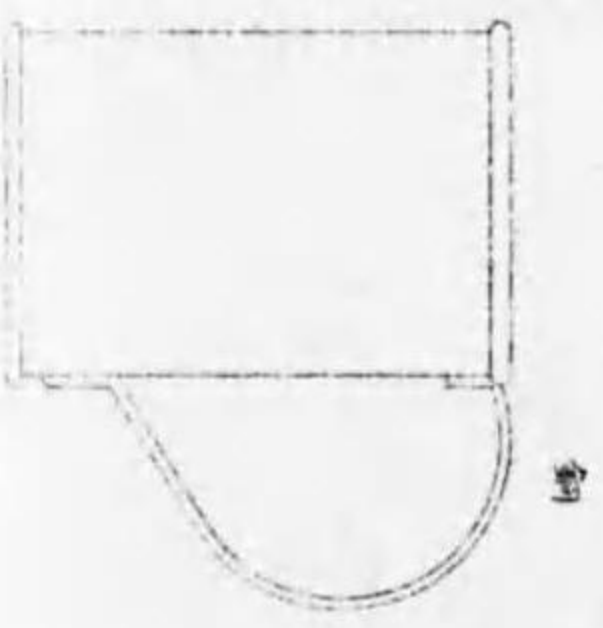


藥斗二空者
內徑寸四分
深寸四分
重八錢

藥斗一空者
內徑寸四分
深寸四分
重八錢

藥斗四空者
內徑寸四分
深寸四分
重八錢

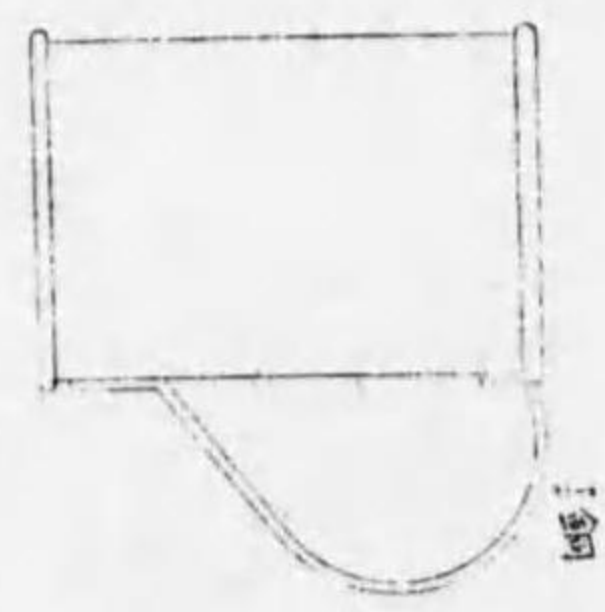
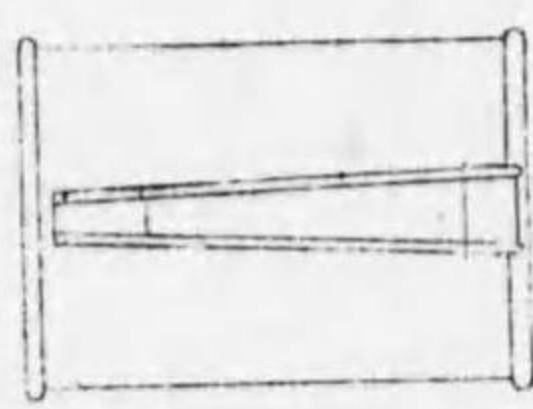
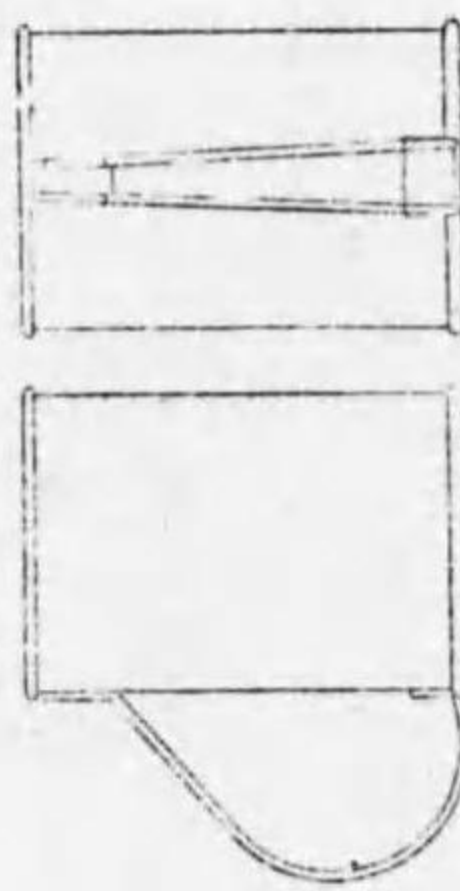
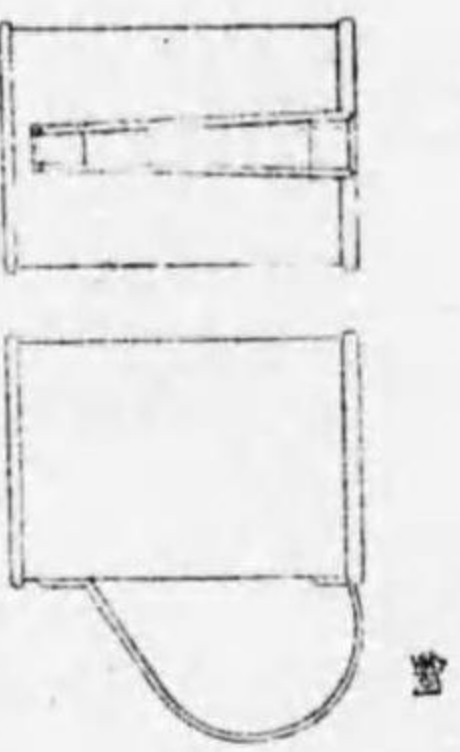
藥斗三空者
內徑寸四分
深寸四分
重八錢



藥斗七空者
內徑寸四分
深寸四分
重八錢

藥斗六空者
內徑寸四分
深寸四分
重八錢

藥斗五空者
內徑寸四分
深寸四分
重八錢

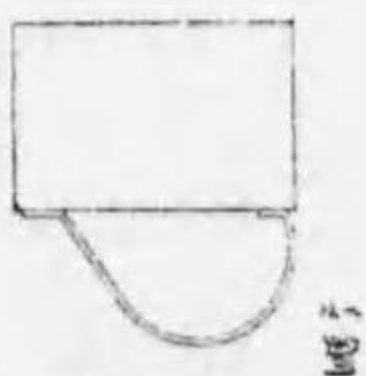
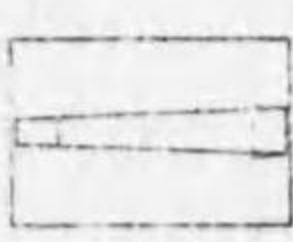
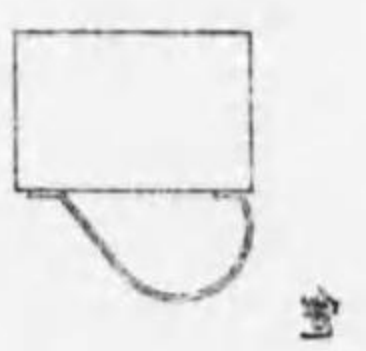
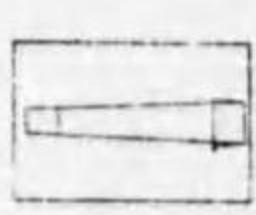
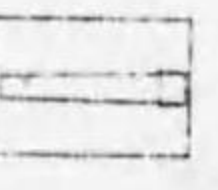


藥斗十一空者
內徑寸四分
深寸四分
重八錢

藥斗十空者
內徑寸四分
深寸四分
重八錢

藥斗九空者
內徑寸四分
深寸四分
重八錢

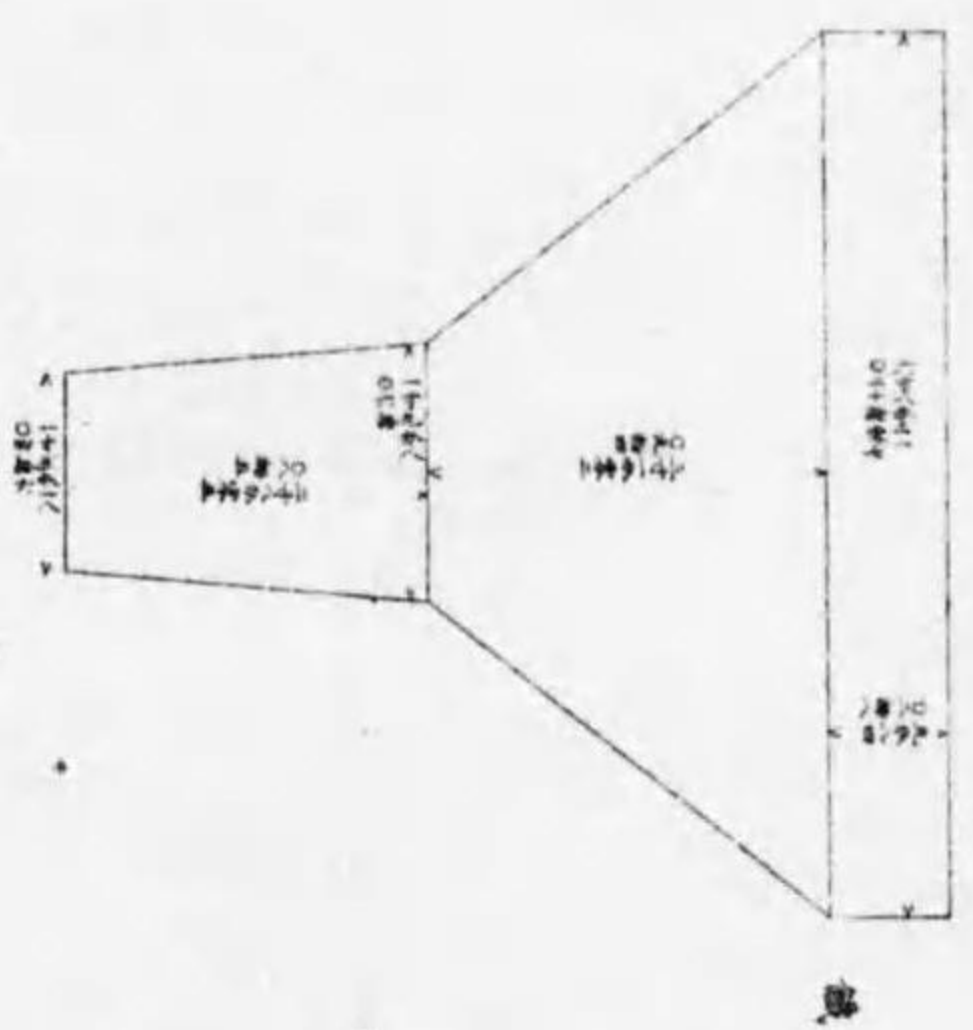
藥斗八空者
內徑寸四分
深寸四分
重八錢



藥斗圖說

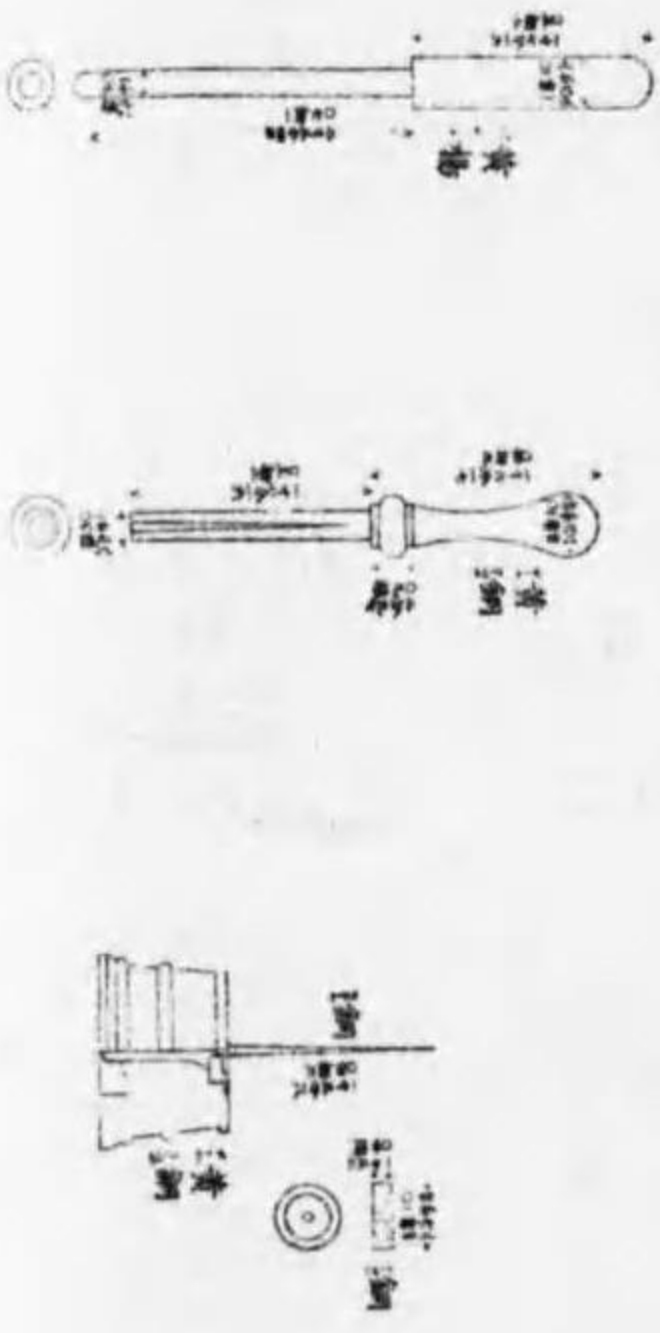
川四

砲身圖

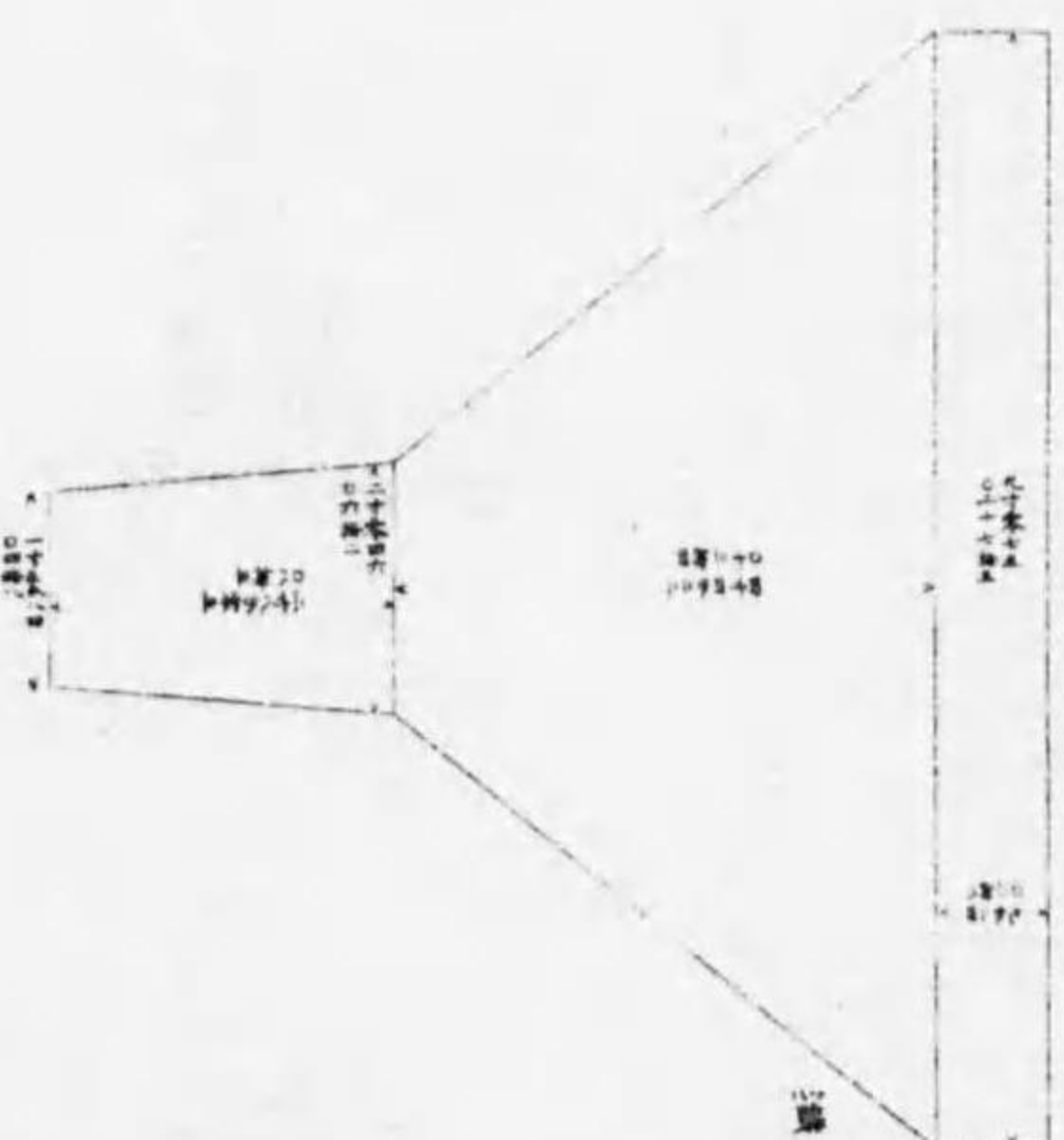


全
長
○
三
十
五
公
分

水
步
槍
重
○
三
十
五
公
分
上
徑
○
一
十
五
公
分
下
徑
○
四
公
分
高
○
二
公
分
重
○
五
百
公
斤
○
五
公
斤
火
步
槍
重
○
五
百
公
斤
○
五
公
斤

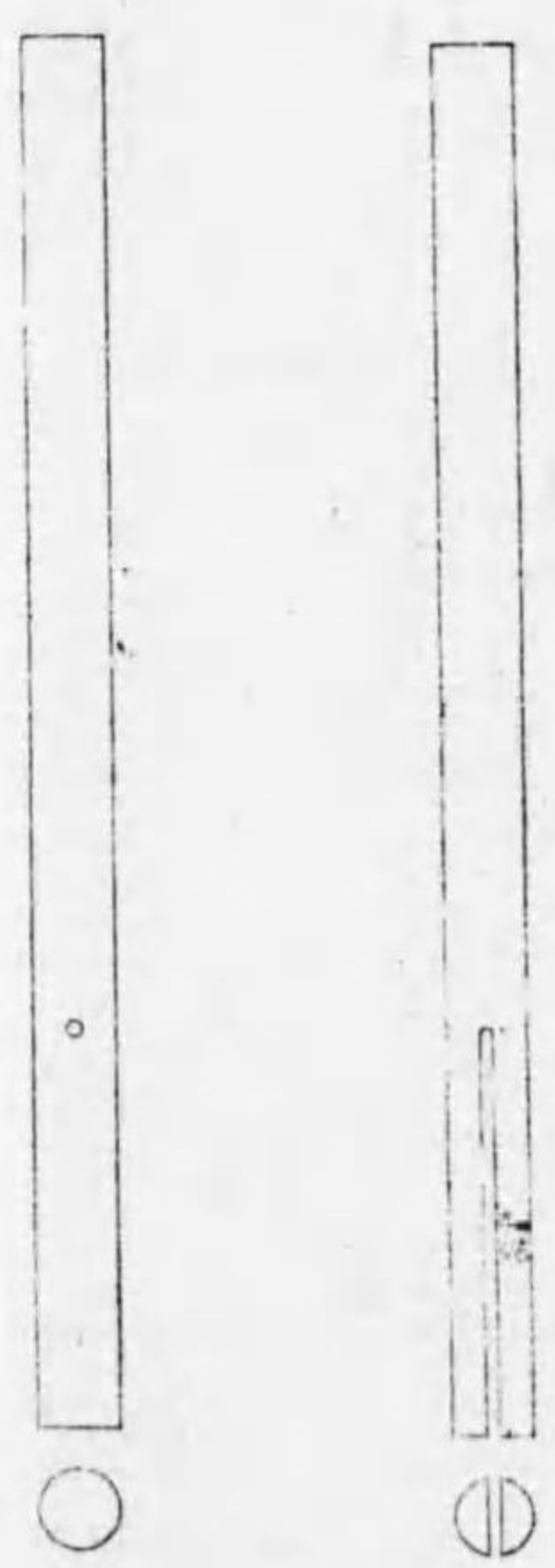


川水

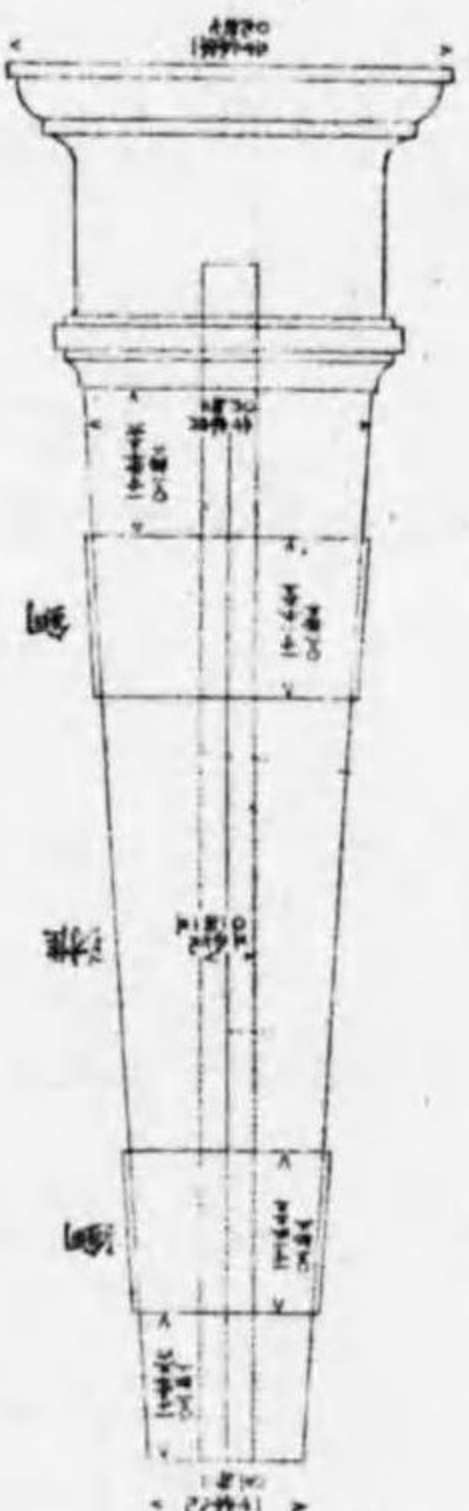


炮
身
重
○
五
百
公
斤
○
五
公
斤

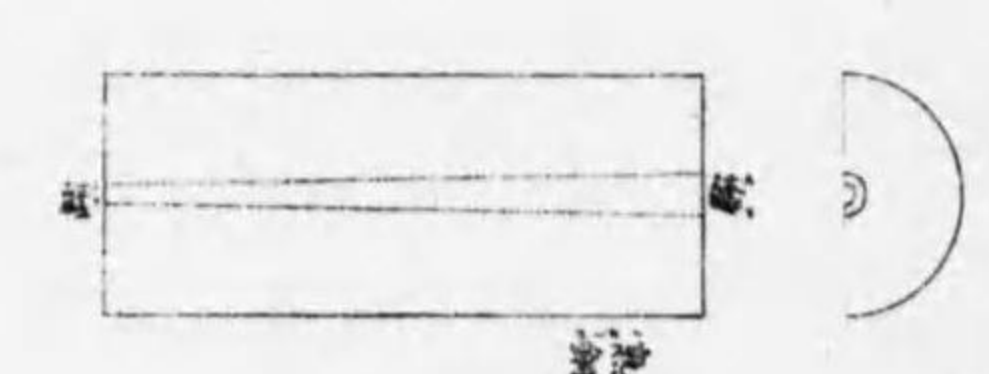
結
木
重
○
五
百
公
斤
○
五
公
斤



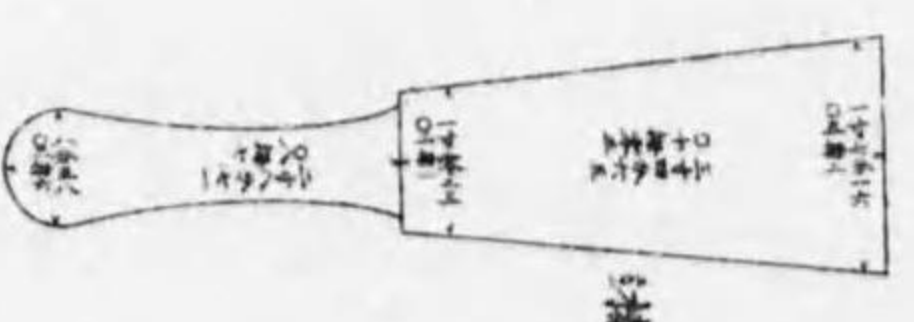
砲身圖



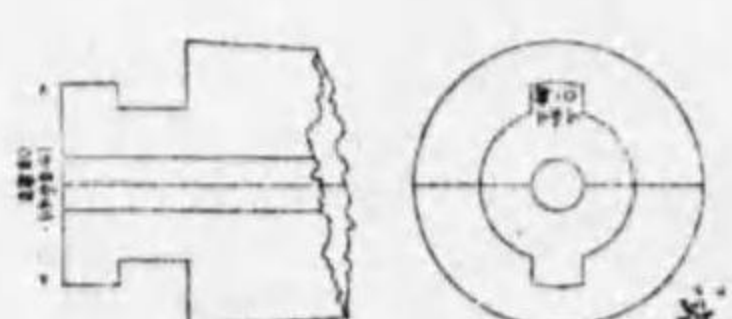
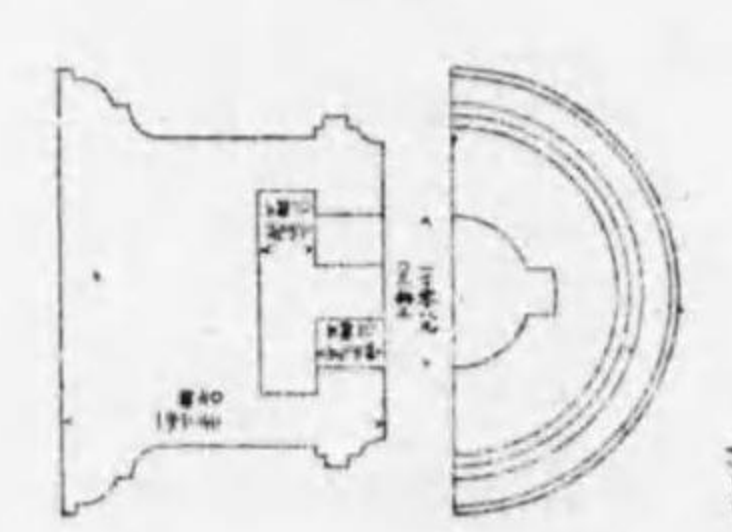
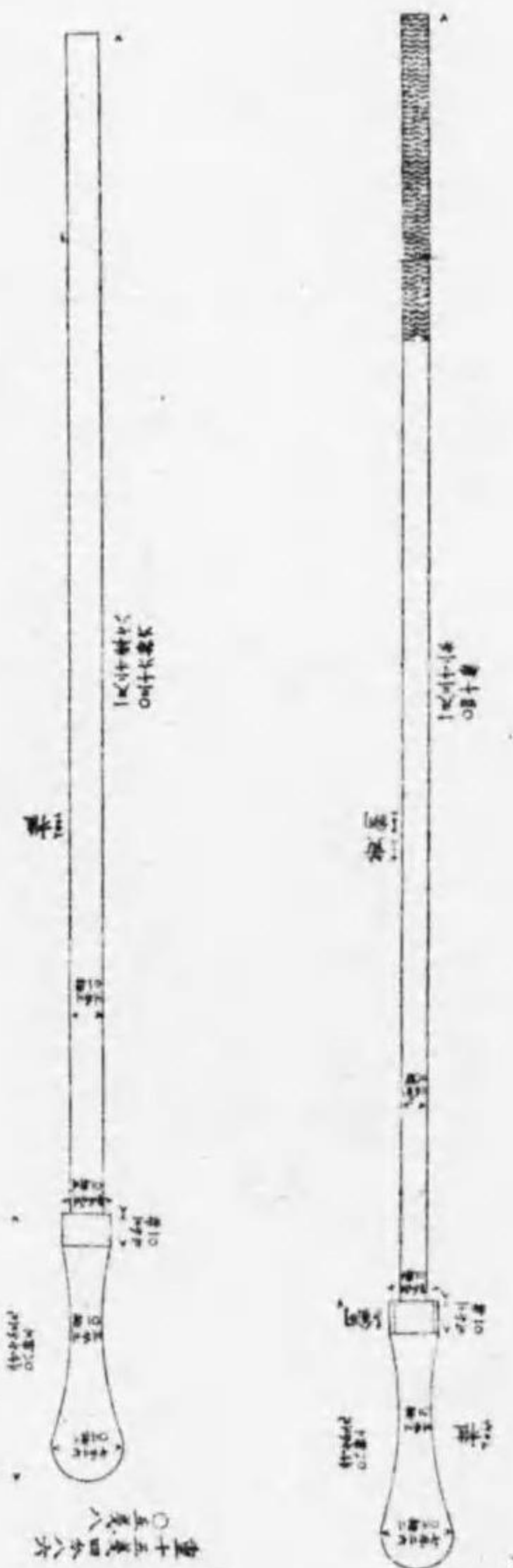
火
步
槍
重
○
三
十
五
公
分



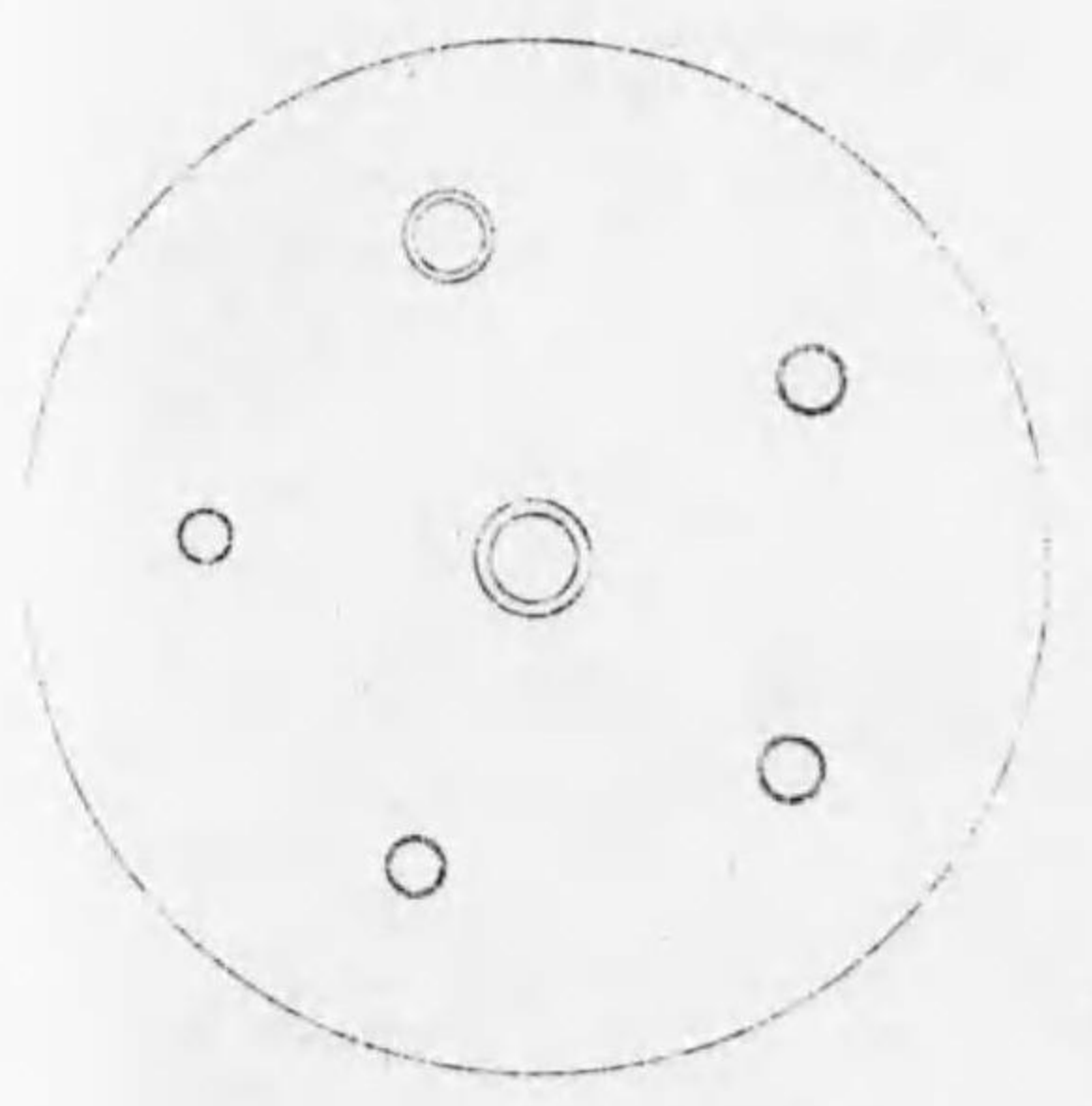
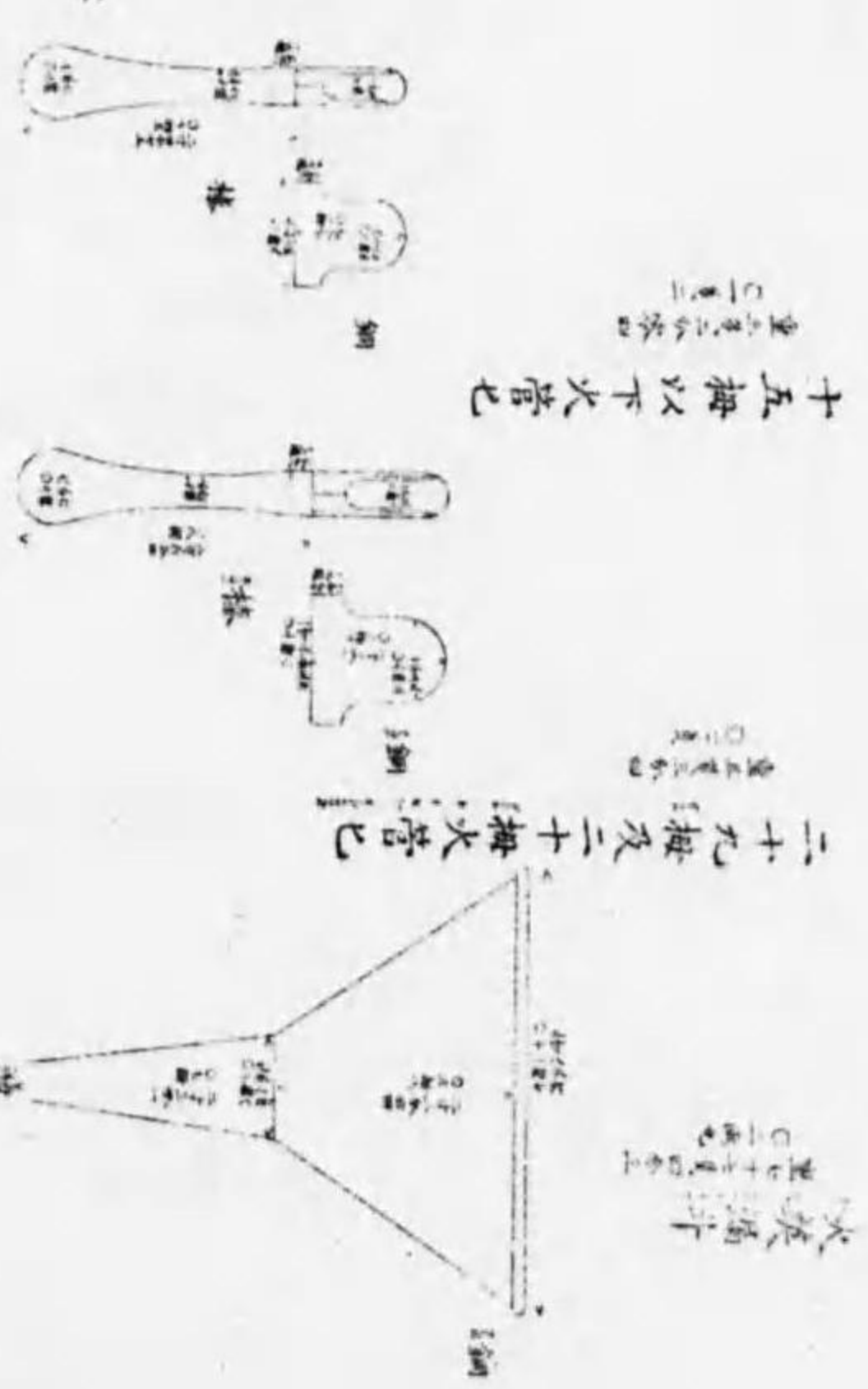
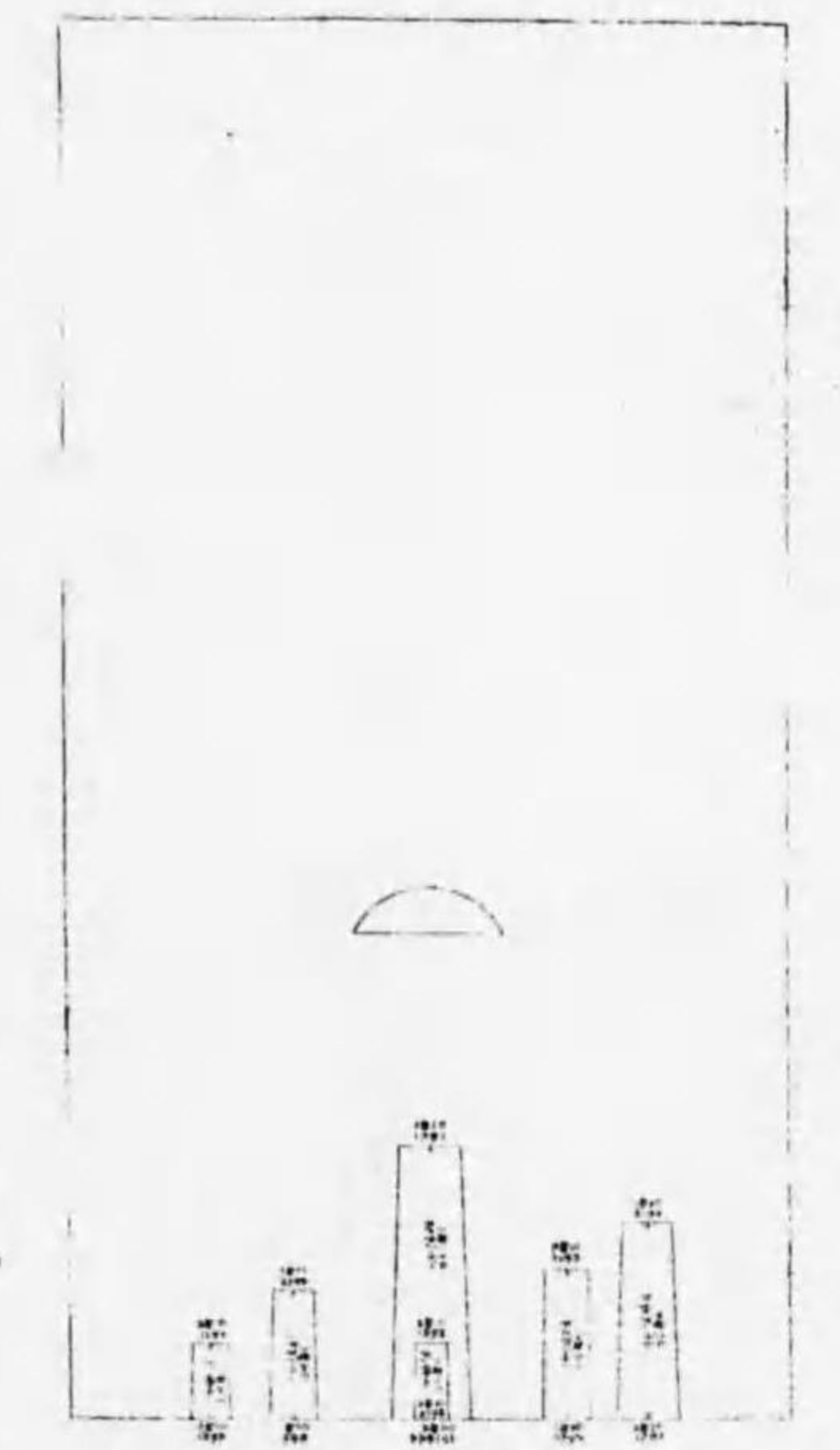
火
步
槍
重
○
三
十
五
公
分
上
徑
○
一
十
五
公
分
下
徑
○
四
公
分
高
○
二
公
分
重
○
五
百
公
斤
○
五
公
斤



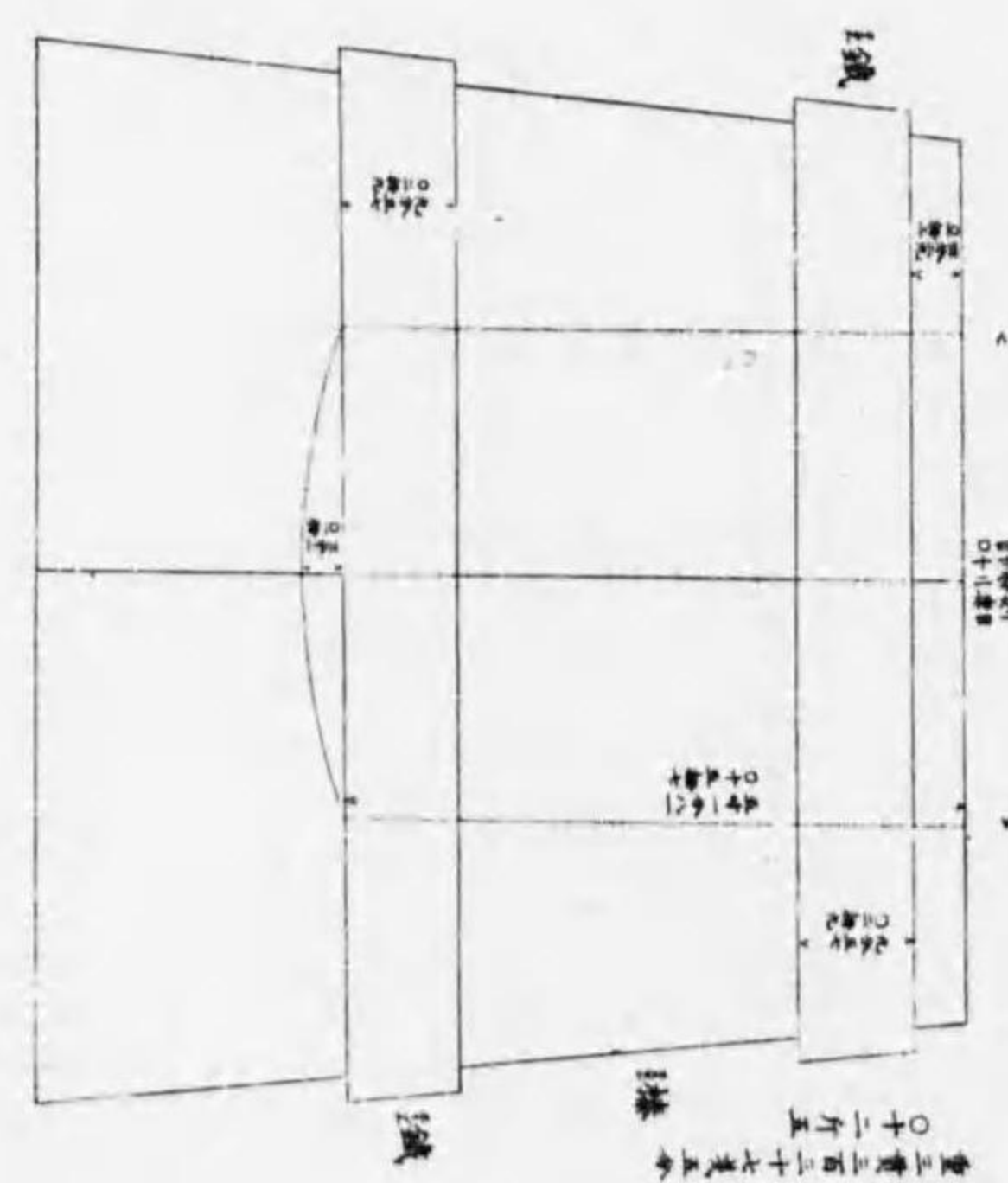
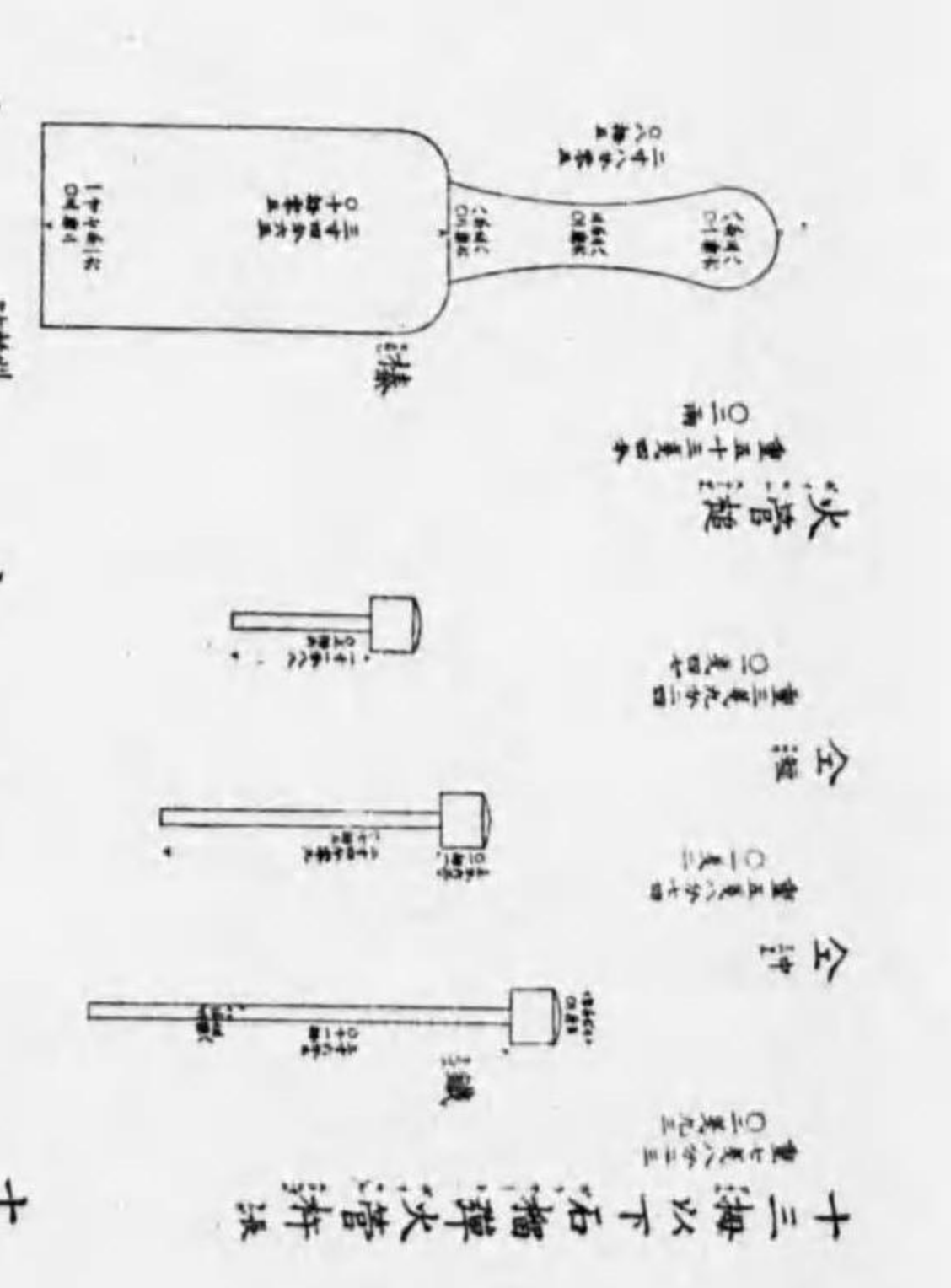
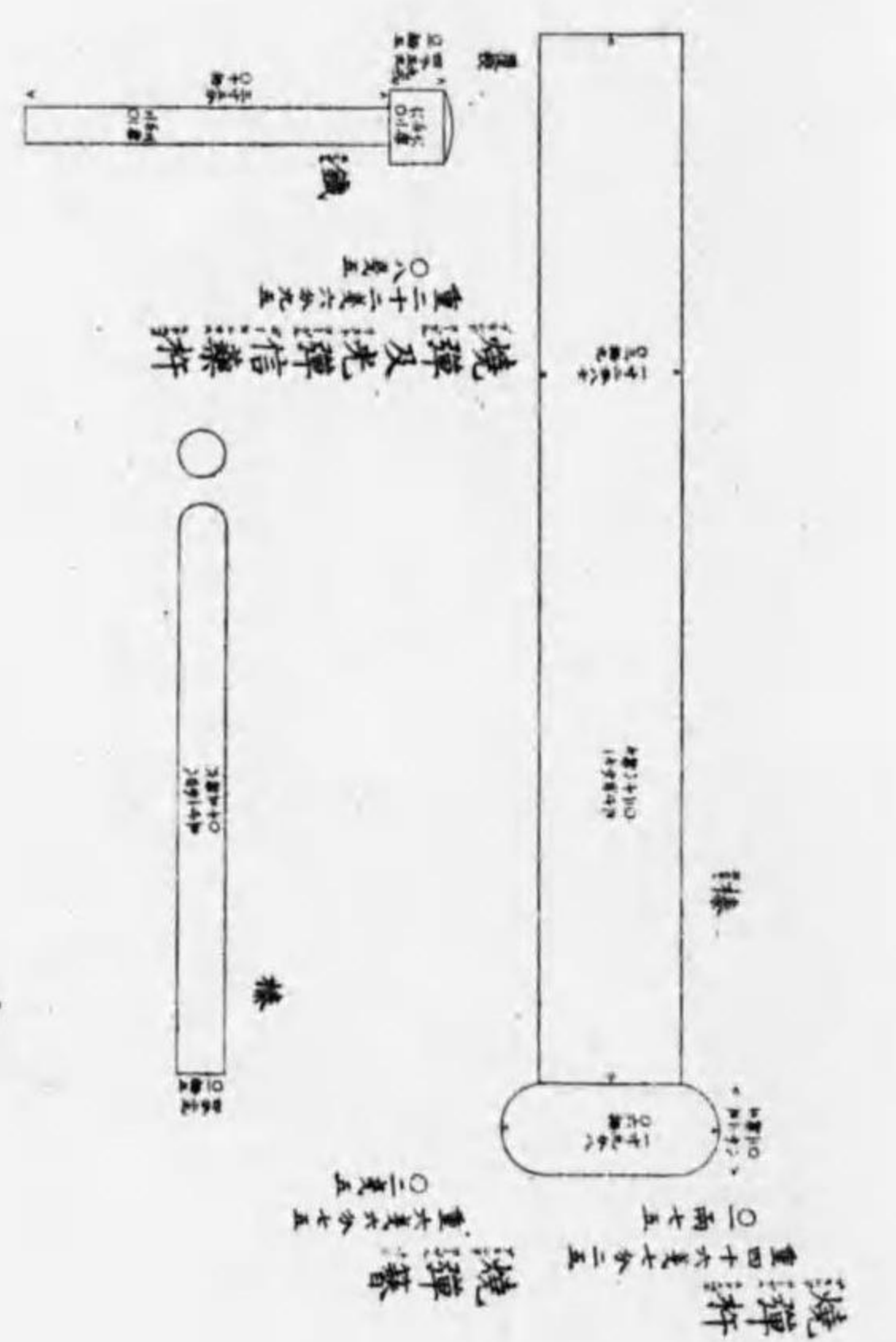
火
步
槍
重
○
三
十
五
公
分



川中



全上面



全上半面

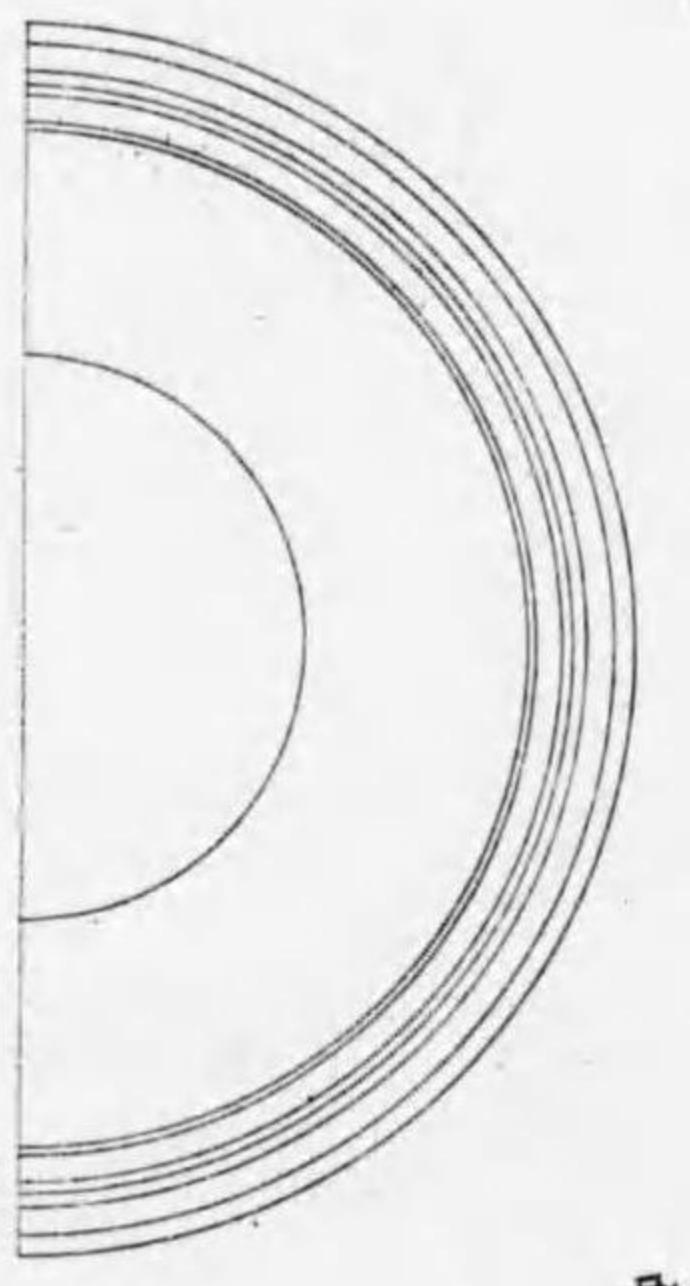


圖 0

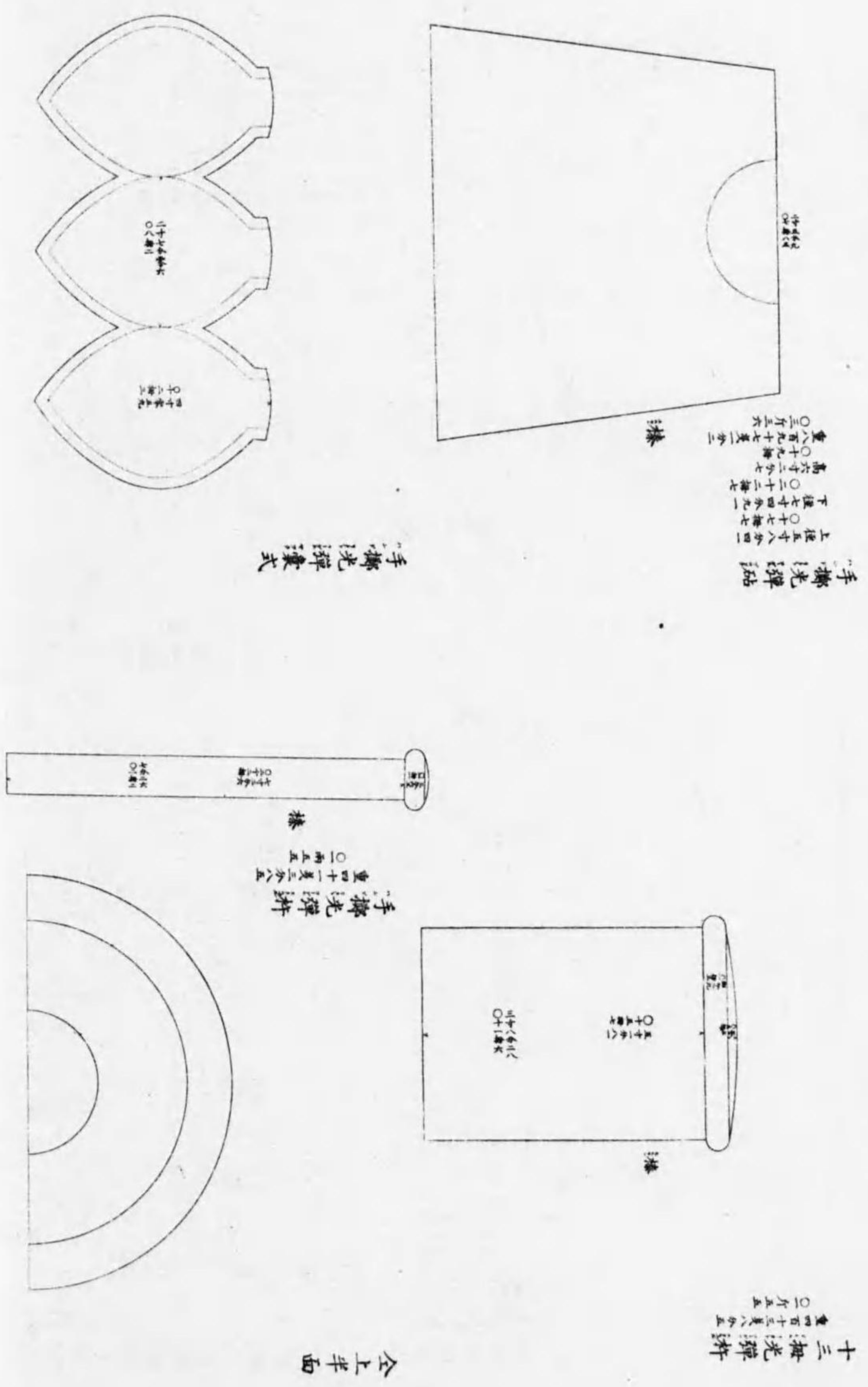


圖 0

圖 1

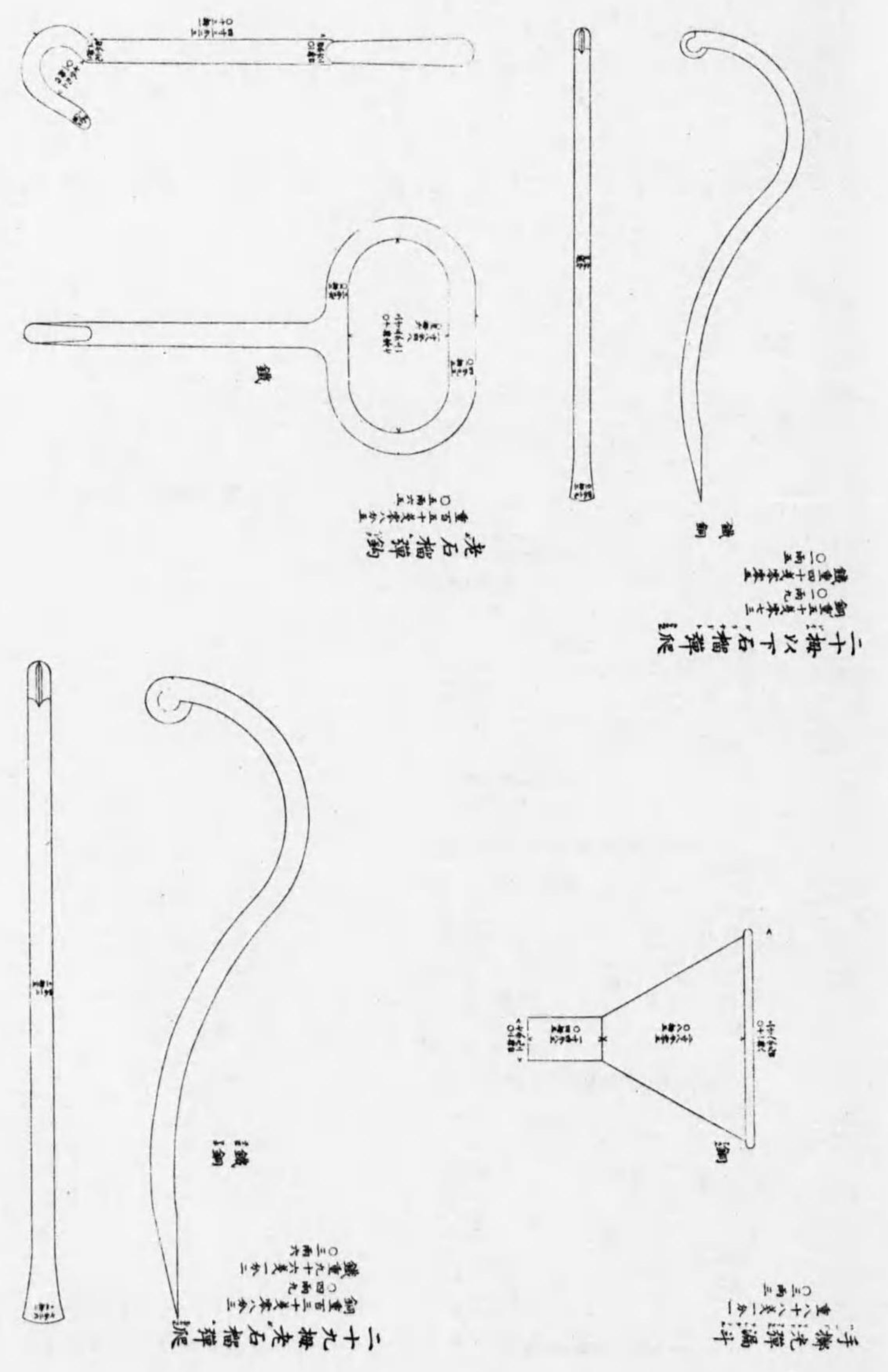
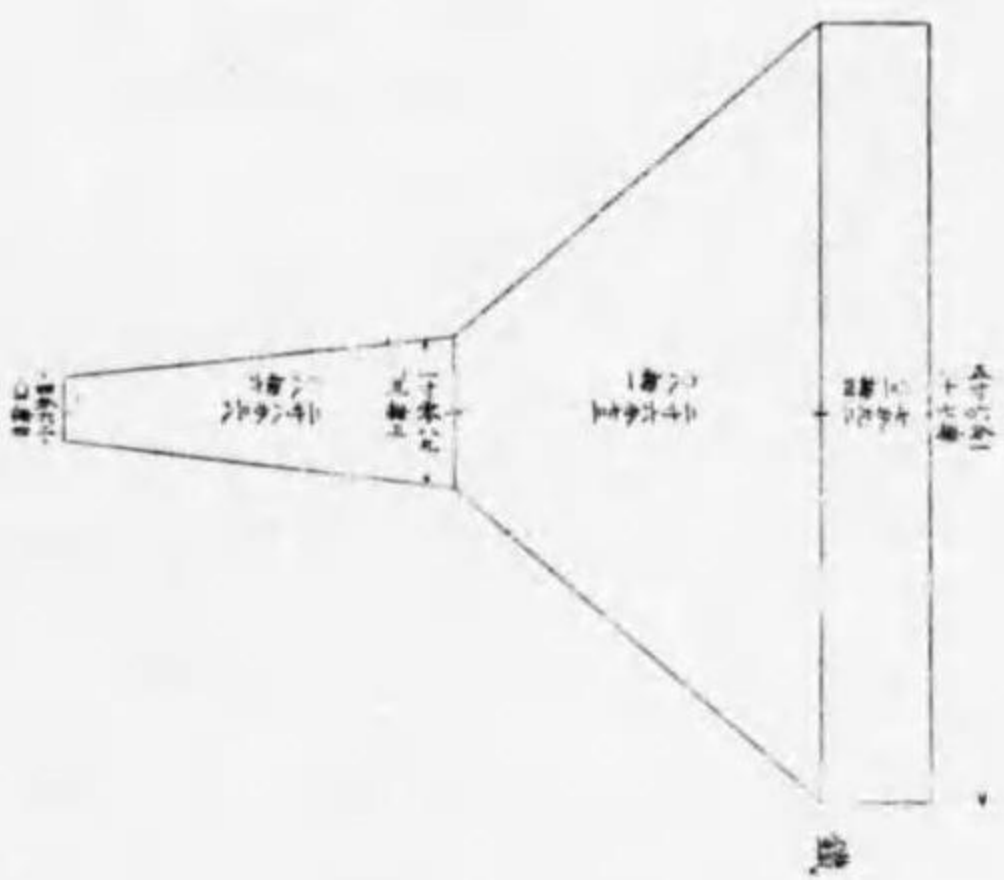
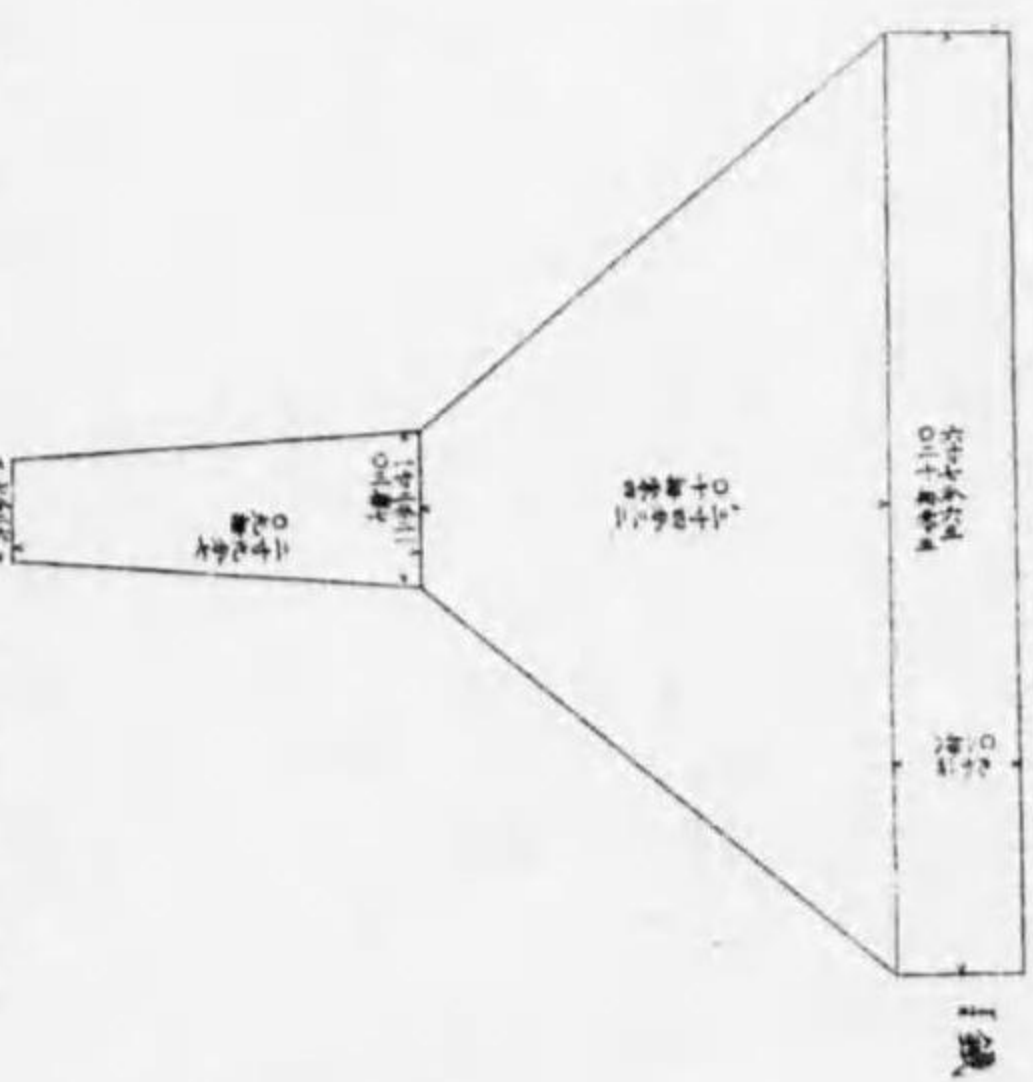


圖 1

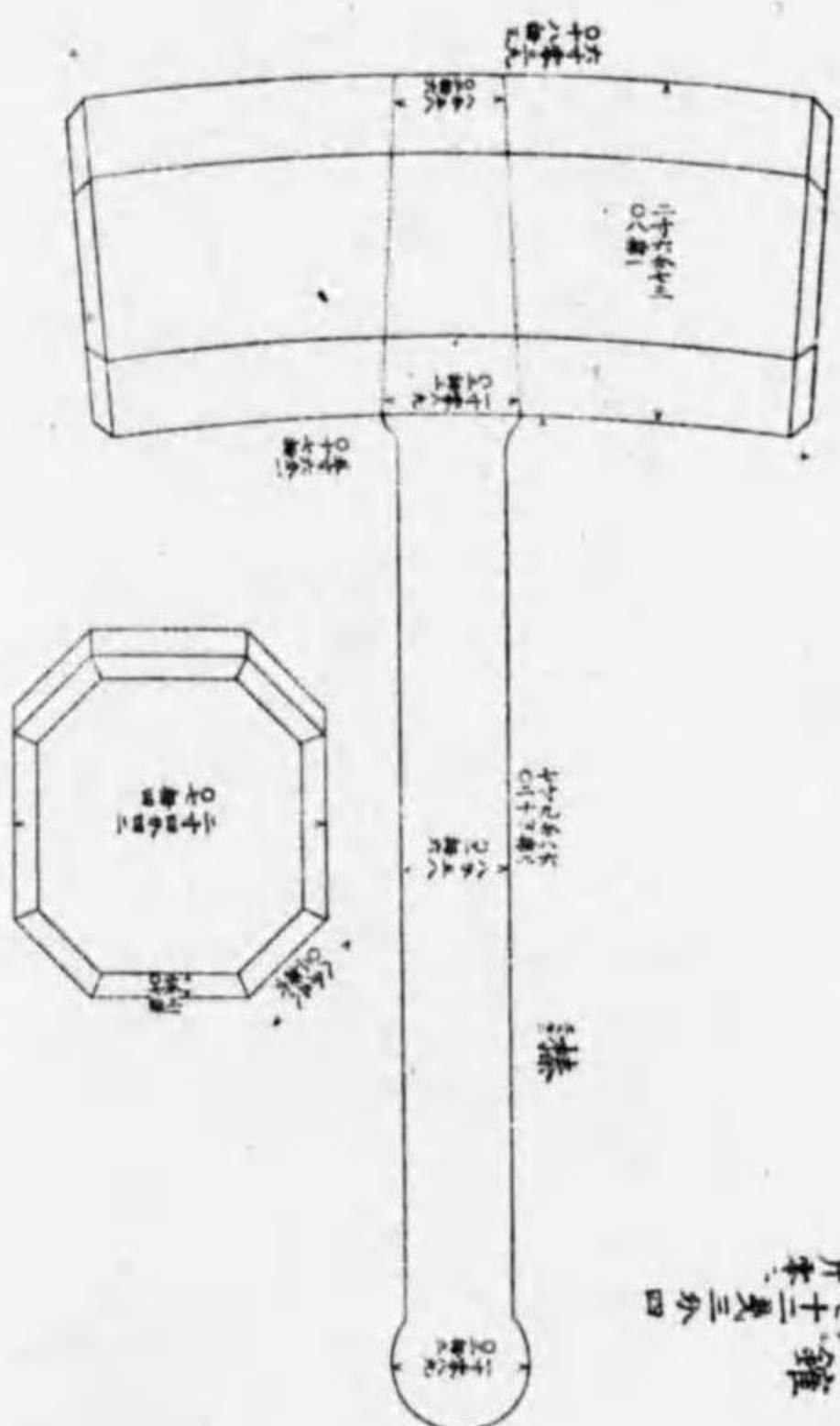
二十吋以下石榴彈漏斗



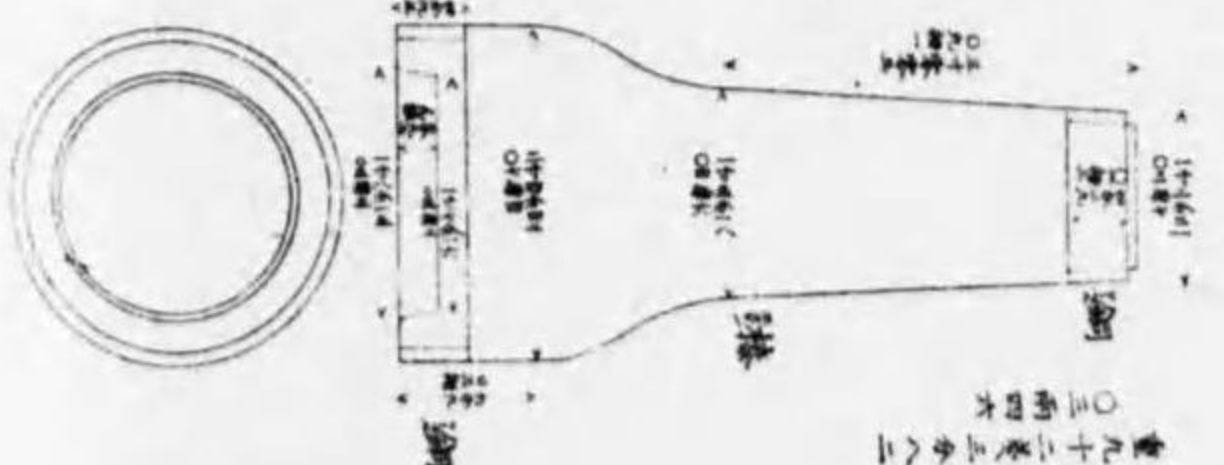
二十九吋及三十吋石榴彈漏斗



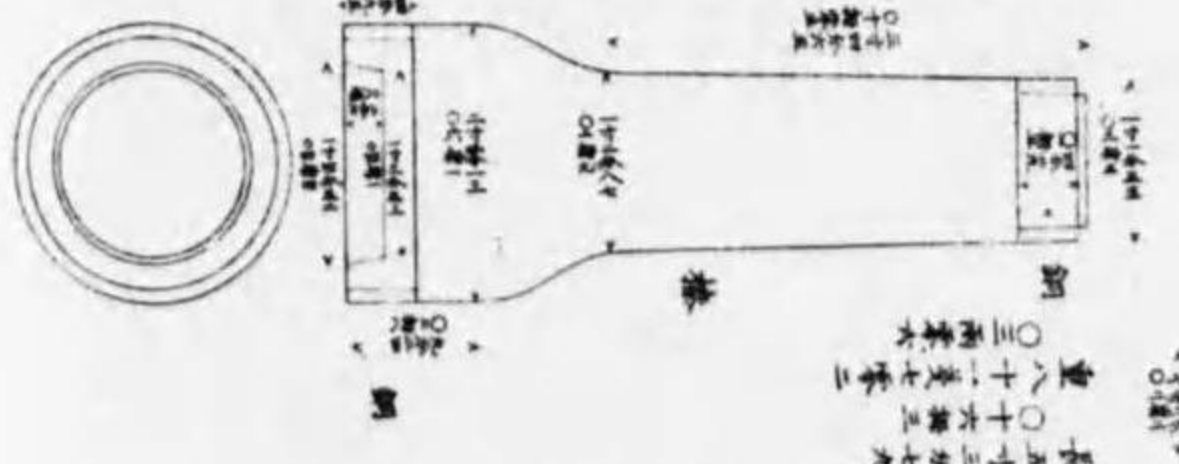
吹管木箱



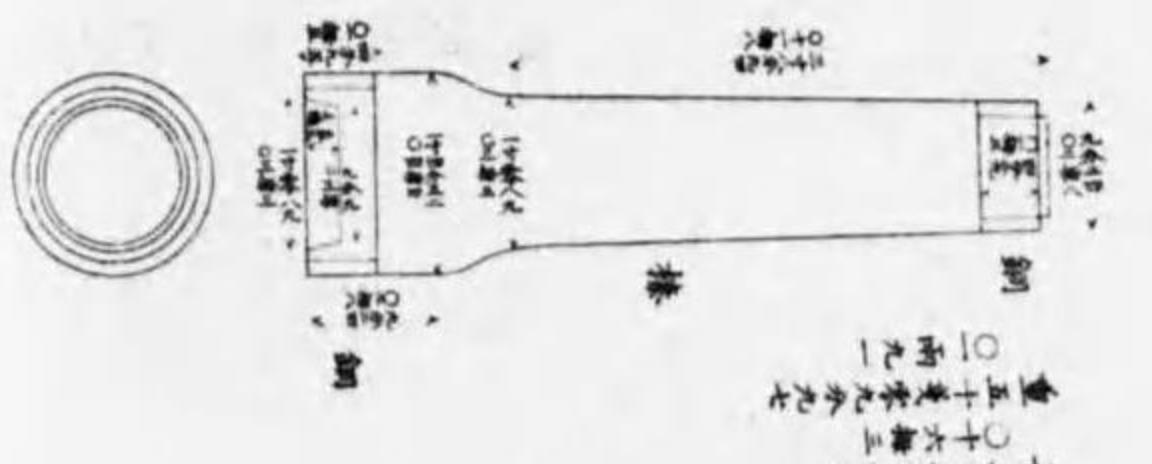
二十九吋及三十吋石榴彈吹管



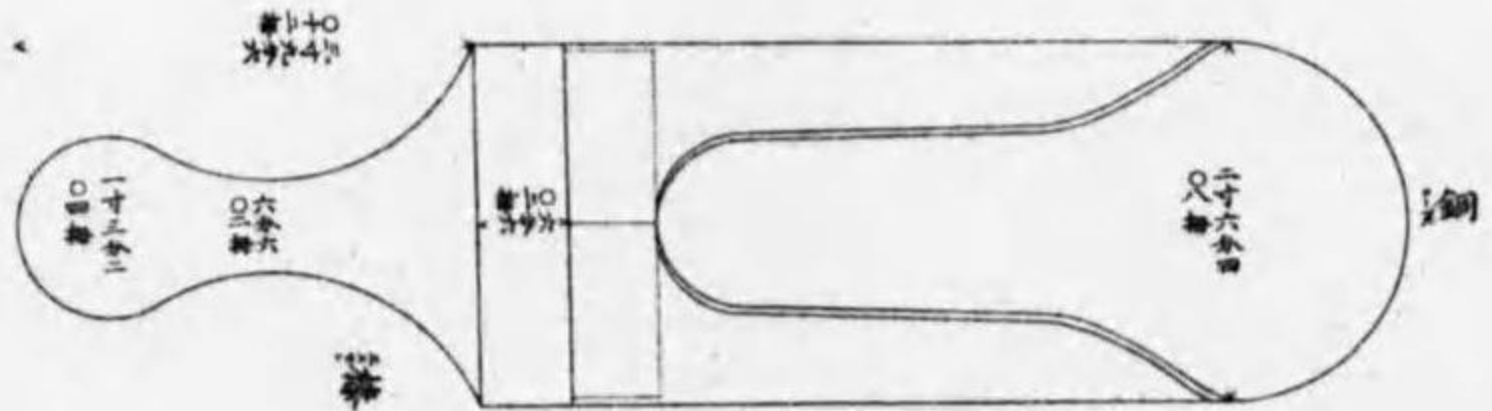
二十吋及十五吋石榴彈吹管



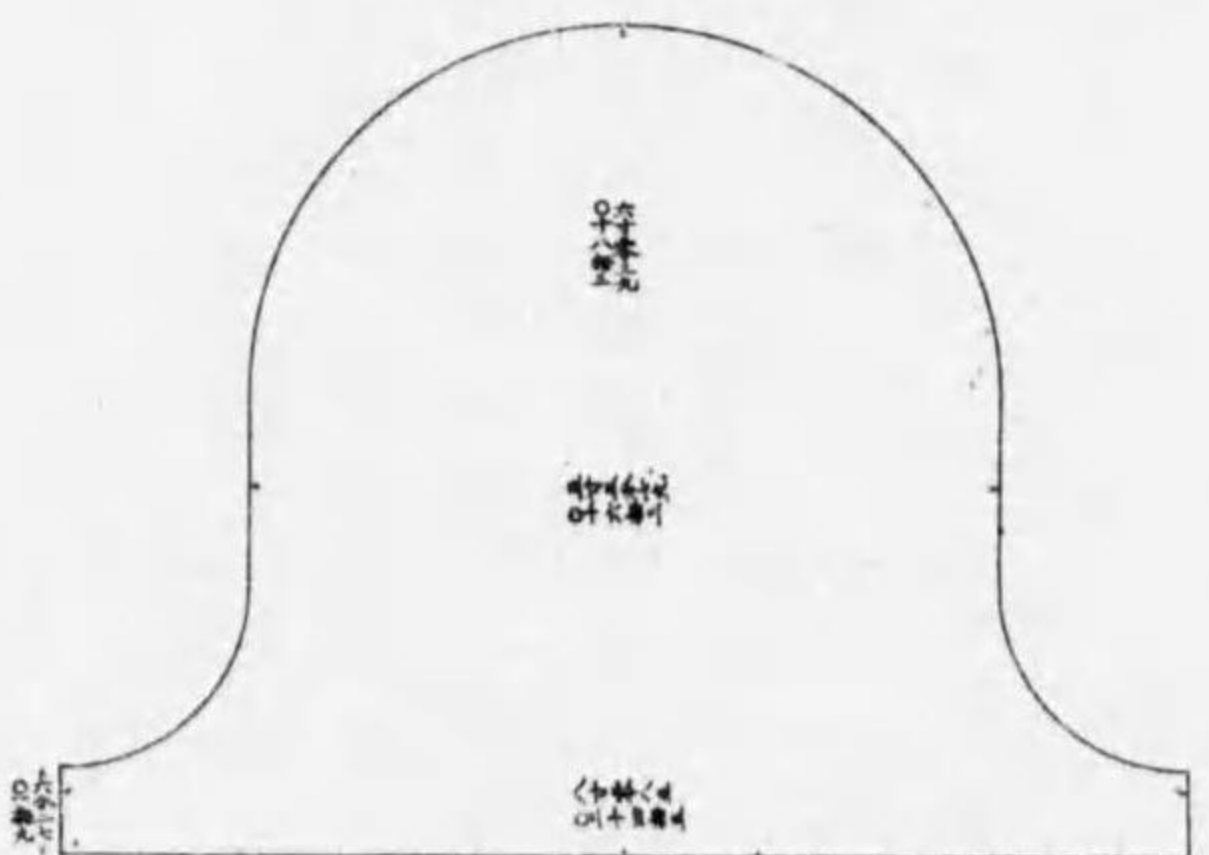
十三吋以下石榴彈吹管



藥匙



全式



迅發擊銃圖說

先生の工夫を加へたる元込銃の圖説なり。安政五年十月成る。乃ちこれを大老井伊掃部頭に獻せしが翌年六月蟹居人の著述獻上不相成とて卻下せられたり。本圖説原稿は松代町長谷川五作氏祕藏の版下本に據れり。

迅發擊銃圖說敘

予頃年觀囑頓製火石銃。納子銃於筒後。如佛狼機。第用撥機。昂起子銃。以便換裝。是爲異耳。閒數歲。彌利堅舶至浦賀。亦齎此銃。或有歎其奇者。予曰。銃之有此製尙矣。明人神器譜云。用長筒。納子銃於筒後。對壘之際。敵一舉放。我已三四發彈。是已。惟彼物此精。固爲不同。然以予見之。此亦未盡精也。其擡起子銃而裝換。則捷矣。而火池之開闔。門藥之傾注。龍頭之張起。其遲滯不快者。猶多。何足以稱奇哉。登時予已有欲損益此銃。換火石以雷汞若鹽酸鹽。造爲一器。以快其不快之意。而公事鞅掌。未及鳩工。甲寅歲。坐事禁錮。于今五年。適覽同藩銃工片井直徹所造送門藥具。快甚。嚮予所欲損益而快其不快者。得此具。尤妙。乃更加斟酌。竊口授親戚之及門者。以製一器。而令試驗焉。或於壘後。或於馬上。果皆無不如意。山區林聚。翳薈之下。湟塹窟穴。窄隘之地。竝可使用。而疊放之便。殆乎可亞射之捷者矣。於是私心竊喜。自謂城艦械器。務與彼侔。

司馬兩支之術也。鍊士習將。利器於彼。孫武計算之說也。兩支既立。計算有優。則勝負可知矣。方今外蕃屬至。天下之事。甚可憂念。予久守罪一室。不勝慨忼。政圖報效。無路可由。苟得宣傳此式。以振揚朝家武威之萬一。可以少抒素懷。爾。然是亦有命焉。非區區之所敢望也。

著雍敦牂冬十月

松城佐久閒啓書

迅發擊銃圖說目錄

銃形第一

器用第二

火藥第三

裝法第四

銃形器用。一一按真爲圖。不差毫釐。皆亦可按圖而製器。故圖上不煩註記分寸。覽者其察焉。

迅發擊銃圖說

松城佐久開啓 又名大星著

士卒臨陳。亡論進退馳逐。雖一手一足之動。非有號令。不得自恣。是器械人。西洋重兵之法固然。故隊伍宜密。銃器宜一。乃若其輕兵。則貴人人善鬪。不必要號令。故隊伍疏開。而銃器亦不必齊。或宜遠到。或宜密中。或宜迅速疊放。蓋遠到者。敵銃未及。逞力而我既能斃敵。密中者。敵丸猶參差。而我既無虛發。迅速疊放者。敵一點燃。而我已三四飛彈。皆輕兵之利也。而其遠到與密中。西洋諸國。有旋溝銃。獨至于迅速疊放之便。則似未有能及此銃者也。夫器均則尙技。技均則尙器。器其可不究心乎。予故纖悉爲之圖說。以諗同仇。如左。

銃形第一

銃口徑五分三釐。銃身連側飯。長三尺五寸七分。膛三尺二寸二分七釐。而其
二寸五分七釐。在子銃內。母銃以熟鐵造之。側飯及子銃。必用熟鋼。先打成母
銃粗鑽完。取起側飯。各用二螺釘。釘在銃側。更以鍮鑽鐸著。乃插入尾砧。左右

揜以螺栓。納子銃後。再用長鑽相通掃洗。仔細查檢歪偏。務令勻圓正直。尾砧後打圓眼。以便下螺釘。揜著銃牀。下際作鈕。以扣住攀機。子母接際。要極緊密抱合。若少鬆寬。則煙洩而彈出無力。銃亦易壞。不可久用。戒之。戒之。

裝時。撥前攀機。則子銃便昂起。可以裝入彈藥。裝訖。用掌根重壓子銃。機則闕矣。

子銃常宜檢點展拭。頻頻澤以香油。若久置不顧。則機塞不舉。致誤大事。不可不察。

火門徑約一分。自火池座鑽透于銃底中心。與銃心爲角。四十五度。鑽透後。以螺栓堵塞剩孔。更取巨鑽。鑽開火池座。別用精鋼一條。鑿成火池。上寬下窄。底畫一線。外刻螺旋七層。擰入座內。磋去頭尾。要令與池座一體。

火池瓦尾有圓槽。取腸真槽內。以擰于側飯上方軸。乃緊振腸端。使瓦壓住火

池。隨開隨閉。以防門藥迸炸射目。瓦上打一眼。安置活臍。活臍比火池深。差長。故門藥在池內。龍頭擊臍首。則臍下焰起而銃響。

火池瓦腸。以黃銅爲之。縮入槽內。擰在軸上。以蓋覆之。更以牝螺緊著。

照門照星。照荷蘭銃新式爲之。對準之法。宜亦倣之。如其彈到中度之詳。則當他日親驗。別著一表耳。

龍頭諸機。俱在側飯內。覆以機廂。不須牀上別挖機槽。且諸機簡約。比常銃大率減入之三。故機關得病亦少。

機廂龍頭孔。不宜寬大。恰好納縮斜齒爲度。若有罅隙。恐塵沙浸入。漸致機轉不滑。

龍頭腦不厭卑。角不厭高。非身親裝放。難識此妙。

龍頭腸。鋼鐵鍊成者佳。

龍頭軸。貫穿龍頭之縮斜齒及腸。連機廂。以螺釘釘著側飯。

腸格。若無此物。腸力無所抗。龍頭雖舉。不能反擊。

攀機。用揜釘揜著尾砧鈕閉。

攀機鎖。子銃敞口昂起。則龍頭低而不舉。蓋緣鎖之彈力。全然止息。此所以無誤發之害。

銃牀。用胡桃木。固宜。信州深山有木。名曰槍梓。質輕理密。柔韌難折。斷爲銃牀。似勝于胡桃。予往時所製銃牀。多用此材。

箍環諸鉸鍊。與常銃無差異。故不別作圖式。惟護機不同。因爲貌之。

子銃鎖。是銃快利之肯綮。全在此鎖。太剛則易折。太柔則易委。不剛不柔。訣在回火。主造者宜盡精思。

搨杖。桿用木。惟頭用黃銅包著。以釘揜定。是銃換裝恆在子銃。不要搨杖。今插搨杖在牀下。何也。此非爲築藥送彈。蓋打放後。不經洗淨。藥滓生濕。鏽化壞。膽。故亦須以布片穿杖端小孔。蘸淨水。搨過洗刷始得。且臨陳敵猶未近。不要

迅速換裝。照手銃常規。從母銃口送下彈藥。挺搨杖築實。亦自不妨。銃手用力築實膽藥。彈出有力且遠。是亦不可不知。

短牀。乘馬者莫不執鞭。鞭可以代搨杖。故騎士銃牀。用此式爲便。如用此式。銃身上宜著照星。

門藥筒。外內俱以黃銅爲之。惟藥函活底用魚鬚。爲其前卻之際。不熱生火。底下小孔。量門藥二三毫爲適。筒心與銃心爲角。大略三度。裝時。以前手小指搭筒頭。向後引擠。活蓋之檐。自然擡起。火池瓦。筒鼻方。臨火池。藥函之距。遇池座格住。而擠力猶少進。至于活底滲下。門藥而始窮。再將前手挺直。則筒內二腸一齊逞力。內筒引縮。遽然復故。筒舊方形。內外接合處。多用竹釘。予改爲上圓下平。換竹釘以螺釘。筒頭更爲彎形。以便搭指。

器用第二

彈藥袋。以木作之。外用牛革套之。中爲二室。竝以羚羊皮襯裏。以防藥包搖動。

兼避墜火亂撲。彈藥包照常法爲之。用細銅線緊括藥際。取二木片。每片排列十二眼二行。將包上銅線。一一穿眼。緊著背上。乃以木片插入于兩室左邊馬蹄槽內。用時。以右手大食二指。攝藥包銅線下際。用力一紵。括處卽斷。不要更以口嚙開。

非陰雨日裝放。宜先將彈藥袋外套下垂。反轉在背。以便疾速送手。彈藥袋帶二條。一挂左肩。一絆腹間。使袋常在臍邊爲便。

門藥盒。以鍍錫鐵葉爲之。大寸餘。長方形者。佳。鍍木爲胎。漆而用之。亦不惡。門藥匕。用黃銅製之。所以用取門藥而寫于筭。

龍頭腸鉤。下腸格時。須先以此鉤提起腸端。不然。恐損壞其螺絲。

三叉子。螺釘擰入擰出。照其齒大小用之。中心方眼。專爲互腸軸設。

火藥第三

以硝七十五分。炭磺各十二分半。製者可用也。如其粒顆。愈細愈妙。西洋火藥。

舊分二種。用篩眼七釐六毫皮篩篩過者。爲大礮藥。篩眼四釐三毫皮篩篩過者。爲小銃藥。然是未可燃。此銃只重一釐而粒數一千四百二十者。卽可聽用。夫銃器譬則身也。火藥譬則血也。其死生作用。皆係于此。可不慎乎。

門藥。雷汞八分。淨硝二分。右凍石若大理石盆上。用魚鬚篋和勻。包以膠紙。盒子盛之。納于彈藥袋空處。予作門藥數方。屢試於此銃。是方尤勝。故特出之。

裝法第四

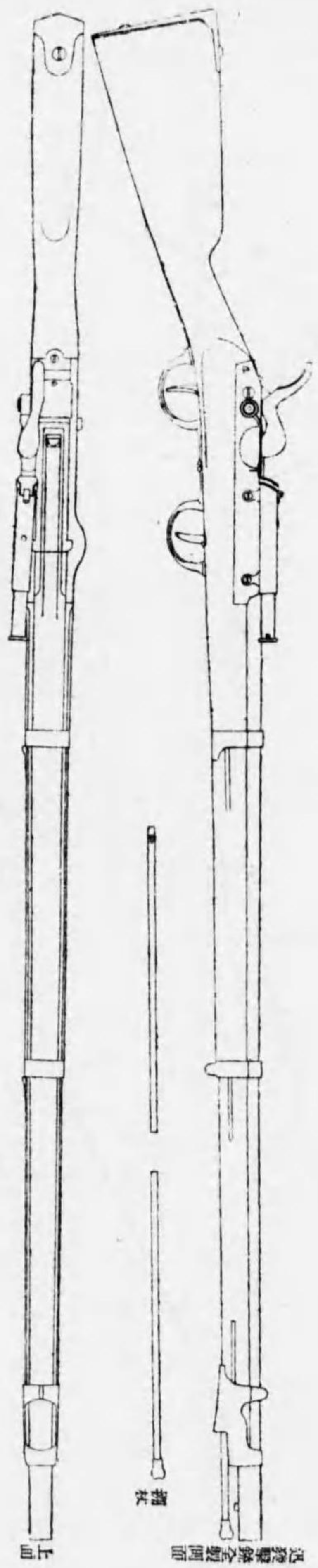
一擡起子銃。二取彈藥。三納彈藥。四壓下敞口。五張起龍頭。六送門藥。七對準。八放。

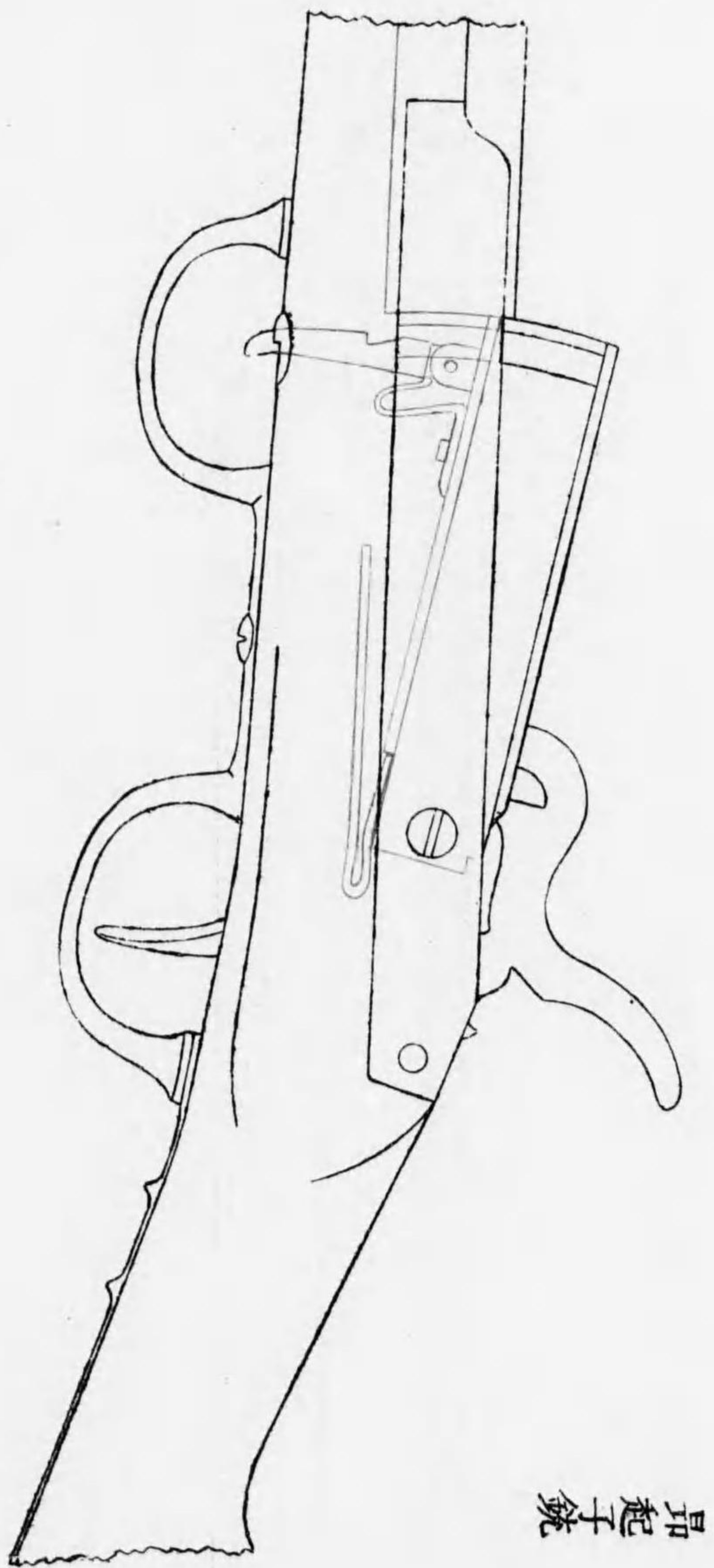
擡起子銃。以右手食指撥前機向後。徑探彈藥袋。攝取包子。

取彈藥。紵斷包子。用大食二指堵包口。不令火藥散落。舉向子銃口。

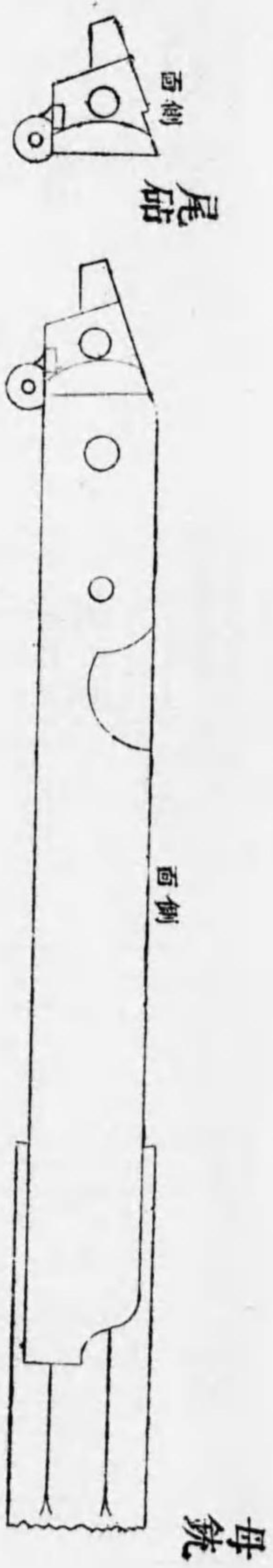
納彈藥。開指將藥倒傾。大約三分之一。便和彈裝入膛內。更以中指頭重壓彈上。

壓下敞口。以右手掌根用力壓子銃上。待機關緊合。急疾轉手向外。張起龍頭。右手將捉銃欄循牀而下。先以大指撫龍角。則龍頭不用力而昂起。送門藥。將牀尾緊挨肩膀。銃身平衡對目。少鬆前手。用小指搭門藥。箭頂向後引送。俟勢窮盡。再挺直前手。對準中央左右。遠近高下。唯意所命。放。後手食指撥攀機。夫右手放箭。左手不知。射之妙訣也。銃亦宜然後手撥機。前手不知。必無不中之理矣。



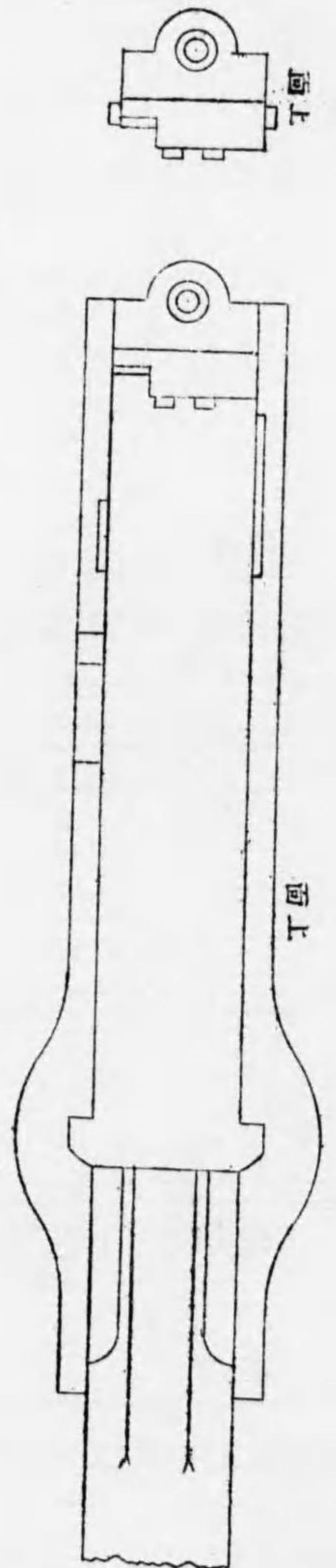


昂起子銃



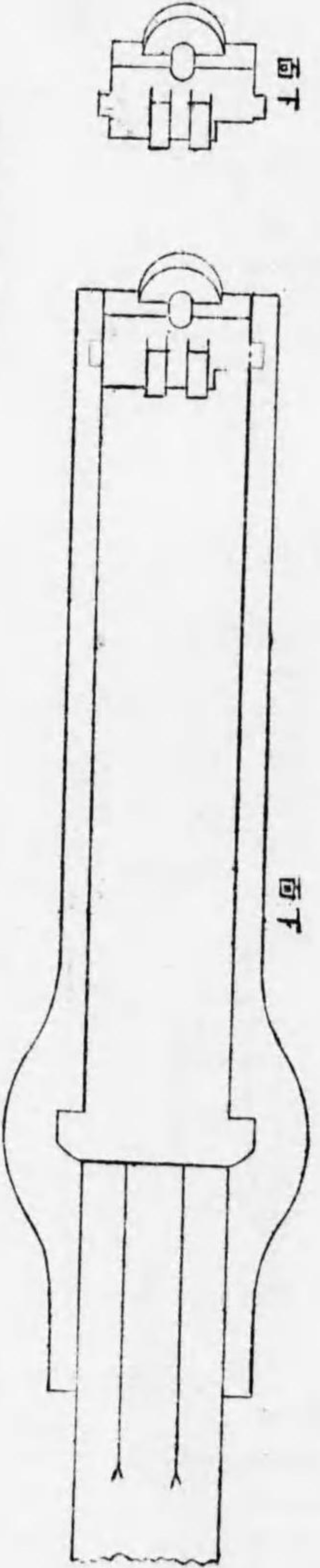
尾砵

母銃



面下

面側

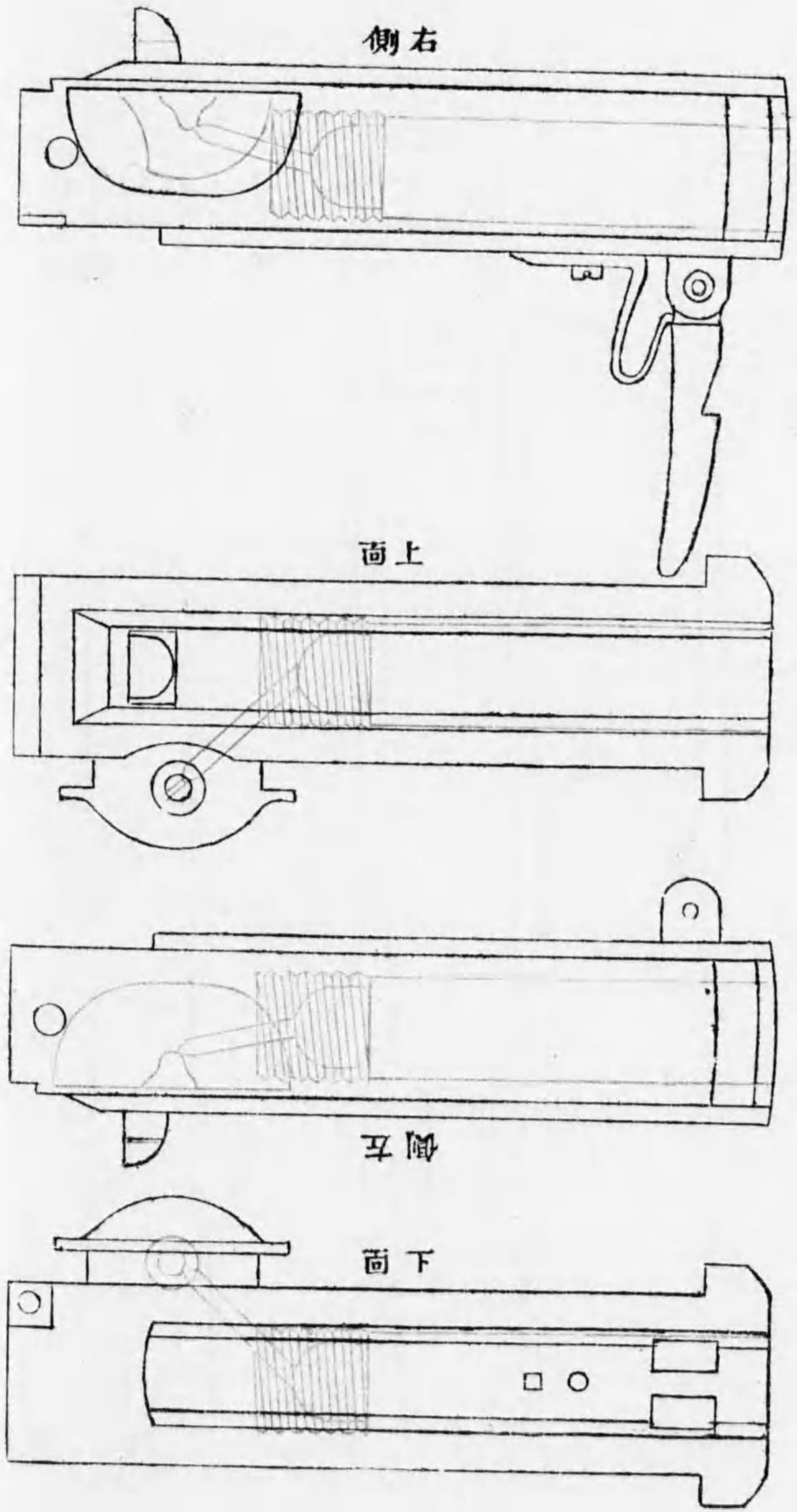


面下

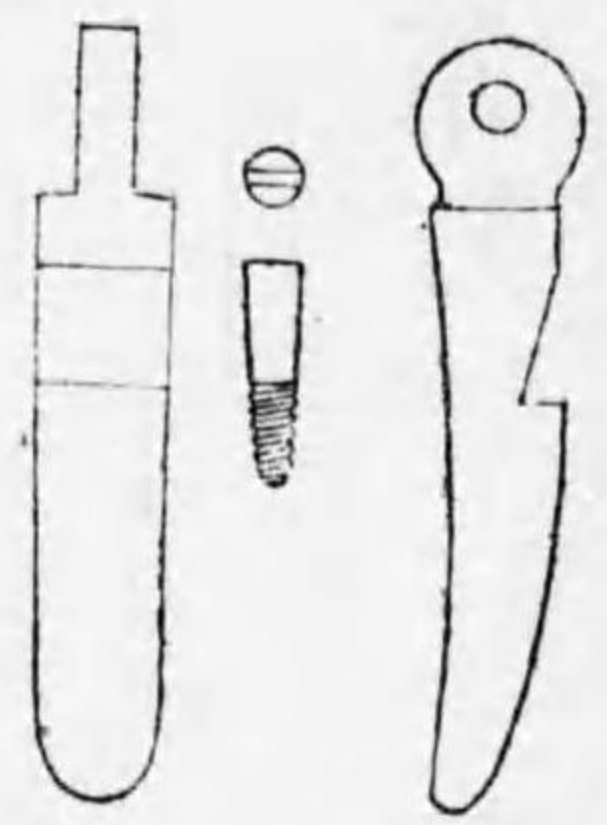
面側

子銃

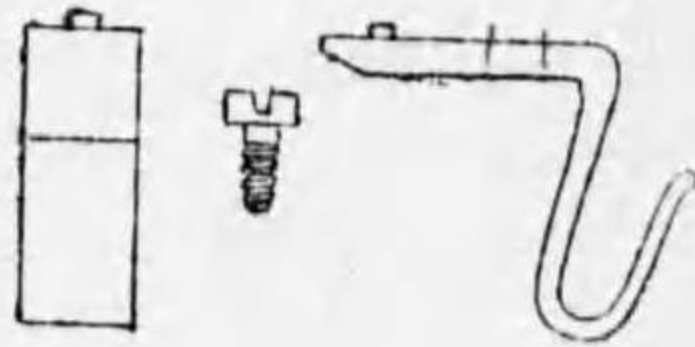
迅發擊銃圖說



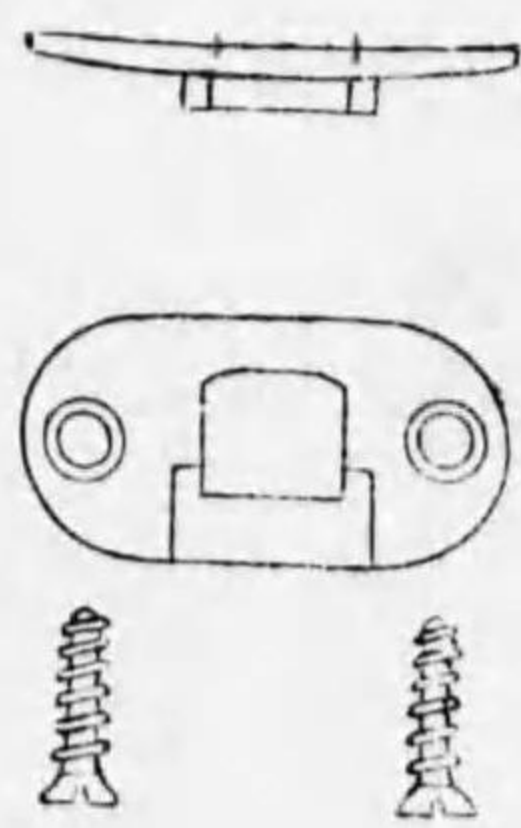
前攀機



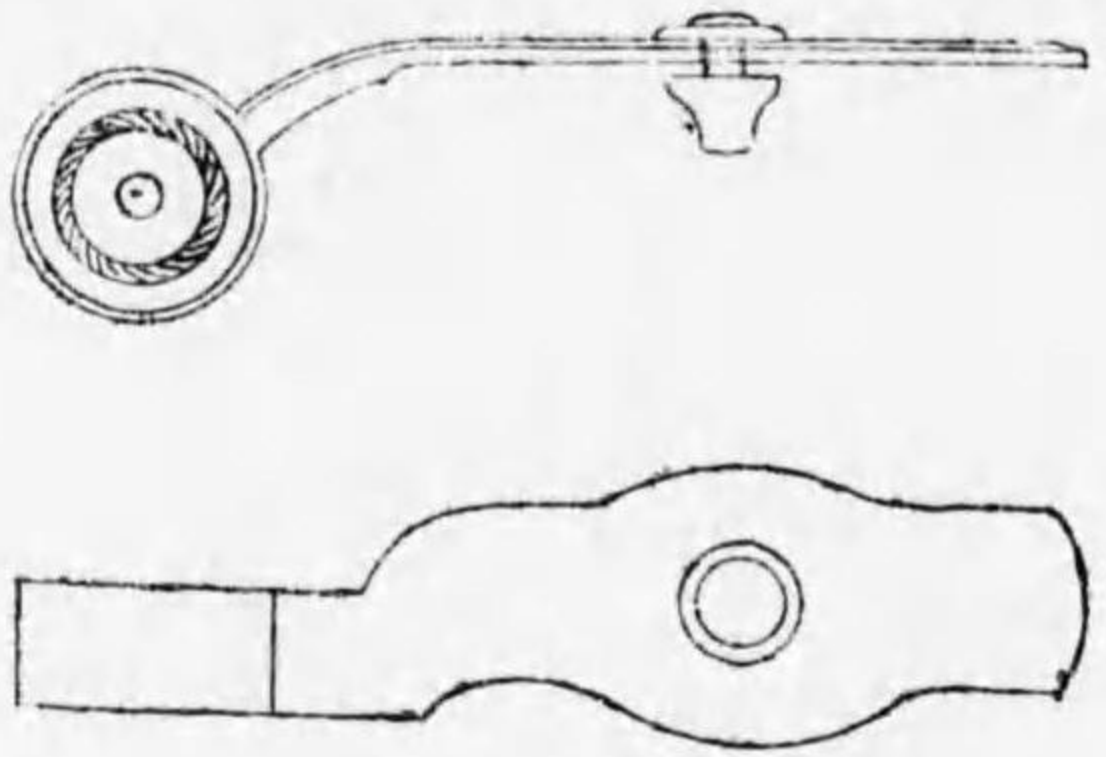
前攀機鉤全釘



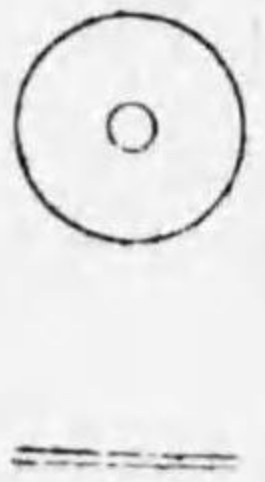
前攀機板全釘



火池瓦



腸槽蓋



瓦腸



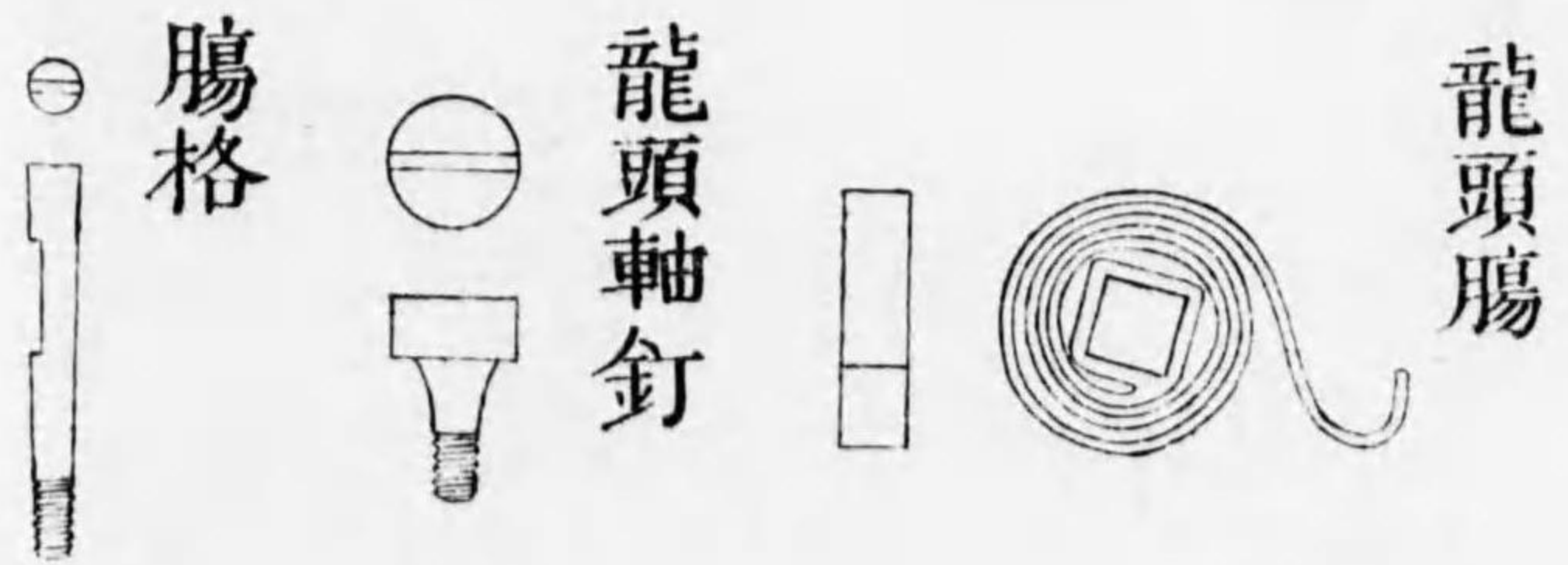
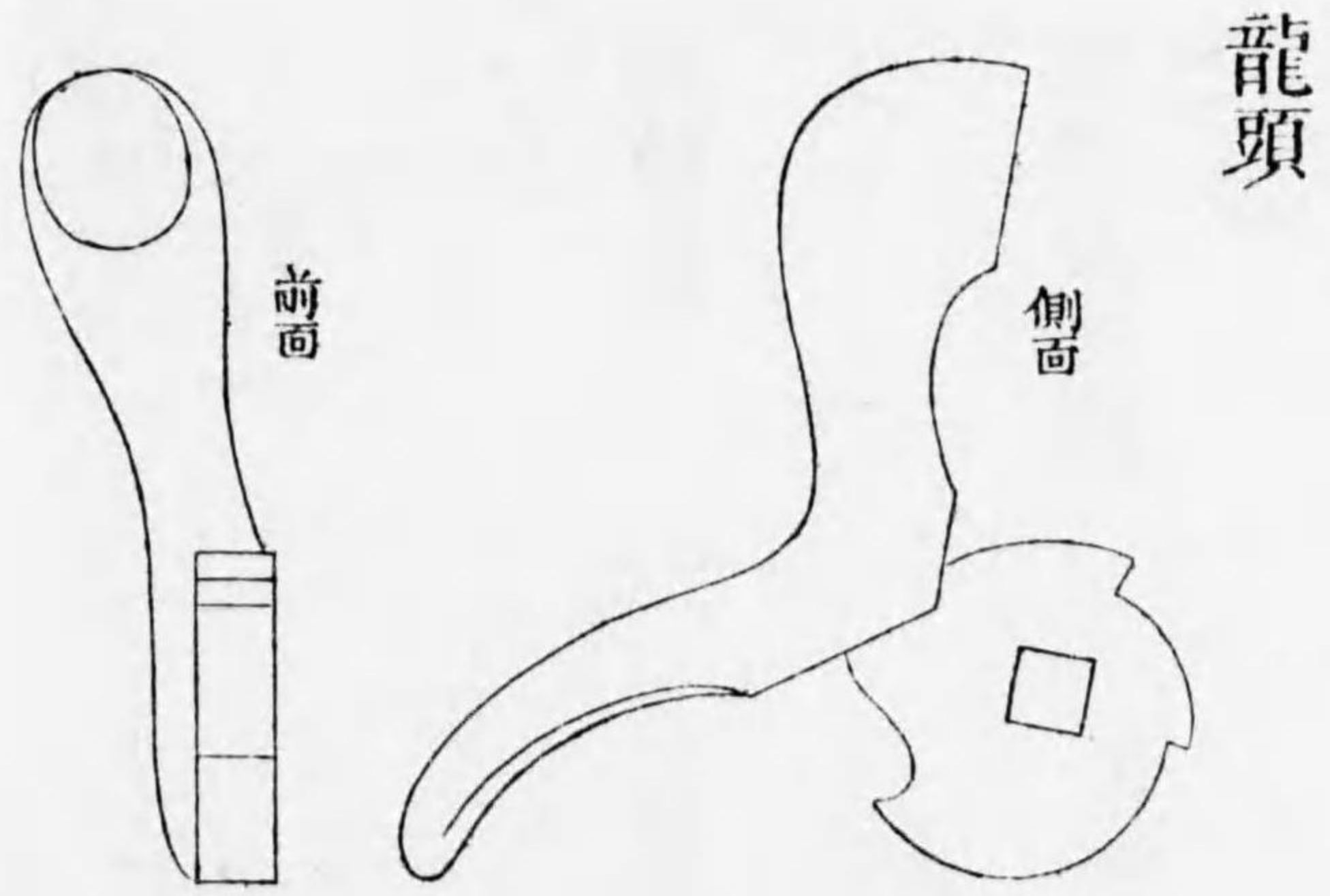
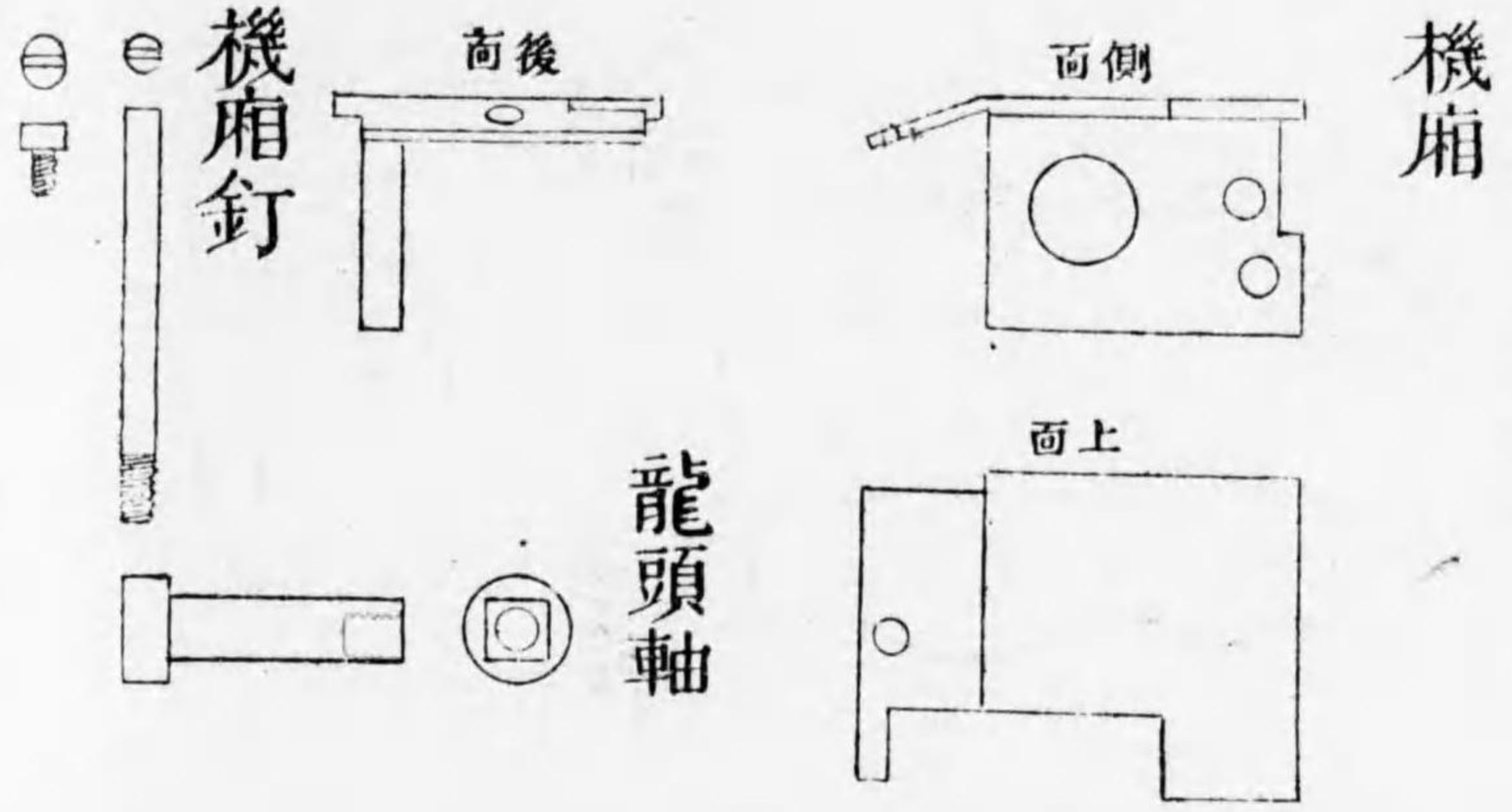
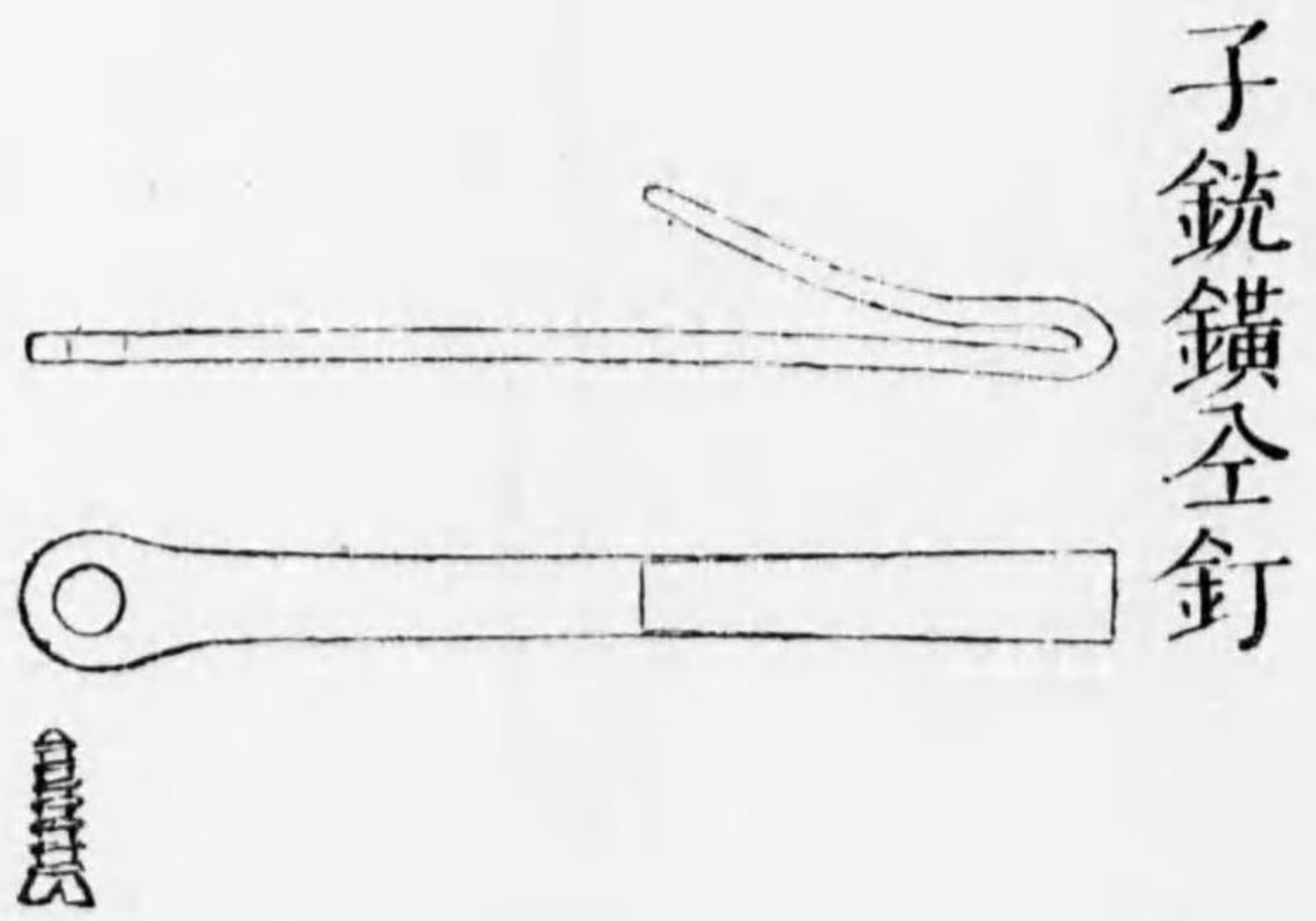
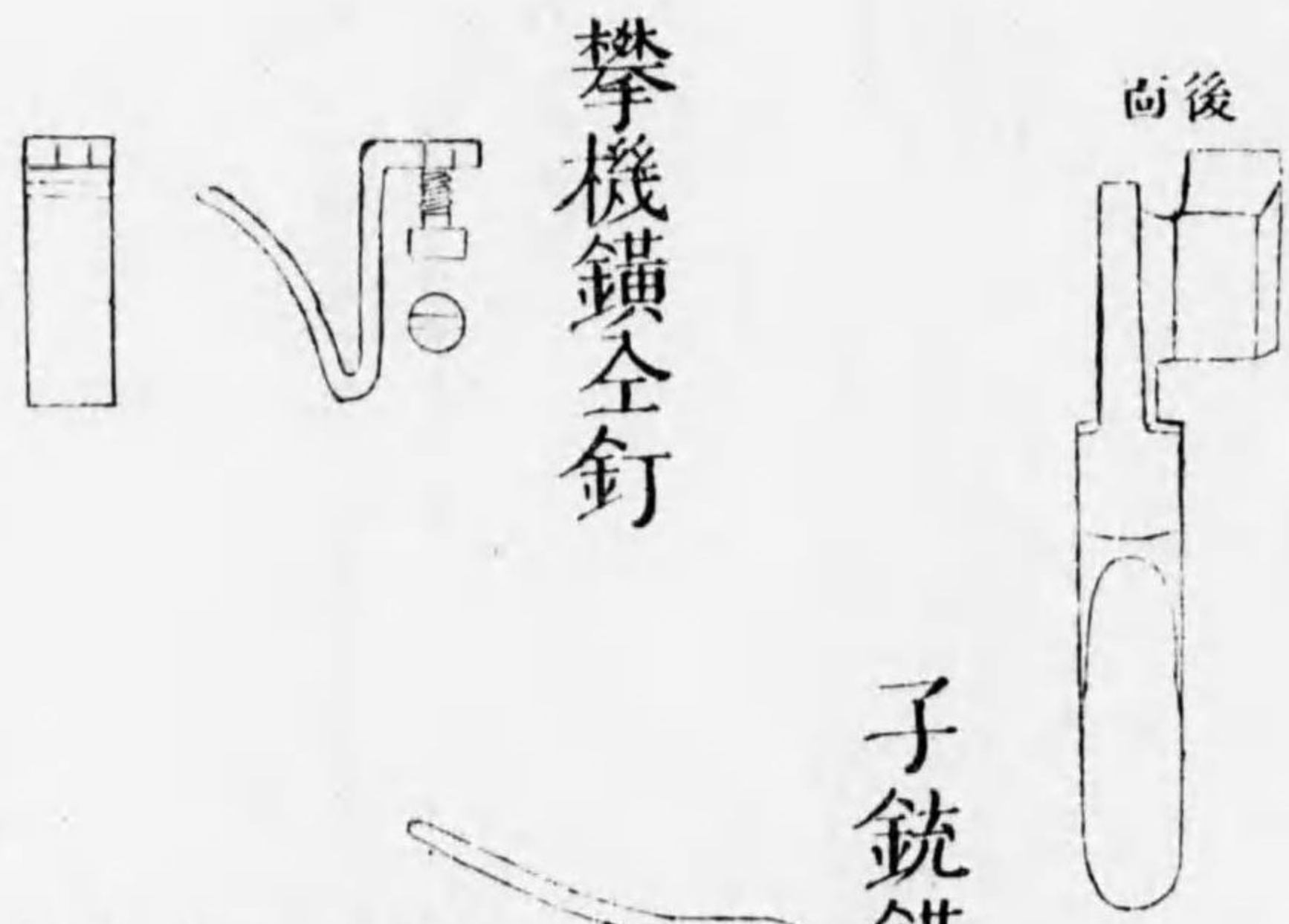
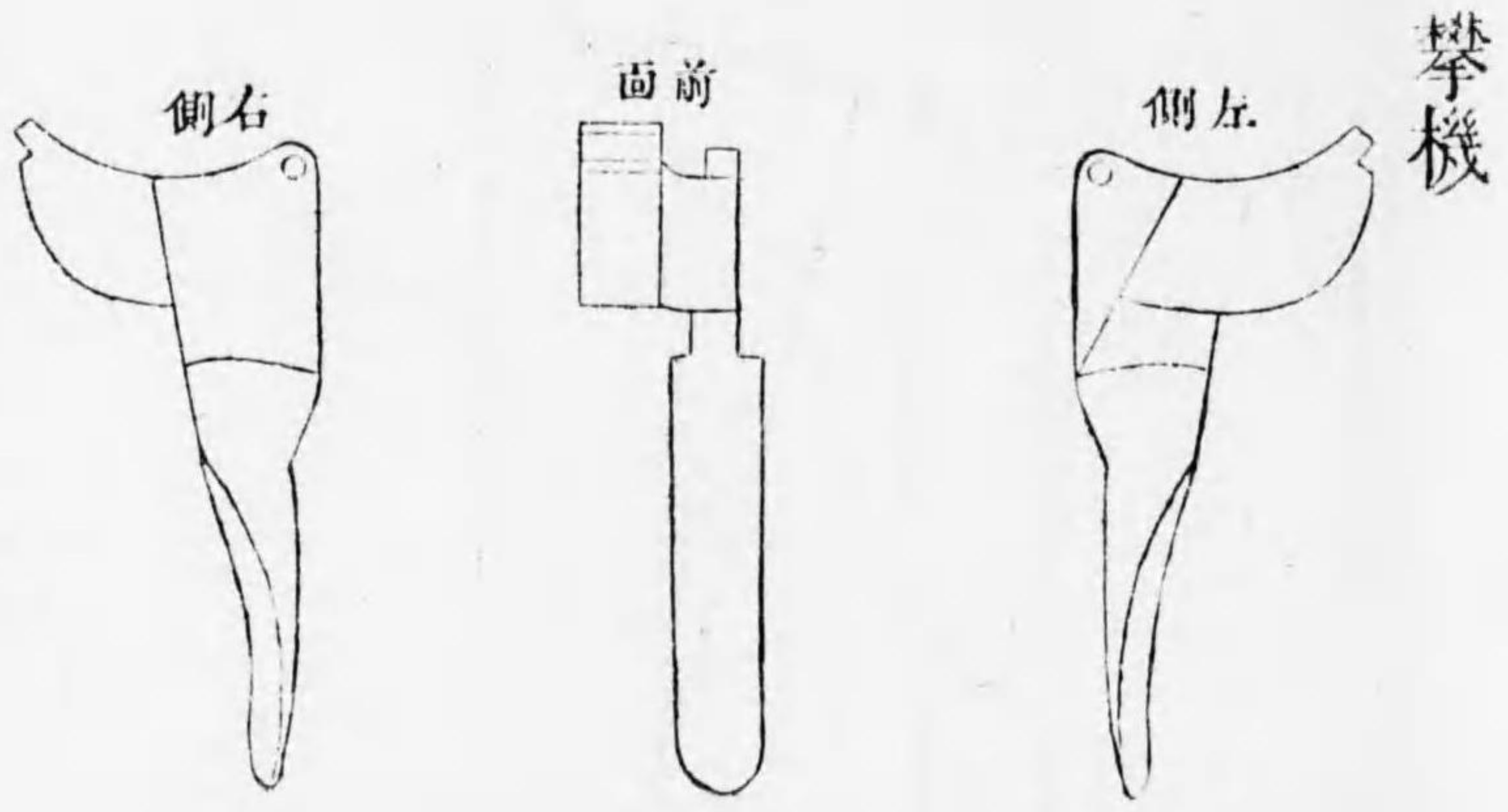
腸槽蓋牝螺

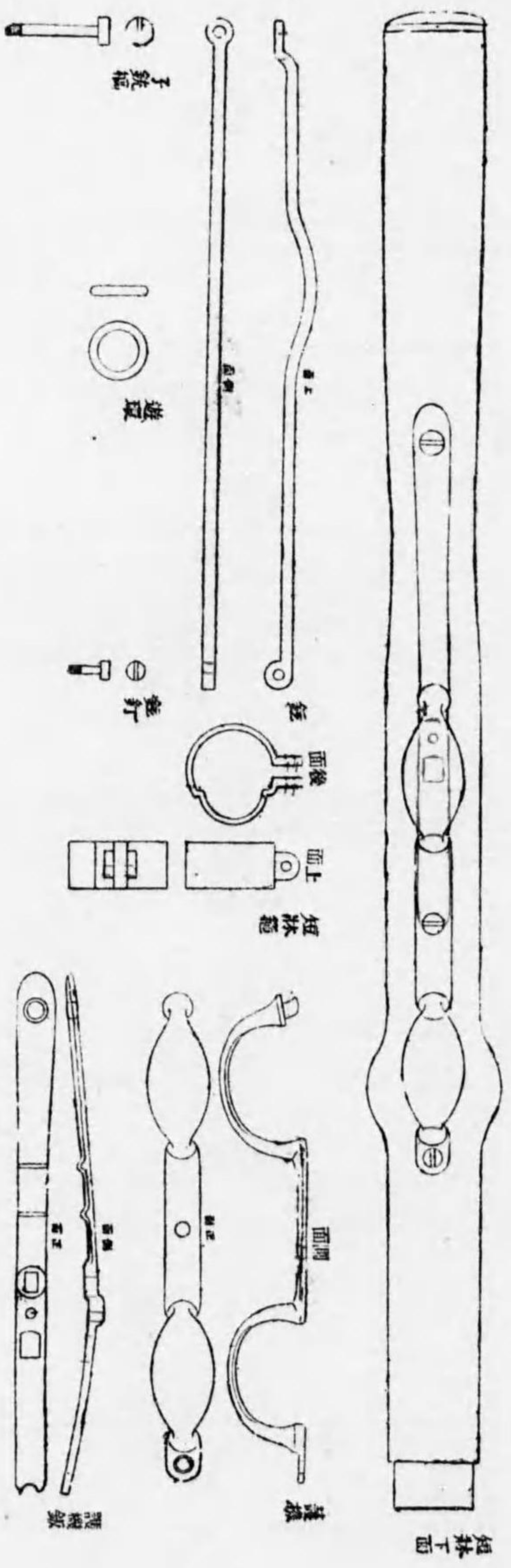
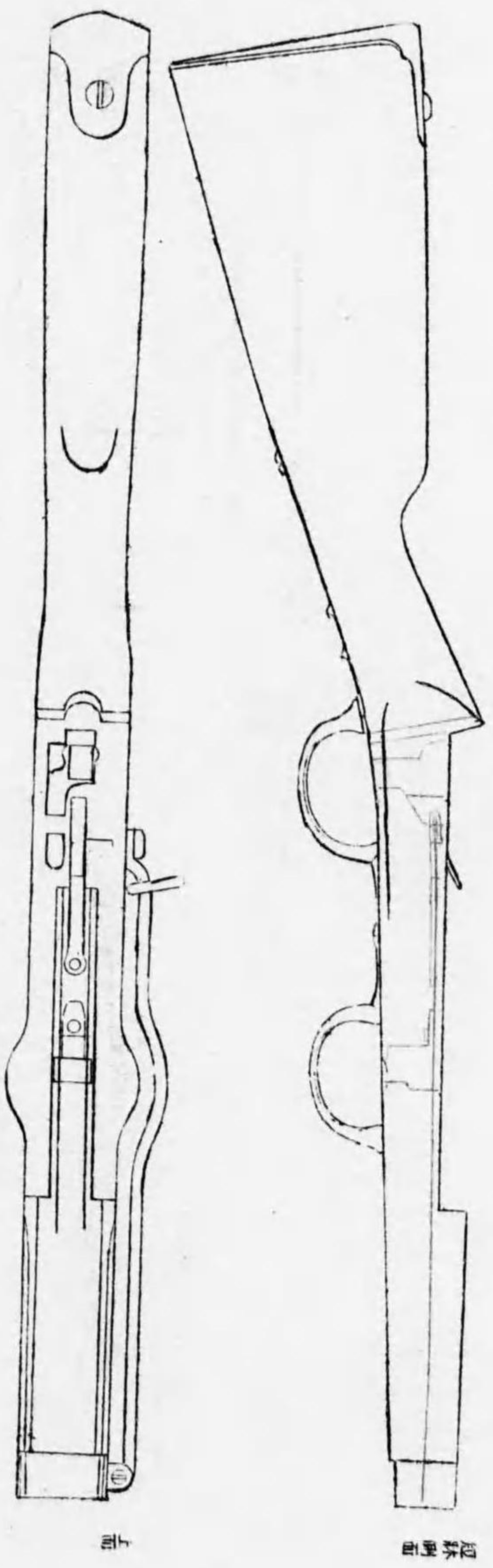


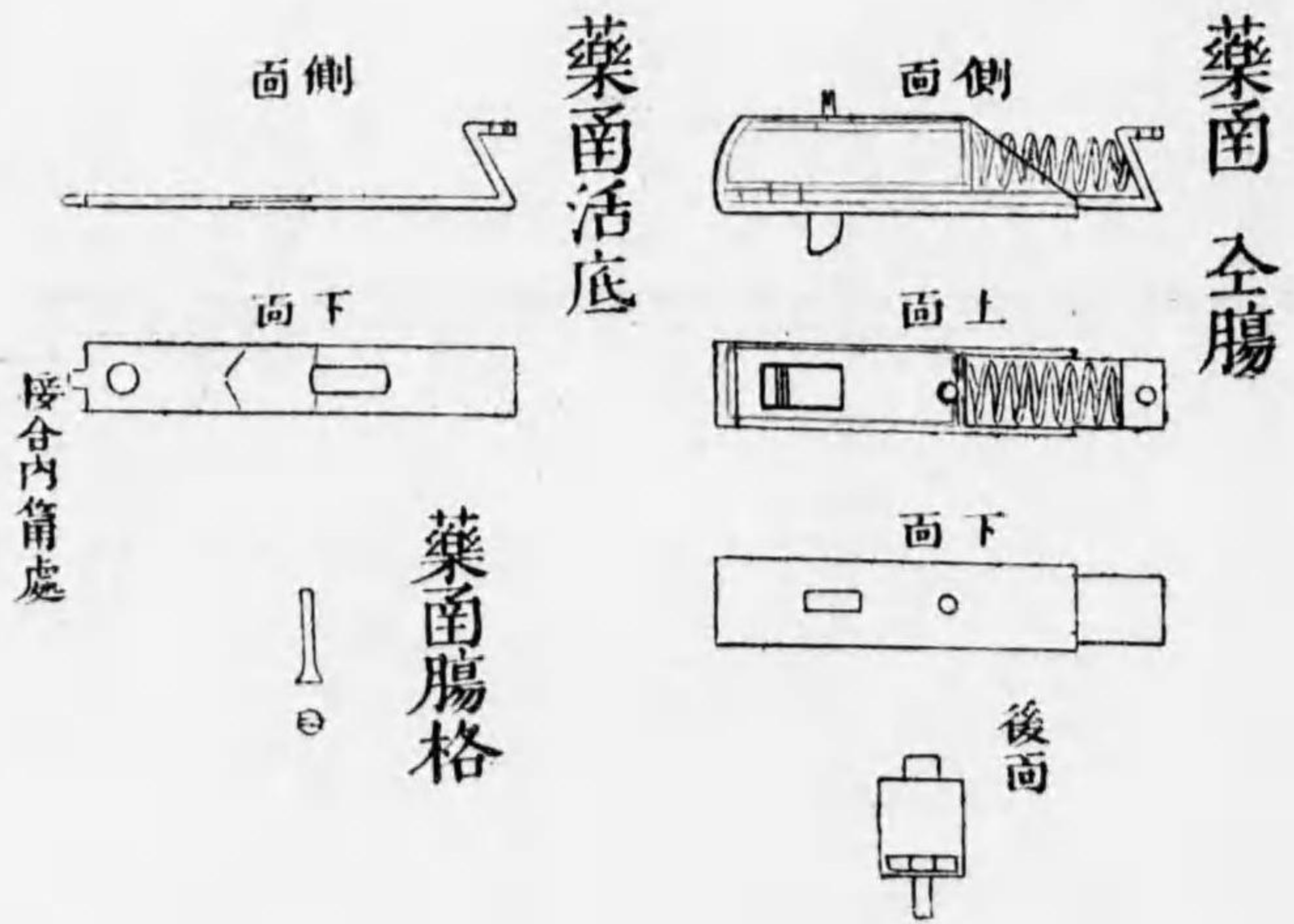
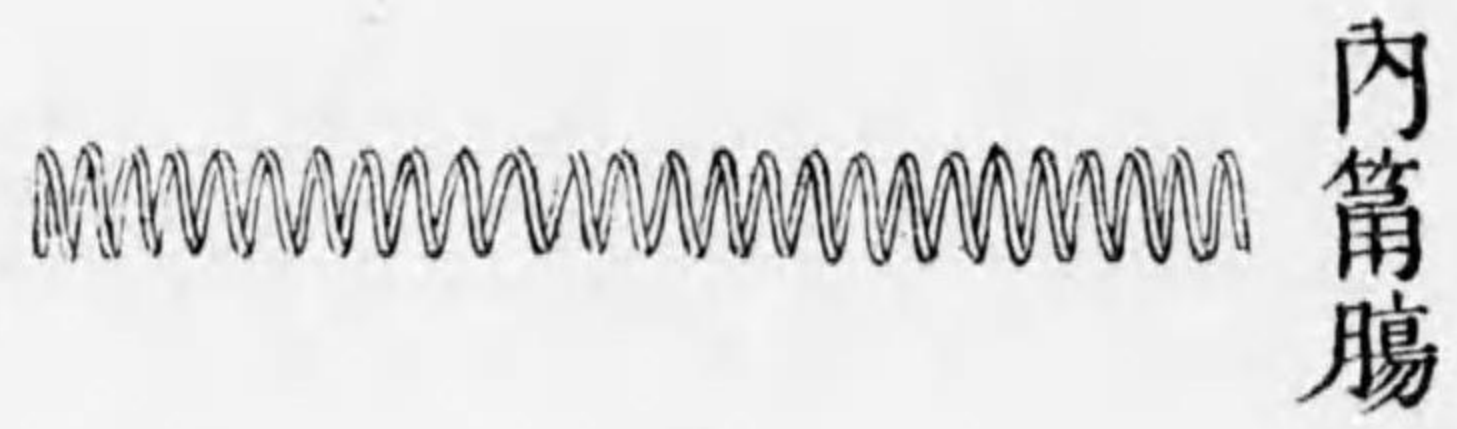
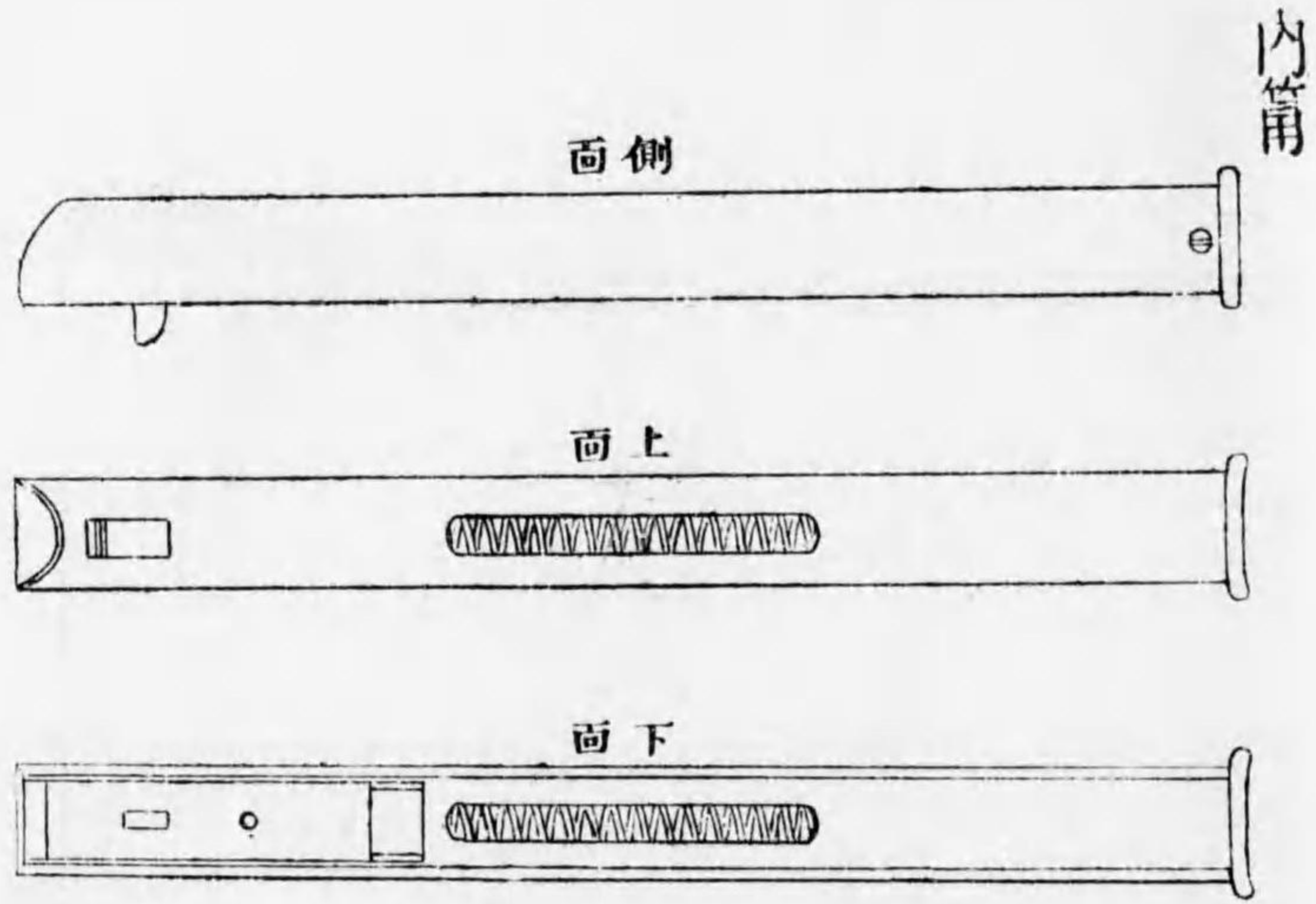
瓦腸軸



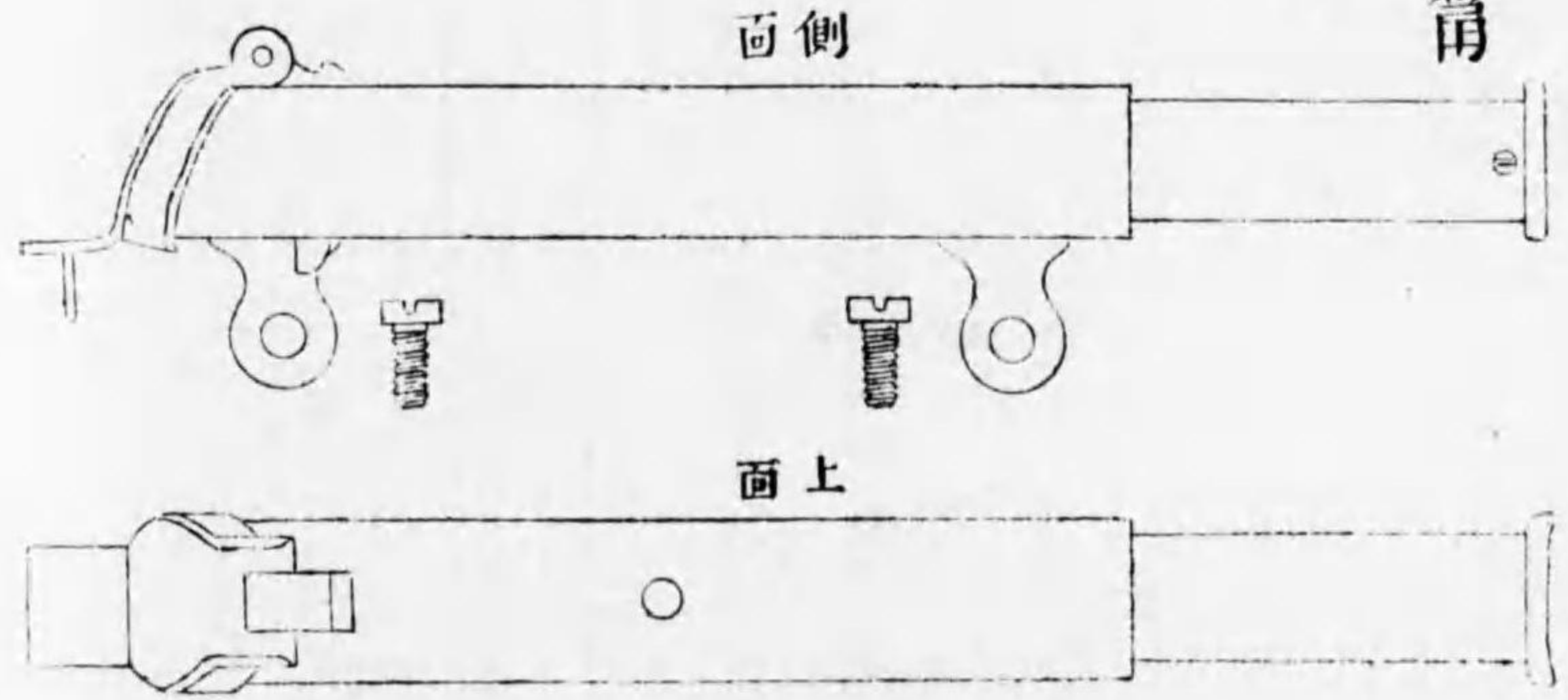
迅發擊銃圖說



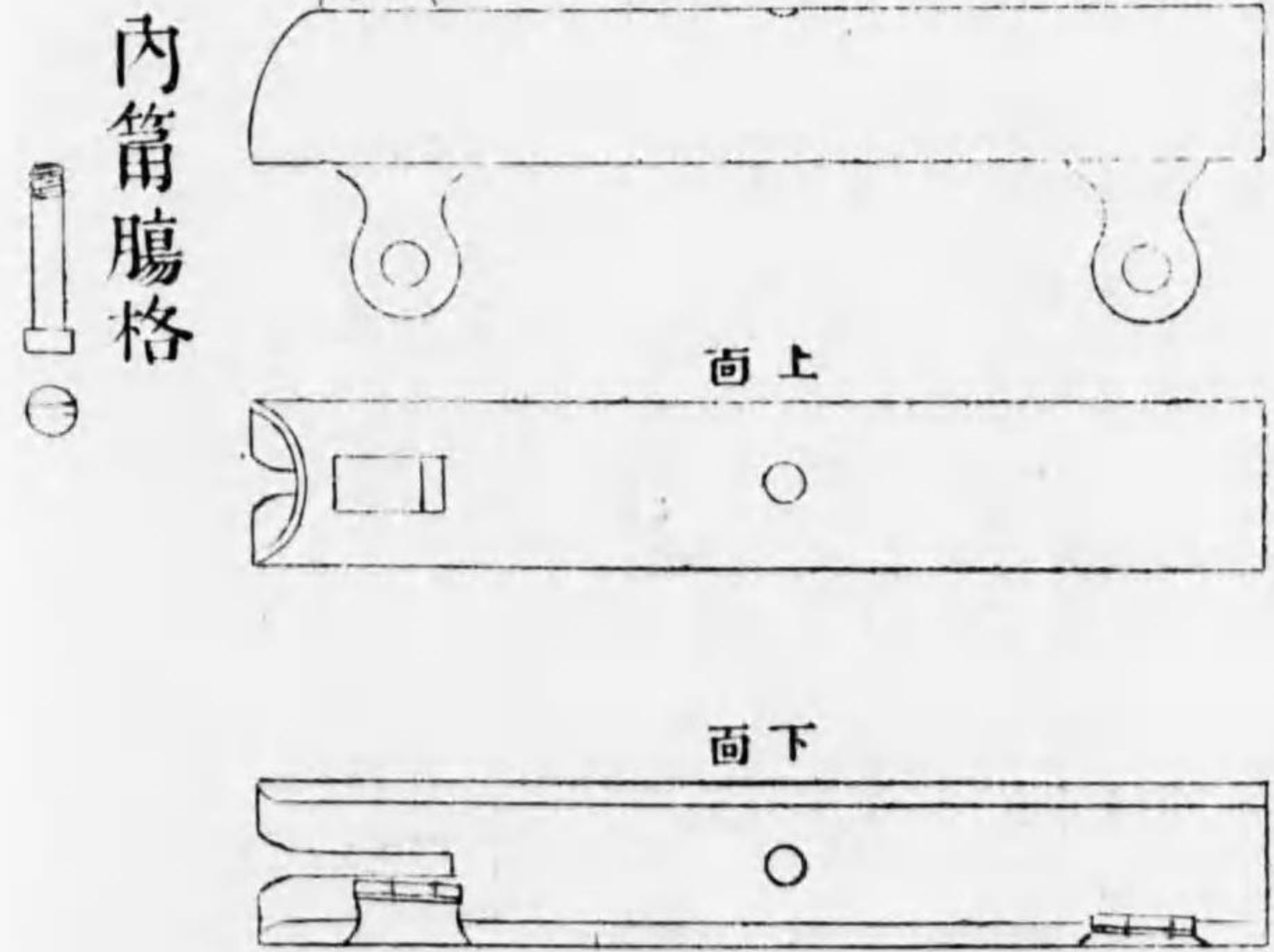


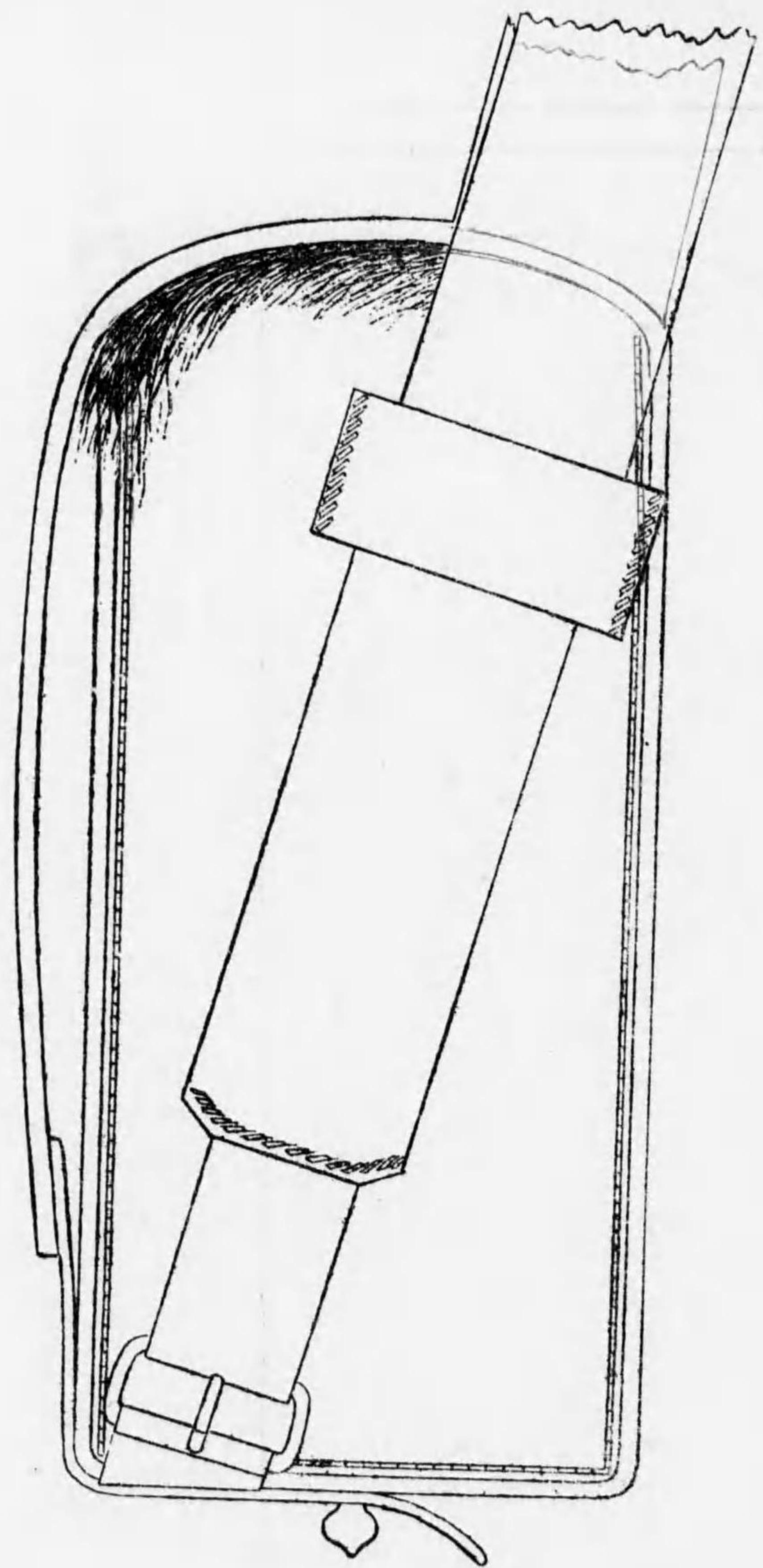


門藥筒全形

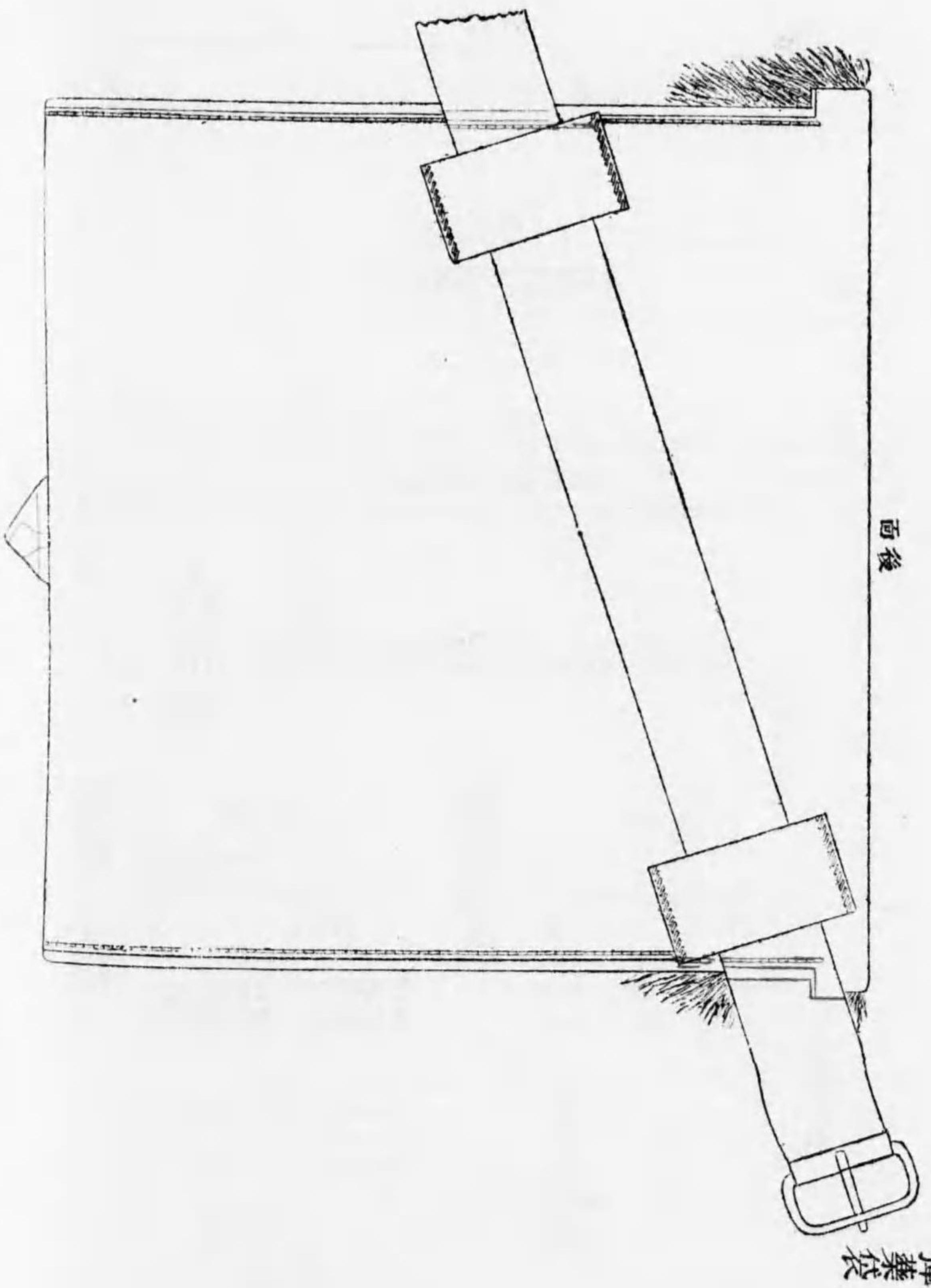


門藥筒分形



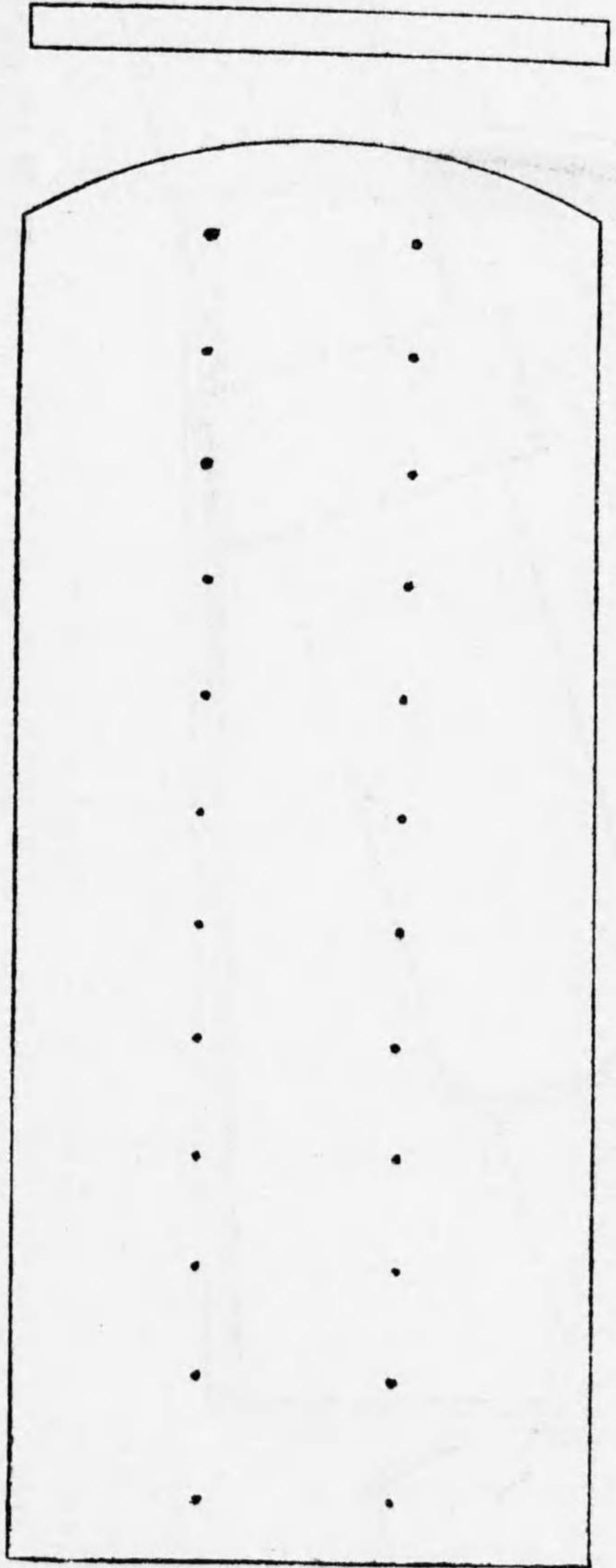


彈藥袋側面

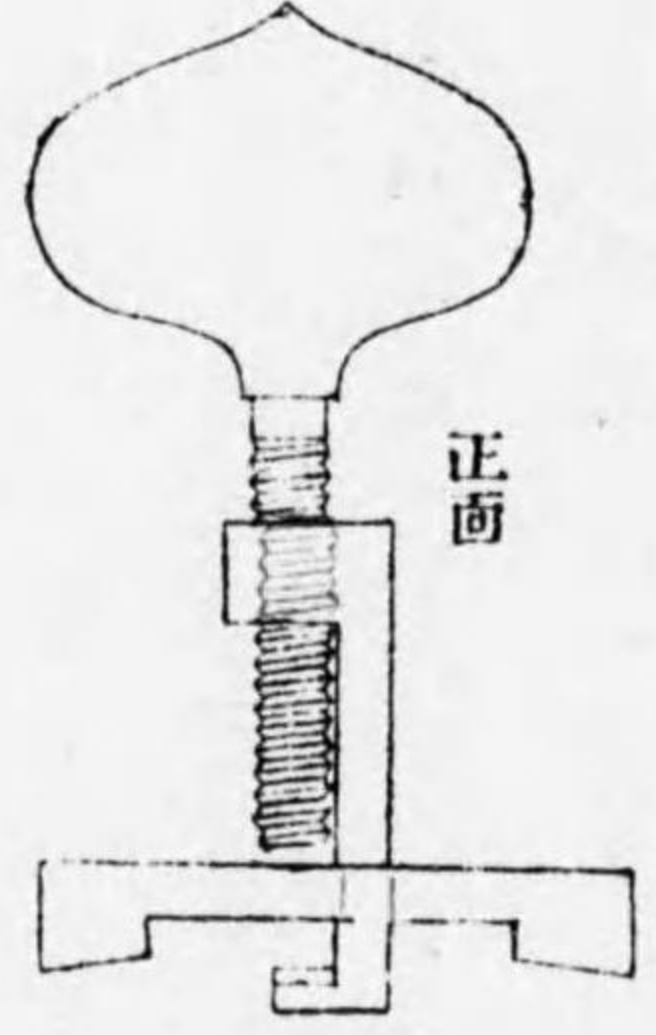


彈藥袋

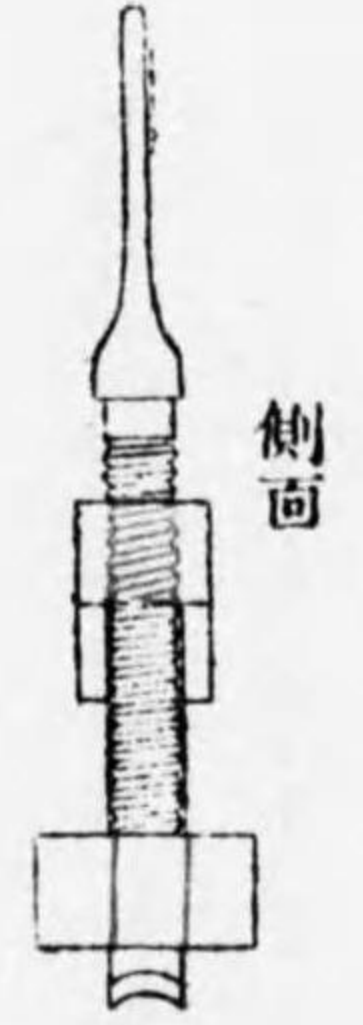
二十四眼板



龍頭腸鉤

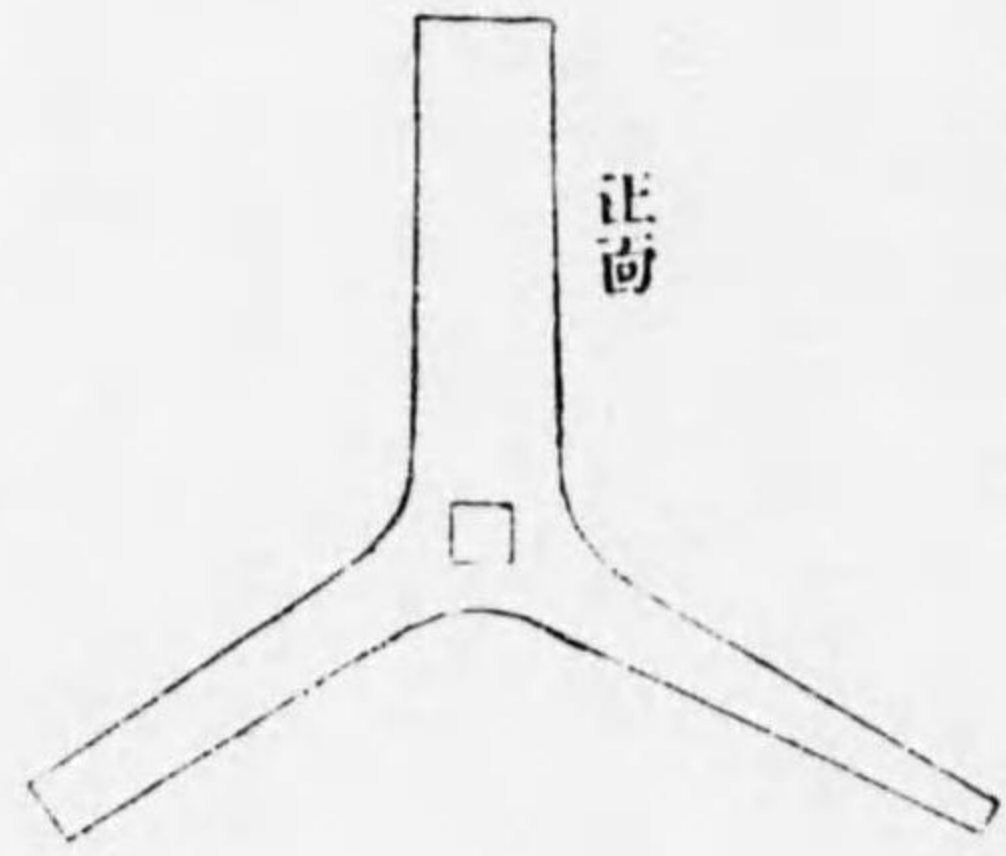


正面



側面

三叉子

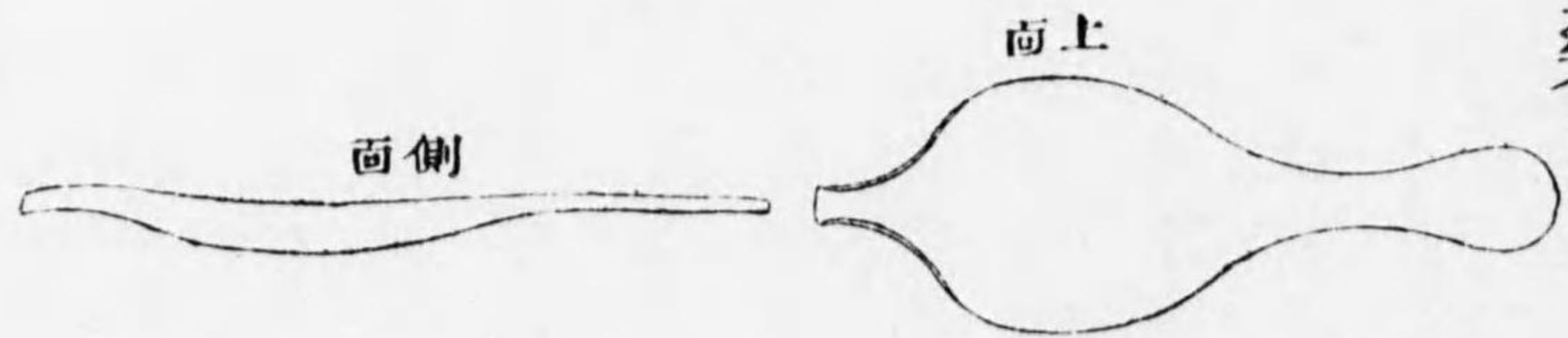


正面



側面

門藥匕



面上

側面

跋

予所著礮卦。寔闡千古之祕。而有裨於銃礮之學。漢土自有周易以來。三千有餘歲。雖有此理。未有人能言及此者。泰西自有銃藥以來。五百有餘歲。雖有此器。亦未有人能言及此者。適至予而始發揮焉。而其理。則所謂本諸身。徵諸庶民。考諸三王。而不謬。建諸天地。而不悖。質諸鬼神。而無疑。百世以俟。聖人而不惑者也。故可以通天下爲礮學者之志。可以定天下爲礮學者之業。可以斷天下爲礮學者之疑矣。予歲壬子而著礮卦。今茲戊午。造此擊銃。七年之前。爲礮卦。固未念及此銃。七年之後。構思此銃。亦未嘗汲汲於礮卦也。然迨器成。而竊以尋繹其理。則明明焉。鑿鑿焉。如珠之在盤。無一出於礮卦之外者。吁亦奇矣。夫礮卦本睽也。今此銃。欲頰而仰之。欲揚而抑之。欲前而後之。欲往而掣之。皆睽之義。而其最可異者。睽卦離上兌下。而二四互離。與下兌亦爲睽。是全睽中又有小睽。此非納子銃於筒後之象乎。是知易象之妙。出於天地之自然。非人

智力之所得爲是知而今而後。五大洲中。異能之士出。而損益舊銃。造爲新器。雖累千百數。亦未始容有異於礮卦之理也。世之同志欲試此銃者。亦得吾礮卦。而精讀深思。必當有所發耳。因爲之圖說。遂私及此。啓記。

喪禮私說

文久元年秋母の喪に居り撰す。經書を經とし、令制を緯とし、慣例を考へ、以て居喪の心得を説き、意義ある喪禮を建設せんことを企圖せるものなり。

本書の原稿は、長野縣埴科郡東條村河口千嘉太郎氏藏の寫本に據れり。

喪禮私說目次

養疾	三
行禱	三
疾病	四
初終	四
治棺	一五
誌石	三
沐浴	三
襲斂入棺	二四
成服	三〇

喪禮私說目次

頁

朝夕奠	五二
弔奠賻	五三
治葬穿壙	五三
作主	五三
遷柩朝祖	五六
載柩發引	五六
及墓	五七
下棺	五八
反哭	五八

一

虞祭……………五九

卒哭……………六四

禭……………六六

假滿……………七〇

小祥……………七〇

禫……………七一

忌日……………七二

聞喪 奔喪……………七四

返葬……………七五

居喪雜儀……………七七

墓碑……………七九

影像……………八〇

喪禮私説

養 疾

父母の疾ある時、看とり参らするは、大事の上の大事なり。もしこゝにいさゝかも憾みを遺すことあれば、身を終ふるまで償ふべきの期なし。慎み重んぜずはあべからず。儀禮既夕記に、養者皆齊と見ゆ。看とりの男女、みな酒飲まず、葷臭を食はず、齋戒して心をその養ふ所に專にすべし。

行 禱

父母の疾み給ふを、庸妄の醫師に委ねて療養を盡し参らすることを知らず。巫覡道釋の説に惑うて、祈念行禱をもてその痊ゆるを求むるが如きは、おろかなるものゝ常とはいへども、不慈不孝の罪道るべからず。たゞ醫藥看護その力の限りを盡して效なきに至つては、孝子の心徒らにやむべからず。神明に祈請してその陰佑あらんことを冀ふべし。これ聖人の許し給ふ所なり。既夕記に行禱于五祀と云れなり。本朝にては五祀の祭なければ、國中の大小神祇に禱るべし。

疾病

疾の甚しきを病といふ。その時に當つて、記に内外皆掃。徹シ褻衣ヲ加フ新衣ヲとあれども従ふべからず。いかにとなれば、この件の用意は、賓客の來り觀ることあらむとの設けに過ぎず。かうやうの細故にかゝはりて、大切の一期を驚かし參らせんこと、罪おほくこそ覺ゆれ。かつ疾みふし給へる間は見苦しき衣裳のまゝにて養ひまゐらせ、大事の時に及び、人の見むためにとて、あはたゞしくよききぬたてまつらむこと、眞ごころもて親につかへまつるといふべからず。かゝれば、看取りの間おのれおのれの分に從ひ、常に見ぐるしからぬやうに勤めおきて、今はの際にならせ給はゞ、殊に内外を戒めて、もの靜にしてあるべし。記の男女改服、これ又従ふべからず。抑、この時いづれのとときぞや、孝子慈孫いかでかさる外を飾るのこゝろあるべき。

初終

疾の革なる時遷居正寢ニといふこと、溫公書儀、文公家禮にあれども、甚だ危きわざなり。尤も從ひ難しとす。これを遷してその死を促さば、罪誰にか歸せん。されば表

奥を云はず、はじめより養ひまゐらせし所にて終りを取らせ奉るべし。

既夕記に、男子不死セ於婦人之手。婦人、不死セ於男子之手。と云ふとあり。こは前文の、御者四人皆坐持體シテといふを承けて云ふなり。疾重りておのれと轉側すること能はざる故に、左右に侍御するもの各その一體をとり兩手介抱するなり。されども、たゞその轉側を助くるのみ、拘執するにはあらずかし。大夫はもとより侍御の臣あるべし。士に臣なしといへども、從僕あれば即ちそれなり。もし婦人なれば、その手足を持するもの必ず婢妾の内なるべし。婦人の手男子の手とは、その侍御者に就いてこそいふなれ。然るを人のかたくなに心得るより、疾困しき時に至り、その妻妾子婦を屏けて前ましめず。そを又美談として語り傳ふるに至る。いとほかなし。その妻をいへばゆくゆく同穴ともならむものなり。その子婦を語れば常にわが疾痛苛癢に侍せしものなり。しかるを、今はの際に至つて、一朝にして反てこれを絶ち遠ざく。理と情とに於て安かるべき事は、よく本文の心を得ば、その誤れることを知るべし。

疾の困しき時、誼しく奔走なごせんことあるまじ。聲を揚げ悲泣せんも、病者の

こゝろを傷ましむべければ、心すべきなり。佛名を唱ふること、儒者はあるまじきこととして殊に戒め禁ずれども、一概にはいひ難かるべし。佛教この邦に行はるゝこと年久しく、既に人の骨髓にいりつ。かつ當代に至つて更に貴賤を問はず、貧富を擇ばず、死後は必ず佛寺に託するの掟となりぬ。されば、その父母の平日佛道に歸依せざることを保つべからず。もし、父母常に深く佛道に歸依あらむに、大事の際に及びて其唱名を禁せば、こゝろやすくは終り給はじ。常々その歸依の心にまかせつる程ならば、唱名はさらなり、打磬もまた禁すべからず。いかに介抱し參らすとも、そのかひなくていき絶え給はゞ、諸子はさらなり、一家擧つて哭泣して哀を盡すべし。さてしもあらぬことなれば、まづ親しき人のもとへ、病のさし重りしことを告げやるべし。

たまよばひは、古禮とは雖兒戯に近し。なす可らず。たゞ、今の世の習はしとして、多く坐棺を用ふれば、この時に於て、大やう半坐半臥の姿に取繕ふべきなり。古禮に、遷戸于牀ニといふことあるは、初め生氣の復るを冀ふがために、牀を廢して地におろしゝに依るなり。本朝の習はしは、はじめより牀を廢することなし。去れば、

今はた戸を遷すに及ばず。

戸を南首せしむること古禮なり。されど、本朝の屋作り異朝と同じからず。今又古と殊なり。必しも泥む可らず。たゞ奠を進むるに、その右側に進めらるゝ様にあるべし。もし終り給ふ時の向き、奠獻に便りあしからば、よき方に改むるをよしとす。古禮の幪フニヒ用ヒ斂ル去ル死衣ヲは、戸を浴せしむるに便りしてなり。浴戸のこと必ずとせざれば、衣を去るに及ばず。暑日には薄き小袖、冬の日にはよるもの常の如く取かけて、顔には、ひとへの服紗のあたらしきをうちおほひてあるべし。その繕ひ參らせたる牀の傍について、供物を奉る。これを始死奠といふ。この奠は、看どりの間に進めまゐらせし酒醴のたぐひの、餘れるを用ひてよし。薦食の膳具も、今まで用ひ給ひしうつはものなるべし。其の供物は、右の肩のあたりに備ふべし。儀禮士喪禮に、奠于戸東ニと見ゆるは、戸の南首に就いてその右傍をいふなり。右傍に奠するは、その飲食に便りよからんようにとなり。死につかへまつること、生につかへまつるが如しといふことなり。記に、即牀而奠ス。當轔ニとあり。轔は肩頭をいふ。

うち寄る人をして戸を襲し參らせじとて、几帳を堂に設けて内外を隔つる、禮にこれを帷堂といふ。平人の家、几帳なければ屏風に換へてよし。

喪主、主婦、護喪、司賓、司書、司貨を定むべし。父母の喪には、世を嗣ぐべき長子その喪主たり。長子なき時は、嫡孫祖に承けて喪主となるべし。母の喪に、もし父あれば父を主となす。賓客と禮を爲すに、尊者よろしければなり。主婦は亡者の妻なり。もしなければ、喪主の妻主婦となり、内賓と禮を爲すべし。護喪は、喪の事よろづ取りはからふ役なり。何も何も皆この人に申し、さし圖を得るなり。家長又は子弟の内にて、才幹ありて禮を知れるものを擇ぶべし。もしその人なくば、親友の内を請うてよし。衛の司徒敬子の喪に、遽伯玉が孔子を請ひ奉りし例もあるなり。司賓は、賓客に應接する役なり。君の御使又は尊長の入り來れるには、喪主を呼出すべし。その餘は、みな司賓にて弔問を受け、返すなり。喪主もし人に出で逢はゞ、大やうものいはず、たゞ禮貌を盡すのみにて、その人の歸るをも送らず、司賓送りて出づるなり。但し君の御使のみ、送迎の禮節常法に替らざるべし。司書は、筆札の事すべてつかさざる役なり。子弟の内或は吏人の書を能くするものに命ずべし。司貨は、金銀米

錢の出入、親賓の賻贈をあづかる役なり。金銀米錢は、悉く帳にしるしてその出入を謹み、賻贈は別帳に詳にして喪用を待つなり。

護喪と司書として仕ふるものならば、まづ届書を作り、續いて親戚僚友への赴告を發すべし。

凡そ喪事に用ふべき物をば、護喪より司貨に仰せて、豫め用意あるべし。その用ふる所の人をも、あらかじめあて置きて、事に臨みてさしつかへざるやうにすべし。その品々は、

棺の具、板 鐵釘 松脂 黃蠟 獸脂 石灰 木灰 紙 銅鐵鍋 磁注かたくち 木

篋 白布

尸牀を隔つる具、屏風

沐浴の具、水桶 浴盤ひしやく 沐巾 浴巾 櫛 元結 鉢 席

襲の具、ひとへの服紗 たたみ 褥 時服 帶 禪湯具 襪 禮服上下 十徳さげ帶かけ類

腰刀

斂の具、小袖 衾常の被を用 衾ひとへの被なり綿布一端を五 綿布裂いて結束

席 褥小なる 弊衣よく洗ひ浄めて
奠の具、卓 香爐 香盒 香沈水降類 燭臺 蠟燭 花瓶 瓶子 酒杯

同臺 磁磁磁 茶 茶碗 同臺 罩巾竹をためて細紗を 脯 醢 鹽

盆 幌巾 箸 箸臺耳かけ

括髮の具、麻繩

成服の具、麻布服の輕重によりて粗細生熟の別ちあり。杖 草履

靈座の具、卓きもの高 同きもの低 衣架 衣服平日身に著きたる 刀架 腰刀 太刀 木主

治葬の具、炭屑 麻索 誌石 平瓦

送葬の具、生時旅行の具の如し、その位階にかなふべし、 白麻衣

常用の人、木工 鍼工 巧思ある者松脂を煉り棺を塗らしむべし 石工

以上或はその舊に因つて用ひ、あるは一器にして數所に用ひ、あるはこれを親戚近鄰に借り、あるはこれを市肆に買ひ、或は工に命じて造らしむ。皆護喪司貨の措辨にあるべし。

初喪に、常服を改め易ふること禮なり。これを易服といふ。喪主をはじめ男子は、肩

ぎぬ羽織を去り、佩ものを解き、襪を脱ぎ、浴せず、月代そらず、髮結はずしてあるべし。もし髮を束ねば、麻緒にてとりあぐべし。

麻のもとのゆひにて髮をつかぬるは、漢土にして成服の時なり。その前は被髮なり。本朝に被髮の制なければ、この時より麻緒にてゆふべきなり。

婦女は櫛笄をおろし、紅粉を洗ひ去り、髮は同じく麻繩にてかりそめに取あげ置くべし。衣服も紅紫の華やぎたるは皆脱ぎ換ふべきなり。

異朝の禮、初喪にその子として三年の喪を服すべきものは、三日の内もの食はず。期の喪のものは、一日の内もの食はず。五月三月のものは、一度兩度ものくはずしであるなり。本朝の禮この制見えずと雖も、孝子哀痛の餘り、飲食さへに思はざるは、彼我古今同じことなるべし。去ればその心に任せて、もの食はであるべし。たゞ、尊長又は淺からぬ友などの、わりなく強ひば、少しくひてよし。尊長朋友は、かならずこの事に心をつくべし。

右不食の事、禮の經なりと雖も、又喪服四制に、百官備、百物具、不言而事行者、扶而起、言而事行者、杖而起、身自執事、而後行者、面垢而已、秃者不髻、偃者不袒、跛者不踊。

老病、不止酒肉。凡此八者。以權制者也。と見ゆ。かたくなに心得まじきなり。

三年の喪は、聖人ひとの情を稱りて、文を立て給ひし所なり。と雖も、飲食の一筋すら、今の人には易からざる事なり。試にこれをいはんに、三日を過ぎて諸子粥を食ふといへども、朝夕兩度にすぎず、かつ鹽をも加へざるなり。三月の後、卒哭の祭はて、疏食水飲すこと、しらげざる飯をたうべ、咽乾きたる時水を飲む。いまだ鹽醬を用ふることを得ず。十三月に及び、小祥の祭畢りて、始て菜果を食ふ。これ迄一年の間、菜蔬果實をだにも食ふことを得ざるなり。二十五日大祥の後、食に鹽醬ありと見ゆれば、凡そ二年の間、鹽味を御せざるなり。その後禫の祭はて、肉を食し酒を飲むことを得る。これその大略なり。彊志のものにあらざれば、これもまた能し難し。

その期以下を語れば、期と九月の喪は、疏食水飲して菜果を食はず。五月三月の喪は、酒を飲み肉を食うて、宴樂にあづからず。期と九月の喪も、葬はてぬれば酒のみ肉食ふ。宴樂にあづからざるのみ。

本朝五服の制、かうやうの沙汰なしといへども、聖人の教に志さむ人は、この禮

制を考へ合せて、斟酌しておのれの志を行ふべきなり。温公書儀も、大やう右に同じく、儀禮禮記を參取してしるされたり。その細註に至つて活用の説あり。今またこゝにしるして、參酌に備ふ。温公曰く、凡そ喪に居るもの、毀瘠するをもて貴しとなすと雖も、力を量りて行ふべし。その體つかれて、三日の内もの食はでありがてぬものは、粥少しばかり食うてよし。粥にて飽きかねぬるものは、既に殯するの後、粗飯を食ふ苦しからず。疏食水飲にて飽きかねぬるものは、葬はてなば、菜茹茹も亦菜なり、醴醬を食ひてよし。喪大記に、不能食粥、羹之以菜可也。と見え、註に性不能者可食飯菜羹といへり。かの粥食ふべきものすら、猶菜羹を食ふべし。まして葬もはて、疏食食ふべきものは、餅餌を食ふと雖も、傷ることなかるべし。たゞ酒のみ肉食ふことなくば宜しからむとなり。又云はく、凡そ父母の喪に居らんものは、大祥の前皆酒のみ肉食ふべからず。去れども、もし疾あらば暫く酒のみ肉食ひて、疾いえば初に復りて、食はず飲まずしてあるべし。もし素食俗に云、咽を下りがたく、久しくして瘦せ疲れ、疾ども成りなんことを恐るゝものは、肉汁及び肺醢或は肉少しばかりをもて、その滋味を助くるも苦しからず。

たゞ恣に珍膳美味を食ふべからず。又人と酒もりし樂むべからず。唯五十以上氣血既に衰へて、酒肉によらざれば扶養し難からむもの必しもしからざるのみ。かゝれば、五十すぎし人なりとも、幸にして血氣おとろへずば、法のごとく勤むべきこと論を待たず。

今の俗、親の喪に居て、弔客來るに遭へば宴を開き酒を設く。そのさま賀客に饗するに異らず。客も亦酒を携へ相過り、孝子に強ひて酒を飲ましむるに至る。放逸無慚のありさま、痛くいましめずはあるべからず。

喪には飲食衣服のみにあらず、居處をもその常を變ずること禮なり。禮記に、父母之喪、居廬不塗、寢苦枕塊、不說經帶とて、父母の喪には、家の外東の壁に木を倚せかけ、草をおほうてかりいほとし、壁をも塗らず、夜もその内に喪服をつけしまゝにて、藁のむしろにつちくれを枕としていぬることなり。こはその親の外に在りて土に就くを哀しみ、我身を安逸にするに忍びざるが故なり。されど、歳に大寒大暑あり、時に雨濕風涼あり、今の世に生れし薄弱の人、いかでか能く此の禮に堪へ得ん。その力を量らず、そを行はんとして、父母の遺體に疾を受くる程ならば、卻て

罪深きわざなるべし。去れば今の人に在りては、禪祭して常に復らんまでは、男子は表の居間に居宿して、故なければ奥に入らず。婦人はたやすく表に出でず。坐するに褥を用ひず。臥すに布衾を用ふるをもて、倚廬寢苦の禮に換ふべし。

治棺

凡そ死を送るの道、たゞ棺のみ身に親しきものとすなれば、孝子の尤も心を盡すべき所なり。しかるに、初喪の日に及び、法の如く造りしたゞめんには、その工夫もたやすからず。そのつくりはてむ日を待つあひだに、やゝもすればその尸腐敗に至ることあり。かくては親尸を恥かしむるといふべし。暑月には殊にこゝろを苦しむるなり。朱子も、今棺用漆要三日、便殯亦難の言あれば、曾てこゝに艱まれしと見ゆ。かゝれば、あらかじめ壽器を造るにしかじなど云へる説も見ゆれど、こはみづからなし置かばこそあらめ。今の時俗の情に於て、父祖のために凶事をあらかじめするの嫌にわたれば、極めてなし難し。事に臨みたやすくなし得べき良法をもとむるにしかず。おのれこゝにひとつの考あり。今委しくいふべし。家語に、孔子中都の宰たる時、四寸の棺五寸の槨もて制して、送死の節となし給ひしと見え、

墨子の書にいにしへ聖主の埋葬の制棺三寸と見ゆ。周尺の一寸は、今の曲尺の七分餘に當れば、孔子の四寸は曲尺の三寸にちかく、墨子の三寸は曲尺の二寸に餘れり。今棺を造るに、これ等の度に合ひぬる材を用ひんこと、孝子の心に倣くおもふ所なるべけれど、初喪に於てはたやすく求め得がたかるべし。また木を得て新に挽わらせなごせむには、徒にひまざるべく、かつ新にわりたる木はその心おほくは濕氣なきこと能はず。棺を造るに不便なり。よりにて時に臨みやむことを得ざらむには、厚さ一寸の板を用ふべし。一寸板は所在に必ずあるものなり。杉檜松樟、いづれの木にてもよく乾きたるを用ふべし。古禮にかゝはり泥めるひとは、薄きに過ぎて用ひがたしともおもふれど、今良法を得て、松脂もて裹めば、いにしへ用ひし厚材にまさること遠かるべし。松脂もて棺をつむこと、周秦の古書に見えざれども、極めて良法なり、稱用すべし。墨子の書に、堯舜禹の棺、みな葛もてこれを緘せりといふこと見ゆ。この言疑はしきに似たれども、禮經にも皮革もて棺を束ぬることを載せ、又熬黍稷と魚脂とを棺旁に設けて、蚍蜉を惑はしむると云ふことあり。又劉熙の釋名にも、棺束スルツ曰、緘ト、緘ト、咸也。古者棺不釘也。と見ゆれば、墨子の言

あながち疑ふべからず。古代智巧の足らざりし時には、かゝることもこそありつらめとおもはるゝなり。葛もて緘し、皮もて束ぬる、いかに固くちからを用ひむも、その合ひ目の臭氣を漏らさざるやうやはある。然ればこそ、蚍蜉を惑はすの設にも及びつらめ。臭氣の漏る程ならば水氣もまた入りつべし。水氣入りなば木の厚きもなにかはせむ。喪大記に、君と大夫との棺を蓋ふに漆を用ふること見ゆれど、こは唯その縫際を塗り塞ぐまでにて、全棺を塗ることゝは見えず。又漆も水土の氣に遇うては、やがてその堅緻の性を失はざることを得ず。かゝれば、たとひ六寸喪大七寸子孟八寸記喪大の材を用ひて漆を施すとも、久しからずして終に土質に化すべし。今良材を得ずして一寸の木を用ふるも、松脂もて全棺に被らしむる時は、牢固堅實にして臭氣を漏らすの患なく、又水氣尸を侵すの恐れなし。水氣だに滲透することなくば、永く朽腐をまぬかるべし。これを、かの厚材を用ふれども尸臭の泄るゝをも防ぎ得ず。埋葬の後水氣膚に親づき、その棺材を并せて速に土化するにたくらべ見ば、いづれか輸、いづれか贏、智者を待たずして辨へ得つべし。さてその棺の造りやうは、裏面に成るべき方のみ匏を用ひ、その表面は鋸にて挽きし

まゝなるべし。かくするに二つの子細あり。一つは板をして薄からざらしめむがためなり。一つは塗る所の松脂をして、よく板に粘綴して剔剝せざらしめむが爲なり。その四隅底蓋とも、ありさしといふものにして、更にしげく鐵釘を下して堅むべし。その外面は松脂を煉りて周ねく塗るべきなり。程子の棺を裹むに松脂もてするの説は誠によし。たゞ雜書の松脂地に入ること千年茯苓となり、萬年琥珀となるの言を引かれしは、いと淺はかなり。茯苓あに松脂の變ずる所にして、琥珀豈茯苓の化する所ならむや。かつ松脂一物のみにては裂けやすく剝げやすし。一たび裂剝することあれば、いかに厚く施すも前功皆空し。高閔その裂くるを病へて、少しの蚌粉黃蠟清油を合せ煎じ用ふべしと云ふと雖も、その劑量を云はず、これも亦おろそかなり。おのれ、西洋書中に參考して一方を得たり。棺を塗るに用ひてその妙いふべからず、今しるして同道におくる。その方、松脂土芥を雜へざるもの五分、黃蠟二分、猪脂半分、おのれ、細に碎き、或は切り、片にし、ひとしく銅鐵鍋に入れ、焰の揚らざる漫火に上せ、必ずかくするは火の入りんことを恐れ防ぐなり 棍もて手を停めず攪せ、よく溶和せしめて、泡立ち沸あがるまでに至り、背ある器に移し、俗に片口な一人

その器をとり、棺面に傾くるを、兩人棺の左右に在りて、幅廣き木篋もて、大よそ厚さ一分ばかりに、むら／＼なく塗りわたし、さて上に白堊の粉を篩もてふるひかけ、帚にて刷き去るべし。しかすれば、物に粘するの患なし。蓋を掩ひ釘を下したる後、その合際には、更に溫め能く溶して、流し入るゝやうにはからふべし。

後儒棺を合するに釘を用ふることを欲せずして、鐵鋪板を壞り、釘撃戸を震はしむるなどいふものあれど、燕尾錠筭は、何れも鐵釘の固きにしかず。かつ釘を用ふるも、その頭深く松脂の下に沈めて、濕をひき鋪を生ずるの患なし。戸を震はしむるの説に至りては、尤も迂怪といふべし。たゞひ燕尾錠筭を用ひむも、椎撃をばまぬかるべからず。均しく椎撃なり、何ぞ釘うつのみしからむ。もし椎を用ひずして合する程ならば、その棺脆鬆にして、解け易く、久しきに耐へざるべし。去れども強ひて震戸をはゝからば、螺釘を用ふるにしくはあらじ。擇ぶべし。後儒棺縫を塞ぐに、銀硃漆の方を稱用す。その説に云はく、硃性極めて濕氣を收む。凡そ漆器を密室中に置くに、雨日に遇へば必ず潤を生ず。たゞ硃漆のみ獨り乾く。故に此の法を用ふべしと。理に暗き論なり。果して然らば、硃漆はかぎりて

用ふべからず。いかにとなれば、雨日に外に潤を帯びぬるは、濕氣を内に引かざるの驗なり。その時にあたりて乾けるは、濕氣を内に吸収せるしなり。濕氣を吸収するは、その質に氣眼ある故なり。氣眼の内濕氣を含めば、その質やがて軟化して、遂に剝脱せざることを得ず。これ理の明なるものなり。漢人多く窮理にうとく、その言杜撰臆説多し。擇ばずはあるべからず。

又蛙の棺木を壞るを恐るゝ説あり。蛙はもと外氣の入るより生ず。今わが法もて棺に周すれば、外氣入る所なくして、蛙もまた生ずるによしなかるべし。

かくその棺を制すれば、その殯日を久しうすといへども、臭をもらすの恐れあることなし。孝子もし寸板の薄きを嫌はゞ、しづかにさらに棹を造らむも本より妨げず。王制に六十歳制の制ありと雖も、その棹は死後に至りて造ることなり。檀弓に句而布材フツといへる、その證なり。たゞし棺木厚きに過ぎぬれば、重くして擧げがたく、曠中地を占むること廣くして、その木腐壞の後、必ず曠土陷落するの患あり。故に木の厚きに過ぐるは、好むべきにあらず。棹も聖人の制にして、古より用ふる所なれども、保藏永安を謀れば用ひざるにしかずと、司馬溫公はいはれたり。孔子

の、御子伯魚を葬り給ひしも、棺ありて棹なしと云へり。こは孔子の貧しかりし故と聞えたれど、周代禮文の盛なりし時に、聖人の家にてだに省き給ひし所なれば、今の士大夫の家に在りては、棹はなくてぞ宜しかるべき。

棺を動かすに便りせむとて、底に太き鐵鑿を釘して、索をつらぬくの説、家禮に見ゆれど、鐵は朽ちやすく、かつ棺の弱みともなるべければ、しかせざるにしかず。但擧牀を、小方牀の如くに高さ七寸ばかりに作りて、その前後には二長杠をつらぬくべき孔を穿ち、出棺の時までは、杠をば貫かず。面には、杠に跨りて大索を通すべき孔八つあるべし。四方には大鑿二つづつを施し、麻の大索を貫き、さて棺をすゑ、棺を擧牀に据るときは、先づ下に

紙二十枚ばかりを周し、その索を取りて棺を動かすべし。出棺の前に至り、その索もて棺を擧牀に結び附け、更に太き麻索を取り、杠の下より牀面の孔へ引き出し、そを互に取りちがへて固く結び、さらにもちといふものを加へてその索を堅くすべし。又塗りたる松脂を剝さゞらむためには、かねて方寸の角木の長さ棺と齊しきを取り、その一隅を内へ角に刊り去り、大やう剃刀の形のごとく造りて、その四隅々に當て、その上に索をかくべし。棺衣は白布もて製すべし。その品に應じ

て帛を用ひむも本より不可なし。

近ごろ、苟簡の俗に徇ひ、瓦棺の説を唱へて水甕もて棺となすものあれども、快からざるわざにして、かつ送葬の道の程甚だ危し。效ふべからず。市中野外、何れの道を行かむも、逸牛奔馬なきことを保つべからず。もしこれありて、昇夫に觸れむに、地に墜さざる事を得べからず。瓦棺地に墜ちば、必ず碎くべし。棺もし碎け散りなば、いかにやする。かゝることおほかたはあるべきことにしもあらねど、喪は大事なり。萬に一つも悔ゆることのなからむやうに、深く慮をめぐらさずはあるべからず。子思も、凡附於身者必誠必信。勿之有悔焉耳矣。と云はれしにあらずや。

誌石

誌石は後來發掘の患を防がむとてのはかりごとなれば、なくては叶ふべからず。石の大小は、はじめより定制なし。大やう、兩面平かにして大さ棺を掩ふ程なるを擇ぶべし。漢土にては石二枚を用ふることなれども、一枚にして事足りぬべし。その書法、異朝にては唐の代よりこなた、大やう同じけれども、これを諸書に考ふる

に、それより前は一やうとは見えす。本朝にてもかくやあるべき。近き頃に至りて、其の石の表に假名文字を取りませ、此の所某姓名の遺骸を藏むと、誰人にも讀易きやうにしたため、裏にその歴官生卒を眞文にてしるし、その實を傳ふべしといふ説あり。大かた世人の用ふる所なり。されどおのれは、尙ほその表の書法を改めたくおもふなり。

宋書何承天傳に、文帝開玄武湖。遇大冢。得一銅斗。帝以問羣臣。承天曰。此新莽時威斗。三公亡皆賜之葬。時三公居江左者。惟甄邯。此必邯墓也。俄而冢内更得一石。銘曰。大司徒甄邯之墓。と云ふこと見ゆ。これ漢代誌石の書法なり。されば、今この法を取りて、誌表は某姓名墓としるすべし。文字も少く、俗眼にも更に知れやすくしてよかるべし。その裏面の眞文は、あらむもなからむも、おのくの心にこそ任すべけれ。ただ年月はある方ぞまさるべき。書法覺束なくば、心得たる人に問ひはかるべし。

沐浴

沐浴は、古禮今俗みな爲す所なり。雖も、人情に求めて甚だ快からず覺ゆるなり。いかにとなれば、生時裸體もて人に見ゆることなし。死して後、人にまかせて浴せ

しむる、もし知ることあらむに、あに快しとする所ならむや。故におのれは、荀子の言に従ふにしかずとおもふなり。すなはち、その書に「不沐則濡櫛三律而止、不浴則濡巾三式而止」とあり。律は髪を理むるなり。式は拭と同じ。荀子は周代の儒にして、しかも禮を好み、しかしてその云ふ所かくの如し。今これに従はむに、誰かそを不可なりといはむ、されば今俗に任せて、沐具浴具を備ふとも、必しも用ひず。髪をば櫛を濡して三たび理めてやみ、面をも巾を濡して三たびぬぐうて止むべし。もし下體汗穢あらば、拭ひ淨むべきこと言を待たず。

襲 斂 入 棺

襲は、尸に禮服をきせ參らするをいふ。異朝にては、襲して後冒もおほふなり。冒は、上下二體にして、いづれも直囊の如し。上を質といひ、下を殺といふ。殺は足を踏みて上行するものなり。質は頭をつゝみて下行するものなり。今これを略す。斂は、數々の衣裳もて包みまゐらするを云ふ。古禮には、斂にも小斂大斂の別あり。小斂の衣は、美なるものの中にあり。大斂の衣は、美なるもの外にあり。その儀節、もとより亂るべからず。しかるを、溫公書儀文公家禮二書には、兩斂を合せて小斂にあて、斂

棺もて大斂にあつるに似たり。二公あに古人大小斂の制を知らざらむや。まさしく當時人に従ひ易からしめむとて、かくその煩文を去り簡省の法をば定められしなるべし。本朝殊に簡易を尙ぶの俗なれば、更に斟酌を加ふべきなり。髪を律し面を式ふの後、臥牀の旁にあたらしきたゝみを鋪き、その上に褥をしき、褥の上に給をしく。但し給は角違ひなるべし。給の上に、小袖二つを、一つを顛倒して褥を深くかさねて、その上に襲し參らすべき禮服をしき、さて今までふし給へる褥上に就て、面を掩ひし服紗の上に兩角を合せて腦後にて結び、褌を著け、母なら下著をきせ、襪をつけまゐらすべし。さてしき設けたる禮服の上に遷し、生時のごとく著せ參らせ、帯ひもは皆眞結にするなり。

異朝本朝とも、襲する時の衣を左衽すべしといふものあり。これ、士喪禮乃襲三稱の鄭註に、凡衣死者左衽不紐。といへるに、誤り據れるにて、ゆゝしきひがごとなり。抑、左衽は夷狄の俗なり。孝子は死につかへまつること生につかへまつるが如しといへり。ざるを、親のうせ給ひていまだその日をも尙へずして、忽ち夷狄の俗とし、衽を左にしまゐらせむこと、これをしもしのぶべくば、いづれをか

しのぶべからざらむ。はたしてしかあらむには、死者にして知ることあらば、よく愧憾することあらざらめや。聖人終を慎みたまふの禮に、かゝるまさなきことあるべくもあらず。おもふに、鄭氏の士喪禮註に云々するものは、蓋し喪大記の文によりて誤れるなり。喪大記には、小斂大斂祭服不倒皆左衽結絞不紐と見えたり。鄭註に反生時也とあり。これまさしく小斂大斂の禮にして、襲禮をいへるにはあらず。しかるを鄭康成の大儒にして、いかにしてか誤りけむ。小大の斂法は、はじめにもいひしが如く、たゞちに尸に衣するにはあらず。襲の後、冒もて韜みし上を、さらに衣裳もて、或はたゞしく、或は倒にしてつゝみしたゝむるなり。そをも生時ならましかば、右を先にし左を後にし、すべての帶をも屈紐して解き易くせましを、死者には復解くべきのことわりなしとて、衽を左にしつゝ、生時衽を右にするは、解く時に便りするなり、帶も眞むすびにするなり。はじめ襲するをりには、衣帶をも常の如くにして、小大斂に至りてかく生時とやらうへなるおきてを用ふること、これなむ禮は變ずるを貴むのいはれなるべき。

さて起したて、半坐の形にし、腰刀を膝の上におき、小袖一つを取りて、たゞみて上よりうちかけ、顛倒してきたる衣もて、下より上に掩ひ、袖もて胸前を左右と掩ひ、さかさまにせざる衣をうち返して、袖もて背後を右左とおほひ、さて給の四角を、左を先に、右を次に前をまた次に、後を終りに打返し、白布六尺一幅を二つに裂きたるもて、横にふたごころ結ぶべし。棺には、はじめ木灰を篩ひ紙袋にもり、袋のまゝ底に鋪くこと三寸、その上に小褥を加へ、さてかさねたゞみのかたはらに席しきて、棺はその上にあるべし。尸を斂め參らするには、まづ綿入りたる衾を棺中に置き、その四裔を棺外に垂れ、子孫婦女侍者ともに手を盥ひ共々尸を舉げて棺中に納れ參らせ、衾裔の前を先に、後を次に、左をまた次に、右を後に掩ひ、存生の間、の髪爪落齒などは、棺の角々に納め、すきますきまは、弊衣のよく洗ひ淨めてよく乾かしたるにて、動搖せざらむ程に務めて充實ならしめて後蓋を加へ、釘を下し、松脂を煖めてその合際を心して塗り塞ぐべし。その後上座に据ゑまらせ、前に靈座を設くべし。異朝の禮は、靈座を柩側に設くることなり。こはいにしへ柩を拜するの禮なきが故なり。今の人情、柩を拜せざることを能はざれば、前に設くるをよしとす。靈座は中央に高き卓を設け、側に太刀、又は衣架に禮衣をかけ置くなり。前

には少し低き卓を安んじ、又その前に香案を設く。靈座すでに定まる時、手を盥ひ、饌を低卓上に供へ、香を焚き、蓋に洒くみて奠すべし。神主成りなば、高き卓に置き奉るべし。

禮記問喪に、三日而後斂者、以俟其生也。三日而不生、亦不生矣。孝子之心、亦益衰矣。家室之計、衣服之具、亦可以成矣。親戚之遠者、亦可以至矣。是故聖人爲之斷決、以三日爲之禮制也。と見ゆれど、こはそのむかし、人身の窮理に至らず、醫術もいまだ明ならず、假死を認めて眞死とせるものありしによりて、聖人のかゝる制をしも立て給ひしなるべし。今の世にありては、醫のわざもすでに精しく、人身の窮理はゆきとゞきて、死して再び生くべからざること、始めて死するとき既にあきらけくまた生きなむ望は露かくべくもあらず。しかるをこの制に拘りて、暑月など三日待ちなむとするあひだに、その尸腐敗して臭氣座に満ち、人をして厭惡せしむるに至らむには、その親を恥かしむるの罪、道れがたし。異朝の禮、士大夫ともに三日にして殯するとはいへども、本より深くその臭氣の泄りて人の惡まむことを恐る。故に死するの日に必ず襲して、冒を加へ、その第二日黎

明小斂するに、必ず十九稱の衣をもてし、その第三日黎明大斂するに、必ず三十稱の衣を備ふ。稱は今一かさねといはむがごとし。これ聖人の深意なり。いま悉くこの禮を備へむには、異朝の禮によらむもしかるべけれど、今こなたの士大夫財に乏しきがおほかれれば、いかでかこの數十稱の衣裳を製してその禮を行ふことを得む。されば眞死と知りなば、その哀痛を忍びて、とく造棺を命じ、その尸の臭を起さざらむさきに、斂棺せまほしきなり。家のはかりごと成らずとも、衣服の具備はらずとも、親戚の遠きもの至らずとも、さてありなむ。父母の尸に恥見せ參らするに比すれば、ものゝ數にあらす。今しばし留めまゐらせてむとおもはゞ、送葬の日を寛くしてそのこゝろを致すべし。

春秋左氏傳僖公三十二年冬、文公卒。庚辰、將殯于曲沃。出絳、柩有聲。といふこと見ゆ。經文を按ずるに、晉公重耳のうせられたるは十二月己卯なり。されば庚辰はその翌日なり。禮に、牀に在るを尸といひ、棺に在るを柩と云ふ。今柩と稱すれば、その棺に斂まりしこと明なり。小斂、大斂、斂棺ともに皆一日の内に行はれし事なるべし。諸侯の喪禮は、五日にして殯すること常なるに、かく速なりしは、甚し

き變禮と云ふべし。されど今この方の士大夫に於ては、卻て還葬の一例ともすべきか。

成服

異朝の禮に成服といへるは、さきにすでに經帶しぬるを、今また冠衰のたぐひもて足し成すゆゑに、これを成服といふなり。本朝に經帶の制なしと雖も、初終の時常服を易へ、今また眞の喪服に改むれば、同じく成服と云ふべし。いまこなたの士大夫、常に冠を冠することなければ、唯衣服のみを改むるなり。士大夫は上下、醫師茶道のたぐひは十徳、その以下は羽織袴、その喪の重き輕きに從ひ、あらし細き白麻布もて縫ひつゞりて著るべし。その説下につまびらかなり。

古禮三日にして服をなすといへど、生には來日をかぞふるの制なれば、その實は死日の第四日にして殯日のあくる日なり。されば、今も服を改むるは、斂棺の後なるべし。前日棺に斂めて、そのあくる日葬を送らむとならば、その葬の日の黎明に服を成して可なり。

喪服は禮經に所以飾衰と見え、本朝にても、服とし云へば喪のこと、聞ゆ。凡そ喪あるもの、常に別なる服をきることを、彼我に通ひし習ひなり。しかるに、いつの頃よりかくなりくだりしやさだかならねど、父母の喪にさへその服を著す。そをあやしみ咎むる人だに、たえてなき世となりぬるこそうたてけれ。今の世の人、多くは忌てふことを喪と心得て、忌あけぬれば、喪を終へしこととして常に復ること、あさましなど云はむもおろかなり。いまの忌てふことは、令には假としるされたり。官に仕ふるもの、喪ある時は、その喪の輕重について假を給はり、憂にこもり居ること、をいふなり。しかるを、神道家の神祇服忌令といふものに、假の字をあらいみと訓あり。元祿の令には、そを據として忌の字を用ひられしこと、見ゆ。忌の字よりして、貴人の前に穢れを忌むなどの説は出で來しものなり。假は勤仕のものに給ふ所なれば、その日數終へぬれば出で、おの／＼その事に從ふこと、もとより論なし。唯父母の喪のみは、職事の官、其の官を解くこと、令にある所の法なり。人に孝道を訓へ、風俗を敦うするの良制といふべし。但し大朝の制、父母の喪と雖も、其の官を解くことなく、五十日の假を給はりて、その日數の後、任に從はしめらるゝは、又據る所ありてやむことを得ざるところなり。禮記曾子問に曰く、子夏問曰。三年

之喪卒哭スレバ金革之事無ク辟也者非歟。孔子曰。吾聞諸老聃曰。昔者魯公伯禽有リ爲ニ爲ニ之也。註に據れば、當時魯國に徐戎の亂ありし故に、魯公喪にありながら、卒哭にしてこれを征せられき。これ王事を急にせらるゝなりといへり。大朝撥亂の後、武をもて治を爲し給へれば、この制を設けて武臣を馭したまへること、あたる所あるなり。但親喪はみづから盡す所也。親に後れて喪を終ふるは、人の子たるもの、常の道なり。太平無事の時、金革危急のことあるにあらず。然るを、祿位を貪り榮進を冀ふの心より、喪にあるの憂を忘れ、宴にあづかり、鼓笛をきくこと、平時に異ならず。遂に相習ひ風を成し、賢者といへども、靡然としてこれに従ひ、愧となさざるに至る。いと、歎かはし。この本を原ぬれば、喪に服なき故なり。志あらむものは、古に復りて、喪には必ず喪服を著て、その哀意を表すべきものぞ。

古禮に受服てふことあり。三月過ぎて卒哭の祭を爲す時に至り、初喪より服せし服に受けて、別服を服することなり。たとへば、服三升のものは、受くるに六升をもてし、四升のものは、受くるに七升をもてする類是なり。斬衰齊衰は、その制殊に麤惡にして、日を経るまゝに壞れ易し。故にこの制あるなり。しかはいへど、唯三年の

喪にのみ受服あるにあらず。期の喪、九月の喪、また皆これあり。然るに唐の開元禮、明の集禮會典に至るまで、練服禪服の制は見ゆれど、受服の制遂に見えず。こは古禮壞れしより、道釋の七々、百日の期を用ひ、衰麻を釋き去りて平常の素服に換へ、受服を制するもの絶えてなきものから、もろ／＼禮を議するの家も、またその時俗に因りて受服の説に及ばざりしなるべし。本朝服制殊に詳ならず。たとへ令に天皇、本服二等以上の親の喪の爲に、錫紵を服し給ひ、義解に錫紵は細布即ち淺墨を用ひ染むるものと見ゆ 以下及び諸臣の喪の爲には、帛衣を除き雜色を通用し給ふとのみ見ゆ。

天皇の至尊をもて、諸臣の喪までに御服を改めさせ給ふこと、いともかしこき御事ならずや。さらば、公卿以下もその五等の親に於て、おの／＼その服のありしことおもひやるべし。しかはあれど、いかなる服を用ひられしと云ふことは知るべからず。まして、受服練禪の制に於てをや。たとへ諸書に、凡そ喪に遭ひぬるもの、貴賤となく、藤衣を著しことをのす。その染料は、委しくはものに見えねど、令義解に、錫紵は淺墨もて染むといへれば、なべての藤衣も異なる染方にはあらざるべし。今の薄墨色は、五倍子に綠礬を加へてそむるなり。しかするも苦しからじ。藤ごろもは、

異朝にて墨衰といふものなり。墨衰は、晉の襄公が、凶服もて戎に從はれし時に始まり、後世喪に居て出入事を治むるもの、權に從つて服する所なり。今これを用ひ、假滿の受服となすべし。

今大やう喪服の制を定めむに、形は皆禮服の姿なるべし。上下十その粗細生熟の序は、一等の親には、極めて麤なる生麻布、二等の親には、次等の粗布、三等の親には、あらしき熟布、四等の親には、稍細やかなる熟布、五等の親には、細やかなる熟布を用ふべし。受服衰には、一等の親にあらき熟布、二等三等の親にやゝ細やかなる熟布、四等五等の親に細やかなる熟布なるべし。

人倫の道は、徳をもて本とし、徳は孝をもて先とす。上古は、親喪の期に、定まれる數はなかりしかど、孝子仁人は、悲痛思慕のせちなるより、遂に身をはたし、性を滅すものありけるとぞ。凡そ天地の間に生れて、血氣を含める類に、知覺の性あらざるはなく、知覺ある類にその同類をいつくしむことをしらざるはなし。見ずや、かの鳥けだものすら、その羣匹を失ふことあれば、月日を越ゆれども、必ずその故郷を過ぎて或は飛鳴し、或は立ちめぐり、蹠蹠踟蹰して漸くにして去りぬることを。燕

雀のさゝやかなるものと雖も、猶しばらくは、啁噓として啼き悲むさまあり。げに、人として親を喪へることゝろの哀み、いのちしぬるに至るまで、窮りやむことなきはことわりならずや。しかるに、衆庶のおろかなる、あしたにその親を喪ひ、暮にそのかなしみを忘るゝものあり。かくては、鳥けだものにだもしかすと云ふべし。かかる輩をして、禮法の教なくて羣居せしめむには、必ず暴亂に及びつべし。故に、中古の聖人、中人の情に緣りて、喪制をさだめ、過ぎなむとするものには、俯してこれに就き、及ばざらむとするものには、跛てゝこれに及び、天下の人に、賢不肖となくおのゝその恩親を盡し、孝道を彰してその徳を厚うし、羣居して和一順睦ならしめむとて、至親の喪を期もて斷たしめ給へり、期は一年をいふ。即ち十三月なり。其の期をもて斷しめ給へりし源をたづぬるに、天地すでに易り、四時すでに徧く、凡そ天地のあひだに在るもの更始せざることなければ、哀戚の心に感じぬるものも、少しく衰ふることなきこと能はざるの故とぞ聞えし。しかるに後世、聖人君子の喪に籠りて一期を過すこと、駟馬の隙間を過ぐるが如しとて、更に加隆して再期の制を定め、天下の通喪として、上一人より下庶民に至るまで、違ふことなか

らしめ給ひき。これを三年の喪といふ。禮記三年間に、三年之喪、二十五月而畢ニシテといひ、喪服小記に、再期之喪、三年也。といへるこれなり。以上禮記荀子通典等の意を取りて記す所なり三年の喪を至重として、期の喪これに次ぎ、九月五月三月の喪またこれに次ぐ。恩あり、理あり、節あり、權あり、具さに禮經に載せて、學士大夫世々これを守る。重といふべし。しかりといへども、周の代、夷厲の時にあたりて、時人すでに三年の喪を行ふこと能はず。毛詩の檜風素冠の詩を讀みて知るべし。その他、春秋傳及び孟子の書に於て、當時服制の定めなきを見る。漢の世に至りても、文帝短喪の詔ありしより、その代を終るまで四百年の間、よく三年の服を全うせしは三四人に過ぎず。唐代に及びては、遂に日をもて再期の月に易へ、二十七日にして至重の喪を除くに至れり。あさましきことならずや。わが皇國にも、いにしへは三年の喪行はれしと云か。孔子の、よく喪に居れりしと稱し給へりし大連小連も、わが御國の人とぞいふなる。文武天皇の大寶中に律令を定めさせ給ひし時、至重の喪を期に斷たしめ、次は五月、次は三月、次は一月、次は七日、これをもて衰齊大小功、總麻の制に準へ、給假の日數をも定め給ひき。君父の至尊をも期の喪と定め給ひしと、三年の喪あるに比す

れば、薄しとも申すべけれど、こは中古聖人の、中人の情にもとづき、あめつちの變に象り、四時の化に法りて定め給ひし制なれば、もとよりいろひたてまつるべきにあらず。かつ再期の制を存して守るものなからむよりは、むしろ一期の制を定めて、天下億兆の民をして悉くこれによらしむるにしかじ。慎みてこの制を行はむには、固より民徳をして厚からしむるに足りぬべし。そも、孝子哀慕のこゝろ窮りやむ時あらざるべければ、たとひ再期の喪をもて限りたればとて、こゝに至りて猝にその情を忘るべきにあらず。たゞその制あるがために、俯してこれに就くのみなり。はじめより、三年の喪をもて、その親に報い奉るに足れりとするにはあらず。かゝれば、期もてこれを斷たむも、遂に同じ心にこそあるべけれ。喪服小記に、親ムハ親ハ以テ三ヲ爲シ五ヲ以テ五ヲ爲シ九ヲ上ト殺シ下ト殺シ旁ト殺シ而テ親ヲ畢ス矣。といへり。おのれの身上は父を親み、下は子を親む。父と子とおのれとを并せて、その數三なり。父を親むより祖を親み、子を親むより孫を親む。これ三をもて五と爲るなり。祖を親むより高祖をしたしみ、孫をしたしむより玄孫を親む。これ五をもて九と爲る也。殺はそぐと訓む。おのれより上高祖に至るまで五世、おのれより下玄孫に至るまで五世、

旁ら三從兄弟に至るも又五世なり。その恩厚きものはその服重く、其の親み淺きものは漸くにして軽く、その六世に至るものは親屬竭きて服なし。これを上殺下殺旁殺して親畢くとは云ふなり。さてその服てふものは、親族の親しきと疎きとを序でて人倫を明にし、仁義の道を隆くする所のもの也。その義理甚だ深し。故に大傳に服術といへり。術は道術經術學術の術に同じ。いにしへ、服制をもて一術とせしと見るべし。異朝代々の大儒に喪服もて家に名ありしもの少からず。漢の夏侯勝がよく喪服を説ける、蕭望之が勝に就いて禮服を問ひたる、宋の元嘉の末、雷次宗が太子諸王のために喪服を講せる、齊の何修之が國子助教たる時、諸王の爲に喪服を説けるたぐひ、その證となすべし。冠婚祭會諸吉例の如きは、その制定まりて變ずるものなし。獨り喪服に至りては、その變ずるものあけて數ふべからず。やゝもすれば、その旨を失ひ易し。されば異父昆弟の服をもて子游は大功なりといひ、子夏は齊衰なりといへるたぐひ、又孔子のうせ給ひし時、門人その服する所に疑ひ、又子思の、その子に出母の服を服することを聽されざりしを、門人の不審せしが如き、これ皆資質聰敏の人にして、仰いで周典を讀み、俯して聖賢につかへ、

飢くまで誨訓をうけ、歲月を累ねしも、喪事に遭ふに逮べば猶尙かくの如し。喪禮の明め難くして惑ひ易く、詳に議定せずはあるべからざると、ここに於て亦見るべし。本朝大寶に定められし令、喪服給假の文、甚だ略して備はらず。當代元祿に頒たれし所も、多くは大寶令に依準せられしとは見ゆれど、これを禮經に考ふるに、その義理を盡さざるものすくなからず。これ當時その事を議し申し、儒臣のその學ぶ所おろそかなりしが致す所哀むべきのみ。新井筑州が折たく柴の記に載せられし大喪の議、その一證なり。同書に文昭廟御治世のはじめに、倭漢古今の喪服の制を問はせ給ひ、筑州の書にしるし、圖に作りてたてまつられしこと見たり。此の事によりて考ふれば、當時すでに元祿の令に安んじさせ給ひ難きふしあるによりて、訂正させ給はむ御旨のありしことおぼゆれ。かゝりしかども、遂にその事に及ばれずして今日に至りぬること、いと惜むべきこと也。唐堯の萬邦を協和し給ひて、黎民あゝ變り、これ雍ぐに至りしも、その本は九族を親み給ひしに始まり、周公の刑措くの治を開きたまひしも、喪服の制を定めて親親の道を厚くし給ひしに由る所なり。今治道を隆くし、薄俗を敦うせむことには、服制を訂正し、

天下の人をして親親の道を知らしむるにしくはなし。今頒行の令、本宗五等の親に於て、その服なきものすでに半に、昆弟の子従父昆弟姉妹及び衆孫の服、七日に過ぎざるたぐひ、これを人心に求むるに極めて安からず。夫れ人情の變窮りなし。禮はその變ずるものに適くを宜しとす。いま世の人情日に薄きに趨く。薄きを救ふの道、厚きをもてするにしくはなし。されば人心の安からざる所は、天理のある所に求め、聖人の經に折衷して更定あらまほしきものなり。

聖人喪服の制、或は引いてこれを近うし、或は推してこれを遠うし、上は高祖に遡り、下は玄孫に至り、旁三従兄弟に及んで親を親むの道畢る。その親を親むの中に、尊を尊び長を長とし、男女別あるの教をこめたり。人道の大なるものなり。さて、父母の喪は譬へばその本根にして、その餘は譬へば枝葉なり。しかはあれど、枝葉凋零しぬれば、本根つひに危きをまぬかるゝこと能はず。故に父母の喪には祭らず、人を弔はず、人に贈りものせずといへども、親戚の喪としいへば、必ずその服を服して、その服とはその輕者の服なり往き、これを助くることいにしへの禮なり。今本宗五等の親その服なきもの半に及び、その服あるべきもの亦つひにこれが爲に服せず。かくて

は技葉すでに稿れて、本根の存せるものも亦いくばくもなし。おのれ竊に深くこれを憂へ、服忌令の増訂を乞はむとする志あり。かつて大寶の令を準とし、異朝よよの制に考へ、義類を推窮して圖ひとひらを作る。圖下にしかれども、敢てみづから是とするにあらず。ただ禮を議し給へらむ君子の、詳考して採擇し給はむことを冀ふのみ。

いにしへ聖王の禮を制し給へるは、大分を立て大分を明にし、うたがはしきをことわり、微かなるを顯はにし給はむとなり。かるがゆるるに、喪服の制ただ親を親むの恩あるのみならず、貴を貴ぶの道あり、父を嚴にするの訓あり、統を尊ぶの則あり、出づるを降すの義あり、一に従ふの制あり、別を示すの教あり。貴を貴ぶの道とは、天子と諸侯とは旁期を絶ち、大夫は降すこれなり。父を嚴にするの訓とは、父の後たるもの出母のために服なく、庶子父の後となれば、その母の爲に總するこれなり。出づるを降すの義とは、姑姉妹女子子の人に適くものに、大功するこれなり。一に従ふの制とは、婦人の貳斬せざるこれなり。別を示すの教とは、嫂叔の服なきこれなり。しかるに、今の令、本宗五服の親その服なきもの半なれば、親を親むの恩

に於て、すでに盡さざる所あり。諸侯の旁期を絶ち給ふと、大夫の降服あるを聞かざれば、貴を貴ぶの道に於て遺すところあり。父の後たるもの、出母のためにも同じく服あり。庶子父の後たりと雖も、その母のために降さず。父の後たらざるの庶子、嫡母の爲に一月小功に準ずを服し、凡そ其の子繼母の爲に一月を服するは、父を嚴にするの訓に於て缺くるとあるに似たり。父その長子の爲に兄弟姉妹と同じく大功に準じて三月を服するは、甚だ軽くして統を尊ぶの制に於て憾むる所あり。姑姉妹女子子の人に適くもの、その室にあるとその服同じ。これ出づるを降すの義なく、われに受けて厚くするものあるを知らざるなり。女子子人に適くと雖も、その本宗の親を降さざれば、一に従ふの制闕けて尊を貳するに嫌はし、その本親の服あるべきもの、すでに服なければ、嫂叔の服なきも別を示すの教を表するに足らず。これ等みなおのれが服忌令の増訂を乞はまくねがふ所のものなり。喪に、忌てふことのある、いにしへのふみに見えず。今その日數をあて、考ふれば、令文の假の字にして、ををあらいみと訓めりしより、轉じて忌の字と成りしこと、前にしるすが如し。されば、忌はもと仕に従ふものにおほやけより給ふ所

のいとまなり。おほやけの御身づからとり給ふべきものにあらず。然るにおほやけにも御いみてふことのおはしまして、やがて御忌とげさせらるゝといふことのあるは、いかなる御事とも辨へられず。御服喪のあらむあひだは、何事も吉に従はせられがたき御ことなるをや。

擬請訂正服制圖

一年以^テ三十^月爲^ス限^ト。不^レ計^ハ閏^月。給^ハ假^{五十日}。惟^ハ夫^{三十日}。

君 天子諸侯卿大夫有^{スル}地^者皆^曰君。

父

嫡母 妾生子稱^ス父^之正妻^ヲ。舊服一月。今進^{メテ}在^レ此^ニ。

繼母 父之繼室。舊服一月。今進^{メテ}在^レ此^ニ。

夫

本主 其文學家令等不^レ在^ラ此^限。

嫡孫承^グ祖^ヲ爲^ニ祖^ニ。爲^ニ曾祖^{高祖}承^ニ重服^{亦同}。

爲人後者爲所後父母

凡男爲人後者爲本生親屬服期皆減半雖其父母無不然假服三十日其本生親屬爲之服亦如之

五月以下並皆計日給假三十日

祖父

祖母

養父

養母

夫之父母 舊服三月。今進在此。

嫡子 舊服三月。今進在此。

出妻之子爲母 舊服一年。今降在此。出妻之子爲母則爲外祖父母無服。出妻之子爲父後者爲出母無服。

妾爲女君補

三月給假二十日。

曾祖父

曾祖母

外祖父

外祖母

伯叔父

姑

妻

兄弟姊妹

繼父同居者 不同居者無服。舊服一月。今進在此。

夫之養父母

衆子 稱衆子者不論男女。舊服一月。今進在此。

嫡孫 舊服一月。今進在此。

嫡婦補

庶子爲父後者爲其母 舊服一年。今降在此。

凡姑姊妹女子出嫁者爲其本宗之親服期皆減半雖父母無不然假服三十日

其本宗之親。爲之服亦如之。其七日者。則四日。假二日。其在室。或嫁反。或雖適人。而無主者。竝與男子同。

一月給假十日。

高祖父

高祖母

從祖祖父 補

從祖祖姑 補

伯叔母 補

同居異父兄弟姊妹

從父兄弟姊妹 舊服七日。今進在レ此。

養子

衆孫 稱ニ衆孫ト者。不レ論男女。舊服七日。今進在レ此。

兄弟之子 舊服七日。今進在レ此。

母之兄弟姊妹 卽舅姨。

庶婦 補

夫之祖父母

嫡孫婦 補

七日給假三日。

族曾祖父 補

族祖父 補

從祖父 補

從祖姑 出嫁無服。補

族父 補

族姑 出嫁無服。補

從祖昆弟 補

從祖姊妹 出嫁無服。補

族昆弟 補

族姊妹 出嫁無服。補

從祖昆弟之子補

從父昆弟之子補

從父昆弟之孫補

兄弟之孫補

兄弟之曾孫補

曾孫

玄孫

外孫

不同居異父兄弟姊妹補

姑之子

姊妹之子

舅之子

姨之子

從祖祖母補

庶母謂父有子妾一補

從父昆弟之妻

昆弟子婦補

孫婦補

夫之曾祖父母補

夫之諸祖父補

夫之諸祖姑出嫁無服補

夫之伯叔父母補

夫之姊妹補

嫡姒婦兄弟之妻相名ツク補

夫之兄弟之子補

夫之兄弟之子婦補

妻之父母補